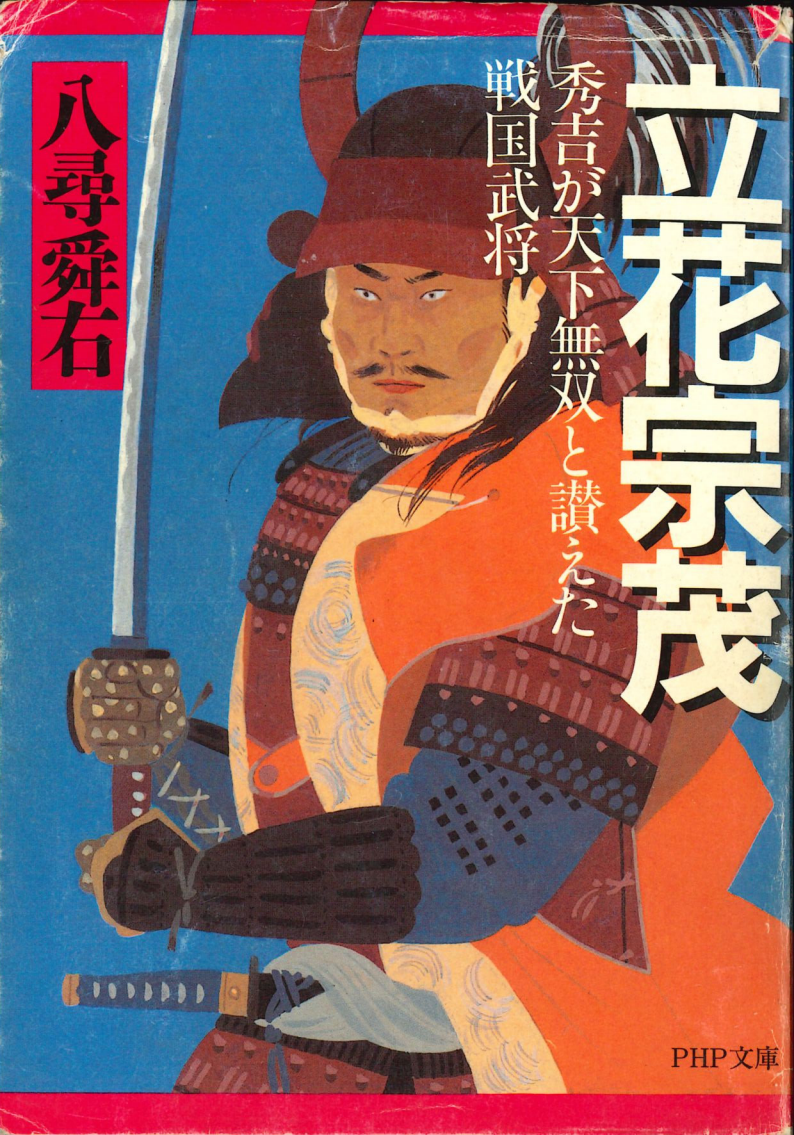
# 立花宗茂

秀吉が天下無双と讃えた戦国武将

八尋舜右

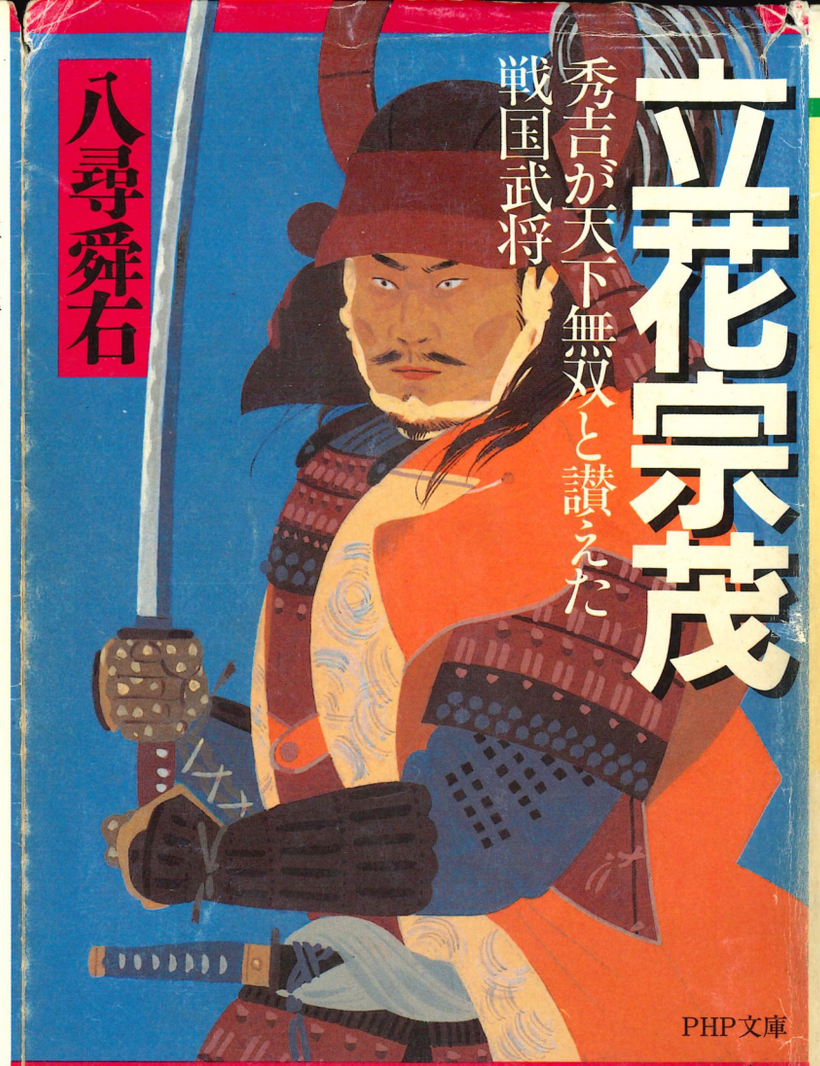


PHP文庫

いかに巧みに情報や戦略を駆使して成功するか、といった知的ノウハウ重視の現代的価値観からすれば、ここに描かれた戦国の愚直な男たちの生き方は、たんなる愚朦としか理解されないかもしれない。しかし、わたしは、あえてそのような現今の風潮へのアンチテーゼとして、この作品を書いた。(中略)
賢しらな知ばたらきだけがすべてではない。猛々しい戦いのみが人生ではない、のである。

本書「あとがき」より

装丁——上田晃郷
装画——西のぼる



# 立花宗茂

## 秀吉が天下無双と讃えた戦国武将

八尋舜右

PHP文庫

や84
八尋舜右　立花宗茂
PHP文庫
743

9784569574219
1920193007435
ISBN4-569-57421-1
C0193 ¥743E
定価：本体743円(税別)

**立花宗茂**
秀吉が天下無双と讃えた戦国武将
**八尋舜右**

「鎮西一の忠勇、天下無双の勇士なり」と秀吉が絶賛した筑後柳河13万石の領主・立花宗茂。その生涯は実父・高橋紹運、養父・立花道雪の高潔な生き方を範とし、戦国乱世にあって、まことに誠実・清廉なものであった。本書は、この父子三様の猛々しくも清々しい生きざまと、妻・誾との夫婦間の葛藤を見事に描出。現代人に人間の温もりをほのぼのとつたえる力作である。『小説 立花宗茂』を改題。

PHP文庫

PHP文庫
八尋舜右の本
竹中半兵衛
森 蘭丸

# 立花宗茂

秀吉が天下無双と讃えた戦国武将

八尋舜右

PHP文庫

八尋舜右　立花宗茂　PHP文庫

# 立花宗茂

秀吉が天下無双と讃えた戦国武将

八尋舜右

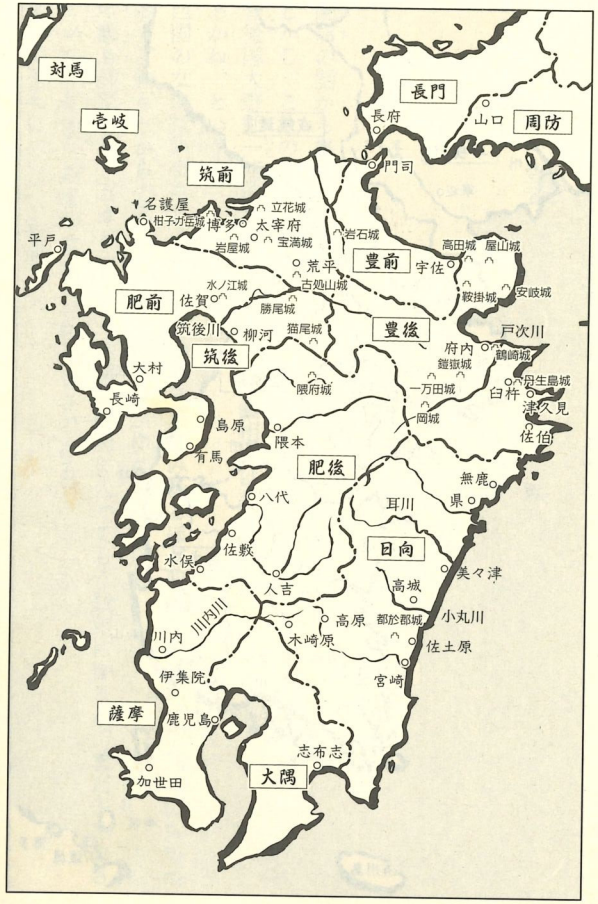
PHP文庫

立花宗茂◈目次

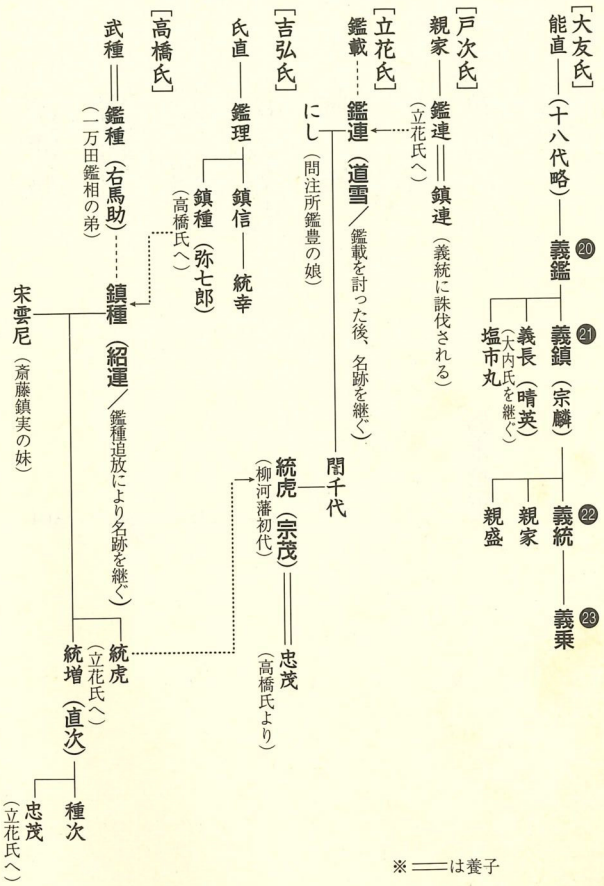
○本表紙図柄＝ロゼッタ・ストーン（大英博物館蔵）
○本表紙デザイン＋紋章＝上田晃郷

盗妻 9
婿盗り 32
旗立て 79
初陣 92
死の秋 117
散華 177
立花城 240
謁見 275
柳河城 304
碧蹄館 340
離別 388
関ガ原役 415
流寓 437
あとがき
解説 鈴木昌平
関係年表

【立花宗茂関連地図】




【大友氏と立花宗茂関連略系図】



# 盗妻

## 1

閨房の話から書きはじめるのは、いささか気がひける。

しかし、ことの筋道上やはり、そこからはじめるしかない。

豊後国大野郡一万田の城主、弾正忠鑑相には美形の妻女がいた。

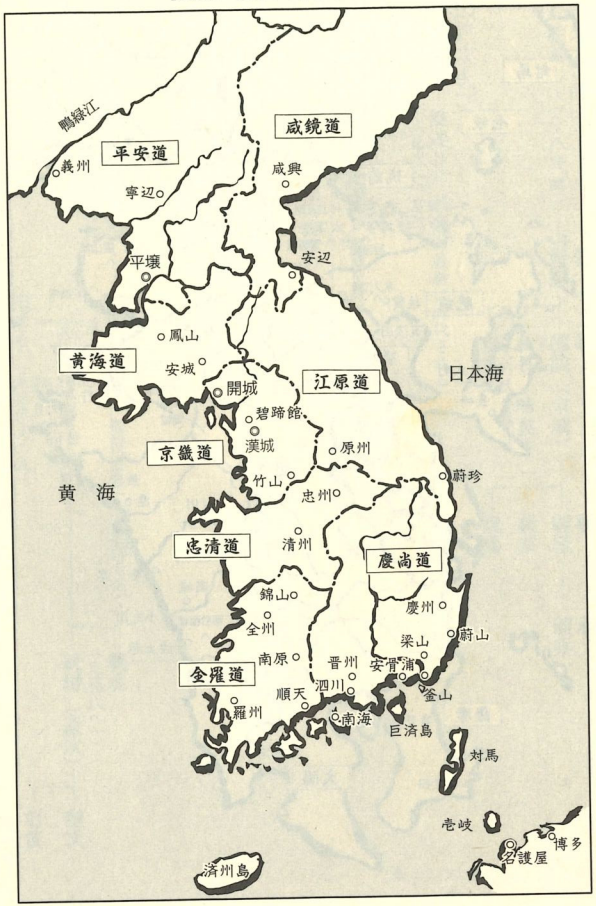
あかね、という。

西国の女にはめずらしく、血のいろが透けてみえるほど肌理こまやかで、細身にもかかわらず、胸もとからこぼれんばかりに乳房がゆたかだった。

年齢も鑑相より十五ほどわかい。鑑相の閨房に入ってもう数年になるが、まだ子をなさぬせいか、生娘とみまがうほどの初々しさである。

子ができぬについて、周囲は、

【文禄・慶長の役関連地図】



「殿のかわいがりようが、すぎるのさ」
いささかのやっかみもあって、過淫のせい、とうわさした。
うわさは、じじつだったかもしれない。
この夜も、鑑相は寝所の燭を細くしてあかねを抱いていた。
うすべりの上にやわらかくひらいた女体におのれの裸身を重ねて、ひとしきり、そのかたちのいい唇を吸う。くつくつと喉を鳴らし身をもんで、あかねは重ねられた唇の端から熱い吐息をもらした。仰臥してもなお両掌にあふれる乳房を丹念に愛撫し、やがて、うす紅いろにそまった乳首に鑑相が唇をふれると、あかねは、こらえきれぬ風情で細いうなじをゆらし、
「あ」
ちいさくさけびをあげて、鑑相の肩口に爪を立てた。
「あかね」
鑑相は両ひじを立て、あかねの顔を両掌にすくいこむようにして名をよんだ。
「あい」
両の瞼をとじたまま、あかねは夢うつつのままにいらえる。
ここまでは、いつもの交わりのとおりだった。
が、この夜、鑑相は眉間に苦渋の皺を刻んでいる。寝化粧にうっすらと汗をにじませ



たあかねの、御所人形のように整った鼻梁をひたとみつめて、
「明朝、臼杵にゆく」
と告げた。
一瞬、あかねのうごきがとまる。やがて、ほうっと吐息をもらすと、
「四郎左衛門どののお館に……まいられるのですか」
けだるげに、うすく瞳をひらいた。
「さよう。にわかのご下命だ」
「御用は、なんでございますの」
「四郎左衛門が風邪で臥せった。その見舞いにゆけと」
あかねの背筋が、にわかにかたくなった。
「たかが風邪の見舞いに、あなたさまが……」
「そうだ」
「おかしくはございませぬか」
ふかぶかと五体をとろかす快感をおしのけるようにして、あかねは喉の奥からかすれた声をおしだした。
「たしかに、おかしい」
「おことわり、なされませんでしたの」

「主命だ」
「殿ごは、主命には逆らえぬのですね」
「お屋形の名代とあれば、なおさらのこと」
「ならば、いたしかたありませぬ」
あかねは小さく首をすくめると、すぐに瞼を閉じて夫のたくましい首に両腕をまきつけた。
熟れた梔の実のようにつややかな唇から、かすかに舌のさきがのぞいている。あかねは、冷めかけた交わりの歓喜を、一刻もはやくとりもどしたかった。
「気が重い」
鑑相は、おもわず腰をうかしてつぶやいた。
「あたくしとの、交わりがですか？」
あかねは、夫の腰にそえた両脚をぴくりとふるわした。
「いや、こたびの使いのことだ」
あわてて、鑑相は首をふる。
「こんなときに、野暮は仰せられますな」
かるく眉をひそめて鑑相をなじると、
「主命には逆らえぬのでしょう」



あかねは瞼をとじたまま、やや投げやりにいった。
「それはそうだが……」
「ならば、いつまでもうじうじと……あなたらしくもございません」
いいながら、あかねは夫の欲望をよびもどしたい一心から、鑑相の胸につよく唇をおしあてた。
が、
「そなたもきいていよう。お屋形がそなたに懸想なされたとのうわさを」
なおも鑑相が憮然といいだすのをきいて、はじかれたように瞳をみはった。
「知らぬのか」
「存じませぬ」
「この正月、そなたをつれて府内の万寿寺と由原八幡宮に詣でたろう」
「はい、子宝を授かるよう祈願いたしました」
「そのおり運わるく、遠乗りからもどる途中のお屋形がそなたを見初めた」
「そんな……」
「そなた、お屋形の好色ぶりは存じておろう」
「多くの美妾をかかえておいでとか」
「鑑理が、こっそり耳うちしてくれたのだが……」

「なんと？」
「お屋形は、あの女は弾正忠の娘か、と供の鑑理にたずねられたそうな」
「あたくしを、娘だと……」
「むろん、鑑理は、娘ではない、女房だと告げた」
「ならば、よろしゅうございましょう」
「ところが、お屋形はなおもご執心で……」
「……」
「いい女だ、弾正めの室にしておくのは惜しい、ともうされたそうな」
「なんと無礼な」
「そこが女には見境のないお屋形のこと」
「あたくしは、大友家加判衆一万田弾正忠鑑相の妻でございますよ」
あかねは、きっと眉をあげていった。
一万田家は豊後、肥後の守護職大友氏の一族で、鑑相は当主義鎮の加判衆の一人だった。加判衆とは連判衆ともよばれ、年寄のなかからえらばれて政治、軍事の評定にあずかる最高位の家老職だ。
「まさしく、わしの妻だ」
あかねを抱く腕に力をこめて、鑑相はうなずく。



「お屋形さまとて、まさかに家老の妻にまでお手はだせますまい」
「と、おもいたいが……」
「なんと自信なげなおっしゃりよう」
「国もとに引き揚げたくとも、しばらくこの府内の屋敷にとどまるようにとのもうしつけだしなあ」
「まさか、あなたは……」
あかねは、にわかに両脚をつよく閉じて、むりやり鑑相をからだの外に追いだすと、
「あたくしに、お屋形さまの側妾になれとおっしゃるのではないでしょうね」
鑑相の胸をおすようにして、半身を起こした。
「じつは、迷うておる」
「迷う？……なにを迷うておられます。主従とはいえ、おなじ男同士でございましょう。あなたは、あたくしを守って戦ってはくださらぬのですか」
「さすれば、わしは反逆者になる」
「妻のためなら謀叛人になってもよい、とおっしゃってはくださらぬのですか」
「いや、まだ、お屋形がそなたを側妾にするとはきまっておらぬゆえ……」
「わかってからでは、手遅れでございましょう？」
「うむ、まあ……」

「どうして、そう弱気なのですか。世のなかには、おのれの利害だけでお屋形さまに背くお方もたくさんおいでではありませぬか」

「やつら有象無象とはちがう。わしはお屋形の引き立てで名誉ある加判衆をつとめる身だ」

「あたくしを主君の閨におくりこんでまで、なおもご出世なさりたいのですか」

「このうえの出世など、微塵も望んではおらぬ。が、主命はこばめぬ」

「あなたの理屈はそうでありましょう。が、あたくしの操はどうなります？」

「そなたはわしのいのちだ。が、しょせん女の操は野のあけび。もがれれば、むなしく落ちる」

「あたくしが、そのあけびだと？」

「そうは、おもいたくない」

鑑相は、狂おしげに唇をあかねのそれに重ねようとした。

あかねは、はげしく首をふってこばみ、

「わかりました。あたくしは夫の身の安泰のため、お屋形さまのいいなりになればよろしいのでしょう」

乳房をゆらしてはね起きると、褥のかたわらに脱ぎすてた寝着をあらあらしくまとった。

「これ、おもいちがいをするな」

「もう、ようございます」

あかねは背をむけて身を硬くした。くやしさに泣いている。

ちち、ち、つめたい夜気を裂いて燭の灯がゆらいだ。

## 2

その後の事態は、鑑相にとって最悪のかたちで推移した。

臼杵四郎左衛門尉鑑速は、吉弘左近大夫鑑理、戸次左衛門大夫鑑連と並び、豊後の〝三老〟とよばれる大友家の重臣の一人である。長く加判衆をつとめ、筑前柑子ガ岳城督をつとめる兄の鑑続とともに外交事務にたずさわり、ときおり上洛して将軍家への使いなどもつとめる。

その鑑速が、この正月から質のわるい風邪をひき、年賀も欠礼して国もとで寝こんでいた。

「なに、弾正忠どのがみえたと？」

遠路、義鎮の名代として鑑相が見舞いにきたと知らされて、あわてて床をはらった。

「ただの風邪でござる。ほれ、もう癒えもうした」

鑑速はみずから出迎えにでると、おおいに恐縮しながら元気にふるまってみせた。
「それは重畳、お屋形も安堵なされよう」
鑑相は微笑んだが、おもいなしか顔色がわるい。
「せっかくのお越しだ、ゆるりとしていかれよ」
いいかけて、鑑速は口をつぐんだ。
鑑相の挙止が、やはり尋常ではない。
「なにか心配ごとでも？」
直截にたずねると、鑑相も心中をかくさず、
「いささか、こころがかりがあって……」
沈鬱にうなずいた。
鑑速は義鎮の性向に、よく通じている。日ごろ臣下の風邪ごときに見舞いをよこすような主人ではない。
すぐにも、おもいあたることがあった。
（もしや……）
義鎮が鑑相の美貌の妻女に懸想したとのうわさは、かれも小耳にはさんでいた。
いかに無体な義鎮でも、まさか一万田の妻女には手がだせまい、とかるくかんがえていたのだが、あながち起こりえぬことでもなかった。



（わしへの風邪見舞いが、一万田の妻女盗みだしの口実につかわれたのだとしたら、まことにもって遺憾千万）
鑑速は、にわかに気がもめてきた。
「わけありときいては、おひきとめもならぬ。一刻もはようご帰府なされるがよい」
これまた、直入に告げた。
「失礼ながら、そうさせてもらおう」
鑑相はうなずく。
「なれば、それがし自慢の駿馬を替え馬にお曳きなされ」
鑑速は小者に命じて厩からみごとな栗毛を曳いてこさせると、早々に鑑相を館から送りだした。
末広川の河口にちかい鑑速の館から府内までは、およそ七里の道程である。
寒風にあおられながら、鑑相は狂おしく馬腹をけりつづけた。鞍上で、ひたすら念じたのは、
——杞憂であってほしい。
の、ただ一事だった。
しかし、駆けもどった屋敷に妻のすがたはなかった。
「にわかのおめしで、大友館にまいられました」

留守居の家宰がいうのをきいて、
「やんぬるかな」
鑑相は、絶句した。
深夜になっても、あかねはもどらない。
眠れぬ一夜を明かした鑑相は、翌朝、蒼惶として大友館に伺候したが、義鎮への目通りはゆるされなかった。まだ御寝中だという。
「お屋形さまの名代でおもむいた、四郎左衛門どのお見舞いの報告にござるぞ」
と言上しても、
「屋敷にて沙汰を待て、との仰せです」
取次ぎの者は、なにやら眼をそむけがちに告げた。
(いまのいま、あかねは館の奥で義鎮に抱かれているのではないか)
鑑相はいても立ってもおられぬ、はげしい焦燥に駆り立てられた。
五体にぬらぬらと汗が噴きだし、頭がくらくらする。このまま一気に奥にふみこみたい、との衝動をかろうじておさえると、鑑相は波立つ胸をかかえて足音あらく退出した。
途中、いきあう家中の者も、いちように鑑相と眼をあわせるのを避けてとおった。
——寝とられ男。
鑑相の耳には、かれらの嘲笑がきこえるような気がした。



やがて府内に、さまざまなうわさが乱れとんだ。
「一万田どのは、意気地なく泣き寝入りするらしい」
「いや、大友館に討ち入るそうな」
いずれも他人の不幸をおもしろがる、単なる憶測から発したうわさにすぎない。
鑑相はまだ泣き寝入りとも報復ともきめていない。妻の去った屋敷で、連日、身を焦がす憤怒の情を、酒の酔いにまぎらわせているにすぎなかった。
ただ、うわさをききつけた家臣らが、国もとからおっとり刀で駆けつけてきた。
「われら敵わぬまでも殿の恥辱を雪ぎ、切り死にいたします」
「まあ、待て。死ぬのはわしだけでよい」
鑑相はひたすら部下の激発を制止しながら、義鎮からの沙汰を待った。
あかねを奪われたくなければ、断固として義鎮の下命をことわるべきだった。しかし、それができぬまま自分は使いに発った。すべてはおのれの身からでた錆である。
あかねを責めることはできない。夫の身を案じればこそ、あかねはあえて毒牙の待ちうける大友館におもむいたにちがいなかった。
責められるべきは理不尽な義鎮のふるまいである。が、いまさら主人の非を鳴らして討ち入ったとしても、もはや穢されたあかねの心身はもとにもどらない。寝とられ男の汚名もきえはしない。永遠に反逆者としての汚名がのこるだけだ。

となれば、ここはあくまで隠忍して義鎮からの沙汰を待ち、伺候をゆるされたら、義鎮の面前で諫死するほかあるまい。おのれの妻女を生贄にして、お屋形の改心をうながし屠腹する。

寝とられ男の汚名をいささかなりとも雪ぐためには、これしかあるまい。鑑相は苦渋のすえに腹をきめたのだったが……。

義鎮はついに沙汰を下すことなく、いきなり一万田屋敷に兵をさしむけてきた。

理由は、謀叛である。

その日、暁闇のなかで鴉がさわいだ。

空には、いまにも一雨きそうな黒雲が乱れ飛んでいる。

と、一万田屋敷の厩にぽっと火の手があがった。

足音をしのばせ、百余の兵が白刃をぬきつらねて屋敷に潜入した。

おりからの風にあおられ、屋敷はたちまち炎につつまれた。

寝所にせまる火勢にあおられ、鑑相はがばとはね起きざま、

「あかねっ」

反射的に枕もとの大刀をわしづかみにして妻の名をよんだ。

いらえは、なかった。

(そうか。あかねは、もうこの屋敷にはいないのだ)



連夜の深酒にどんよりと濁った頭のなかで、鑑相はようやく眼前に起こった事態をさとった。

どうじに、またしても義鎮の閨でぬくぬくと眠っているあかねの寝すがたが脳裏によみがえり、

「うぬっ」

獣に似た憤怒のさけびをあげた。

寝所の板戸をけやぶって、黒塗りの具足を着けた数名の兵がおどりこんできた。

「お屋形の手の者か」

鑑相の問いにはこたえず、

「み首級、頂戴」

さけんで斬りかけてきた先頭の兵を、鑑相はおどりあがりざま真っ向から両断した。

後の兵が一瞬ひるむ。そのすきに鑑相は、

「わが、死にざまをお屋形に告げよ」

血を吐くように一言さけぶと、寝着の腹にぷっつりと刃を突き立てた。

——無念だが、わしにはこのような死に方しかなかった。

歯ぎしりしつつ、鑑相は絶息した。

この日、天文二十二年(一五五三)閏一月二十三日。豊後府内の空に、めずらしく寒

雷が一日中あれ狂った。

## 3

「お屋形も罪なことをなされる」
その夜、吉弘鑑理は訪ねてきた戸次鑑連と苦い酒を酌みかわした。
「お屋形の女好きは、やはり血というものかな」
鑑理が声をひそめて、ぽつりとつぶやく。
「なんの、先代義鑑公は家来の妻女にまでは手をだされなんだ」
鑑連は、言下に首をふった。
「弾正忠のくやしさがわかるだけに、われらもつらい」
いいつつ、感情家の鑑理はほろりと涙をこぼした。
「泣くな。弔い酒がまずくなる」
鑑連はにぎりしめた拳で、棕櫚たわしのような粗い髭を一なでする と、
「もし、われらが妻女がお屋形に懸想されたらどうするかな」
鑑理に問うた。
「さて……」



鑑理も、にわかにこたえられない。
「や、これはまずい。おぬしの妻女はお屋形の姉ごだったの。いかにもの好きでも、姉ごにまでは手をだされまい」
「ま、それはそれとして、余人は知らず、いのちを投げだして主に仕えると誓うたわれらとすれば、理屈としては妻女をさしだすのもつとめのうち、ということになるのではないか」
「妻女までが、主仕えをしているわけではあるまい」
「しかし、主仕えの夫に養われる身であれば……」
「やはり、かかわりなしとはいえぬか」
憮然として、鑑連はつまみの塩をなめた。
「となれば、弾正忠のように死ぬしかないのだな」
「つらいことだ」
「つらいのう。とまれ、わしの妻女は美形でなくてよかった」
むりに高笑いして、鑑連はぐいと盃をあおった。
すでに十代のころから、義鎮はすこぶる女癖がわるかった。身内からほとばしる性の衝動に駆られるまま、前後の見境なしに女を犯した。
生娘、人妻を問わない。城下で好みの女をみつけると、うむをいわさず閨にひきこん

で、わがものとする。家臣の妻女とて例外ではない。これまで幾人の武士が妻を寝とられ、悲憤の腹を切ったことだろう。

父の義鑑が義鎮を廃嫡して、異腹の末子塩市丸を跡継ぎに立てようとした一因には、この嫡子の下半身の不行状がある。

「女色を好むのも覇気の一つだ」

はじめは大目にみていた義鑑も、際限なしの義鎮の漁色ぶりに、

「これでは、家中のおさまりがつかぬ」

憂慮の眉をひそめた。

それに、なによりも、

「かくも荒淫がすぎては身がもつまい」

嫡子の前途に不安をもった。

じじつ、義鎮は房事過多のため顔色わるく、いつも五体に気だるさをただよわせていた。

「義鎮どのが家督を継がれては、大友の名跡が絶えまするぞ」

塩市丸に肩入れする年寄の入田丹後守親誠など、ことあるごとに義鑑に訴えた。

親誠は幼いころの義鎮の養育係だったが、ことごとに反発する義鎮に愛想をつかし、塩市丸の母に口説かれて、義鎮廃嫡にまわったのだった。



かくて三年まえの天文十九年（一五五〇）春、義鑑は塩市丸を継嗣にすえようとし、四人の年寄を召しだして、その旨を告げると四人が四人とも反対した。で、義鑑はかれらを討ちとろうとしたが、津久見美作守、田口新蔵人の二人だけは討ちもらした。

翌日、津久見と田口は逆に義鑑の館を襲って、塩市丸母子を殺害、義鑑に深傷を負わせた。惨劇がおこなわれたのが館の二階だったので、このクーデターは〝二階崩れ〟とよばれる。

このとき義鎮は別府の温泉にでかけていたが、津久見と田口を背後であやつったのは、むろん義鎮であった。

義鎮は瀕死の義鑑にせまって、むりやり家督相続を承認させた。このおり義鎮のがわに立って尽力したのが、ほかならぬ一万田鑑相であり、吉弘鑑理、戸次鑑連、それに斎藤鎮実らの宿老だった。

家督相続の後は、

――父上を弑してまで名跡を継がれたのだ。すこしは行状もあらたまるだろう。

宿老たちは期待したものだが、すぐに裏切られた。

頭の上の重しがとれた義鎮は、ますます女あさりに精をだし、領内では垢ぬけした女がみつからぬというので、近侍を京、大坂まで上らせて物色させるのぼせようだった。

みかねて、

「当主になられたのだ。すこしはお慎みなさい」
鑑連は、いくどとなく強面に諫言した。
が、義鎮はきかない。そのうち鑑連を避けて目通りをゆるさぬようになった。
しかし、鑑連はあきらめない。一計を案じて、自分の屋敷に歌舞の得意な美女をあつめ、連日派手に遊興の宴を張った。
なにしろ、日ごろ無骨で知られる鑑連である。たちまち家中の評判になった。
「なに、あの左衛門大夫めが美女をあつめて遊んでおると……」
義鎮は興味をあらわにし、鑑連に女たちをつれて登城するようにもうしつけた。
「しめた」
鑑連はさっそく登城して、義鎮のまえで舞妓たちの踊りを披露し、義鎮が上機嫌になったころあいをみはからって、やおら諫言にかかった。
「はかりおったな」
義鎮は苦虫をかみつぶしたような顔をしたが、根っからの暗愚ではない。これほどまでにして自分を諫めようとする鑑連の気持ちはわかったから、しばらくのあいだおとなしくなった。
だが、このていどでおさまる義鎮の病ではない。反動からか、その後の行状はかえってひどくなり、あげくが、あろうことか加判衆一万田鑑相の妻女に目をつけ、こたびの惨劇



となったのだった。
妻女に横恋慕すれば、忠臣さえも謀叛の濡れ衣を着せて殺してしまう。罪の意識など、ひとかけらもみられなかった。宿老たちの絶望はふかい。
「弾正忠は、妻女に死んでほしかったろうな」
ぽつりと鑑理がもらした。
「うわさでは、妻女どのはお屋形の閨にめされたおり、夫はわたくしを愛しております。わたくしを犯せば、夫はお屋形さまとて容赦はいたしませぬぞ、と気丈にいうてのけたそうな」
鑑連が、感に堪えぬふうに首をふっていった。
「ほう」
「するとお屋形は、弾正忠をわしに殺させたいのかと、妻女どのをおどしたという」
「無体だ」
「ならば自分が死ぬと、妻女どのはきりかえした」
「で、あろうな」
「そうおもいつめるな。そちがわしの側妾になれば弾正忠は殺さぬと、お屋形はおしふせて因果をふくめた」
「妻女としては、死のうにも死ねなかった。夫が奪いかえしにきてくれるのでは、との一

縷の望みもあった。が、ついに夫はあらわれず、あげくに無残に殺された」

「いまどんなおもいで、お屋形に抱かれておるか」

「地獄だな」

鑑理は顔をしかめて塩をなめた。

「あれは、病気だよ」

鑑連はいう。

「そうとでもおもわねば、とてもついていけぬ」

「われらはともかく、右馬助が実情を知ったらどうでるかだ」

鑑連は顎髭をしごいた。

右馬助は鑑相の実弟である。先年から周防山口の守護職大内家に養子に入った義鎮の異母弟八郎晴英の奉行人として国をはなれている。

「やつは、知ってのとおりの兄おもいだ」

「兄の無念ばらしに、お屋形と一戦まじえることになるかな」

「となれば、またしてもわれらが、意にそまぬ戦に狩りだされる」

「苦い酒は、もうのみたくないものだ」

「まこと、ごめんこうむりたい」

両人はうなずきあったものだが、けっかは意外なかたちでおさまった。



罪ほろぼしのつもりか、あるいは身辺からとおざけるためか、義鎮は山口から帰国した右馬助を嗣子の絶えた筑前の名家高橋家に養子に入れ、宝満城の城督に任命した。

城督とは城代の意味だが、内実は城主とおなじで、義鎮から幅広い支配権をゆだねられている。ことに宝満城の城督は、筑前の商都博多をおさえる重要な任務を負っている。

——はたして、うけるか。

家中が固唾をのんでみまもるうち、右馬助は意外にあっさりと命令にしたがい、なにごともなかったかのように、おとなしく筑前におもむいて高橋家をつぎ、三河守鑑種と名乗った。

「よい、がまんじゃ」

鑑理、鑑連らは、ひとまずほっと胸をなでおろしたのだったが……。

# 婿盗り

## 1

渓谷は匂い立つような新緑である。
そのあわあわとした光のなかで、しきりに鶯が啼きかわしている。
弥七郎はまぶしげに眼を細めて、川面にはねる魚影をみていた。都甲川源流にあたるこのあたりの渓流には鮠が多い。
「きゃん」
足もとで仔犬のような悲鳴があがった。
「どうした」
弥七郎は足もとをのぞきこむ。
三歳になるかならぬかの幼児が、からだを硬くして弥七郎をみあげていた。その楓の葉



のような小さな指先に一匹の沢蟹が、しっかりと鋏を立ててぶらさがっている。
「千熊丸、痛いか」
苦笑しながら弥七郎は、たずねた。
「イタイッ」
必死の面持ちで、千熊丸とよばれた幼児はうなずく。
「おまえが、いらぬちょっかいをだすからだ」
父親のつめたい口調に、千熊丸はべそをかいた。
「泣くのか」
「ううん」
千熊丸はつよく頭をふった。
「それでよい。武士の子は泣かぬものだ。で、どうする」
つきはなされて、それでも千熊丸はしばらく助けをもとめるように父親の顔を仰いでいたが、やがて岩角にはっしと蟹をうちつけた。甲羅がはじけとび、指先に紅いろの鋏だけがのこった。
「ようやったぞ」
弥七郎ははじめて優しい口吻をみせ、
「おのれの敵は、おのれの手で始末するものだ。さすれば、救いの手ものびてくる」

諭しながら、幼児のやわらかな指にくいこんだ鋏をとってやった。
「弥七郎さま、ここでありましたか」
背後で声がして、世戸口十兵衛が渓谷の斜面に群生した矢竹をわけ、仔熊のようにころころとしたすがたをあらわした。額にうっすらと汗をにじませている。
「なにごとだ」
「鎮信さまが、およびにござります」
「兄上が？」
「はい、府内のお屋形さまより使いがまいられたとか」
「戦か」
「とは、きいておりませぬ」
「なんであろう」
「わるい報せではありますまい。鎮信さまは、いたって上機嫌であられましたゆえ」
「十兵衛、千熊丸をたのむ」
いいおいて、弥七郎は矢竹の藪をこぎながら一気に斜面を駆けのぼった。
吉弘家の本城屋山城は豊後国東郡の北部、岩を噛んで馳せくだる急流都甲川に臨む標高五百メートル余の屋山、別名八面山の頂に築かれている。ただし、ここに籠もるのは戦のときだけで、平時は麓の筧の城館に起居している。



吉弘家の嫡男鎮信は、一時は筑前粕谷郡久山の立花西城の城督として赴任していたが、いまは国もとにもどり、義鎮の申次職をつとめている。
ここでも新たにかきあげられた城館の土塁をおおう木立のなかで、しきりに鶯が啼いていた。
「およびでありますか」
息をととのえて、弥七郎が兄鎮信のまえにでると、
「弥七郎、喜べ」
鎮信はいった。
「筑前宝満城の城督を命じられたぞ」
「それは、おめでとうござります」
「ばかめ、命じられたのはわぬしだ」
「それがしが……」
「そうだ。かの三河守どのの後釜だ」

## 2

高橋家を継いだ右馬助あらため三河守鑑種は、それからの十年余、一片の叛意を示すこ

ともなく、宝満城の支城として新たに岩屋城を築くなどして、忠実に筑前経略の役目にはげんだ。

いっぽう、義鎮の覇権もおおむね順調にすすみ、九州の過半に勢力を浸透させ、三十歳になった永禄二年（一五五九）には、豊後、肥前、肥後の守護職に加えて、新たに豊前、筑前、筑後の守護に補され、さらには九州探題に任じられた。

大内氏をたおして中国に台頭した毛利元就との角逐は、なおつづいていたが、これも将軍家を仲介に立て、講和が成立しようとしていた。

下半身の行状のほうも、あかねを愛妾にしてからはしだいにおさまり、九州探題になった年には、正室まさとのあいだに嫡男義統をもうけ、ついで二年後には次男親家も誕生した。

永禄四年（一五六一）、義鎮は新たに臼杵湾にうかぶ臼杵七島の一つ丹生島に城を築いて本拠をうつした。臼杵湾は水深もふかく、南蛮船の出入りにも便利だった。

亀のかたちをしているので亀島ともよばれた丹生島の新城は、四面を断崖でかこまれた堅固な海城である。

城普請は大友家の軍師角隈石宗が奉行し、諸国を流浪中たまたま義鎮のもとに身をよせていた明智十兵衛光秀が縄張りした。

府内の大友館は城といえた代物ではなく、戦となればちかくの高崎山（いまは猿山として有名）に籠もらねばならなかったが、新城は城砦と居館の機能を兼ねそなえた本格的な城だった。



この新城にうつってまもなく、義鎮は入道して宗麟と号するようになった。

で、この小説も以後、宗麟で統一することにしたい。

「ちかごろ、とみに太守らしい風格をそなえてこられた」

「これで、われらも一安心だな」

吉弘鑑理と戸次鑑連は顔をあわせるたびに喜びあったものだが、そのころになって、高橋鑑種がひそかに不穏なうごきをみせはじめ、ついに反旗をひるがえした。四年まえの永禄九年（一五六六）初冬のことである。鑑種の離反を知った宗麟は、

「いまさら、なにが不満で背くのだ」

すぐに側近の吉良伝右衛門尉を使いにだし、鑑種に翻意をうながした。

「まったく、いくつになっても理非を解せぬばか殿でござるな」

鑑種はわらいとばして、伝右衛門尉を追いかえした。

妻を奪われ、謀叛の罪をきせられて憤死した兄鑑相の恨みを、鑑種はわすれてはいなかったのだ。

「けっくは、こういうことになるのか」

「因果なことだな」

宗麟から鑑種追討を命じられた鑑理と鑑連は、ふかくため息をもらしたものだ。

鑑種の離反と前後して、これまた大友一族で西の大友とよばれた筑前立花城主立花鑑載が背き、おなじく古処山城主秋月種実や宗像神社の大宮司宗像氏貞、それに肥前五カ山城主筑紫広門、おなじく佐賀城主龍造寺隆信らも反大友の狼煙をあげた。

いずれも鑑種としめしあわせたもので、本格的に北九州制覇へのりだしてきた毛利元就と結び、宗麟の支配から脱して、それぞれの野望をはたそうというのだった。

鑑理と鑑連、それに臼杵鑑速を加えた大友軍主力は、筑前に出陣してこれらの諸勢と戦うことになった。むろん、諸勢の背後には毛利元就の息子吉川元春と小早川隆景の軍勢がひかえている。これらの毛利勢は強力な水軍に加えて、巧みに新兵器の鉄砲をつかった。

ちなみに、鉄砲が組織的につかわれたのは、元亀元年（一五七〇）六月、織田・徳川連合軍が浅井、朝倉の軍と戦った姉川合戦をもって嚆矢とされるが、毛利軍はそれより一年まえから、かなりの量の鉄砲を戦術的につかっており、大友軍はしばしば苦戦した。

ただし、宗麟は女癖こそわるいが凡庸ではない。領内にバテレン（キリスト教宣教師）をうけ入れて南蛮貿易に精をだしながら、鉄砲の効力に気づくのがおそかったのは不覚といってよいが、戦略家としては端倪すべからざる才能の持ち主で、ことに謀りごと、調略に長け、巧みに諜者を放って対抗勢力の内部を攪乱、和戦両様で臨み、つぎつぎに支配下におさめた。六カ国の守護職、九州探題にまでなりえたのは、その辣腕あってのことだ



った。

おりから、毛利にほろぼされた尼子の遺臣山中鹿之助が、織田信長のあとおしをうけて出雲に決起したのなども、宗麟の画策のけっかだ。

これには毛利の総帥元就が動揺した。機をのがさず、宗麟は女婿の大内輝弘に数千の兵をさずけて渡海させ、毛利の新領山口を衝かせた。

たまらず、毛利軍は急ぎ北九州から撤退する。大友勢はこれを追撃して一千余の将兵を討ちとった。後詰を失った諸勢は進退きわまった。

永禄十一年（一五六八）秋には立花鑑載が討ち死にし、つづいて翌年春には龍造寺隆信が降伏した。

鑑種は元就とのあいだに、自分は宗麟とは絶対に和睦しない。そのかわりに、元就がまんいち宗麟と和睦するさいには、自分を毛利の客分としてひきとってもらいたいと申し入れ、元就の承諾をとっていた。

にもかかわらず、毛利軍は鑑種をおきすてにして早々に退却した。

やむなく宝満城に籠もって最後まで抵抗した鑑種も、城内の糧食がつき、ついに頭を丸めて降伏のやむなきにいたった。

「三河守も前非を悔いておりましょう。お屋形のふところのふかいところをおみせなされ」

鑑種に同情的な鑑理や鑑連は、ここぞと宗麟に鑑種の助命を進言した。
いまはすっかり宗麟の側妾としておさまっているあかねも、閨で宗麟をかき口説いた。
「ここで義弟のいのちをおゆるしくだされば、亡夫の怨念もきえましょう」
「これだけわが寵をうけながら、そなた、いまだに弾正めがわすれられぬのか」
宗麟は鼻白みながらも、さすがに内心忸怩たるところがあったのか、
「忠義者のおぬしらが、それほどまでにいうなら……」
鑑理や鑑連の顔を立てるかたちで、宝満、岩屋両城ほか、鑑種のすべての所領をとりあげ、豊前小倉に蟄居させた。これが、昨永禄十二年（一五六九）十一月のことである。

## 3

「こたびのことは、おそらく戸次のおやじどののご推輓でありましょうな」
弥七郎は鎮信にたずねた。
「さよう、弥七郎をおいてほかにはないと、お屋形に力説なされたそうな」
「そうでありましたか」
「亡き父上も喜んでおられよう」
鎮信は、いいながら感慨ぶかげな表情をした。



父の吉弘鑑理は、つい二月ほどまえに他界していた。
近来、病気がちだったが、病の身をおして筑前から肥前にかけて転戦し、あげく血を吐いて死んだのだった。いま吉弘家の跡目は鎮信が継いでいる。
「戸次のおやじどのに、お礼言上にまいらねばなりませぬな」
弥七郎はいった。
「それがな、あすにも先方から訪ねてみえられるらしい」
「なんと、あの、不自由なおからだで……」
鑑連は両脚が萎えている。
昨年の夏のことだが、大木のしたで昼寝していて落雷に遭ったのだ。雷は鑑連のかたわらの差し料に落ちた。鑑連は両の脚を焦がしたが、幸いにいのちびろいした。
「鑑連どのは、刀をぬきあわせて雷を一刀両断に斬りすてられたそうな」
と評判が立った。
「わしが、いかにむこうみずでも、雷を斬れるはずがない」
苦笑しながらも、鑑連は世人の立てた評判がすっかり気に入って、その差し料を焼きなおして雷切丸と名づけ、いまも得意げに腰に帯している。
鑑連は馬に乗れない。で、戦場には雷切丸と種子島銃一梃をたずさえ、輿にのってでる。輿の周囲には百人ばかりの屈強の若者が長刀を手にしてしたがうのがつねだった。

鑑連は輿のまま戦陣の先頭にでて、腕貫をつけた三尺ばかりの棒で輿の縁をたたき、大声を発して兵を鼓舞した。戦況が不利となり、兵が怖じ気づくとみるや、

「逃げるなら、わしをこの場にすてていけい」

大声で叱咤するので、兵はいたしかたなく必死に活路をもとめて奮戦し、退却することがなかった。で、左衛門大夫鑑連の勇名は、ますます高くなった。

もともと、鑑連はただ勇ましいばかりの武将ではなかった。人心収攬の術にも長じ、家来にたいするおもいやりもふかかった。

「兵は本来、勇気があるものだ。兵が臆病になるのは、その上に立つ将がだめだからだ。他家で弱卒の汚名をこうむった兵は、すべからく、この鑑連のもとに馳せ参じるがよい。天下に恥じぬ勇士に育ててみせよう」

と豪語した。

そして、みごとに武功を立てた家来には、

「ようやった。やはり、わしの眼に狂いはなかったな。今後ともたのむぞ」

人まえで大声で賞賛した。

逆に手柄が立てられず、しょげている家来がいると、陰によんで、

「手柄は時の運だ。焦るなよ。むりに手柄を立てようとして、おぬしに死なれたのでは、このわしがこまる。わしがこうして大きな顔をしておられるのも、おぬしのように陰ひなたなくはたらいてくれる者がいるからだ。まずは一献どうだ」

ねんごろに酒をふるまって慰撫した。

こんなこともあった。

同僚を招いて酒席をもよおしていたときのこと、接待役の家来の一人が酌をしそこなって恐縮しているのをみると、

「この者は平時はこのように不調法だが、戦場ではこう槍をふるって、まっさきに敵中に突入する勇者であります」

と、身ぶり手ぶりを加えて、家来の失態をかばった。

粗相をした家来が、主人の温かいこころづかいに感奮したことはいうまでもない。

ただし、懸命につとめたうえでの過誤には寛大な鑑連だったが、いたずらな懈怠にたいしては峻烈な態度で臨んだ。

あるとき、長陣に飽きた数十人の兵が、こっそり戦陣をぬけだし家に帰ったことがあった。鑑連は、

「ただちに、親子一族ともに誅殺せよ」

と厳命した。

「ちと、きびしすぎませぬか……」

側近が躊躇をみせると、鑑連は首をふり、

「無断で戦場を離脱した罪は、一家眷属におよぶものと心得よ。この軍律なくしては、鑑連の戦は遂行できぬ」

断固として実行させた。

主従の紐帯は信義である、というのが鑑連の信条だった。

信義は、武士がおのれの生き方をまっとうするためのものだ。ただ、おのれ一人が生きのび、肥えふとるために右顧左眄し、利のあるほうへなびく行為は、武士としてもっとも恥ずべき所為だ、と鑑連は信じている。

戦国武将のほとんどは、信義とはかかわりなく、ひたすら利害でうごいた。そのけっかが下剋上の風潮を生んだ。

しかし、すべてがそうではなかった。鑑連、鑑理、弥七郎、そして妻を寝とられても、主人に復讐の刃をむけようとはしなかった一万田鑑相などの生き方がそれだ。

たった一度かぎりの短い人生である。算盤勘定でうごいたのでは、潔い死に方はできない。

「死のうは一定……」

尾張の織田信長が好んで口にした小歌の一節は、鑑連の生き方でもあった。

どうせ死ぬのなら、おのれに恥じない生き方をしたい。これは徳川幕府成立後、日本中に定着した儒教的主従の規範とはちがう。あくまで、おのれ一人の価値観から紡ぎだされた人生哲学だった。



こんな哲学をもつ鑑連だけに、敵にたいしても姑息な手段はいっさいとらない。

こんな逸話がつたえられている。

「秋月種実が、お忍びで博多に芝居見物にでかけるとのうわさです。絶好の好機と存じますが……」

家来の一人が、耳よりな情報を入手して得意げに鑑連に告げた。

「この鑑連に、騙し討ちをしろというのか」

鑑連は、その家来をきびしく叱りつけると、即刻、種実のもとに使いをだして、

「ご油断めされぬよう」

と、いいおくった。

鑑連とは、そんな男である。

その鑑連が、弥七郎をなにかにつけて引き立ててくれた。

「かのご仁は、わぬしの大の贔屓だからな」

鎮信が、ひやかすようにいった。

「なにゆえ、眼をかけてくだされるのでしょう」

「鑑連どのは至誠を絵に描いたような父上が好きだったからな。わぬしは、その血をうけておる」

「ならば、兄上とておなじではありませぬか」
「おれはお屋形への忠節より、吉弘家の所領拡張に熱心な男だ。かのご仁には、それが気にくわぬ」
「それは、兄上は総領でありますゆえ」
いたしかたのないこと、と弥七郎はいった。
「なあに、それだけではない。おれは欲ぶかだ。欲のためにお屋形や、わぬしらを裏切ることがあるやもしれぬ」
「まさか」
「とおもうのが、弥七郎らしいところよ。おれはちがう。わかりやすい話が、おれならちよを嫁にはもらわぬ」
「……」
「わぬしは許嫁のちよが、あばた面になっても嫁にした男だ。おなじようにお屋形がどうあろうと、最後まで臣下の道をまもりとおすだろう。父上がそうだった」
「それは……」
「そんなわぬしの真情に、かのご仁は惚れたのさ」



## 4

鑑連が鑑理のもとに弥七郎の縁談をもってきたのは、数年まえのことだ。
あいては斎藤左馬助鎮実の妹ちよである。鎮実は、塩市丸の名跡相続に反対して義鑑に殺された斎藤長実の子で、鑑連や鑑理とともに宗麟側近の一人だった。
弥七郎は府内の鎮実の屋敷のまえで、いくどかちよをみかけたことがある。いつも、地味な着物をまとい、門前に水をまいたり、垣を繕ったりと忙しげに立ちはたらいていた。
「慎みぶかく、清楚を絵に描いたような娘ごだ」
鑑連は仲人口をきいた。
「存じております」
弥七郎がうなずくと、
「なんだ、知っておるのか。ぬしも隅におけぬのう」
鑑連は大口あけてわらった。
「で、もろうてくれるか」
「はい、喜んで」
たちまち縁談はまとまった。

ところが、不運にも、ほどなくちよは痘瘡にかかり、みるも無残なあばた面になった。
「この話、なしにしてもらいたい」
兄鎮実からの申し出もあって、仲人の鑑連も破談を覚悟した。
しかし、弥七郎はいった。
「それがしは、ちよどのの容色に惚れたわけではありませぬ。ちよどののこころがかわらぬかぎり、わが妻としてもらいうけたく存じます」
これには、父の鑑理があわてた。
「むりをすることはない。かわいそうだが、ちよは二目とみられぬ面相になった。義理で結婚することはない」
「父上のおことばともおもわれませぬ」
日ごろ、ものしずかで口かずのすくない弥七郎が、めずらしく眉をあげて抗弁した。
「武士にとっての第一義は、信義をまもることでありましょう」
「それはそうだ」
「あばたくらいに、いちいちおどろいていたのでは信義はつらぬけませぬ」
「とは、いうてもなあ」
「あばたがなんでありましょう。難儀な痘瘡にうち勝った、みごとな向う傷のようなものではありませぬか」



「さすがは、わが倅。うれしいことをいうてくれるわ」
感激家の鑑理は、目尻に涙をうかべて喜んだ。
これで、ちよとの婚儀がととのった。
婚儀の成立をもっとも喜んだのは、仲人の鑑連である。
「弥七郎は、まっこと戦国一の婿どのだ」
これまた、涙をながさんばかりに感激した。
いらい、鎮信のいうとおり自分の息子のように弥七郎を贔屓にしてきた。
翌朝、その鑑連がやってきた。
輿の背後に祝いの酒樽をつんだ荷馬を曳かせている。すぐに祝宴となった。
「めでたいのう」
鑑連は、さっそく持参の酒樽をあけた。
肴は美味な関鯖の干物と乾鮑である。
「それがしごとき若輩に、お役がつとまりましょうや」
鑑連の盃をうけながら、弥七郎はつつましくいった。
「できるからこそ、お屋形もおみとめなされたのだ」
「なにとぞ、よろしくご後見を……」
「おう、ぬしのためなら一肌も二肌もぬぐぞ」

鑑連は大きな掌で、どんと弥七郎の肩をたたいた。
「左衛門大夫どの」
弥七郎が中座したすきに、鎮信が小声で鑑連に質した。
「三河守が背いたのは、やはり兄嫁を寝とったお屋形への怨みでしょうか」
「毛利にそそのかされたせいもあるが、根っ子はまちがいなくお屋形への怨みだ」
「やはり」
「でるのだとよ」
鑑連が、眉をひそめてみせた。
「なにが、です？」
「弾正忠の怨霊がだよ」
「城にですか」
「さよう。夜な夜な鑑種の夢枕に立ち、お屋形に抱かれるあかねへの未練を、くどくどともらしつづけたのだそうな」
「いっそ、お屋形の枕元に立てばよいものを……」
「そこが弾正忠の死んでも律儀なところよ。やつに主人は呪えぬ」
「忠義のお化けのような方ですな」
「謀叛の科で殺されたが、やつは最後まで忠義者でとおしたかった」



「妻女を寝とられても、なお忠義とは解せませぬ」
「寝とられたは、おのれがわるいとおもうのが忠義というものだ」
「左衛門大夫どのも、そうおもわれるのですか」
「死んだ鑑理とて、おなじかんがえだったさ」
「忠義とは、せつないものですな」
「惚れたが因果、ということもある」
「仮に、惚れるに値せぬ主君でも？」
「むりにでも惚れるのさ。弾正忠も、ぬしのおやじどのも、そうしたのだ」
「けっくは、主君を甘やかすことになるのでは？」
「むろん、惚れたからには諫死もいとわぬ覚悟だ」
「わりにあいませぬな」
「わりにあわぬからこその武士ではないか。計算ずくは商人のすること、武士は潔う死ぬために生きるのみだ」
「みながみな、そうはいきますまい」
「他人のことはどうでもよい。ただ、弥七郎には潔う死んでもらう」
「そのためのご推輓でありましたか」
「なんの、この件を決したのは、わしではない。ほかならぬあかねだ」

「あの、あかねどのが……」
「そう、義弟の後任にはぜひ吉弘弥七郎どのをと、お屋形を股にはさみこんで閨で寄り切った」
「それはまた……」
「弥七郎の迷いのない一途な生き方に感動したのよ。おもうてもみよ。あかねはいまやお屋形の寵愛を独りじめにして、権勢およぶ者のない羽ぶりだが、毎夜の床は地獄だ」
「はあ、地獄でありますか」
「いや、女人の身では、こころは地獄、肉は極楽というべきかな。その地獄、極楽の狭間に迷うておるだけに、あばたの娘をあえて嫁にした弥七郎の男ぶりに、ぞっこん惚れた」
「うわさは、大友館まできこえておりましたか」
「なんの、国中、とりわけ女ご衆のあいだで大評判だ」
「その評判、おそらく弥七郎は気づいてはおりますまい」
「そこが弥七郎のいいところよ」
「兄ながら、いささか嫉けてきますな」
「おぬしも、よい弟をもった。弥七郎なら怨念の城を誠忠の魂の憑代と化してくれよう」
「それはもう、弥七郎はそれがしなどとはちがって愚直なほどの男でありますゆえ」
「愚直こそ、武士の誇るべき紋章よ」



「すえながくうしろ楯のほどを……」
「いうにやおよぶ」
「弥七郎は幸せ者です」
「おうよ、ちよはよい嫁だし、千熊丸も丈夫に育っておるしな」
鑑連は萎えた膝をたたいて、豪快にわらいをほとばしらせた。
千熊丸とは、いうまでもなく弥七郎が愛妻ちよとのあいだにもうけた玉の子である。

## 5

宝満、岩屋の両城は、ともに眼下に太宰府を望む山上にある。
宝満城は竈門神社の上宮の鎮もる標高八百三十メートルの宝満山頂ちかくに築かれており、山頂はそれ自体が砦のような巨岩がそそり立ち、その岩頭に立てば、東方、筑紫平野のひろがりのかなたに、古処三山、英彦山が連なり、西には背振山系の峰々、南に筑後川、そしてはるか北方には玄界灘の瑠璃いろの海面を望むことができた。
春には純白の石楠花が群れ咲くこの山は、古来、英彦山とならぶ修験の山で、かの最澄や空海も入山して遣唐使船の航海安全を祈願したとつたえられる。
この宝満山の南西に、太宰府の町をはさんで四王寺山（標高四百十メートル）のなだら

かな山容が望まれ、その中腹、馬蹄形に北に張りだした尾根上に岩屋城があった。

城の周辺には小楢や櫨が群生し、秋ともなれば城は真っ赤な色彩の渦に塗りこめられる。

紹運は宝満城を詰城にし、岩屋城に起居して四辺ににらみをきかせた。

両城は南北から指呼の間に太宰府をはさみこむ要衝にあるだけに、その山麓をおさえれば、筑前の交通を容易に遮断することができるのである。

高橋家の名跡をついでより、弥七郎は主膳兵衛尉鎮種と名乗り、やがて入道して紹運と号するようになった。

毎日が戦、また戦――。

秋月種実、筑紫広門、宗像氏貞、原田了栄、龍造寺隆信ら毛利に寝返った諸将があいついで攻めよせ、低山にある岩屋城はしばしば落城の危機にさらされた。

しかし、紹運は文字どおり獅子奮迅のはたらきをして守りとおし、はげしく逆襲もした。

宗麟の抜擢はまちがっていなかった。青年武将のみごとな活躍ぶりはバテレンたちの耳にも達し、ルイス・フロイスは本国あての報告書で、紹運を〔希代の名将〕と絶賛したほどだ。

こうして、またたくまに十二年の歳月がながれた。



「紹運、統虎をわしの婿にくれぬか」

鑑連が強引に紹運にもうしでたのは、天正九年（一五八一）の春だった。筑紫の野は一面、黄金いろの菜の花に彩られている。

鑑連は、紹運が宝満・岩屋の城督になった翌年、激戦のすえに攻めおとした筑前立花城に入って立花家の名跡を継いだが、まもなく頭を剃って紀伊入道道雪と号し、一人娘の誾千代に家督をゆずって隠居した。

紹運と親子ほども年のちがう道雪は、すでに六十六歳である。

誾千代は道雪が雷にうたれて下半身が不自由になるまえに、三番目の妻にしに産ませた一粒種である。にしは筑後浮羽郡長岩城主問注所鑑豊の娘で、死別した先夫安武河内守鎮則とのあいだに二人の子がいた。

道雪があえて子連れ女を娶ったのは、離別した二人の先妻とのあいだには子ができなかったからだ。

――わが血脈をのこせぬとは、なんたる不幸……。

そこで、あえて経産婦を嫁にえらんで、最後の子づくりにはげんだ。

努力は実って、にしは子を産んだ。ただし、女児である。このつぎこそ男児を、と道雪は意気ごんだが、そのやさきに被雷したのだった。

――一生の不覚。

道雪は身をもんで悔しがったが、もはやなんともならない。
——このうえは、闇千代を跡継ぎに仕立てるほかはない。
道雪はこころをきめた。
剛将道雪の血を濃くうけついだ闇千代は、望みどおり気のつよい男まさりの娘だった。
道雪は闇千代に男装させ、きびしく武術を仕込んで女城主として薫育した。
その闇千代が当年十三歳になる。
「父さま、闇もはよう合戦にでたい」
闇千代は、たのもしいことをいって道雪を喜ばせた。
が、しょせんは女だ。その心意気は壮としても、やはり立花家の後事を託するにはこころもとない。
で、道雪は一日もはやく、しっかりした婿を迎え、まことの隠居をしたいとおもうようになった。
あげく、紹運の長男千熊丸に白羽の矢を立て、
「たのむ」
紹運に談じこんだ。
千熊丸はすでに元服して統虎と称している。闇千代より二つ年上の十五歳、格好の婿候補だったが、紹運にとっては、たいせつな嫡子である。



いかに道雪のたのみでも、たやすくうんとはいえない。
「おやじどのには、戸次家に男子がおられましょう」
国もとの親戚筋から養子をとればよいではないか、といいかえしたが道雪はひきさがらない。
「わからぬか。わしは、ぬしの血が欲しいのだ」
「それがしの血？」
「さよう。鑑理から紹運へとうけつがれた天晴れな武人の血だ」
「ありがたいおことばではありますが、こればかりは……」
「くれぬというのか」
「ご勘弁ください」
「ぬしは、存外けちだな」
「ご無体な申し出をことわり、けちよばわりされるのは心外です」
紹運は、抵抗した。
「ぬしには、まだ千若丸がおるではないか」
道雪はいった。
千若丸は紹運の次男で十歳になる。
「どうしてもともうされるなら、千若丸をおゆずりしましょう」

紹運はおれてでたが、道雪は即座に、
「だめだ。年下の千若丸では、お閻めがひねり殺しかねぬわ」
つよく首をふってことわり、
「わしが、統虎を実の孫のようにおもうておるのは、ぬしも知っていよう」
あらためて、紹運の顔をのぞきこんだ。
道雪が紹運とおなじように、息子の統虎にもふかく肩入れしてきたのはじじつだ。まるで、実の祖父であるかのようにふるまい、ときに箸のあげおろしにまで、きびしく口をはさんだ。
たとえば、統虎がまだ千熊丸と称していたころのこと、膳にのった焼き鮎の骨をはずし、ていねいに肉をむしって口にはこぶのをみて、
「千熊丸、われは女か。そんなことでは戦場ではものの役に立たぬわ。武士ならば、頭からがぶりとやれ」
と叱りつけたものだ。
紹運が千熊丸をつれて立花城を訪ねたときには、その面前で、軍律に違反した部下を斬首してみせ、やにわに千熊丸の股間に手をあてがい、
「さすがは紹運の息子だ。睾丸がだらりとしておるわい」
大声あげて、千熊丸の胆力をほめた。



そんなとき、紹運はなにもいわず、ただにこにこしていた。
道雪を父のように信じきっている。じっさい、紹運がこれまで大過なく宝満・岩屋の城督をつとめてこられたのは、道雪の父親にもまさる親身な後見があってのことだった。
「ぬしは、まだわかい」
道雪は、さらに口説いた。
「もはや、三十四歳になります」
「わかい。まだまだ子はできる」
「つねに矢弾にさらされる身、明日、死ぬるかもわかりませぬ」
「なんの、ぬしが死ぬものか。だが、わしはちかぢか確実に死ぬ」
「おやじどのは不死身です」
「紹運よ、気休めはいわぬものぞ。われらが必死にまもりぬいてきた大友家も、いまや滅亡の危機に瀕しておる」
道雪のことばは、けっして大げさではなかった。
かつて九州の過半を支配した太守大友家も、数年来、落日の影を濃くしていた。
三年まえの天正六年（一五七八）夏、日向に進出した薩摩島津軍と戦うため、宗麟は四万八千の大軍をひきいて遠征した。紹運、道雪の二人は従軍しなかったが、田原紹忍以下、佐伯惟教、田北鎮周、田尻鑑種、それに臼杵鑑速の長男統景ら、大友家の主だった重

臣が参加した。

しかし、総大将の宗麟が前線にでて指揮しなかったこともあり、大友軍は日向高城、耳川の戦に惨敗し、二千余の将士を失って敗走した。紹忍は重傷、軍師の角隈石宗以下、惟教、鎮周、統景らは討ち死にし、紹運の兄鎮信も戦死した。

敗因は、宗麟のキリスト教狂いにある。

## 6

フランシスコ・ザビエルが豊後府内にきたのは、天文二十年（一五五一）。宗麟が家督を継いだばかりの二十二歳の秋だった。

「豊後の新しい王は、デウスの教えに関心をもっている」

ポルトガル商人から情報をえたザビエルは、大きな期待を抱いて宗麟に会いにきたのだった。

会ってみて、うれしくなった。宗麟はたしかに他の大名とはちがった。

キリスト教に好意を示した大名は多いが、いずれもキリストの教義よりも、宣教師がもたらす鉄砲や薬、ギヤマンやワインなど〝舶来品〟に魅かれてのことだった。それらの品は、莫大な利益をもたらすからだ。



むろん、宗麟もこれら珍奇な物品への関心を隠そうとはしなかった。ただ宗麟のばあい、それだけではなかった。熱心にデウスの教えをきこうとした。ことに、きびしい戒律と原罪の説にふかく耳をかたむけた。

――この王は、こころの救いをもとめている。

ザビエルはさっそくに入信をすすめたが、宗麟は曖昧に微笑をかえすだけで、うんとはいわない。

――しかし、脈はある。

ザビエルは四カ月後、おもいをのこしながら府内から去った。

辞去するにあたって、

「王がキリスト教に入信してくださらねば、このザビエルは死んでも天国にいけませぬ」

真顔をつくって最後の口説きを試みたが、宗麟は、あいもかわらぬ微笑でこたえただけだった。

――いまはだめでも、いずれこの王はキリスト教に帰依する。

ザビエルは確信した。そこで、

「かならず、入信させよ」

後任者にいいおくり、バルテザル・カゴ、イルマン（バテレンを補佐する宣教師）のペトロ・ド・ダルカセバ、ルイス・デ・アルメイダ、さらには、フランシスコ・カブラル

と、つぎつぎに腕利きのバテレンを府内におくりこんだ。

なかで、弘治元年（一五五五）に入府したリスボンの貴族出身のアルメイダは、裕福なうえに医術の心得もあったので、教会や修道士養成所に加えて、診療所や育児院を自費で建設し、領内の庶士のこころをつかんだ。

宗麟は資金こそださなかったが、アルメイダにたのまれると、土地や工事人を提供して協力を惜しまなかった。

「このうえは、王みずからキリスト教徒になられませ」

アルメイダは、ここぞと懸命に入信をすすめたが、やはり宗麟は首を縦にふらなかった。

天正四年（一五七六）、宗麟はとつじょ家督を嫡男の義統にゆずり、臼杵の城下に寿林寺を建立、京の大徳寺から怡雲禅師を招いて開山上人にすえ、みずから禅学を修した。

そのくせ、キリスト教をみかぎったわけではない。臼杵城下にも教会や診療所などを建設させ、府内どうよう自由に布教をゆるした。

すでに二年まえに受洗し、ドン・セバスチャンの洗礼名をもつ次男の親家が、教会のミサに通うことにも、一言の異議もさしはさまなかった。

じつは、この親家が入信するとき、一騒動が起こった。

親家は兄の義統と仲がわるい。宗麟はおのれの体験からも、将来の兄弟間の家督争いを



避けるため、親家を出家させたほうがよいとかんがえた。じつは寿林寺を建立したのもそのためで、それには母親のまさも賛成だった。

ところが、

「禅坊主になるよりは、キリシタンの洗礼をうけたい」

と親家はいいだした。

宗麟が、これをゆるすと、

「ならば、わたくしも……」

親虎も受洗を希望した。

親虎は公家柳原家の出で、男子のない田原紹忍の養子になっている。京育ちらしい優雅な容姿の少年で、正室まさは将来は自分の娘と結婚させるつもりで、おおいに目をかけていた。それだけに、親虎のわがままを怒った。

「兄上、親虎に入信をゆるしたら絶交ですよ」

紹忍とまさは実の兄妹である。

両人は、大友家の社家奉行をつとめる国東郡安岐郷奈多八幡の神官奈多鑑基の子で、紹忍は国東郡武蔵郷今市城主田原親資の養子に入り、宗麟の加判衆の一人として重臣の座に列している。正室の兄であることを鼻にかけ権高にふるまうことが多く、家中の評判はすこぶるわるい。道雪や紹運も、獅子身中の虫と断じている。

その紹忍が妹まさには、からきし頭があがらない。

まさは、ひそかにイゼベルとよばれていた。

神官の娘のまさは、夫の宗麟がキリスト教に肩入れするのが、なんともがまんならない。で、ことごとにバテレンたちにつらくあたった。その意趣がえしに、バテレンたちはイゼベルのあだ名を献呈したのだった。

イゼベルとは、イスラエルの王アハブの妻の名で、夫をないがしろにして異神を信じる有名な悪女の代名詞。怒れる牝獅子の意味だという。

結婚いらい、宗麟はこの怒れる牝獅子の並みはずれた嫉妬に悩まされつづけてきた。むろん、まさを怒れる牝獅子にしたのは、宗麟自身だ。あかねだけでなく、宗麟の閨房には、つねに十指にあまる側妾が侍っている。

おもえば、イゼベルも気の毒だった。

宗麟のもとに嫁して義統ほか二男三女をつづけて出産したとたんに、ぴたりと宗麟の足がとおのいた。そのくせ、宗麟の閨房からは、夜ごと若い女のあげる息もたえだえの喜悦の声がひびいてくる。

空閨にもだえながら、イゼベルは嫉妬に狂い、ひたすら夫を呪った。

「大望を抱く男ほど、女への欲望も強いものだ」

兄の紹忍はなだめようとしたが、イゼベルはきかなかった。



ことに、一万田弾正忠の妻から側妾に入ったあかねにたいしては、

「亡き殿ごにかわって呪い殺してやる」

つよい敵意を示しつづけた。

――おそろしい女だ。

宗麟は、できることなら、この怒れる牝獅子を離別したいと切実におもった。しかし、そうなれば紹忍がだまっているはずもなく、家中は収拾のつかぬ騒擾におちいるだろう。

じつは、宗麟がザビエル以下のバテレンの説教に熱心に耳をかたむけたのは、異教の教えのなかに、この苦悩からまぬがれるための救いがないかと期待したためだった。

おさえようもなく、身内からたぎり立ってくる欲望の火をしずめる手だてはないのか。愛してもいない女から逃れる術を教えてくれる救済があるのではないか。

しかし、バテレンの説く教えは、いわく姦淫するなかれ、複数の妻をもつことも、離婚をすることも、神の名においてゆるされぬ、というきびしい掟ばかりだった。

宗麟がバテレンの布教に理解を示しながら、みずから入信することを逡巡したのは、この戒律のきびしさに辟易してのことだった。

さて、紹忍である。

「絶交する」

と気のつよい妹にすごまれて、あわてて親虎を軟禁したが、半年たっても親虎は決意を

かえなかったばかりか、三人の近習とともにカブラルのもとに駆けこみ、勝手に受洗してしまった。ドン・シマンというのが洗礼名である。

「兄上が甘やかすからです」

まさは怒髪天をつく形相で、紹忍にくってかかった。

「なるほど、デウスの教えは害毒だ」

それまで宗麟に遠慮してキリシタンに寛容だった紹忍も、この一件で激烈な反キリシタンに転じ、カブラルをよびつけると、

「親虎に棄教させねば、教会をうちこわしバテレンを皆殺しにする」

と脅迫した。

しかし、カブラルはいささかも動じない。

「そんな無茶を、王がゆるされるはずがない」

つっぱねた。

「ほざくな。わしは、お屋形に全権をまかされておる重役だぞ」

さらに、紹忍は恫喝した。

容易ならぬ事態となった。にもかかわらず、宗麟はただ傍観している。

――うかつに手をだせば、内乱になりかねない。

紹忍や正室のまさだけでなく、国内には反キリシタンの将士があふれている。紹忍が謀



叛にふみきれば、それに同調する者もたくさんいるはずだ。

翌天正六年（一五七八）夏、宗麟はぬきうちにまさを離縁した。どうじに、まさに仕えていた侍女のひなを正室に迎えた。

ひなは病弱のため前夫に離別された女で、口かずのすくない貞淑な女性だった。

「なにも、よりによってわたしの下女などと……」

あてつけがましく再婚することはないではないか、と牝獅子は吠え立て、ついには自殺をはかったが、宗麟はひややかだった。

離婚と再婚をどうじにやってのけると、宗麟は後妻のひなをともなって教会にいき、カブラルの洗礼をうけた。

ひなの洗礼名はジュリア、宗麟はかのフランシスコ・ザビエルの名を希望してゆるされた。

フランシスコ宗麟――。

宗麟のこころには、最初に会ったザビエルのことが、わすれることなく焼きついていた。

――父殺し。

あのとき、その重くこころにかぶさる原罪を懺悔して、ザビエルの膝にすがりたかったのだ。しかし、宗麟はあまりにもわかすぎた。こころに女をおもうだけで姦淫の罪になる

というデウスの教えには、とてもついていけそうもなかった。
が、いまや五十歳を目前にして、ようやく女色の欲望もおとろえ、一婦を慈しむ教えにも、なんとかしたがえそうな気になった。で、入信にふみきった。
——これからは、だれはばかることなく、おのれの信念どおりに生きる。
そして、この年夏の日向遠征となったのだった。
宗麟には遠大な夢があった。
——日向の地を平定して、そこにキリシタンの王国を築く。
宗麟は遠征軍の先頭に十字架をかかげ、道々、寺社をうちこわしながら進軍した。その眼前に島津軍は神社の御幣をかざして立ちふさがった。
異教の旗印に反発しながらすすんできた大友軍の将兵は、神威のまえにおそれおののき、たちまち戦意を喪失した。あげくの高城、耳川の大敗北だった。ドン・シマン親虎も養父紹忍を助けようとして討ち死にした。
この敗戦を境目に大友軍はふるわなくなり、各地で連戦連敗したにもかかわらず、宗麟はすっかり覇気を失い、信心ごとにばかりかまけている。
「バテレンかぶれのお屋形にはついてゆけぬ」
多くの将士のこころは、しだいに宗麟からはなれていった。
道雪は、そのことをいっているのだ。



「このままでは、大友家はつぶれる」
道雪はくやしくてならない。筑前の前線で日ごとに勢いを増してくる反大友の諸勢と忙しく干戈をまじえる身では、じかに臼杵にでかけて宗麟に諫言することもままならぬ。で、いくたびも声涙ともにくだる諫書をしたためて宗麟のもとにおくった。が、宗麟からのいらえはない。
さりとて、他の諸将のように宗麟をみすてられないのが道雪だった。
「紹運よ。いまこそわれら二人、力をあわせて大友家を守らねばならぬ」
そのためにも、統虎を立花家にゆずれ、というのが道雪のいい分だった。
紹運は道雪のねばりに負けた。
「おやじどのには、かないませぬな」
「なに、くれるというか」
道雪は、坊主頭をふり立てて喜悦の声をあげた。
「くれるもくれないも、まるで強奪ではありませぬか。お屋形に妻女を奪われた一万田どのの気持ちがようわかります」
紹運は口惜しげにいった。
「これ、人ぎきのわるいことをもうすな。わしは利発な稚児は好きだが、統虎を衆道のあいてにする気はないぞ」

「軽口でありますよ。このうえは統虎めをお手もとでしっかりと鍛えなおしてください」
「たいせつなおぬしの種だ。戦国一の大将にしてみせるわ」
統虎が正式に立花家に婿入りしたのは、この年、天正九年（一五八一）秋のことだった。
出立前夜、紹運は統虎に送別の盃をあたえながら、厳粛にいいわたした。
「よいか。明日からは、わしとそなたは父でも子でもない。まんいち高橋家と立花家が敵味方となったときには、そなたは道雪どのの先鋒となり、まっさきにわが首をとれ。道雪どのは天下に恥じぬ武人だ。まちがっても未練な所業があってはならぬ」
「わかっております」
怜悧な瞳をみはって、統虎はうなずいた。
「そなたが不覚をとり、たとい道雪どのから追いだされるようなことがあっても、当城にもどることはゆるさぬぞ。そのときには、潔く腹を切れ」
いいながら、紹運は吉弘家伝来の一振りの銘刀備前長光を統虎にあたえた。
この統虎が、後に天下に名を成すことになる立花宗茂である。



# 7

立花城は宝満、岩屋両城の北方五里、筑前粕谷郡久山と新宮の境界にそびえる標高三百六十七メートルの立花山の頂に築かれている。
東城ともよばれる本城のある山頂部は平坦で井楼山ともよばれ、楠をはじめ美しい照葉樹林におおわれており、西がわは博多湾の香椎潟、和白浜にむけてひらけ、はるかに志賀島、能古島、玄界島の島影が望まれる。東につらなるのは、ふかぶかとした犬鳴山地である。
北西の峰つづきに西城のある松尾山。その南に大首領、小首領の峰々。松尾山の西方には白岳、東方には大一足、小一足の小峰がつらなり、俗に立花七峰とよばれている。このうち、白岳にも出城が設けられており、いわゆる連郭式の山城を構成していた。
立花山中腹の北斜面には、こんこんと清水の湧く井戸があり、その谷底には清流のながれるふかい沢がはしり、水の心配はない。
この城を築いたのは南北朝のころ、足利尊氏に与して活躍した大友家庶流の貞載とつたえられる。立花家は代々西の大友とよばれたほどの名家だけに、宝満、岩屋にくらべて城郭の規模も格段に大きい。

統虎に、立花家での新しい生活がはじまった。

「そなたが、養子の統虎か」

はじめて顔をあわせたとき、闇千代は横柄な口をきいた。さすがは男まさりのじゃじゃ馬娘だ。

「これ、お闇、なんという口をきく。統虎はおまえの婿どのぞ」

あわてて道雪が叱りつけたが、闇千代はきかない。

「婿というても養子でしょう。城主は、この闇千代です」

「ばかをもうすな、養子であろうと、おまえの婿となったからには統虎が城主だ」

「父さまの理屈は、おかしい」

闇千代はさけんだ。

「なにが、おかしい」

「女は一人まえの人間ではないともうされるのですか。なぜ統虎に城主をゆずらねばならぬのか、闇にはわかりませぬ」

「戦は男のものだ」

「父さまに男の子として育てられた闇です。りっぱに城主として戦ってみせます。薙刀(なぎなた)の腕はご存じでしょう」

「たしかに、男まさりの腕まえだ」



「ほれ、ごらんなさい。闇は男におとらぬ武士です」

闇千代は誇らしげに胸をはった。

統虎は、ただあきれて父娘のやりとりをきいていた。

――こんな女ごもいるのか。

統虎のこれまでに知っている女は、母のちよをはじめ、みな男に従順だった。

父の紹運が統虎を養子にだすときめたとき、ちよは、

「せめて、もう一年待っていただいたら……」

いいかけたが、

「いまさら、一年や二年にこだわってみてどうなる。おやじどのとの男の約束だ」

紹運がいうのをきくと、

「さようでございますね。統虎はもうりっぱに一人まえですからね」

ちよは、すぐさまひきさがった。

――女とは、そんなものだ。

と、信じこんでいた統虎である。

闇千代の父をもおそれぬ言辞を耳にして、

――とんだ女の婿になってしもうた。

ひそかに、ため息をもらしたのだった。

「すまんな、婿どの……」

あとで、道雪はわびた。

「あれに男の格好をさせ、なまじ武術など仕込んだわしがまちがっていた」

「ききしにまさる勇ましい姫ごですね」

統虎は苦笑するしかなかった。

「だがな、悍馬ほど乗りこなすたのしみがあるというものだ」

「わたくしに、乗りこなせましょうか」

「それは、ぬしの腕しだいよ。まちごうても養子の身をひけめになぞ感じるなよ」

この年、暮れになって二人の婚礼の式が挙げられたが、そこでも誾千代はあくまで城主の自分が婿をとるのだという態度をくずさず、高橋家から統虎についてきた世戸口十兵衛を憤慨させた。

じっさい、養子とはつらいものだ。誾千代だけでなく立花家の家臣たちからして、なにごとにつけ誾千代を立て、養子の統虎をうとんじるけはいがつよかった。

道雪につれられて立花七峰の一つを登ったときのこと、統虎が栗の毬を足裏につきたて、

「たれか、ぬいてくれぬか」

供にむかって命じたところ、付け人頭の由布源五兵衛尉がはしりよるなり、いきなり



統虎の足首をにぎって、ぬくどころか逆にぐいっとばかりに毬栗をおしつけた。足裏に火で焼かれるような痛みがはしったが、悲鳴をあげることもならず、統虎はただ歯をくいしばって、源五兵衛をにらみつけるしかなかった。

源五兵衛は立花家屈指の勇者で、あらっぽさで知られていた。道雪は統虎を鍛えるために、わざとこの荒くれ武者を付け人にしたのだった。

だから、このときも、

――甘えるな、刺さった毬栗くらい自分でとれ。

口にこそださぬものの、道雪はきびしい顔をして輿のうえからだまってみつめているだけだった。

道雪の意図は、統虎にもおぼろげながら理解できた。しかし、

（この統虎がいかに年少の城主とはいえ、源五兵衛のやりかたには家臣としての敬意が一かけらも感じられない。これもけっくは源五兵衛に、たかが養子と、この自分を軽んじる気持ちがあるからだ）

統虎は、屈辱的な痛みにたえながらおもった。瞼のうらに、じんわりと涙がにじんだ。

「くやしいか」

帰城したあと、道雪は統虎にたずねた。

「臓腑が破れんばかりに、くやしゅうございます」

統虎は率直にこたえた。
「ぬしが、だらしないからだ」
「さように存じます。ただ源五兵衛のいたしようは、いささかひどうござりませぬか」
「ほう、そうかな」
「つまるところ、わたくしめを養子と軽んじてのことでありましょう」
「そうかも知れぬな」
「わたくしは一生、養子の憂き目にたえねばならぬのですか」
「だから、それはぬししだいよ。くやしければはよう、まことの城主らしくなることだ」
「まことの城主？」
「そうだ。ぬしはもう、お閨めを寝床でおさえつけたか」
「いえ……」
「お閨が、きらいか」
「好きもきらいも……。閨どのは毎夜、お付きの女たちを褥（しとね）のまわりに侍らせ、わたくしなどよせつけませぬ」
「ぬしは、まだあれが立たぬのか」
「あれ、でありますか」
「さよう、男のあれだ」



「りっぱに立ちまする」
「ならば、邪魔な女どもなどけちらして、あの生意気な小娘をおさえつけ、ぬしの旗印を立てい」
「そのようにしても、舅（しゅうと）さまはお怒りになりませぬか」
「なんで、わしが怒る。ぬしはわしが望んだ婿どのだ。お閨を焼いて食おうと煮て食おうと、ぬしの勝手だ」
「では、やります」
「おう、やるがよい。わがお屋形なぞ、十歳のときにはもう侍女を総なめなされたものだ」
「お屋形さまは、家来の妻女にまで懸想されたとか」
「なんだ。知っておるのか」
「はい。父母が閨で話しておるのを耳にしました」
「家来の妻女に手をだすのはやめにせい。まず、おのれの妻女にしっかりと旗を立てるのがさきだ」
「はあ……」
「どうにもお閨が好きになれねば、離別してもかまわぬ」
「離別しても……」

「そうだ。気に入った女ごが欲しければ、敵将の妻女でも奪うつもりで戦にはげめ」
「戦とは、そのようなものでありますか」
「敵方の女を抱きたい下心からであっても、いのちがけで戦うて勝利をおさめれば、それがお家への忠義になる」
「ははあ……」
「まあ、男にとっては戦も女もいのちがけよ。わしは雷にうたれてより女は抱けぬ身となったが、この年になっても、まだ女体に恋いこがれておる」
「まことでござりますか」
「まことだ。そのわかさで、ぼやぼやするな。ただひたすらに突進あるのみだ」
「わかりまいた」
「お閨がぬしにしたがえば、家中はおのずからぬしを立てるようになる」



# 旗立て

## 1

男子として育てられたこともあり、閨千代は立ち居ふるまいこそ優しさに欠けたが、整った眉目は輝くばかりに美しかった。
「若殿には、もったいないばかりの嫁ごでござりますな」
高橋家からついてきた世戸口十兵衛など、閨千代をみるたびに賛嘆の吐息をもらし、
「なにとぞ、臼杵のお屋形さまのお目にとまりませぬよう……」
いささかわるふざけをすごして、胸に十字をきってみせたりした。
統虎が閨千代と夫婦の交わりをとげたのは、年が明けて統虎が十六、閨千代が十四になった早春だった。
立花家の居館は立花山の東麓にある。背後に楠の大木が鬱蒼と生い茂り、ちかくに小野

和泉守、由布惟信、十時連貞、薦野三河守、内田壱岐入道ら重臣の屋敷があった。

その日、統虎が沢ぞいの馬場でひとり馬を責めていると、馬乗り袴をつけた閻千代が、たくましい栗毛に乗ってあらわれ、会釈もせずに、いきなり統虎と馬首をならべて駆けはじめた。

なかなか巧みである。やがて、馬腹をけって統虎のまえにでると、ちらと皓い歯をみせてふりかえり、挑発するように全速で駆けはじめた。

――生意気な。

統虎も負けずぎらいなわか者である。一鞭あてて、すぐに後を追う。

ぬきつぬかれつ、二頭の馬は広い馬場を縦横に疾駆した。

馬場の周辺には、おりから紅梅が馥郁と咲き匂い、晴れあがった空には雲雀がさえずっている。

しかし、いまや闘争心のかたまりとなって馬を駆る二人のわか者には、なにもみえず、なにもきこえない。たがいに紅潮した顔面から汗をしたたらせ、ひたすら先頭を競いあった。

小半時もたったろうか。さすがに閻千代の息があがった。

と、なにをおもったか、閻千代は、いきなり鐙に足をふんばり統虎の乗馬に自分の馬腹をよせてきた。



二頭の馬腹がふれあいそうになり、

「あぶないっ」

統虎がさけんだときには、もう閻千代のからだは毬のようにはずんで地上になげだされていた。

統虎は手綱をひきしぼり、竿立ちになった馬の背からすべりおりると、うずくまったままの閻千代に駆けよった。

抱き起こすと、閻千代の額にうっすらと血がにじんでいる。眼はとじたままだ。

「しっかりせい」

よびかけながら、統虎は閻千代を胸に抱きあげた。

――死んだか。

戦慄が一瞬、五体をはしりぬけた。

と、閻千代の唇がかすかにひらき皓い歯がのぞいた。やがて、その皓い歯間から、

「ふっ」

と息がもれ、

「ふふふっ」

しだいに、ふくみわらいにかわった。

「負けた」

いたずらっぽく薄目をあけて、闇千代はちらと紅い舌をのぞかせた。
「ばかめ、死んだかとおもうたぞ」
統虎は怒りに駆られ、おもわず闇千代をほうりだそうとした。が、
「おねがい。このまま、もうしばらく……」
うっとりした表情で、闇千代は両手を統虎の首にまわしてきた。
闇千代のはだけた胸もとから、かすかに乳房がのぞいた。小麦いろにやけた健康そうな肌から、ふつふつと玉の汗がふきだしている。そこから立ちのぼる生温かい匂いが、むんむんと統虎の鼻孔を刺激した。
はじめて嗅ぐ女の汗の匂いである。なにやら勃然とした衝動にとらわれ、統虎は困惑して、てれかくしに、
「やはり、女だな」
といった。
「闇のからだが、やわらかいから？」
闇千代は統虎の腕のなかで、ちらと媚びをみせてわらった。
「いや、男まさりでも、意外とからだはかるい」
統虎は感じたままをのべた。
「なんだ、そんなことか」



つまらなそうに闇千代は口をとがらせたが、すぐに機嫌をなおすと、
「もっと抱いていたい？」
さらに媚態をあらわにして、統虎の顔をうかがいみた。
「そうではない。そなたが自分では立てぬとおもうて抱いてやっているだけだ」
「だいじょうぶ、自分で立てるさ。でも、もっと抱いていたいんだろ」
「いやなことだ」
統虎は怒ったようにいい、それでもそろりと闇千代のからだを地面におろした。
闇千代の小さな乳房のふくらみが、かすかに統虎の胸もとにふれた。
（まさしく女の胸だ）
母の胸に甘えていたころの、なにやら甘美な気分をおもいだし、統虎はすくなからず動揺した。その動揺をかくすように、
「落馬しても怪我ひとつせぬとは、さすがに男まさりだな」
統虎が、べつのことを口にすると、
「闇は、やはり男にはなりきれぬ」
めずらしく闇千代が、しおらしいことをいった。
「あたりまえだ。いつまでもそなたが男では、この統虎がこまる」
「こまる？」

「ああ、こまる」
「ほんとに？」
「ほんとだ」
「じつは、このまえ、闇は女になった」
意味ありげに、闇千代は統虎に笑みかけた。
「女になった？」
「わからないのか？」
「……」
「月のものが、あった」
「月のもの？」
「なんだ、なにも知らないのだな……今夜、闇のもとにおいで」
意外なことばである。統虎は、にわかには信じられぬ。で、
「いいのか」
たしかめた。
「うん、いい。闇が、いろいろ教えてあげる」
優しい声音になって、闇千代はうなずいた。



## 2

その夜、二人は一つになった。
ただし、いざ同衾（どうきん）すると闇千代は口ほどにもなく、ただ棒のように身を硬くしてよこたわっているだけだった。
統虎も、むろん女体にふれるのははじめてである。それでも本能にまかせて、かたく閉じた闇千代の裸身をまさぐりながら、
「ほんとに、よいのか」
いくども、念をおした。
「よい」
闇千代はこたえるが、いつまでもからだは棒のままだ。木の実のように反応のない、かたい乳首にふれながら、統虎は、
（やはり、この女はおれを好きではないのではないか）
とのおもいにとらわれた。
（だれか、ほかに好きな男でもいるのだろうか）
あれこれ疑ってみたが、そんなあいてがいるようにもおもえない。けっきょく、統虎

は、

（女になったとはいっても、それは月のものがあったというだけで、こころはまだ女になりきっていないのだ……）

とおもうことにした。

（ならば、むりやり旗を立てることもない）

「いやなら、やめてもよいぞ」

統虎はいった。

「いやとは、いうておらぬ」

「ならば、もっと熱うなれ」

おもわず統虎が不満をもらすと、

「この閨に、命令するのか」

とたんに、閨千代は眼をむいて下からにらみかえした。

（やはり、閨千代はまだ自分が城主のつもりでいるらしい。城主が養子のおれをためしているつもりなのだ）

にわかに興がさめ、統虎は萎えかけた。

その耳底に、舅の叱咤の声がとどろいた。

「まことの城主になりたければ、まず閨千代をおし伏せろ」



たしかに、ここでやめたら自分は一生、閨千代とまことの夫婦になれぬかもしれない。さすれば、どうなるか……。

（閨千代ではなく、神が自分をためしているのだ）

と、統虎はおもおうとした。

父は、あばたを気にする母と結婚し、優しくいたわったではないか。

（そうだ、自分に欠けているのは、その優しさだ。閨千代をいたわるこころだ。閨千代はまだ子どもなのだ。男の子として育てられ、幼くして城主にすえられるという異常な境遇のなかで、すなおな自分をみうしなっているのにちがいない。責めるのではなく、むしろ優しく同情してやるべきではないのか）

「すまぬ。命令する気などなかった。ただ二人で燃えて一心同体になりたかっただけだ」

統虎は、すなおに閨千代にわびた。

自分がおれてでることで、閨千代の高い気位と矜持にこりかたまったこころを、すこしでもときほぐすことができれば、とおもったのだった。

統虎は四苦八苦のすえ、夜が白みかけるころになって、ようやく目的をはたした。その瞬間、

「むう」

小さくうめいて、閨千代は顔をのけぞらせた。目尻から涙が一筋、糸をひいてながれ

た。

はてた後の気だるさのなかで、統虎はふっと一つの記憶をよみがえらした。

五、六歳のころ、統虎は一羽の仔兎を飼っていた。かわいがっているつもりでも、仔兎はいっかな、なつかなかった。抱こうとすると統虎の腕のなかから、はねとんで逃れた。むきになって統虎は耳をつかみ、むりやり胸におしつけた。仔兎は苦しげな鳴き声を立てて身をもみ、その後はますますなつかなくなった。

（あのときの仔兎に似ている）

身じろぎもせず仰臥したままの闇千代をみおろしながら、統虎はおもった。

歓喜の情とはほどとおく、統虎はなにやらわるいことでもしたように、そそくさと闇千代のからだからはなれた。

と、ふっと闇千代が大きく眼をひらいて裸形の統虎をみた。それから、

「おもったより、小さい」

と、妙に平静な声でいった。

「なにが……」

統虎は、どきりとした。

「統虎は着太りする質なんだ。裸になると顔のわりにはからだが小さい」

頭でっかちで、からだが貧弱だ、と闇千代はいっているのだ。



統虎はひどく傷つき、

「おれは、まだ成長途中なのだ」

いいすててすばやく、ぬぎすてたままの小袖を身につけた。

（なんという女だ。棒のように身を硬くしながら、ひそかにおれの裸身をしらじらと観察していたにちがいない）

優しい気持ちはたちまちきえうせ、なにやらぞっとするおもいに駆られて統虎は寝所をでた。

隣室のうす明かりのなかに、老女が一人くぐまっていた。

「だれだ」

誰何すると、

「たか、ですよ」

老女は欠けた歯並みをみせて、にっとわらった。

闇千代が生まれたときからそばについている古参の侍女である。日ごろから、統虎をあからさまに養子とみくだしている、とりまきの女の一人だ。

「首尾はいかがでありました？」

くぐまったまま、たかはきいた。

「おまえが、のぞきみたとおりだ」

「あれ、のぞきだなぞと。これもだいじなお役目ですよ」
「ならば、お役目ついでに嫁どのの始末をしてやるがよい」
いいすてて立ちさろうとする統虎の背に、たかがわざとらしいことばをなげつけた。
「姫さまを、たいせつにあつかってくださいましよ」
（こういう女どもが、闇千代をいたずらに気位ばかり高く、かわいげのない娘にしたのだ）
無性に腹が立った。
統虎は音たてて庭に面した戸をはらった。爽昧の冷気のなかに、ほのかに梅の香がただよっている。
はだしのまま庭にはしりでると、統虎は手にした脇差をぬきはなち、とうと一声発して冷気を断ち切った。
これからどうすれば闇千代と仲よくやっていけるか。いつまでも統虎をよそ者として、こころをよせようとしない家中の者を、どのようにしてたばねていけばよいか。
十六歳の統虎には、なんとも気鬱な難題だった。
父の紹運は、日ごろから人の和のたいせつさを口にした。かれも吉弘家から高橋家を継いだ人間だ。当初は、従来から高橋家に仕えてきた家来となじめずに苦労した。
前の主人鑑種について小倉に落ちた重臣もすくなくはなく、紹運は兄鎮信からゆずって



もらった若干の吉弘家の家臣をつれて入ったが、その家来と旧来の高橋家の家臣とのあいだも、なにかとぎくしゃくした。
それを克服できたのは、紹運が両家の家来をわけへだてせず、どちらかといえば、みずからがつれて入った部下にきびしくし、先頭に立って両者の融和をはかろうとつとめたからだ。
事情は舅の道雪のばあいもおなじで、長年にわたって立花家の遺臣と戸次家の家来の不和に悩まされたあげく、ようやく結束をかためたところに、こんどは統虎を養子に入れたことで、家臣は闇千代派と統虎派にわかれて反目しあうことになった。
闇千代がおとなしく統虎の妻としておさまらぬかぎり、立花家の過半の家来は、いつまでも統虎を当主として仰ごうとしない。
隠居したとはいえ、いまだ絶大な影響力をもつ道雪が後おしてくれればよいのだが、道雪は、統虎自身で当主としての威厳と信頼をかちとれ、という姿勢をくずさない。それはそれで、道雪流のやり方なのだ。
――よりつよく、より聡く、そしてなによりも、より優しくならねばならぬ。
統虎は、憂悶をふりきるように、裂帛の気あいとともに冷気のなかでひたすら刀身をふりつづけた。

# 初陣

## 1

「統虎どのは、わしに似ておるな」

蔵人はいった。

丸目蔵人長恵――。

肥後人吉出身の剣客である。

十代で京にでて上泉伊勢守信綱に新影流を学び、伊勢守が将軍義輝の御前で演武したおりには打太刀をつとめ、将軍から感状をもらった。上覧試合で師のあいてをつとめたほどだから、上泉門下でも傑出した存在で、やがて伊勢守から新影流極意の殺人刀、活人剣太刀の免許をうけた。

二十代のおわりころ、いったん郷里に帰って領主の相良義陽に仕え、兵法指南をつとめ



ていたが、数年後、暇乞いをして弟の寿斎、吉兵衛、それに門人の木野九郎右衛門らをつれ諸国武者修行の旅にでた。

京の愛宕山、誓願寺、清水寺の三カ所に「兵法天下第一」の高札を立て、真剣の他流試合を望んだのは、このときだ。ただし、一人の応募者もなかった。蔵人の剣名を恐れたというより、「天下第一」などという高札を立てるやり方が、いかに戦国とはいえ京の地にはなじまず、無粋で、うさんくさいものと感じられたからだろう。つまり、田舎者と軽蔑され、無視されたのだ。

とはいえ、蔵人の剣技はまぎれもなく一級品だった。

ふたたび肥後にもどった蔵人は九州一円に新影流を広め、やがて、みずからの新工夫を加えてタイ捨流をとなえるようになった。タイ捨流などというカタカナ文字の流名は、まことにめずらしいが、タイとは体、待、太の意という。

〔体をつかうときは体を捨てるにとどまり、あるいは待と書しても待つことを捨てるの心なり。また太捨といえば、自性にいたるという心となり、かくのごとく範囲一系にして心狭く、ただ漢字そのことのみに通じ、真意をうがつことをえざるなり。ここは伝来のごとく、理と業とよくあわせて修行工夫のけっか、年久しくして悟りあるべきこと、よって仮名に書したるは、いずれにも心通じ、こころ広く達するの意なり〕

要するに、カタカナ流名を名乗ることで、おのれの剣術にはば広い意味をもたせようと

したものらしい。

その剣技も、嵐勢、車輪、猿廻、蜻蛉返、猛虎などという形名からも想像できるとおり、機敏に前後左右、縦横に斬りまわる実戦的刀法で、同根の柳生新影流が徳川将軍家の御流儀兵法となり洗練されていったのにくらべ、こちらはあくまであらあらしい野性味を失わなかった。

まぎれもない鄙であり、蛮風を好む九州では、この野性剣がうけた。

たとえば、門人の亀井六弥太から東郷藤兵衛につらなる系統は、薩摩の島津家で大いに流行し、示現流となって、やがて関ガ原合戦や幕末維新の動乱に、そのすさまじいばかりの実戦的威力を天下にとどろかすこととなる。

わかいころの宗麟も女色で満たしきれない精力を、このあらあらしいタイ捨流の稽古にぶつけ、家中の若侍たちにも奨励したものだ。統虎の父紹運も熱心に稽古にうちこんだ一人で、蔵人から大友家中随一の折り紙をつけられていた。

その紹運から手ほどきをうけているだけに、統虎の剣の筋はいい。で、自然と蔵人の指導にも熱が入る。

「徹底的に鍛えてくだされ」

隠居の道雪からもたのまれているので、年にいくどかは、みずから立花城に足をはこんで、きびしく指南した。



蔵人の稽古は木剣ではなく、袋竹刀をつかう。師の上泉伊勢守が考案した道具で、木剣とちがい、はげしくうちあっても怪我をすることがない。

腕の一本や二本失う覚悟でうちあわねば剣の修行にはならぬ——はじめは抵抗をおぼえた蔵人も、いまはもっぱら袋竹刀をつかう。剣術は身を守るためのもので、人を傷つけるのが目的ではない、という伊勢守の思想を遵守しているのだ。

五体にあおあおと衒気をみなぎらせ、天下に名を上げることにつよく執着してきた蔵人も、ようやく四十歳をすぎて、太刀筋に円熟味を加えるとともに、風貌、挙措にも、おのずから剣客らしいおちついた雰囲気をただよわせるようになってきた。

その蔵人が、統虎を、

「自分に似ている」

というのだ。

太刀筋や雰囲気が、ではない。体型が、である。

蔵人は、どちらかといえば矮軀である。全身、鋼のような筋肉におおわれているが、手足は短めで、ために頭が異様に大きくみえる。

敏速に立ちまわるには、これがいいのだ、と蔵人はいう。実戦には、長身かならずしも有利ではないと。

「長松軒なにがしと、尾張の城下で立ちあったことがある」

蔵人は統虎に語った。

長松軒は名のごとく手足が長く、あまつさえ巧みに六尺の樫の棒をつかった。小柄な蔵人をあなどり、ただ一うちと、頭上から威嚇して長棒をふりおろしてくるところを、ひらりひらりと猿廻、蜻蛉返でかわし、最後は長棒の下をかいくぐって長松軒の脛にしたたかな一撃を加えた。たまらず、長松軒は高塀のごとくばったりとたおれ、二度と起つことができなかった。

「兵法に体軀の大小は重要ではない。すべては心身の機敏さにある」

蔵人はいった。

「だから、統虎どのもつとめて頭脳を澄ませ、からだに柔軟な筋力をつけることだ」

さすれば、大将みずから先陣に立つ戦でも、自信をもって部下を督戦できる、と断言した。

「さようでありますか」

すなおにうなずきつつも、統虎の表情はもうひとつ冴えなかった。

なにしろ、初の閨房に臨んで、妻の闇千代に体軀の矮小をあからさまに指摘されたばかりである。

（おれは、まだ十六歳のわか者だ。これから四肢は若木のごとく生えのびる）

一夏ごとにすくすくとのびる城内の楠の若木を目にして、自分もまたそのようにのびるものと信じているだけに、矮軀の蔵人から、自分とおなじ体型だときめつけられることには、いささか抵抗があった。

しかし、現実は統虎の願望むなしく、成人しても四肢はあまりのびなかった。努力によって五体に鋼の筋肉はついたが、残念ながら背丈、手足のほうは存分にのびたとはいえず、ために頭がやや大きめにみえた。



## 2

「ずいぶんと上達されましたな」

春いらい半年ぶりに来城した蔵人は、つよい夏陽の下で半時ほど統虎に稽古をつけた後、襟をはだけて胸もとの汗をぬぐいながら、かたわらの統虎に声をかけた。

「ありがとうございます」

統虎はふかく腰をおって礼をのべ、清水を入れた竹筒をうやうやしくさしだした。

立花山の中腹には冷たい清水の湧く井戸がある。統虎は師のために、わざわざ井戸奉行にたのんで、汲みあげたばかりの清水をとどけさせたのである。

「そう、ていねいになさらずともよい。統虎どのは当城の主でござる」

蔵人が恐縮してみせると、

「剣のうえでは一門人であります」
統虎は、さらに丁重にいらえた。
「日本国広しといえども、統虎どののようなわか者はみあたりませぬな」
かたわらから、吉兵衛が感に堪えぬふうにことばをはさんだ。
吉兵衛は蔵人の弟で、兄とともに諸国を武者修行してまわり、多くのわか者たちをみてきた。しかし、統虎ほど礼儀正しく心性の清々しいわか者はみたことがない、というのだった。
「兄者。この統虎どのは、きっと当代一の武将になられましょうな」
「吉兵衛もそうおもうか。栴檀は双葉より芳し。人の器量はおのずから、その挙止にあらわれる」
「統虎どのの涼やかな瞳は、世の濁りを微塵も映すけはいがない」
丸目兄弟に面とむかってほめあげられ、統虎は気恥ずかしそうに頬を朱くそめて面をふせた。
(こんなところまで、わかいころの紹運どのにそっくりだ)
蔵人は好意に眼をほそめて統虎をみつめた。
客気満々、出世欲に身を灼くおもいですごした自分の少年時代が、なにやら恥ずかしくおもいだされる。生まれ育ちがちがうといえばそれまでだが、それにしても、紹運、統虎父子の清々とした風姿のありようは、自分などがいかに真似ようとしても真似られるものではない。
(けっきょくは、心性の美しさというしかない。偽りなく生き、潔く死ぬことのみをおもう人間だけがもちうる真正の光輝が、このわか者の五体から放射している)
統虎にそそがれる蔵人の眼は、まぶしいものでもみつめるように、さらにほそめられた。



「しばらくお会いしておらぬが、お父上にかわりはござらぬか」
優しい声音で、蔵人はきいた。
「おかげをもちまして壮健でありますが、舅の道雪どうよう、からだの休まるときがありませぬ」
わか者は、かわらぬ丁重さでこたえた。
「さもあらん。いまや道雪、紹運ご両者人は大友家の二大柱石でありますからな」
吉兵衛が大きくうなずいた。
「ご存じのとおり、毛利や島津に寝返る者があいつぎ、まわりは敵ばかりです」
「たしかに、そのようですな」
「舅は、このままでは大友家はほろびる、ともうしておりますが、やはりさようでありましょうか」

統虎は二人に真剣な眼ざしをむけて問うた。
「われらは剣術師範として諸家に出入りする身、軽々に所見をもらすわけにはまいらぬが、宗麟どのがデウス信仰に深入りして覇気をなくされたことは、たしかにお家にとっての一大事といわねばなりますまいな」
蔵人は、ひかえめに意見をのべた。
「やはり、そうですか。舅は老体、それがしもいつまでも城の留守番ばかりしてはおられませぬ」
統虎はこたえながら、いまは一刻もはやく初陣したいとのおもいをおさえかねた。
立花家に婿入りするまえの十三歳のとき、父の紹運がたわむれにいったことがある。
「おぬしも、そろそろ初陣するか」
勇み立つかとおもいきや、統虎はしばしの沈黙の後、こうこたえた。
「わたくしも父上のお供をしたいのですが、まだ鍛練がたりませぬ。いま敵にゆきあえば、甲斐なく討ちとられましょう。あと一両年の猶予をくだされば、かならず一方の将をつとめてみせます」
紹運が統虎をまえに、この話を道雪に披露して、
「幼少より、このように気おくれするようでは将来がおもいやられると、家来たちの評判はさんざんでありました」



苦笑すると、道雪は、
「それは家来どもが浅墓というものだ。十三歳にして、その思慮ぶかさは尋常ではない」
大声で統虎を弁護した。
この一言で、統虎は、ますます道雪が好きになったものだ。
いま、統虎は戦陣で存分にはたらける自信がある。で、いつ道雪のゆるしがでるか、一日千秋のおもいで待っている。その統虎の気持ちをみぬいたかのように、
「統虎どのは、すでにりっぱな大将、せっかく戦ばたらきをなされることだ」
蔵人は統虎をはげました。
それから、崖ぎわの井楼のかたわらに矮軀をはこび、しばし陽炎にけぶる筑紫の原野をみおろしていたが、やがてふっとふりかえり、
「ただし、まちごうても死に急いではなりませぬぞ」
統虎の瞳の底をみすえるようにして告げた。
「はい、人の生死は天の差配と存じております」
統虎は、すなおにうなずいた。
「たしかに、生死は人知のおよぶところではない。が、それをわきまえたうえでなお人事をつくすのが、われら武門のつとめ。要は戦は機敏に、生き方はねばりづよくということだ」

情愛をこめて、蔵人は諭すようにいった。

「お教え、肝に銘じて」

統虎は一礼し、

「そのお話、ぜひわが舅にもおきかせくださいまするよう。じつは、先刻より御師に一献まいらせたいと、奥で待ちかねておりますれば……」

にわかに快活なわか者の笑顔をみせて告げた。

「道雪どののお招きとあればことわりもならぬが、あの豪酒は剣よりこわい。討ち死に覚悟で臨まねばならぬ」

蔵人も吉兵衛も酒には目がない。軽口をたたきながら、いそいそと統虎の後について、回廊をわたり奥にとおった。

「おう、みえられたか」

道雪は戦陣でならした胴間声をはりあげて客人をむかえ入れた。明けはなった座敷には、すでに膳部がととのえてある。

「先日、博多の島井宗室がまいっての、朝鮮土産の新酒をおいていった。蔵人どのがまいられたら口開けしたいと待っておった」

「宗室とは、博多の豪商でしたな」

「さよう。博多には大賀宗伯、神谷宗湛など傑物の商人がたくさんおるが、宗室には、こ



とにお屋形が目をかけてこられた。ところが、ちかごろはお屋形をみかぎって、もっぱら安土の織田信長のもとに到来物の茶器など持参して、ご機嫌をとりむすんでおるようだ」

「信長は、茶湯狂いをしておりますそうな」

「そうよ。お屋形も名器蒐集に目がないが、あんなもののどこがおもしろいのか。不調法なわしなどには、とんとわからぬ」

「茶湯のたしなみとは、けっく、かたちでありましょう。わが師上泉伊勢守の同門、柳生一派の剣も、まさしくそのかたちです」

「かたちは実体がない分、みばえがよく俗にうけやすい」

「さすがに、よくおわかりですな。じつは、伊勢守が亡くなった後、この蔵人、柳生又左（宗厳）に真剣の立ちあいをもうし入れた。どちらが、当代一の剣客か決着をつけようと」

「それで……」

「ところが、又左は立ちあいをこばみ、こうもうした。おぬしは師から西国一の印可をうけた。自分は東国一の印可をうけている。いまさら雌雄をあらそうことはないではないか。おたがい東西にわかれて新影流を広めてこそ、師の遺志を忠実にうけつぐことになる、と」

「理屈だな」

「さよう、この蔵人は、その理屈にころりとだまされた」

「まあ、そこが蔵人どのらしいところよ。理屈は人を賢しらげにみせる分、人間本然の野性味を失わせる。タイ捨流剣法の魅力は、あくまで猛虎のあらあらしさを失わないところにある」

「まこと、うれしいことをいうてくださる」

「まあ、理屈はこのくらいにして、まずは一献まいられよ」

道雪は、素焼きの瓶子をとりあげ、蔵人と吉兵衛の盃になみなみとそそいだ。

「朝鮮の酒でござりますか」

「うむ。高梁なるものをしぼってつくる」

一口飲んで、蔵人は舌を鳴らし、

「なかなか美味ですな」

にっこりした。

「こうした珍なる到来物が手に入るのも、われらが博多をおさえておるからだ」

大盃で酒をあおりながら、道雪はいった。

「毛利どのはじめ、周辺の諸将が博多を欲しがる気持ちがようわかりますな」

「宗室の話では信長は新しいものに目がないそうだ。やつに知られたらえらいことだ」

道雪は腹をゆすってわらった。

「道雪どの、紹運どのがおられるかぎり、信長とて手はだせますまい」



「むろんのことだ。が、わしはもう長くは生きられぬ」

「気よわなことをもうされますな」

「いや、わしも七十だ。戦場で息がきれるようになった。先がおもいやられてならぬ」

「りっぱな跡とりがおわすではありませぬか」

「これのことか」

道雪はひっそりと酒席のかたわらにひかえ、大人たちのやりとりに耳かたむけている統虎をかえりみて、

「こんどの戦には、初陣させるつもりだ」

うなずいてみせた。

統虎の瞳がかがやいた。

「かならずや、みごとなはたらきをなされましょう」

蔵人がいう。

「うむ。さすれば、お閻めも惚れなおすかな」

統虎をちらとみて、道雪はくすりとわらいをもらした。

明けはなった戸外の庭は、すでに夕景にかわっている。

# 3

大友家の筑前支配の生命線は、宝満、岩屋の両城と立花城、それに今津湾に臨む柑子ガ岳頂上にある柑子ガ岳城だった。

柑子ガ岳城には代々臼杵一族が城督として詰めていたが、すでに荒平、鷲ガ岳城とともに、秋月種実、龍造寺隆信、原田了栄らの兵に攻めおとされている。

道雪と紹運にたいする諸勢の包囲網は、日ごとにせばめられていた。

この年天正十年（一五八二）春には、岩屋城内に筑紫広門の放った忍びの者が潜入した。

忍びは櫓や蔵の柱にホウロク火をしかけて逃亡した。ホウロク火は火薬をつめた器に火縄がついており、火縄の長短で発火時間を調節するようになっている。携帯用の時限爆弾である。

やがて、このホウロク火が各所で爆発した。どうじに広門が大軍をもって麓から攻めかかる。不意をつかれて城方は大混乱におちいった。城代屋山中務三介の苦心の采配で、なんとか撃退したものの、城内の建物のほとんどが焼失した。

まったく片時も気のぬけない毎日だった。



臼杵の宗麟は、前線の将士の苦労をよそに、この正月、おなじキリシタン大名の有馬晴信、大村純忠とともにイエズス会の日本巡察使アレッサンドロ・ヴァリニャーニの勧めにのって、四人の少年使節をヨーロッパに送りだした。宗麟が自分の名代として送りだしたのは、伊東義祐の外孫伊東祐益である。

ちなみに、伊東義祐の先祖は源頼朝が富士の裾野でもよおした巻狩りのおり、曾我兄弟に討たれた工藤祐経である。日向の地頭として下った伊東氏は十代義祐のとき、長男義益の妻に宗麟の姪阿喜多をむかえ、大友の勢威をうしろ楯に日向の盟主となったが、南進をはかって薩摩の島津義弘と衝突し、敗れてからは斜陽の一途をたどることとなる。

島津のつよい圧迫をうけた義祐は、わずかな近親者をつれただけで九州山地の尾根づたいに宗麟をたよって豊後に逃げこんだ。宗麟が、日向に遠征する直接のきっかけになったのが、この義祐の泣訴だったのだ。

とまれ、当時、七歳だった祐益は十三歳の少年になり、有馬の神学校で受洗してマンショと称し、ローマ法王を訪う正使にえらばれたのだった。

宗麟のキリシタン狂いはますます高じて肉親の多くを入信させ、政治は義統にまかせて、みずからは臼杵のちかくの津久見に隠棲した。

紹運は妹きくを義統に嫁がせている。で、なんとか義統を守り立てようとしたが、いかんせん義統は凡庸にすぎた。自分に確固とした信念がないだけに、父母や重臣の意見にふ

りまわされ、腰がおちつかない。ことに宗麟は隠居をきめこみながら、義統のすることになにかと干渉する。で、義統は宗麟を憎み、しばしば対立した。

紹運はとおく筑前にあって、道雪だけをたよりに四面の敵と絶望的な戦をつづけねばならなかった。

この年六月、筑後の井上城主問注所鑑景が背いた。宗麟は朽網宗暦に三千の兵をさずけて討伐にむかわせたが、秋月種実が後詰にでてきたため攻めきれない。で、宗麟は紹運と道雪に加勢を命じた。

十月、紹運と道雪が三千五百の兵をもって井上城におもむくと、朽網宗暦の兵は豊後に撤退した後だった。大友家中に謀叛が出来したため、急遽、宗麟がよびもどしたのだった。

紹運と道雪はいたずらに帰国するのも癪だというので、秋月領内の筑前嘉摩、穂波両郡に侵攻し、疾風のごとく駆けまわって村々に放火した。

その陣中に統虎のすがたがあった。銀の鍬形うった兜をいただき、唐綾縅の鎧に身をつつんだ統虎は、初陣の興奮に頬を紅潮させ小脇に塗籠の弓をしっかとたばさんでいる。

領内を焼き討ちされた種実は、すぐに邀撃にでてきた。かるく矢あわせをした後、ころあいをみて、立花、高橋の連合軍は撤退にかかり、石坂のあたりで反転すると、追撃してきた秋月軍への迎撃態勢をとった。



石坂は文字どおり累々と大石の重なりあう急坂である。いくつかの坂を上りつめた高地の萱原に、連合軍は鉄砲隊、槍隊の順に埋伏した。

「若、なにをなされるおつもりか」

由布源五兵衛とともに統虎を後見していた有馬伊賀が、馬をよせて統虎のゆくてをさえぎった。統虎がにわかに立花軍の主力からはなれて、わずか百五十名の部下とともに別陣をかまえようとしたからだ。

「われに一計がある」

統虎はいった。

「と、もうされても、かくも小勢で本隊からはなれるのは危険です」

伊賀は鬢の白髪をふるわしてさけび、統虎の馬の口輪をおさえた。

「そなたの心配はわかるが、いまはとめだてしないでくれ」

統虎は鞍の上に身をかがめ、懇願するようにいった。

「初陣に、むりは禁物でござりますぞ」

伊賀は、いっかな口輪をはなそうとはしない。

統虎は、なおも必死に伊賀を説得した。

「初陣は、生涯ただ一度のことだ。舅どのと行をともにするかぎり、われにしたがう家来も舅どのの下知にしたがって進退するばかりで、統虎の戦にはならぬ」

「それで、よろしいのです」
伊賀は、諭すようにうなずいてみせた。
「功をあせるつもりは微塵もない。が、われに一計がある。かならずや鼻どののためにも役立つ。ここはまげて目をつむり、われに一戦させてくれぬか」
たしかに、統虎のものいいは冷静で、挙措にもいささかのたかぶりはない。それとみさだめて、伊賀はようやく口輪をはなした。
「わかりもうした。そこまでもうされるなら、とめだてはいたしませぬ。存分にはたらきめされよ。責めはこの伊賀めが一身に負いましょう」
「伊賀どのばかりに責めは負わせぬ。それがしも若の下知にしたがいますぞ」
由布源五兵衛も同意した。
「あの森かげに入る」
統虎は百五十の手勢をひきいて、原野の一隅にしずもる梢の木立のかげにひそんだ。
やがて、坂をのぼってきた秋月軍が大挙して攻めかかり、はげしい銃撃戦の後、両軍入り乱れての白兵戦となった。
「かかれ、かかれっ、この道雪に後退はないぞっ」
例のごとく、道雪が輿の縁をはげしく棒でたたきながら大声を発して督戦している。しかし、味方はおされぎみだ。紹運の指揮する右翼の高橋隊もじりじりと後退する。



「若、潮時では」
源五兵衛が、統虎に馬腹をよせて催促した。
「このままでは、大殿があぶのうござる」
「なんの、鼻どのは不死身だ」
「お父上も、ほれ、あのとおり苦戦しておいでだ」
源五兵衛は気が気ではない。だが、
「まあ、もうしばらく待て」
統虎は鞍上にのびあがって戦況を観望しながら、おちついた口調でこたえた。
その手に一輪の紫桔梗がにぎられている。
(いつのまに、摘みとったものか)
すでに季節は初冬である。いかに西国筑前の原野とはいえ、咲きのこりの桔梗のかずは多くはない。そのかずすくない花を、手にするとは……。
(初陣で、この余裕……。さすがは大殿がみこまれた婿どのだけのことはある。すえたのもしい将器というべきだ)
源五兵衛は、ひそかに舌をまいた。
「いかん。大殿の輿がかしいだ」
それまで、だまって統虎の馬側につきしたがっていた伊賀が声をあげた。

立花軍の先鋒を切りくずした秋月の一隊が、勢い鋭く突出して、道雪の輿にせまったのだ。

「のびきったな」

統虎は、ささやくように伊賀に告げた。

勝ちにはやって突出したため、秋月軍の前衛のかたちがくずれた、といっているのだ。

「御意」

伊賀は、敵勢のかたちよりも、道雪の安否が気づかわれてならない。

「まだで、ござるかっ」

おもわず、嗄れ声をはりあげて督促した。

「よし、かかれっ」

ようやく統虎は突撃を命じると、馬腹をけり、まっさきかけて木立のかげからおどりでた。駆けながら腰の太刀をぬきはなつ。立花家に婿入りするおり、父紹運からゆずられた名刀備前長光である。

「わあっ」

満を持していた兵は勇ましく鯨波をつくり、火の玉となって秋月軍の横手にしゃにむに突入した。

不意の新手の出現に、秋月勢はあわてた。



「あれは、統虎ではないか」

輿のうえで首をめぐらし、道雪さえもおどろきの声をあげた。

（やつめ、やりおるわ）

敵味方ともに予期せぬ統虎隊の奇襲だった。

前衛をつきくずされて、たちまち秋月勢は算を乱して退却にかかる。

「逃すなっ」

統虎は逃げる敵勢に、唐綾縅の鎧をきらめかせて追いすがった。

「立花の小倅だな」

秋月家中で勇猛をもって知られる侍頭の堀江備前が、

「猪口才なり」

手勢とともに長刀をかざして統虎に駆けむかった。

そうはさせじと伊賀が立ちふさがり、三騎まで突きたおす。しかし額に傷をうけ、血が目に入って危うくなった。それとみて、統虎は弓をひきしぼり、ひょうと切って放つ。矢はあやまたず備前の左腕をつらぬいた。

「なんの、これしき」

備前はかまわず、馬をよせざま統虎に切りかかった。

二合、三合、火花を散らして、はげしく太刀がうちかわされた。

「若っ」

源五兵衛が、得意の長槍を馬上にふるい、わって入ろうとした刹那、備前がむんずとばかりに統虎にくみつき、そのまま地上に落下した。大力の備前はそのままおし伏せようとしたが、幼いころから相撲を得意とした統虎である。それに備前は左手が利かない。統虎は逆に備前をおさえこみ、駆けつけた家来に首をかかせた。

立花城に凱旋した後、

「とても十六歳とはおもえぬ、みごとな組み打ちでござりました」

源五兵衛からの報告をきいて、

「さすが紹運の種だな」

道雪は眼をほそめ、軍律に反し、ことわりなしに別行動をとった統虎を、あえてとがめようとはしなかった。

「やつめが、軍列をはなれたおり、なにかやる気だなとたのしみにみておった」

「やっ、大殿はお気づきでありましたか」

「あたりまえよ。わしの輿からは八方みとおしだ」

「おそれいりました」

「なに、ぬしの薫陶の賜物だ」

「それがしも、憎まれ役をつとめてきた甲斐がありました」



源五兵衛は皓い歯をみせて、心底うれしげに破顔した。

もっとも、この日、いちばん喜びをあらわにしたのが闇千代だった。

帰城した将兵が口々に統虎の勇ましい戦ぶりを口にするのをきいて、

「やはり、あの大頭はからっぽではなかった」

闇千代流のほめ方をしているところに、統虎の近侍の十時伊織が一輪の桔梗の花をとどけてきた。

「なんだ。この萎れた桔梗は？」

「若殿が、合戦のあいだ、だいじに身につけておられた桔梗にござりまする」

「これを、闇に？」

「はい、おわたしするようにとの仰せにござります」

「顔に似あわぬ気障なふるまいを……」

いいながらも、闇千代はうれしさをかくしきれなかった。

（生き死にのまあいにも、この闇千代のことをわすれていなかったとみゆる）

「姫、今夜はご褒美に、若にむしゃぶりついておあげなさいまし」

老女のたかが、闇千代をたきつけた。

しかし、この夜、統虎は大広間での戦勝祝いの宴席で、はじめて酒を口にし、酔いつぶれて闇千代の寝間を訪れなかった。

（せっかく、闇がその気になっていたのに……）

いたく自尊心を傷つけられた闇千代は、

「闇ならば、種実の首を一薙ぎにしてみせたものを」

侍女をあいてに、悔しまぎれの大口をたたいた。



# 死の秋

## 1

「なに、熊が死んだか」

道雪は、頬ばっていた李をおもわずのみこんだ。

「島原の野陣にて、あい果てたやにござります」

十時摂津守連貞は、いろ白のふっくらとした顔に微笑をうかべながら、ゆったりといらえた。

菜種梅雨の名残であろう。本城のある立花山から足下に望まれる筑前の平野は、茫々たる霖雨におおわれている。

北がわの崖ぎわに立つ井楼のそばに数本の李の木がある。道雪がこの城にうつってきたとき、戸次家歴代の居城鎧嶽城の本丸の庭から、わざわざ苗木を持参して植えたもの

だ。十数年の歳月をへて、いま苗木はみごとに成長し、春の訪れとともに青い果実をつけ、やがて熟して黄赤色に変じ芳香を放つ。

この数年、とみにおのれの生の終焉を自覚する道雪は、実が生るのを待ちかねるようにして小さな青実のうちに食するのをつねとした。表皮は青くとも、歯を立ててかじれば、ほんのり紅い果肉から酸っぱい果汁がほとばしりでる。老来、歯肉にしみる。

甘い果実を食いたければ熟れるまで待てばよい。しかし、なぜか道雪は酸っぱい李に手がのびる。

(なにやら、わしの人生のような……)

周囲は、甘い蜜をもとめて花わたりする蜜蜂のような武将ばかりだ。そのなかで、道雪は愚直に大友家一筋に生き、とおくはなれた筑前の最前線で、不利な戦にいのちをけずってきた。豊後の三老といわれる身でありながら、いわば、主家の枝さきの酸っぱい実ばかりを食してきたといってよい。

かつて枝も埋もれるほどに花をつけ、大粒の果実を実らせた銘木も、いまは無残に根腐れして、その枝にはいくつの果実ものこってはいない。いずれ、このままでは立ち枯れするほかなかった。

(甘い実の一個にもあずかることなく、あえて、酸っぱい果実ばかりを食しつづけてきたこの道雪の一生とは、いったいなんだったのだろう)



ちかごろ、道雪はしきりにおもう。

京や堺のみならず大陸までではかけて手広く商売し、諸般の事情に通じている博多の商人たちは現金なもので、かつてあれほど足しげく宗麟のもとにかよった島井宗室や神谷宗湛からして、いまや豊後にはほとんど足をはこばない。それどころか、一部の商人たちは、「龍造寺や島津から博多をまもるには、このさい大友家などみかぎり、いっそ羽柴秀吉どのとむすばれたらよろしいのに」

などと道雪に耳うちする始末だった。

羽柴秀吉なる者が、尾張の小百姓から身を起こし、織田家有数の幕僚にのしあがったきれ者だということは道雪も知っている。この秀吉が信長の命をうけ毛利と戦をつづけてくれたおかげで、元就没後の毛利氏は北九州にまで手がまわらず、道雪や紹運がどれほどたすかったかわからない。

二年まえ、明智光秀が謀叛して信長を屠ったとき、秀吉はすばやく毛利と手打ちし、神速の大返しを敢行して光秀を討ち、信長の遺産をそっくり手に入れた。

「道雪さまも、すこしは見習いなされるとよい」

商人たちは臆面もなくいう。

「この入道に、そんなことができるか」

道雪は声をあらげて叱りつける。

しかし、商人たちはひきさがらない。
「人望といい、戦の腕といい、道雪さまさえその気になれば、九州全土の制覇も夢ではありますまいに……」
「商人とは口達者なものだな」
「口だけではありませぬ。目もききます」
「いや、肝心なものがみえておらぬ」
「肝心なもの？」
「さよう、武士の世界は商人のそれとはちがう」
「しょせん、いのちの切り売りをしていくらの世界でござりましょう。道雪さまはこの十数年、いのちがけで血をながし、主家のためにつくしても、いまだにただの一立花城主……」
「おぬしらの勘定にはまらぬのが、武士の魂というものだ」
「魂でお飯が食えますか。それに当今のお武家をごらんなされ。利のまえには主人は裏切るわ、家来は殺すわ……。商人は勘定ずくであくどい商いはしても、人殺しまではいたしませぬよ」
「たしかに、武家の実態はぬしらのいうとおりかもしれぬ。が、紹運をみよ」
「あの岩屋城の高橋紹運どのですか。失礼ながら道雪さまとならんで、正直のうえにばかのつくお武家さんですな」
「ばか正直でわるいか」
「主人にこきつかわれ、冷や飯食うて一生をおわる。つまりません」
「商人にはつまるまい。だが、武士は死にざまこそがすべてなのだ」
「やせがまんにしかきこえませぬなあ。死んで花実が咲くものか、ともうしましょう。われらは道雪さまが好きなのです。この十数年、道雪さまがからだを張って博多をまもってくだされたおかげで、ずいぶんとよい商いができました」
「そういうてもらえるだけで武家冥利というもの」
「だから、道雪さまには主家へのこだわりなどすてて、もっと大望をおもちいただきたい」
「ぬしらは、この老入道に謀叛をすすめるのか」
「このままでは、いずれ主家もろとも朽ちはてられましょう」
「無礼なもうしようだの。まあよいわ。それで、ぬしらは大友家がつぶれたら、だれが博多の主になるというのだ」
「まずは、肥前の熊」
「ぬしら、まことにそうみるか」
「いまの勢いでは、まちがいなくそうなりましょう。でも、あの強欲で残虐な熊どのは、

われら好きになれませぬ」

商人たちは、肩をすくめていったものだ。

その熊が死んだ。

「まことか」

と、あらためて問いなおすまでもない。

摂津守は、道雪がもっとも信任する戸次家いらいの重臣だった。一見のんびりした風貌とは裏腹に早耳で知られる。しかも、その情報はつねに正確だった。摂津守の報告に万に一つのまちがいのあろうはずがない。

「それにしても、あっけない最期だの」

道雪は、ふうっとため息をもらした。

「御意。熊どの、いささか調子に乗りすぎたようで……」

熊、とは「肥前の熊」とあだ名された龍造寺隆信のことである。

大友家に反旗をひるがえした諸勢のなかでも、もっともしたたかな強敵が、この隆信だった。



## 2

龍造寺氏は、もと大宰府官僚高木氏の庶流で、鎌倉幕府から肥前龍造寺村の地頭に補され、代々、鎮西奉行人の大宰少弐氏にしたがってきた。しかし、四十年ほどまえ、主の少弐冬尚の寵臣馬場頼周に謀叛のいいがかりをつけられ、一族滅亡の危機に追いこまれた。

隆信は龍造寺氏の分家水ケ江龍造寺家の長男である。性格が粗暴で、幼いころに寺に入れられたが、祖父や父が馬場の奸計にかかって急死したため、還俗して家督を継いだ。このとき十八歳。やがて、肥前守護代をつとめる本家の村中龍造寺家の跡継ぎが絶えたので、本家の当主をも兼ねることになり、大張りきりで勢力伸長に精をだした。

大内氏がほろびると、毛利氏に与して大友勢と戦い、元亀元年（一五七〇）には、大軍でおしよせた大友勢を佐賀北方の今山に奇襲して、大将の大友親貞を討ちとる大勝利をおさめた。

この勝利をきっかけに隆信は盛運にのり、肥前、肥後、筑後、豊前を席巻、さらには筑前の大友氏の牙城荒平、鷲ガ岳城をも降して、垂涎の商都博多の制圧を望んだ。それができなかったのは、立花道雪、高橋紹運の二将が死力をつくして対抗したからだ。

道雪、紹運の二人は、本国の支援がないまま、この肥前の熊の熾烈な攻勢にさらされて対応に苦慮し、あるときは隆信と和睦して、そのはげしい矛先をしのぎ、またあるときは薩摩の島津氏と同盟して隆信を討とうとした。

当面、最強最大の敵が、五国二島（壱岐、対馬）の太守を自称する肥前の熊だった。

その隆信が、あえなく討ち死にした。島原の有馬晴信をみずから討伐におもむき、救援にきた島津家久の奇襲に敗れたのだ。

数万の大軍をひきいた総大将が合戦場で首をとられた例は、他には今川義元くらいしかみあたらない。義元のばあいとおなじく、隆信も油断がいのちとりとなった。

島原日野江城を本拠とするキリシタン大名の有馬晴信は、大友氏をたよって隆信の圧力に抵抗していたが、耳川の合戦以後、大友氏がふるわなくなったため、かわって台頭してきた薩摩の島津氏に乗りかえた。大友氏を破り日の出の勢いの島津氏をうしろ楯に、龍造寺勢に対抗しようとしたのだ。

天正十二年（一五八四）三月、隆信は数万の大軍をもよおして有明海をおしわたり、島原半島に上陸した。有馬をほろぼし、あわせて北進する島津の出端をたたく絶好の機会とふんだのだった。

はじめ、宿老の鍋島直茂らは隆信じきじきの出陣に反対した。

「おそらく、島津の総大将義久はでてまいりますまい」



当方もまず若殿の政家に出馬させ、ようすをみたほうがいい、というのだった。

「お屋形が本城を留守にすれば、かの立花道雪や高橋紹運が背後をついてくるやもしれませぬ」

ともいった。

「なんの、いまの大友勢になにほどのことができるものか」

隆信は直茂の意見を一蹴した。

「それに、この戦は政家には気が重かろう」

政家は晴信の妹を嫁にしている。妻女の実家を攻めるのでは戦意もあがるまい、というのだ。

そこで、直茂もおれた。

ただし、直茂のみとおしどおり、晴信から応援を請われた島津義久は、末弟の家久に三千の兵をさずけて救援にむかわせただけだった。有馬勢とあわせても、五千そこそこの兵力である。

「もみつぶすに一日とはかかるまい」

隆信は、初手からなめてかかった。

家久は島津兄弟のなかでも戦上手で知られる。寡勢で大軍を迎えうつには城外の狭隘の地に敵をさそいこむしかないと判断し、決戦場を島原日野江城から北方半里の沖田畷

にもとめた。

この地は雲仙岳の前山である眉山の東麓にあり、一面、蒲や葦の生い茂る湿地帯である。そこに沼地を埋めてひらいた深田がひろがり、そのなかを一条の細い畦道がのびている。龍造寺軍が日野江城を攻めるには、この道のほかには嶮岨な山がわの路か海ぎわの砂浜をとおるしかない。

家久は、海上に軍船を配して砂浜を封鎖し、畦道の周辺に全軍を伏せた。細い一本道に敵の大軍をさそいこみ、奇襲しようとの作戦である。島津では、この戦法を〔釣り野伏せ〕とよぶ。この戦法に隆信はまんまとひっかかった。

隆信は馬に乗れない。下半身の萎えた道雪とちがい、隆信のばあいは極度の肥満のためだった。で、その肉団子のような巨体を六人がかりでかつぐ駕籠にゆだねて、中央の畦道をすすんだ。

龍造寺の本隊が沖田畷にさしかかると、物見をよそおった島津、有馬の囮の兵は畦道づたいに算を乱して退却した。かさにかかって龍造寺軍は追撃にかかる。

龍造寺本隊は鉄砲隊一千、槍隊千五百、大砲隊で構成されており、その軍団が数段がまえになっていた。その後を隆信の駕籠がゆっくりとすすむ。その背後には高良山の僧や陰陽師も従軍していた。

龍造寺本隊の先陣は、はげしく銃砲を撃ちかけながら追撃し、やがて、狭い畦道に縦一



列にのびきった。そこに埋伏していた連合軍がいっせいに立ち、前後左右からはげしく弓、鉄砲を射かけ、短槍をふるい、白刃をぬきつらねて襲いかかった。

おりからの霖雨である。それでなくても膝うえまでぬかるむ深田は、混乱する龍造寺勢を泥濘地獄におとし入れた。

隆信の駕籠も泥田のなかで身うごきがとれなくなった。

「はかられたか」

隆信が切歯したときには、駕籠のまわりに、はやくも慓悍な島津の兵が殺到した。

駕籠からまろびでた隆信は巨体をゆすって徒歩で後退しようとした。が、島津の一将川上左京亮が駆けよりざま、その肥大した肉塊を槍の穂先につらぬきとおした。

なにやら、西の桶狭間とでもよべそうな戦の顚末である。

それにしても、九州五国を席巻し、あらあらと咆哮した肥前の熊の最期にしては、あまりにあっけなさすぎた。

「当面の敵は死にましたが……」

摂津守はいいながら、はるか南方にけぶるような視線を転じた。

「また新たな強敵を迎えねばならぬな」

道雪はうなずきつつ、かりっと音立てて新しい李にかぶりついた。

「これからも難儀な戦がつづきましょう」

ため息とともに、摂津守もかたわらの李の枝から青い実をもぎとって頬ばったが、
「めっぽう酸っぽうございますな」
こらえきれずに、ぺっと吐きだした。
「この酸っぱさは、われらが背負う運命とおなじよ」
道雪は苦笑まじりにいった。
「そういわれてみれば、いささか苦みもまじっておりますようで……」
摂津守は、まだ顔をしかめている。
「統虎をたのむぞ……」
真顔にかえって、道雪はいった。
「情けないが、わしはもうぼろぼろだ」
「なんの、まだこの酸っぱい李が嚙めるではありませぬか」
「嚙めはする。が、食すればもどしてしまう。老いとはかなしいものだ」
「いまや、わが殿は一立花家のみならず、全大友の守護神であられます」
「この老入道をおだてても雲脂もでぬわい。それより統虎だ」
「たのもしい若殿と存じまするが」
「希有な将器だ。ただ、この李以上に闇千代との仲が酸っぱい」
「わかい夫婦でござります。いずれは熟して琴瑟あい和しましょう」



「ならばよいが。なにしろ闇千代があのとおり気がつよいからのう。このままでは紹運に顔むけがならぬ」
道雪は困じはてた表情で、入道頭をつるりとなでた。

## 3

「紹運とともに親家の後詰をするように」
義統から道雪のもとに指令がとどいたのは、この年八月のことだった。
筑紫野には、すでに秋色が濃い。
宗麟の次男親家は東国東郡の安岐城主田原親宏の養子に入り田原親家と称している。
この年七月、義統はこの親家に年寄の志賀道輝、朽網宗暦らの兵をつけ、筑後八女郡の猫尾城を攻略させた。
猫尾城主黒木家永は、龍造寺隆信の死後、秋月種実や筑紫広門らとともに筑後に残存する大友方の長岩城主問注所統景を攻めた。
家永はもともと大友方に属していたが、龍造寺隆信の強勢のまえに、秋月、筑紫とともに、その軍門に降った。隆信は死んだが、佐賀城に嫡子が人質にとられていたため、大友方に帰参するわけにもいかない。で、やむなく長岩城攻めに参加したのだった。おもえ

ば、気の毒な男である。

義統は、統景から救援の要請をうけると勢力挽回の好機とみて、八千の兵を親家にさずけて筑後に遠征させた。耳川の合戦で戦巧者のほとんどを失った大友家としては、八千の兵を動員するだけでも精いっぱいだった。しかも、田原親家は戦将としては未熟だ。

遠征軍は戦意とぼしく、黒木勢の必死の抵抗をうけるとすぐに後退し、いたずらに猫尾城を遠巻きにして時日をついやすのみだった。

「このうえは、道雪めに出陣させよ」

宗麟は義統に命令した。

「道雪入道はもはや七十歳をすぎております。すこしは休息をとらせませぬと……」

義統は反対した。

「そなた、道雪にぞっこんだの」

宗麟はひやかすようにいった。

「いま、大友家に道雪入道をおいて、他に頼るべき将がおりましょうや」

義統は憤然と、ことばを返した。

「そなた、道雪は耄碌(もうろく)したと、もうしたばかりではないか」

「なんの、耄碌などしておりませぬ。いまだ意気軒昂(けんこう)であります」

「わしとはちがうというか」



「父上はまだ五十半ば、老けこむにははやすぎましょう。ちかごろはあちらのほうも、お元気がないとか」

「そのようなこと、だれにきいた」

「あかねどのです」

「ふむ、あかねか。嫉妬でもうしておることだ。デウスさまに仕えてより、わしは色欲をつつしんでおる」

「道雪入道は悔やんでおります。好色を諫めすぎて父上をデウス信仰に深入りさせ、覇気までなくさせてしまったのではないかと」

「道雪のいうことを信じるのか」

「それがしは道雪入道を師父とも頼んでおります」

「わしでは頼りにならぬというのだな」

「かつて、われらをふるえあがらせた、あの烈々たる覇気はどうなさりました」

「すべては神の御心のままだ」

「デウスの神より現世の神でありましょう。道雪入道は、このうえは秀吉にすがって島津の圧力を避けるしかないというております」

「道雪が、そうもうしておるのか」

「秀吉に父上から親書をつかわされますようにと」

「ふむ」
「紹運も同意見です」
「紹運と道雪はむかしからの一味同心だからの。そうだ、紹運にも出陣をもうしつけるがよい」
「まことの忠臣を、長年とおく筑前に追いやりながら、なおこのうえこきつかわれますのか」
「そなたがだらしないから、かれらの苦労も絶えないのだ」
「紹運はともかく、道雪入道は休ませてやりたい」
「意気軒昂だというたではないか」
「そんな老人だからこそ、むりをさせて死なせたくないのです」
「当家が生きるか死ぬかの瀬戸ぎわだ。もう一苦労してもらう」
道雪は大友親子の、このようないいあらそいは知らぬ。義統から命令をうけると、統虎に家老の十時摂津守、薦野三河守らの兵をつけて立花城にのこし、みずからは二千余の兵をひき具して出陣した。
いっぽう、紹運も居城岩屋城には家老の屋山中務三介、宝満城には次男統増を入れ、千数百の手兵をもって太宰府で道雪ひきいる立花勢と合流すると、筑後川をわたり耳納山の嶮を越えて猫尾城にむかった。



矢部川と笠原川が合流するあたり、東岸につきでた標高二百四十メートルの猫山の頂に猫尾城は築かれてい、城の西麓、両川にはさまれた砂州に土塁をめぐらして家永の居館があった。
むろん、家永は大友軍の来襲とともに山上の城に立て籠もり、二千の守兵をもって頭上から矢弾を射かけ、岩石をなげおとしてしぶとく抵抗した。
それにしても、これまでにかずかずの堅城を攻めおとしてきた道雪からみれば、猫尾城など、なんということもない小城である。どうして、八千もの兵でかこみがら、二月ちかくもかかって攻略できないのか。
――腑ぬけぶりにもほどがある。
老来、道雪は気短になっている。で、着陣するなり、
「おぬしらは、いったい男か女か。女なら逃げるがよい。男ならなぜ戦わぬ」
頭から軍監の志賀道輝、朽網宗暦らを叱りつけた。
道雪は両人がきらいだ。
志賀氏は大友氏の庶流で、加判衆をつとめる年寄職。居城は、あの滝廉太郎の「荒城の月」で有名になった豊後竹田の岡城である。道輝は宗麟の信任あつく、日向遠征にさいしては搦手軍の総大将に任じられた。が、後手にまわって高城・耳川合戦の大敗北の因をなした。翌年、秋月種実の謀叛を討伐したおりにも、はかばかしいはたらきをせず、むな

しく敗退している。

直入郡山野城主の朽網宗暦も道輝とおなじく加判衆をつとめる重臣で、日向遠征では道輝とともに搦手軍の大将をつとめた。宗麟の側近でありながら、過去に主家に謀叛をくわだてた点でも二人は共通していた。

「しっかりと、お役目をはたされよ」

日向遠征の失敗後、道雪はがまんならず両人に檄文をおくりつけたことがある。

――おのれの保身のみに憂き身をやつす、このような佞臣が国をほろぼすのだ。

日夜、はるかに本領からはなれた任地で強力な外敵あいてに骨身をけずる道雪にすれば、道輝や宗暦の過怠はゆるされることではなかった。

いらい、両者との反目がつづいている。道雪に罵倒されて、

「ならば、入道どのがみごと攻めおとしてみられよ」

両名は反発した。

「たやすきこと」

道雪は紹運と語らい、まず猫尾城の水の手を断ち、立花、高橋両軍で先鋒を担い、総大将田原親家の尻をたたくようにして総攻撃をかけた。城内は二月ちかい籠城で糧食がつきている。あまつさえ水まで断たれて戦意喪失していたから、大友軍の猛攻のまえに家永は自刃、城兵は降伏した。



「おわかりめされたか。忠義の戦とは、かようにつかまつる」

鎧の片袖に矢をつき立てたまま、道雪は両将をかえりみていった。

道雪が生涯三十数度の戦にいちどもおくれをとらなかったのは、こうして矢弾をおそれず、みずから先頭に立って部下の士気を鼓舞したからだ。そのことばには、いのちをすてて戦った者のみがもつ凄味がある。道輝も宗暦も返すことばがなかった。

## 4

その道雪が、猫尾城をおとした後、紹運にこっそりとうちあけた。

「息ぎれがする」

「連日の強攻でありましたゆえ、ご老体にはちとむりでありましたかな」

紹運は心配げに眉をひそめた。

「じつはな、出陣まえより体調不如意であった」

「過労でありましょう」

「心の臓をやられたようだ」

「それはいけませぬ。ただちに帰城し、ご養生ください」

「そうしたい。だがな、ぬしは親家どのひきいる豊後の兵の戦ぶりをどうみる？」

「かの日向遠征で歴戦の強兵ことごとく戦死いたしましたゆえ、いまは戦になれぬ新兵ばかり、まずはこのていどの戦しかできますまい」
「大友家の落日ちかし、か」
「かなしゅうございますな」
「かなしいのう。で、ぬしはどうする」
「と、いわれますと？」
「ぬしは義統さまの義兄ゆえ身のふりかたはむずかしかろうが、義統さまはあのとおりのお方だ。二十五になっても、まだ他人の意見にふりまわされておられる」
「義統さまは、おやじどのを心底、頼りにしておられまする」
「頼られてもこまるのだ。わしはもうすぐ死ぬる身だ」
「……」
「親子、兄弟が殺しあう世のなかだ。ほろびるとわかっている主家に忠義立てをすることもあるまい。ぬしも、そろそろ転身をはかったらどうだ」
「本気でいうておられますのか」
「むろん、本気だ。ご隠居やご当主が、最後の力をふりしぼって戦う気勢をみせてくだされば、このようなことはいわぬ。だが、もうだめだ。早晩、島津にしてやられる」
「そうかもしれませぬが、それがしの存念は、おやじどのとおなじでありますよ」



「わしは老いぼれゆえ主家に殉じる。しかし、ぬしは春秋に富む身、なにもわしに義理立てすることはない」
「いまさら、なぜそのようなことをいいだされますのか」
「血だよ、血。わしらはあくまで節義をつらぬき、主家に殉じて死んでもよいが、それではわれらの血が絶える」
「義を曲げて血を汚すくらいなら、いっそ絶えたほうがよいとはおもわれませぬか」
「そのとおりだ。が、人間、いざ死ぬるとなると迷いがでる。博多の商人どもとつきおうてみてわかったが、わしらがいのちがけでまもってきた武家の誇りなど空に描いた絵のごときものやもしれぬ」
「しょせん、われらの人生からして空でありましょう」
「わしとぬしのあいだだけなら、それですむ。しかし、わかい者たちまで道連れにしてよいものか」
「統虎夫婦のことをもうしておられますのか。不幸にして、われらとともに死ぬることになったとしても、それはそれでわれらの子に生まれた運命というものでありましょう」
「ぬしは、まだわかいから潔いことをいうておれる。だが、死を目前にしたわしは、まさに煩悩地獄におちておる。なんとか、わかい者らを生かす道はないかと」
「統虎は、おやじどのにさしあげました」

「おう、たしかにもろうた。が、闇千代といっしょに、ぬしのもとに返してもよい」
「それで、それがしに主家をすてろと？」
「すてろとまではいうておらぬ。わしがみるに、これからは秀吉の天下だ。で、義統さまをとおしてご隠居にすすめておる。一日もはやく秀吉に請うて九州に兵をだしてもらい、島津を討ってもらうべきだと」
「秀吉の幕下に入るのでありますか」
「さよう。そのために大友家随一の勇将たるぬしと、その息子の統虎を秀吉のもとにさしだす」
「おやじどのもいっしょにまいられるなら、かんがえぬでもありませぬが」
「引き出ものに、この老入道はそぐわない。わしは、そのお膳立てのために死ぬるのよ」
「ずるうござる。ならば、それがしもわか者たちのために死にましょう」
「ぬしは、弥七郎のころとすこしもかわらぬな」
「それがしを愚直ともうされたは、おやじどのでありましょう」
「それにしても愚直にすぎるわい。それだけに、わしの依怙地な生き方にぬしをひっぱりこんで、わるいことをしたと心底くやんでおる」
「それがしは、おやじどのと生死をともにできることが無上の幸せなのです」
「まことに、そうおもうてくれるのか」



道雪は双眸をいっぱいにみひらいて、紹運の顔をひたとみつめた。その皺をきざんだ頬に光るものがある。
「おやじどの」
紹運は目をそらして、道雪に告げた。
「いずれにしろ、当面は龍造寺の残党と島津あいてに力戦して時をかせがねばなりませぬ」
「そうだな。このさい本国の弱腰の新兵どもに戦のしかたを教えるとするか」
道雪は涙をはらって微笑した。
「その意気です。ただ、いまはしばし帰城して英気を養ってください」
紹運は懇ろに頼んだ。が、
「養生したとて、さして延命できるともおもわれぬ。かまうな」
道雪は紹運のすすめを退け、みずから豊後からの遠征軍を叱咤して、家永の家老椿原式部が守る支城の高牟礼城、ついで川崎重高の籠もる犬尾城を降し、その後も筑後の龍造寺方の諸城をつぎつぎに攻略し、ついには龍造寺家の一党家晴の守る柳河城にまでせまった。

# 5

柳河城は筑後川と矢部川の豊富な水流を天然の濠にした堅城である。

道雪、紹運の手練の攻城術をもってしても容易にはおちない。

そのうち、島津が肥後を制圧し、大軍をもよおして筑後へ進出してきた。

龍造寺の当主政家がまずその勢威のまえに屈すると、それまで配下に入っていた筑前の秋月、筑紫らの有力武将らが、つぎつぎに島津に降った。紹運の膝元、太宰府天満宮別当の大鳥居信寛（おおとりいのぶひろ）も、はやばやと島津氏に使僧をおくって服従を誓った。いずれもおのれの家を存続させるために必死なのだ。

腹背に敵をうけるかたちになった道雪と紹運は、やむなく耳納山西端の高良山まで退いて陣を立てなおし、ここで越年することにした。

ところが、道雪に心服する当主の義統とちがって、次男の親家はむしろ道雪に反感を抱いている。猫尾城攻略いらい、道雪が総大将の自分をさしおき、まるでおのれが総大将のごとくふるまい、しかも、その作戦がことごとく成功したのが気に入らない。

――これから筑後に滞陣して勝利をおさめたとしても、老入道と紹運の手柄になるだけのこと。



狭い料簡から、道雪、紹運にことわりもなく、八千の部下とともに、さっさと豊後に引き揚げてしまった。

「かくして、ほろぶべきものはほろびるのだな」

道雪は悲しげに紹運にむかって歎いたものだ。

高良山は、はるか古代、大和に反乱を策した梟雄磐井（きょうゆういわい）が拠（よ）った戦場跡であった。主峰の毘沙門（びしゃもん）岳は標高三百十二メートル、中腹に筑後一ノ宮高良大社が鎮座し、山頂に奥の院がある。神籠（こうご）石のつらなる山上からは、眼下に悠々とながれる筑後川と茫漠たる筑紫平野が望まれる。

十数年まえまでは、宗麟みずから吉弘鑑理（あきただ）や臼杵鑑速（あきはや）らをしたがえて、龍造寺をはじめとする筑後の諸勢をうち平らげるために、いくたびもこの要害に陣どったものだ。

いまは鑑理や鑑速すでに亡く、道雪のみが老いの身を寒風にさらして背水の陣をしき、島津の大軍をひきつけて、時をかせごうというのだった。

さて、この間、統虎は薦野三河守らと立花城の留守を守っていたが、秋月種実は道雪が高良山からうごかないのをみて、立花城の奪取をくわだてた。城内を守備する兵はすくない。城をかこんだ秋月の大兵をまえに、城兵は動揺した。

「討ってでる」

統虎は三河守に告げた。

「この小勢では無謀です。籠城こそ最上の策でありましょう」
即座に、三河は反対した。
「三河よ」
統虎はいった。
「血気にはやって、もうしておるのではないぞ。敵はわれを若年者とみて油断しておろう。そこを衝くのだ。戦は時の運ともうすではないか。勝つべくして負けることもあれば、その逆もある。わしは討ってでるぞ。そなたは、しっかり城を守ってくれ」
いいおくなり、三百の兵をひきつれ夜闇にまぎれて秋月陣に夜襲をかけた。
統虎の予想どおり、秋月軍は油断して陣中で酒宴にふけっている。不意をつかれた秋月の将兵は、一戦にもおよばず潰走した。
「三河めの、不明にござりました」
三河は、すなおに詫びた。
本丸の寒空に、百舌（もず）の声が冴えざえとひびきわたっている。
明くれば天正十三年（一五八五）――。
道雪は七十三歳、紹運は三十八歳となった。
長陣のなか、筑後の原野には梅がほころび、菜の花が群れ咲き、山桜が花吹雪となって乱舞した。青梅雨に入るころ、道雪はしだいに食が細り、全身の力が萎えた。



「ここは紹運におまかせくださり、立花城におもどりください」
紹運はくりかえし懇願したが、道雪は皮のゆるんだ入道頭をふり、
「柳河城をおとすまでは死ねぬ」
といいはった。
「おとさねばならぬのは柳河城だけでなく、まだかぎりなくあります」
「むろんだ。が、それはぬしの役目だ。わしは、いまは目前の標的を射おとすことに一意専心する。愚かにみえようが、人にはそれぞれ、その場、そのときの役目というものがある。その役目を愚直にはたす。これが大愚（たいぐ）に通じる」
「大愚でありますか」
「そのように、まじめな顔をするな。老入道のたわごとよ。おもえば、この入道、口さきばかりでお屋形のためになにほどの忠義もできなんだ」
「お屋形の側近にあればまだしも、筑前の辺地にあっては諫言のしようもありませぬ」
「遠隔をいいわけにして、この入道、いささか怠けた」
「おやじどのが、怠けたなどと……」
「いやあ、お屋形をだめにしたのは、この入道よ」
「病の身を、あまり責められますな」
「ありがとうよ。いまとなっては、病みさらばえた屍（しかばね）をせめて陣中に朽ちはてさせるし

か、詫びのしようがないのだ」

道雪はやせ細った喉をあげて、からからと乾いたわらいをほとばしらせた。

いたしかたなく、紹運は道雪を輿にのせて高良山の北東一里の三井郡北野にうつし、里家を借りて湯にひたらせ、精のつく鰻や鮠を膳に供し、薬石を投じて介護につとめたが、盛夏がすぎて周辺の樹々が紅くいろづき、百舌が高啼きする九月に入ると、道雪は重態におちいった。

異方に心ひくなよ豊国の鉄の弓末に世はなりぬとも

みずから、ふるえる手に筆をとって辞世の歌をしたためた後、

「学のない哀しさ、野暮な腰折れだな」

紹運に力なく苦笑してみせると、

「雪下、和泉、与五郎を枕元に」

と近侍に命じた。

雪下は由布源五兵衛の入道名、和泉は道雪が立花家に入ったとき、豊後からついてきて家老となった小野鎮幸、与五郎は十時摂津守連貞の弟連秀である。

「遺言する」



道雪は枕頭にあつまった家老らに、絶えだえの息の下から告げた。

「わしの屍に鎧を着せ、高良山西方、吉見岳の麓に顔を柳河にむけて埋めよ」

いいおえるまもなく絶息した。

「おやじどのっ」

紹運が悲痛な声音でよびかけたが、もはや道雪のいらえはない。

「わっ」

と声を放って雪下が号泣し、

「それがしめもお供つかまつります」

道雪の遺体にとりすがってさけんだ。

「われらも、ただちに追い腹切りもうす」

和泉と与五郎も、異口同音にさけびをあげた。

「おのおの方のお気持ちはわかるが、まずは立花城に道雪どのの訃報をつたえてからになされよ」

紹運が制止した。

この日、九月十一日。

筑後からの早馬で道雪の訃報と遺言をつたえられた統虎は、しばしことばもなく瞑目していたが、やがて口をひらくと、きっぱりといった。

「いかに舅どののご遺志とはいえ、敵地に葬ることはあいならぬ」
「敵地に身を埋めても、わたくしどもを守ろうという、お父さまの気持ちをないがしろになさるのですか」
闇千代が身をのりだしてさえぎった。
「舅どののお気持ちはたいせつにしたい。しかし、そのとおりにすれば、そのなきがらは、敵方に掘りおこされ、無用の辱めをうけるだけではないか」
統虎は闇千代を諭すように、しずかな口調でいった。
「お父さまは、おのれの屍を捨て石にして、死んでも大友家のためにつくそうとのお覚悟を示された。いたずらになきがらにこだわり、つねに武家の鑑としてふるまい、潔い死にざまをねごうてこられたお父さまのこころを無視してよいものか」
闇千代は唇をふるわせた。
「お闇、そなたの気持ちはわかる。が、いまは、そなたと話しあういとまもない。わしは立花城の跡継ぎとして、早々に決断を下さねばならぬ。重臣らの殉死もゆるすわけにいかぬ。ここは曲げて、この統虎にしたごうてくれ」
「統虎どのは血をわけておらぬゆえ、そのようなことがいえる。闇は立花家ではなく戸次家の血をうけついだ実の娘。あくまでお父さまの遺志をつらぬかせてあげたい。統虎どのこそ闇にしたがうべきです」



闇千代は後にひかなかった。
「ご両人が、いさかいなされたのでは、大殿も往生できますまい」
十時摂津守がおもむろに仲にわって入り、立花家譜代の家老薦野三河守も、
「ひとまず、ご遺体を当城にお迎えして、北のお方さまにおわかれをしていただくのがよろしいのでは」
苦労人らしく、闇千代の母の名をだして仲介した。
「そう、ねがいまする」
日ごろ、ひかえめなにしが、ふかぶかと頭をさげて頼んだので、さすがに闇千代もだまった。
道雪の遺骸は立花城まで搬送されることになった。
統虎の意向がつたえられた北野では、
「若殿のご決断とあれば反対はできぬ。が、大殿の側近に仕えた雪下としては、ご遺言に背いて生き恥さらすわけにはまいらぬ。腹かっさばいてお詫びする」
由布雪下がいいつのった。
なればと小野和泉らも、また殉死を主張してゆずらない。
そのとき、原尻宮内がぼそりといった。宮内は統虎が婿入りするとき、お迎え役をつとめた男だが、かわり者として知られ、いつも苦虫を嚙みつぶしたような顔をしている。

「おのおの方が腹を召されたのでは、若殿は一人ぼっちになる。いっそ、若殿にも切腹してもらったら、いかがでござろう」

「宮内め」

妙な理屈をもうしおって……雪下は舌うちしたが、宮内の意見には雪下らの熱した頭を冷やさせるに絶大な効果があった。

けっか、道雪のなきがらは立花城に移送され、葬儀の後、城の麓にある立花家の菩提寺梅岳寺の養孝院の墓のとなりに葬られた。

養孝院とは、道雪の母である。血こそつながっていないが、道雪にしたがって長年住みなれた豊後から移住し、数年まえ、この地で没した。ひたすらおのれを殺して道雪の生き方にしたがった一生だった。

「お閨、婿どのに頭でむかっては不幸をまねく。女は胸じゃ。胸に優しく婿どのを抱きとって出世させてやればよい」

と日常、閨千代を諭したものだが、この祖母のことばを古ぼけた忍従の思想として、勝気な閨千代はすなおにはきき入れなかった。

――男たちのつくった勝手な理屈やしきたりに、どうして女は唯々諾々としたがわねばならぬのか。

生来、自立心の旺盛な閨千代には、不満のみが鬱積した。



死んだ道雪が最後まで気にかけたとおり、統虎と閨千代の仲は青い李以上に酸っぱいままだった。

夫婦のことに表立って口だしこそしなかったが、これまで両人のあいだには、つねに巨きな道雪の存在があった。その巨きな存在がきえたいま、二人はもろにむかいあわねばならない。

しかし、いまの二人には道雪を失った哀しみにひたることも、ましてや、いさかいをするひまもなかった。

訃報を追いかけるようにして、さらなる飛報がとどいた。

## 6

道雪のなきがらを守って立花隊が出立した後、紹運はあわただしく北野を陣ばらいして、立花隊の後を追った。

北野から立花城までは北方にほぼ十里の道のりである。

道雪の死は、すでに敵方に知れわたっているとみなければならない。となれば、すくなくとも筑前に入る国境までは、いつどこから龍造寺や秋月の兵が襲ってきてもおかしくなかった。たいせつな道雪のなきがらは、なんとしても、ぶじに立花城までおくりとどけな

くてはならない。

「急げ」

紹運は馬上に鞭をあげ、部下をうながした。

立花城への道筋のほぼ中ほどに岩屋城がある。できうれば、そこまでに追いつき、寸時なりとも城内になきがらを迎えて最後のおわかれをし、柩によりそって立花城まで供をしたかった。

「おやじどの……」

鞍上に声をひそめ、紹運はいくたびも道雪の名をよんだ。その声は枯れ尾花をゆらして筑紫野をわたる晩秋の風に、たちまち吹きはらわれた。

——いずれは、わかれのときがくる。

ともに戦乱の修羅を生きる身、あるいは自分のほうが先にわかれを告げることになるやもしれぬ、とも覚悟していた。しかし、道雪は先に逝ってしまった。

——さぞや、無念であられましょう。

ぬぐってもぬぐっても涙がしたたり、戦陣灼けした両の頬をぬらした。

親昵してきた三十余年、紹運にとって道雪は文字どおり無二の戦友であり、なによりも、こころの父であり師であった。その大きな存在がすっぽりとぬけおちた空間に、紹運のこころは虚しく揺曳するばかりだ。



「いかぬ、いかぬ」

紹運ははげしく頭をふって心気をふるいたたせようとした。いまは敵中だ。いたずらに悲しみに沈淪することはゆるされない。

隊列は、なにごともなく国境を越えた。あとは一路太宰府の森をめざしてすすむだけだ。

眼さきに赤蜻蛉がまばゆい銀翼をきらめかせて群れ飛んでいる。

と、

「注進っ」

前方に砂煙があがり前駆の伝騎が馳せもどってくるのがみえた。

「なにごとっ」

紹運の馬側から弓削了意が高声にさけんだ。

「宝満城に敵勢でありますっ」

伝騎の武者ははるか馬上から応答した。

「秋月か」

紹運が質すと、意外にも筑紫広門の手の者だという。

「卑怯にも修験者をよそおって侵入し、山内の堂宇に火をかけまいてござります」

使者は砂埃をかぶった頭をふり立てて注進した。

「で、味方は」
「伊東源右衛門どの以下、必死で防戦つかまつりましたが、なにぶん不意をつかれましたゆえ……」
「おちたか」
「いまだ定かではありませぬ。幸い、統増さま、北のお方さまは……」
「ぶじだというか」
「はい。あやうく敵の俘虜となるところを、屋山中務どのが手勢をひきつれて馳せつけ、岩屋の城におうつしもうしあげたとのことであります」
紹運は猫尾城攻めに出発するまえ、妻のちよと次男の統増を岩屋城より要害の宝満城にうつしたが、かえってそれが裏目にでたのだ。しかし、岩屋城に城代としてのこした屋山三介のはたらきで救出できたというのは、不幸中の幸いというべきだろう。
「立花の隊は、はや通過したか」
紹運の、もっとも気がかりなのが、この一事だった。
「小野和泉守どのが殿軍し、ぶじ駆けぬけられたもようにござります」
「さようか」
紹運は、ほうっと安堵の息をもらした。
ひとまず、最悪の事態は避けることができた。



「先駆けして岩屋城をかためよ」
紹運はただちに萩尾麟可に百名ほどの兵をつけて先行させた。
それにしても油断も隙もならないのが筑紫広門である。
この男は、さしずめ筑紫の小鼠とでもいおうか、まことに向背つねならぬ人物である。
もともと筑紫氏は少弐氏の被官だったが、少弐氏がおとろえると大内氏に属し、大内氏がたおれると大友氏にしたがった。しかし、毛利氏が進出すると、秋月種実らとともに反旗をひるがえし、毛利氏が北九州から手をひいた後は、龍造寺氏についた。隆信が死んだいまは、ひそかに島津に通じている。小族の哀しさにはちがいないが、紹運などからみれば、あまりに節操に欠ける。
――ようもまあ、小鼠のようにちょこまかと……。
あきれはてるおもいである。
しかも、広門は紹運と親戚なのだ。斎藤鎮実の娘、つまり紹運の妻ちよの妹が、広門の妻女だった。
「わたくしなどより、ずんと美形に生まれた妹が、あんな男に嫁いでかわいそう」
かねがね、ちよは妹の不幸を歎いている。
両家は当主が親戚でもあり、また領地が隣接しているせいもあって、家臣たちも顔みしりが多い。戦さえなければ、たがいに往来して酒など酌みかわす仲なのだ。

とまれ、この隣りの小鼠は紹運の留守をねらって宝満城を略取し、一族の筑紫四郎右衛門に三百の兵をさずけて守らせた。ただし、宝満城は紹運の居城岩屋城とは目と鼻のさきにある。

早駆けして紹運の本隊が帰城すると、筑紫の守兵はたちまち浮き足立った。

「すぐにもご加勢の兵をだしましょう」

やがて、急を知った統虎から早馬で助勢をもうし入れてきたが、

「なに、すぐにも片がつこう」

紹運は余裕をみせて辞退した。

はたせるかな、屋山中務三介に命じて山の麓をかこませ、一声あげさせてみると山上の筑紫兵は声をひそめてすくんだままだった。

「むり攻めして、いたずらに兵を損じるほどのこともない。いずれはむこうから降ってこよう」

くやしがる将士を紹運はなだめた。

「このうえ、おてまえ方と干戈をまじえるつもりはござらぬ」

そのうち、筑紫四郎右衛門からいいおくってきた。

「盗人どうぜんのことをして、おかしなもうしようをするものよ」

三介は筑紫方の真意をはかりかねて憤懣をもらしたものだが、やがて、広門のねらいが判明した。

年が明けた天正十四年（一五八六）正月になると、広門から和議をもうし入れてきた。

統増に娘のかねを妻あわせたいという。

「なるほど、宝満の城を質にして有利に和談をすすめたい魂胆でありましたか」

三介はうなずいたが、

「それにしても、いまさらなにを血迷うて劣勢のわれらに与しようというので？」

またも首をひねった。

前年暮れには、秋月種実からもひそかに和睦の打診があったばかりだ。

「信義なき者ほど、あれこれ去就に迷うものよ」

紹運は憐憫の口調をみせて三介にいった。

いまや、九州はほぼ島津氏の勢力下にある。したがわぬのは、大友勢だけである。

島津義久は、すでに大友総攻めの準備をすすめていた。豊後の宗麟、義統父子の本領とどうじに、筑前の高橋紹運、立花統虎父子の城が攻められるのは時間の問題といってよい。

龍造寺も秋月も筑紫も、それに相良をはじめとする肥後の諸将も当然、島津の幕下に入って攻撃に参加するはずだ。いかに紹運、統虎父子が戦上手でも、この大軍のまえには抗しようがないだろう。勝敗は歴然としていた。

それでいて、秋月や筑紫氏がひそかに紹運にすりよるけはいをみせたのは、背後にもう一つ大きな不安を感じていたからだ。羽柴秀吉が、いよいよ九州に兵をだすらしい。

## 7

前年夏、秀吉は関白になった。最大の敵徳川家康と和議をむすんだ秀吉は、事実上、家康を臣従させることに成功した。東方の脅威をひとまず解消した秀吉は、秋には四国に長宗我部元親を攻めて屈伏させた。いまや、いつでも九州に出兵できる態勢にある。

――島津は九州随一の勇猛な軍団を有する大勢力だが、日本の過半を支配する秀吉の遠征軍にはかなわぬのではないか。

その不安が、島津に服属する諸将の腰をおちつきのないものにしている。

――紹運父子は、まもなく太閤の与力にとりたてられるそうな。

こんなうわさが、近来、博多の商人筋からしきりにながれている。

となれば、いまのうちに紹運父子に誼を通じておき、きたるべき太閤の九州征伐には、その傘下に馳せ参じて生きのこりをはかりたい。

むろん、紹運父子はこんなうわさとは無縁だ。

紹運はいまは亡き道雪から、そのような生きのこり方を匂わされたことはある。しかし、紹運自身はふかくかんがえてみようともしなかった。



道雪とおなじように、いかに潔く死ぬか、ということばかりをおもっている。紹運にとっては、潔く死ぬために日々の営為がある。

道雪といい紹運といい、ふしぎな血といわねばならない。いずれも、ただの戦馬鹿ではない。明晰な頭脳の持ち主だ。明晰な頭脳なくして、よき戦はできぬ。それでいて、両人ともにあえて愚直な生き方をえらんだ。

謀叛、裏切り、下剋上――人間という生きものは、おのれが生きのびるためには、いかなる非道も辞さない。しかも、それを正当づけるためにさまざまの理屈を弄するものだ。しかし、愚直者は、いっさい理屈をいわない。いいわけもしない。

病の身を養うことなく北野で陣没した道雪は、頃日、主人宗麟のキリスト教狂いを苦々しくおもっていた。それでいて、宗麟の家来でキリシタンの柴田礼能と会ったときには、

「わしはキリシタンぎらいだとうわさされておるが、キリシタン信仰の邪魔をしたことなどいちどもない。なぜなら、デウスの教えのなんたるかを、まったく知らぬからだ。お屋形は熱心なキリシタンであられる。わしは、お屋形の重臣として全生涯をお屋形にささげて生きてきた。だから、お屋形が竹竿を肩に茫然自失の態で町なかをさすらえば、わしも迷わずお屋形の後を、おなじ格好をしてあるくだろう」

と告げている。

これはルイス・フロイスが『日本史』に書いている記事で、おそらく身ぢかにいた紹運さえ知らぬことだろう。

主人宗麟の女狂いには、いのちを賭してきつい諫言をくりかえした道雪が、キリスト教信仰に関するかぎり、手だしも口だしもしなかったというのだ。これは、いったいどうしたことだろう。

むずかしくかんがえることはない。女色は道雪にもわかった。が、キリスト教信仰については関心がなかったこともあり、教義の中身がほとんどわからない。わからないことについては、手だしも口だしもしない。晴朗な戦国武人の姿勢がここにある。

主人が案山子の格好をすれば、自分も案山子になって後にしたがう。理屈ではない。惚れたが因果、とでもいおうか。それが主従というものだときめてかかっている。

『論語』には、しばしば愚ということばがあらわれる。当然ながら、孔子は愚を否定的にはつかっていない。

たとえば、こんな一節をおもいだす。

〔子曰く、寧武子、邦に道あれば則ち知、邦に道なければ則ち愚。その知は及ぶ可き也。その愚は及ぶ可からざる也〕

寧武子は春秋初期、晋の文公の時代、衛の国の家老だった。

春秋時代の史書『左氏伝』の記述によると、西暦前六三年ごろ、衛は晋、楚の二大強国



にはさまれ、国内は親晋、親楚の二派にわかれてあらそい、君主の成公はしばしば亡命を余儀なくされた。

寧武子は、いずれも国をおもうこころはおなじはずだと、熱心に両派を説いて団結させようとつとめた。

しかし、ひとり寧武子の善意だけでおさまりがつくほど、人の世はいまもむかしも甘くはない。その後も党争はつづき、成公は晋の文公のもとで裁かれることになった。寧武子は成公のために懸命に弁護したが敗訴し、成公は周の都に拘禁される。ただし、弁護には失敗したが、寧武子の献身的な忠誠は晋の国の人々の感動と尊敬をよんだ。

その後も寧武子は獄中の成公をみすてることなく、差し入れなど細やかな気づかいをつづけ、ことに成公が毒殺されかけたおりには、医師にひそかに金品を贈って毒薬に匙かげんをしてもらい、あやうくいのちを救ったこともあったという。寧武子とは、このような人物である。

さきの『論語』の一節は、この寧武子を評したことばだ。

〔邦に道あれば則ち知〕とは、国が平和なときは大いに知を発揮し、〔邦に道なければ則ち愚〕つまり、国が乱れ危機におちいったときには、知をおさえて愚直な誠実さをはたらかせたという意味であろう。

平時に知者としての才能、伎倆をはたらかせることは他の者にもできることだが、危機

にあたっての愚直なはたらきは、だれも真似ることができない。〔その知は及ぶ可き也。その愚は及ぶ可からざる也〕とは、そのことをいっている。

凡庸な成公とちがって、先代の文公は名君だったので、寧武子は、その下で知者としての才腕を大いに発揮したにちがいないが、その功績についてはなにもつたわっていない。つまり、知的はたらきは寧武子でなくとも、できることだから、とくべつにつたえられることはなかったということだろう。

こんなこともあった。

文公のとき、寧武子は衛の代表として魯におもむいた。歓迎式典で、どうした手ちがいからか演目の異なる音楽が奏された。奏楽がおわっても、寧武子はいっこうに答礼の挨拶をしようとしない。で、魯の役人がうながすと、

「これは失礼。さっきの演奏は楽人たちの稽古の手あわせかとおもっておりましたので」

と、とぼけながら謝った。

あいての面子をつぶさぬように謝りながら、どうじに、あいての誤りをさりげなく指摘してやったのだ。『左氏伝』の注釈者杜預は、〔これ、その愚の及ぶ可からざるなり〕と記している。

愚とは、まさに知ではかりがたい奥ゆきをもつものらしい。

話がそれた。縁談にもどる。



紹運は宝満城の件にはあえてふれず、広門からの縁談もうし入れをうけた。

統増は十五歳、かねは十七歳。二つ年長の姉さま女房である。

「かねどのは、しっかりした娘です。統虎とちがって苦労なしに育った統増には、よい連れあいとなりましょう」

まず、ちよがもっとも喜んだ。これで、妹ともまた親しくつきあいができる。

「広門どのも、こんどこそ寝返りはしないでしょうな」

屋山三介が苦笑しながらいう。腹のなかでは、そうはおもっていない。広門のような男の性根は、たやすくかわるものではないと知っている。

紹運もおなじだ。広門にいまさら信義をもとめてもはじまらない。ただ、島津の総攻撃をまえに、一人でも敵はすくないほうがよい。頼りにはならないが、かたちだけでも味方についてくれれば、それでいいのである。

まったく、あてにはしていない。

## 8

「たまげた」

宗麟は心底おどろいている。大坂の町なかのにぎわいぶりに、である。

天正十四年（一五八六）四月、宗麟は大坂にいた。

前月すえ、宗麟は佐藤新介ほか、わずかな供をつれ、臼杵の港から船出して瀬戸内の海をぬけ泉州堺に着いた。翌日、住吉、天王寺をへて大坂に入った。秀吉に会うためだ。

島津に支配地のほとんどを奪われた宗麟は、みずから巻きかえすだけの気力も兵力もないままに、秀吉に頼ることにした。道雪にいわれるまでもなく、いまやこの術しかないことを宗麟は知っていた。

名流の裔として、成り上がり者の秀吉ごときに膝を屈することは死ぬほどいやなことだ。しかし、それをするしかない。で、前年、宗麟は秀吉に秘蔵の茶壺志賀を献じ、島津を牽制してくれるよう親書をもって依頼した。

「休庵（宗麟）、義統のこと、見放つべきにあらずそうろうあいだ、こころ安かるべくそうろう」

師走になって、秀吉から返書がきた。

「心配するな。島津はこの太閤がおさえてやる」

というのだった。

かたや、島津の当主義久も秀吉に使者をおくり、九州全土の守護職に任じてくれるようねがいでていた。

いま手中にする領土は、すべてまっとうに、みずから額に汗し、血をながして手に入れたものである。われらは関白に敵対するつもりはないのだから、すみやかに承認ありたい、とのもうし入れだった。



秀吉は、大友、島津両氏に和解を勧告したが、島津はきき入れない。

「わるいのは大友、われらは、やむをえぬ防戦をしているだけのこと」

と強弁し、着々と大友攻めの準備をすすめた。あわよくば秀吉が兵をだすまえに全九州を制覇し、九州全土を戦場にして秀吉に抵抗する。和議にもちこむとしても、領地は大きければ大きいほど、わりのいい取り引きができるはずだ、との計算だった。

秀吉にすれば、島津の魂胆はみえみえだ。ひたすら泣きついてくる大友にくらべ、なんともかわいげがない。だから、宗麟には「心配するな」といってやったのだ。すでに島津討伐の気持ちはきまっている。

ただし、宗麟にすれば秀吉の一片のことばだけでは安心できなかった。すでに島津の匕首が、喉もとにまでせまっている。

――ほんとうに、たすけてくれる気があるのか。

じかに、秀吉にあってたしかめずにはおられなかった。

で、茶器ほか秀吉の気に入りそうな秘蔵の名品を手土産に、大坂までのぼってきたのだった。

大坂城におもむいたのは、四月六日である。

まず、大坂の市街のにぎわいにたまげた宗麟だったが、大坂城をみて、さらに仰天した。

なにしろ規模が大きい。三年まえに着工した城普請は、いまだおわっていない。大河のような濠、巨石を積みあげた、みあげるような城壁、宗麟自慢の国崩しの大砲をもってしても撃ち破れそうもない堅固な鉄の城門、いずれも度肝をぬかれるものばかりだった。臼杵の城など、この城にくらべれば、まるで鶏小屋だ。

かつて京、上方に家来を上らせて美女をさがさせたおり、まだ戸次鑑連と称していた当時の道雪が、

「田舎者根性まるだし」

と軽蔑したものだが、

（いや、まことわれは、田舎者そのものだったわい）

秀吉に会うまえから、宗麟はすっかり意気阻喪してしまった。

秀吉は大広間の上段に座して謁見した。その脇には秀吉の弟秀長がすわり、細川幽斎、宇喜多秀家、長谷川秀一ら、秀吉お気に入りの重臣が居並んでいる。

宗麟は次の間に座をあたえられ、背後には前田利家、安国寺恵瓊、前田玄以、そして茶道頭の千宗易（利休）らがひかえた。

「ようまいられた。面をあげられよ」



うながされて、平伏したままわずかに視線をあげると、正面に小男が一人すわっていた。紅の小袖のうえに唐綾の白小袖を重ね、紫と玉虫色の模様を配した派手な袴を着している。

このとき秀吉五十一歳。宗麟より六つ年下だが、はるかに年長者にみえたのは、皺の多い顔のせいか、あるいは苦労をかさねて関白にまで成りあがった男の貫禄というものか。

豊後の名家に生まれ、多くの家臣と美女にとりまかれて気ままに育ち、家督争いに勝ってからは、合戦、外交に敏腕をふるって九州の過半に版図を広げ、かたわら博多や堺の商人、文人、茶人らとまじわり、莫大な費えをはらって茶器、刀剣、書画などの名品を蒐集し、さらにはバテレンを庇護して諸外国の文物に学び、一時は天下の栄耀を独りじめにした気分で生きてきた宗麟だったが、いまは頼るべき重臣もなく、からだを病み、亡国の危機にさらされ、猿面冠者のまえに膝を屈している。

「なにとぞ、関白さまのご威光をもって……」

おのずから宗麟は自虐と卑屈の情におしひしがれ、蛙のように秀吉のまえにはいつくばった。

「すべては、この秀吉にまかされよ」

秀吉は鷹揚にうなずいてから、それ以上はなにもいわず、みなとともに湯漬けをふるまった。菓子を食しおわったところで、秀吉は、

「宗麟どのは茶が好きか」
とたずねた。
「お点前の作法、道具の目利きともに一級の数奇者であられます」
宗麟がこたえるよりはやく、背後の宗易がひきとって如才なく紹介した。
島井宗室を通じて、宗易は宗麟の数奇者ぶりを知っていた。茶の湯の席では、宗麟は宗滴、休庵などと号している。
むろん、秀吉は無類の情報通だ。そのくらいのことは、つとに承知したうえで、たずねている。本音は自慢の茶室を一刻もはやく宗麟にみせたいのだ。
「されば、休庵どのに一服献じよう」
秀吉は身がるにさきに立って、宗麟を茶室に案内した。
「これは……」
宗麟は絶句した。
三畳敷の茶室は天井も壁も障子の桟も、すべて黄金にかがやいていた。茶道具もまた柄杓立、柑子口、お茶入れ棗から四方釜、茶碗、茶杓、火箸のたぐいまで黄金づくし、柄杓と茶筅のみがわずかに竹であった。
「おどろいておるな」
秀吉は、うれしげに宗麟をかえりみた。



「まこと龍宮にあそんでおるような……」
宗麟は、かわいた声を発しながら秀吉の足もとにひれ伏した。秀吉の足袋は赤地の金襴に練貫のものだった。
秀吉は機嫌よく、みずから手杓で自慢の茶碗に茶を点てて宗麟にふるまった。宗麟はおしいただいて半分を喫し、のこりを背後にひかえる供の者にあたえた。天下の太閤が点てた茶を喫する名誉を、家来にもわけあたえたいという気持ちをあらわすための、宗麟のおもねりだった。
この種の演技は、出世途上の秀吉が得意としたものだった。それだけに、秀吉には宗麟の心事がよくわかる。
「休庵どのに、天守をご覧に入れよう」
さらに上機嫌となり、秀長とともに天守閣にいざなった。
天守閣には衣装や武器や金銀を納めた蔵が各階にある。その一つ一つを秀吉は宗麟にみせた。やがて最上階の天守にあがった。
「みられよ。よい景色であろうが」
秀吉は宗麟の手をとり、肩に手をまわして親しげに眼下の景物を説明した。
秀吉の好意はうれしい。が、できうることなら、みずからが秀吉の肩に手をまわして城を自慢する立場でありたかった。しかし、いまや詮ない夢である。宗麟は、しだいにこと

ばすくなになった。

「くたびれられたかの」

秀吉はいちはやく気づいて、天守をくだり、あらためて茶をふるまった。しばし、雑談するうちに、秀吉はまたも自慢癖が頭をもたげ、ついには寝室をみせるといいだした。

広さ九間四方ほどもある寝室には大きな寝台がおかれ、その褥は猩々緋の織物でおおわれ、繊細な彫刻をほどこした黄金の枕がおかれていた。つぎの間もまた寝室で、ここには金襴の袋に納め紅緒でむすんだ秘蔵の茶器がしまわれていた。

「休庵どのにみせてやれ」

部屋にひかえる宗易ほか津田宗及、今井宗薫らの茶人にむかって、秀吉は命じた。

まず、宗易が四十石をとりだして宗麟のまえにおいた。つづいて宗及、宗薫がうやうやしく松花、佐保姫、撫子、百島など、いずれも秀吉自慢の天下の名器を披露した。

「そこもとより贈られた志賀も、四十石にそえて秘蔵する」

如才なく、秀吉は宗麟献上の茶壺にもふれた。

「まいられよ」

ついで、秀吉は別室にさそい、みごとな一振りの脇差を手ずからあたえ、宗麟が頭上にいただいて跪拝するところに、

「さて……」



と、いった。

語調がかわった。

「休庵、わしが島津を征伐したら、そちはなにをくれる？」

「ははあ、筑前はじめ、わが領地をことごとく進上いたしまする」

「領地か、そんなものは、そちからもらうまでもなく、わしが自分で手に入れる」

「ならば、瓢箪茶入ほか……」

「ほう、瓢箪肩衝をくれるか。それもよい。が、そのまえに人がほしい」

「は、人でありまするか？」

「大友家随一の忠臣をな」

「はて？」

「おもいあたらぬのか」

「忠臣もあまたおりますれば……」

「休庵、負け惜しみをもうすな。忠臣といえば、いまでは、ほれ筑前のあれしかおるまい」

「ともうされますと、立花道雪でありましょうや」

「道雪入道は死んだであろうが」

「ははあ、よくもご存じで……」

「日本六十余州、この関白が知らぬことはない」
「おそれ入りまして、ござりまする」
「道雪入道に子がおろう」
「養子でありますが、立花左近将監統虎がことでござりましょうか」
「実父は高橋主膳入道紹運」
「さようにござります」
「この父子を、わしの直参にする」
「はあ……」
「不服か」
「いえ、さような……なれど、両人をなにゆえに？」
「木下藤吉郎のころより、わしは故上様（信長）の忠実な僕であった」
「ききおよんでおりまする」
「へつらい者と、まわりにばかにされた」
「……」
「むろん、へつろうたよ。だがの、ただのへつらいではない。上様のためなら足裏をなめろといわれればなめる。妻を閨房にさしだせといわれれば、だす」
「妻女どのを閨房に？」



「むろん、そちとはちがう。上様はさようなことはもうされぬ」
「……」
「まあ、そのようなことはどうでもよい。道雪入道亡き後、孤立無援の筑前でいまなお、そちのために龍造寺や島津に立ちむかっておるのは、この両名のみであろうが」
「ま、さようで……」
「両名は、そちには惜しい」
「と、もうされますか」
さすがに、心気萎えた宗麟の胸中にも、むらむらと矜持の残滓がよみがえった。
皺の底にくぼんだ双眸をかっとみひらき、宗麟は下から秀吉をにらみあげた。
「ほう、怒ったか」
「……」
「怒らねば男であるまい。そちは百姓あがりのわしなどとちがって鎌倉いらいの名族の出だ。それだけに、かえって人のこころがわからぬ。真実、たいせつな人間の価値がな」
「道雪、高橋父子は、まこと忠実な家臣でありました」
「その忠実な家臣らを、そちはどうあつかった？　ていよく遠国に厄介ばらいしたであろうが」
「まさかに。戦に巧みで寝返るおそれのない者ゆえ、筑前の関門を守らせたまでござ

る」
「強面のかれらが目ざわりだったのではないか」
「かれらが、そのようなことをもうしておりましたか」
「もうすはずがなかろう。なにもいわぬかれらにかわって、博多の商人どもや、ほれ、あの、なんというたか、頭の大きな肥後の武芸者……」
「タイ捨流の剣術師、丸目蔵人でありましょう」
かたわらから、秀長が口をそえた。
「そう、あの剣術使いまでが、伝をもとめてわしに上申しおった。あのような希有な人物を、辺地で朽ちはてさせてはならぬと」
「蔵人までが、さようなことを……」
「商売にしろ、剣術にしろ、日々、懸命に生きておる者らには、人の値打ちがわかるものだ」
「紹運父子を、それほどまでの人物ともうされますか」
「おう、りっぱだよ。唐国に愚直ということばがあるそうな。わしのような生臭男には縁がないが、かの者らは、いまも一言の苦情もいわず、ひたすらそちのためにいのちをかけて戦うておるであろうが。そちもかつては九州六カ国を支配した男だ。時の運にのれば、このわしをもしのぐ器量人となったやもしれぬ。が、どうやらそちには、いまもってかの者らの真価がわからぬらしい。だから、わしがもらいうける。文句があるか」
「む……ござりませぬ」
「ならば、きまった。そちは老体ゆえ、くたびれたろう。もう宿にさがれ」
最後は秀吉に追いだされるようにして、宗麟は大坂城の大手門をでた。
外は雨だった。雨具の用意はない。
「お駕籠まで、辛抱ねがいまする」
供の佐藤新介がすばやく小袖をぬいで、宗麟の頭上にさしかけた。
濠のうえに白い鳥が群れている。摂津の港から飛来した海鳥であろうか。
鳥は飛べる。しかし、自分は飛べぬ。しかも、いまはひそかに股肱と頼む高橋父子までも秀吉に召しあげられてしまった。みずからも秀吉の膝下にひれ伏す身となったのだ。くやしい。さびしい。が、これも、おのが身からでた錆とおもうしかない。
「あかね」
宗麟は雨にうたれて宿舎の妙国寺にむかう途次、駕籠のなかで小さく愛妾の名をよんだ。困じはてたとき、苦しいとき、いつもその巨きな乳房に宗麟を抱きとってくれたのは、まさでもない、ひなでもない、あの一万田鑑相から奪いとったあかねだった。
あかねは、子を産んだことがないにもかかわらず、乳首を吸うと乳に似た甘いしたたりを宗麟の舌にほとばしらせた。

「われは、子を産んだな」
宗麟が乳首をくわえたまま、猜疑の声をあげると、あかねは巨きな胸をひらき、
「ふふ……」
とわらった。
「宗麟さまという、とんでもない甘えん坊を産みましたよ」
「弾正忠にも、おなじような睦言をいうたのか」
そんなとき、宗麟ははげしい嫉妬に駆られて、あかねの乳房を噛んだものだ。
「男とは、まことに勝手で執念ぶこうございますね」
あかねは、あきれはてたふうにいった。
「女は、ちがうのか」
「女は、あけびでございます」
「あけび、か」
「自分の気持ちとはかかわりなしに、季節とともに身がわれ、男の手中におちます」
「ふむ、おもしろいことをいう女だ。弾正忠を殺してまで奪った甲斐があった。わしが年よりわかくしておれるのも、そなたのおかげだ」
「女とは薄情なもの。もはや亡夫の名をだされても、なにも感じも痛みもしませぬ。さあ、まいられませ」



「デウスの教えにしたがえば、わしは気安くそなたとは交われぬのだ」
「平気で人を裏切り、殺戮の戒律を犯すお方が、姦淫を気になされますのか」
あかねは、かたちのいい唇をゆがめて淫靡にわらい、その豊満な胸に宗麟の痩身を抱きとって肉地獄、いな天国に誘ったものだが、いまやそのあかねもいない。前年秋、とつじょ血を吐いて死んだ。
「年甲斐もない、過淫のせいだ」
あかねの死に、家中の空気は冷たかった。
「あかね、ゆるせ。わしがわるかった」
胸にひそかに十字をきり、宗麟はいまは亡きあかねにわびた。
――おもえば不明の一生であった。いまはかの義祐入道のように、堺の港で野垂れ死にしたいおもいだよ。
義祐入道とは、かつての日向の盟主伊東義祐のことである。領国経営を誤り島津に攻められ、宗麟を頼っておちてきた。しかし、その請いをうけて日向に遠征した大友軍が大敗すると、絶望した義祐は豊後から失踪し、数年あまり伊予、周防などを転々とした後、昨年暮れ、堺の船着場で行きだおれになったとのうわさだった。
そのうわさを耳にしたおりには、さしたる感慨もおぼえなかった宗麟だが、いまは落魄の身を行路病者として異国にはてた義祐の無残な胸中が、しみじみわかるような気がし

た。

春の雨はいつやむともなく降りつづき、駕籠の簾戸をとおして宗麟の老いた五体にしみとおった。



# 散華

## 1

「ちと、話をしたい」

遠慮をみせて、統虎は閨千代の背後から声をかけた。

「どうぞ」

閨千代は、ふりむきもせずにこたえる。

指さきに餌匙がある。鳥に餌をやっているのだ。

鳥は目白である。全身あざやかな緑の羽毛でおおわれ、胸もとから嘴にかけてあざやかな卵黄色に染めあがっている。目のまわりに白い隈どりがあり、軽捷なうごきに愛嬌をそえている。

立花山には四十雀や頬白とともに目白が多く群れている。閨千代はみずから鳥黐で捕

り、つねに数羽を飼っていた。鳥黐は山中に生えている鳥黐の木の樹皮をはぎ、丹念にたたいて水にさらし、ねばり気をだしてつくる。

闇千代は鳥黐のつくり方も目白の飼い方も父道雪からならった。

「鳥を飼うこころに邪念はわかぬものぞ」

いいながら、道雪は幼い闇千代にみずから手ほどきした。

生来、猛々しい娘の気性に、いくばくかでも女らしい優しさを涵養したいとのおもいからであったろう。

じつは、統虎も目白が好きだった。立花家に養子に入るまえ、傅役の世戸口十兵衛を供に四王寺山の山ふところを駆けめぐり、さかんに目白を捕った。婿入りにさいしても、気に入りの一羽をたいせつに持参したほどだ。

「いっしょに飼おう」

唯一、共通の趣味をみつけて、統虎がうれしげに提案すると、闇千代はすげなく首をふり、

「飼いくらべしましょう」

といった。

麓の農民たちは春ごとに神社や寺の境内にあつまり、稗や米を賭けて目白のすがたを競い、啼きくらべをしている。それを真似て夫婦べつべつに飼い、すがたくらべ、啼きくらべをしようというのだ。



道雪の意図ははずれた。闇千代にとって目白を飼うのも闘争の一つだった。統虎は新婦の提案に鼻白み、せっかくもってきた気に入りの一羽を山に放ってしまった。

しかし、闇千代は統虎の心事など頓着せず、いまも自分の目白を飼いつづけている。

「勝負を逃げるとは、婿どのもだらしのうござりますな」

とりまきの侍女たちにおだてられ、勝ちほこった気分にさえなっていた。

けさも、闇千代はその自慢の目白に餌をやっているところだった。

「相談がある」

統虎は重ねて声をかけた。

「もうされませ」

侍女に手伝わせて鳥籠の蓋をあけ、餌壺をとりだしながら闇千代はこたえた。その横顔が盛夏の朝の光に映えて美しい。

「相談したいともうしておるのだ。せめて、こちらをむいたらどうだ」

「耳は、そちらをむいております。どうぞ、おっしゃってくださいまし」

いつものことだが、闇千代のこの頑さにはがまんがならない。統虎は怒りをのみこんだまま、無言で踵を返そうとした。その背にむかって、闇千代がことばを投げた。

「紹運さまのお城への助勢のことでござりましょう」

この勘のよさがまた、闇千代の真骨頂だった。並の男など、とうていおよびもつかぬ鋭さで、いまなにが起こり、なにが必要かを、かの女なりに読みとっている。統虎にとっては、それが救いでもあり癪でもあった。

「そのとおりだ」

統虎は足をとめ、憮然としてこたえた。

「あたくしに相談なさるまでもありますまい。ほかならぬ紹運さまのご命運にかかわること、おもうとおりになされませ」

ぱたり、と音立てて鳥籠の蓋をとじた。

「岩屋城に援軍をおくれば、そのぶん当城の守りが手薄になる。そなたのいのちにもかかわることだ。で、いちおう相談しようとした」

「おかしなことをもうされる。あたくしは統虎さまの妻でありますよ。おのれ一人、生きのびようなどとは微塵もおもうておりませぬ」

いいながら闇千代は、はじめて統虎の顔をみた。かすかに紅を刷いたかたちのいい唇に微笑がうかんでいる。

「まことに、よいのだな」

「闇はこころにもないことは口にいたしませぬ」

たしかに、そのとおりだった。こころにあることを、にべもなく口にしすぎるので、統



虎とのあいだにも軋轢を生じるのである。

「ならば、二十名ほどをご加勢にだす」

「わずか二十名ですか」

「このあたりが父上がうけ入れてくださる限度だろう。二百も三百もだしてみよ、父上は頑として拒絶なさるにちがいない」

「紹運さまは頑固でいらっしゃいますからね」

「わかいころから、そなたの父に薫陶されたのだ。頑固にもなろう」

「おもえば、あたくしたちはみな、どうしてこうも頑固者ぞろいなのでしょう」

「頑固だからこそ、いまこのようなつらい役まわりを演じておるのさ」

「まことに愚かですね」

「愚直は武家の誉れとは、亡き舅さまの口ぐせであった。わしもそれでいく」

「三代の愚直でござりますね」

「いや、四代目もそうだ」

いいながら、統虎ははっとして闇千代の顔をみた。闇千代も無言でみつめかえす。

二人のあいだには、まだ子がなかったのだ。口にこそださぬものの、両人の胸底にはいつもそのことが重い澱のようにわだかまっている。

(まずいことをいってしまった……どんなはげしいことばが、はねかえってくるか)

覚悟して統虎は身がまえたが、意外や闇千代の硬い横顔に、ふっと女らしいやわらかな気色が匂い立った。

寸時のためらいの後、

「今夜、まいられませ」

面を伏せるようにして、闇千代はささやいた。

「うむ」

唐突な闇千代の誘いにとまどい、統虎はおちつきなく視線を宙におよがした。なにやら気分がうきたち、無意識のうちに、

「ひゅっ」

と口笛を吹いていた。

チョッ——

すかさず籠の目白が、喉をあげてこたえた。

## 2

その夜、久しぶりに二人は睦んだ。

「統虎どの……」



めずらしく五体を熱くして闇千代は燃えた。狂おしく唇を統虎の胸におしあて、両腿を統虎の腰にまきつけると、

「ほしい」

声をうわずらせて、うわごとのようにもらしつづけた。

わかい統虎もたぎり立った。

「ほしいか」

「はい」

迷わず統虎は没入した。おもいもよらぬやわらかさで、闇千代は統虎のたぎり立つものをうけ入れ、あふれる熱いものでひたした。

統虎が、はじめて味わう喜悦の交合だった。闇千代もかたちのいい小鼻に汗をにじませ、舌をそよがせて、

「ほしい、もっとっ」

恍惚（こうこつ）のさけびをあげた。

颶風（ぐふう）にもまれる若木の幹のように、二つのからだははげしくゆれ、ぶつかりあい、軋（きし）みをあげた。絶頂で二人は、たがいの名をよびあい、はてた。

一刻の放心の後、統虎が心地よく闇千代の腹上の汗の海に身をゆだねているとき、

「こわれそう」

ようやく喘ぎのおさまった喉をしぼるようにして、闇千代がいった。
「こわれる、と？」
「たくましい攻めでした」
「そうか。わしも、よかった」
統虎はすなおに喜び、闇千代の硬い乳房をあらためて愛撫しながら、唇を吸おうとした。その統虎の唇をするりとかわし、
「今夜こそ、子がさずかったような……」
気がする、と闇千代はいった。
「あるいはな……」
うなずきかけて、統虎はまじまじと闇千代の顔をみつめなおした。
「ほしいというたは、この統虎ではなく子のことであったか」
「いまさら、なにをいうておられます？」
「いや、わしに抱かれたいのではなかったのか、ときいておる」
「どうして、そのようなことをきくのです」
「今夜も、子をつくるためにだけ、わしと寝たのか」
「いやな殿ごですこと」
「このさい、正直にこたえてもらいたい。わしとは義務で寝ておるのか」



「義務とまではもうしませぬ。ただ……」
「ただ、なんというのだ」
「子をもうける営みのほかにも、夫婦は交わらねばならぬものかどうか」
「交わりをするからこそ夫婦であろう」
「こころの交わりだけでは、いけませぬか」
「やはり、そなたは抱かれるのがいやなのだな」
「抱かれる、などと一方的ないいかたはおよしなさい。女からいえば男を抱くのです」
「そなたの気性からいえば、そういうことになろう。それはよい。抱くにせよ、抱かれるにせよ、愛するあいてを喜ばせたいからこそ交わるのではないか。そなたはちがうのか」
「正直いって、いささかわずらわしい……」
——わずらわしい？
統虎は、おもわずのけぞった。
（やはり、はじめから、この統虎をきらっていたのだ）
「あたくしは、やはり女ではないのかもしれぬ」
闇千代は、面を伏せて小声で告げた。
「そんなことがあるものか。わしが好きでないから、わずらわしくおもうのではないか」
「そのようなこと、他の男と寝たことがないのでわかりようがない」

闇千代は、ほんとうのことをいっている。
統虎にも、おぼろげながら、そのことはわかる。わかるが、すっかり気持ちは萎えてしまった。
「そなたがわずらわしいなら、やめにしよう」
「もう、交わらないというのですか」
「さよう。これで最後にしよう」
「それでは、四代目ができませぬ」
「愛のない交わりをして、むりに跡継ぎをつくってもしかたがない」
「他の女の腹で、つくろうというのですね」
「いまは、そこまでかんがえていない。わしはあすにも死ぬる身だ」
「あたくしは道雪の娘です。戸次家の血をのこさねばなりませぬ」
「戸次家の血をのこすためだけなら、他の男とでも子はなせる」
「よくも、そのような。亡き父に誓って、そのようないいぐさはゆるしませぬ」
「ゆるすもゆるさぬもない。舅どのは、そなたが気に入らねば離別してもかまわぬ、ともうされた」
「あの父が……」
「そうだ。そもそも舅どのが高橋家の嫡男たるわしを、むりやり立花家に迎えられたのは、祖父吉弘鑑理（あきただ）の血を戸次家の血にうけつぎたかったから、ときいておる」
「それは……」
「きいておらぬのか」
「きいておらずとも、わかるような気はします」
「わかれば、それでよい」
「闇のわがままは自分にもわからぬ女の生理のせい、としてゆるしてくれませぬか」
「たしかに女の生理はむずかしい」
「では、離別しないと」
「約束はできぬ。そなたに女の生理があるように、わしにも男の生理というものがある。これは、頭やこころではどうしようもないことだ」
「悲しいことですこと」
「そう、悲しいことだ」
いいながら、統虎はおもわず、いとおしげに闇千代の肩を抱いた。闇千代もつよい力で統虎の胸に顔をうずめた。
「われら武家の世界は、男と女の気持ちに、ゆっくりとかかわるいとまがない。家族だけでなく、主家からあずかった幾千の部下のいのちを守る義務があるからだ」
「闇にもわかります」

「いまももうすこし、そなたと話していたいが、これより評定して岩屋の城への助勢をおくりださねばならない」

「いかれませ」

起きあがって閨千代は告げた。

すでに夜は白み、戸外で目白が啼きかわしている。

## 3

天正十四年（一五八六）七月七日は七夕である。

この日、前月より筑後高良山に布陣している島津忠長を主将とする島津の陣営にうごきがあった。

まず伊集院忠棟が秋月種実の兵を先導に、二万にちかい兵をひきいて筑後川をわたった。そのまま肥前の筑紫広門の領内に攻めこむと、朝日山、春日山、日当山など筑紫方の支城をつぎつぎに攻略し、翌日には広門の本城勝尾城にせまって城下の村々に放火した。

勝尾城に籠もる筑紫の兵はわずか一千にすぎない。それでも、本城の前面の鷹取城を守る広門の弟晴門は、手勢三百ばかりをひきいて果敢に城外に討ってでた。晴門は弱冠十八歳ながら、日ごろ兄の優柔不断ぶりを、ひそかに恥じている。で、



「筑紫武者の根性のみせどころぞ」

まっさきかけて敵中に駆け入り、たちまち手槍のさきに数人の薩摩兵を血祭りにあげた。

それをみて、

「よか大将どんよな」

川上左京亮忠堅が馬をよせ、得意の槍をしごいて一騎打ちを挑んだ。

左京亮は二年まえ、島原で龍造寺隆信の首級をあげた名うての猛将である。

両者、はげしく馬上でわたりあううち、やがて膂力に勝る左京亮が鞍上から晴門をからめおとし、どうとばかりにのしかかって首をかこうとしたが、兜の内の晴門の紅顔をみて一瞬、憐憫の情をもよおした。その一瞬の隙をついて、晴門は左京亮の鎧の錣のすきまに小刀をつらぬきとおした。

苦痛に顔をしかめながら、左京亮は晴門の首をかき切ったが、

「不覚をとりもうした」

もはや立ちあがる力はない。相討ちとなって、その場で絶命した。

晴門の討ち死にで、ほどなく鷹取城はおちた。

勝尾城からの急報はすぐにも岩屋城にとどいた。

が、紹運に応援の兵をだすだけの余裕はない。

「いずれ関白どのの軍勢が着到いたそう。それまで、せっかく防戦につとめられよ」
型どおりに激励するしかなかった。
じつのところ、秀吉の援軍はとてもまにあいそうにない。
秀吉の御家人にとりたてられた紹運と統虎は、一月ほどまえ村山志摩守と薦野三河守をそれぞれの名代として上坂させ、秀吉に御礼を言上させた。そのおり、
「一日もはやいご西下を……」
両名から懇願された秀吉は、
「明春には下向する」
と確約した。
しかし、九州の戦雲は急を告げている。島津が大攻勢に転じたのだ。
島津家の総帥義久としては、秀吉の大軍が九州に入るまえに大友勢を制圧し、早鞆の瀬戸（関門海峡）まで進出して水ぎわで関白の軍勢をたたきたい。そこで、まず肥前と筑前に残存する大友勢の掃討にかかったのだ。
紹運と統虎は、九日、島津軍の来攻を報じる急使を秀吉の軍奉行として豊前まで下向している黒田孝高（如水）のもとにさし立て、すみやかな援軍の派遣を要請したが、あてにはしていない。むろん、本国からの後詰も期待できない。豊後の国境には別手の島津家久の軍勢が、ひしひしと詰めかけているのだ。



けっく、紹運らはわずかな手勢をもって独力で戦うしかなかった。
連日、島津の波状攻撃にさらされた筑紫広門は、かつての盟友秋月種実に泣きつき、はやくも十日には、みずから城門をひらいて降伏した。これでまず、大友勢の守りの一角がくずれた。
これより二日まえの八日、立花城主の統虎は十時摂津守を急ぎ紹運のもとにおくり、
「岩屋城は要害とはもうせませぬ。せめて宝満城に籠もられるか、いっそ、わが立花城におうつりいただいてはいかがか」
とつたえさせた。
「左近将監（統虎）はじめ、重臣方のご配慮には重々感謝もうしあげる」
紹運は使いの摂津守に丁重に礼をかえした後、
「されど……」
眉をあげて弁じた。
「島津の大軍をまえに、居城をすてて逃げるのは武士の本意にもとる。たしかに岩屋城は堅固さにおいて宝満城におとるが、戦は運である。天運と人の和があれば、当城にてもそこそこの戦はできもうそう」
「ではござりましょうが、なにしろ敵は幾万の大軍、ここはぜひにも天嶮の立花城にお越しいただき、ご父子あいたずさえて防戦につとめられるのが良策と存じまするが……」

摂津守は身をのりだして説得しようとした。

「それも一策ではあるが、いかに大敵あいてとはいえ、一所に二人の大将、それも父子の大将が、いたずらに身をよせおうたのでは天下のわらいものになろう。なに、小勢なりとも一丸となって戦えば、この小城でも半月はもちこたえ、敵勢三千ばかりは討ちとることができよう。さすれば、島津勢もすぐには立花城に馳せむかえまい。まんいち攻めかかっても立花勢一手で、さらに半月はささえることができるだろう。両城で一月余の時を稼げば、かならずや関白どのの軍勢が着到する」

紹運は自説をまげず、

「このうえは、すみやかに立ちもどり、紹運が決意のほどを左近将監に告げられよ」

なおも、いいつのろうとする摂津守に、

「さらば、でござる」

紹運はすべてを断ち切るように告げた。

もはやふたたび生きてあいまみえる日はないであろう。「さらば」は摂津守に託して統虎へあてた、父親としての万感こもるわかれのことばでもあった。

紹運の真意は、みずからはほろびても秀吉の援軍が到着するまで、なんとか時を稼いで、息子の統虎だけは生きのこらせたい、というところにある。

自分が岩屋城をすてて要害の宝満城に立て籠もれば、島津軍は容易にぬきがたしとみて、部隊の半分をさき、立花城攻略にむかわせるおそれがある。それを阻止するには、自分があくまで岩屋城にいすわって島津の全軍をひきつけ、最後の一兵になるまで抵抗するしかなかった。

抵抗が一日でものび、敵兵を一人でも多くたおせば、その分、統虎は有利になるのだ。

## 4

十時摂津守を帰した翌日、紹運は本丸に七百余の全将士を召集して告げた。紹運は黒の道服の上に鎧を着している。

「二、三日のうちにも島津勢が攻撃をかけてこよう。当城をすて宝満城に籠もって防戦すべきとの意見もある。が、わしはあえて当城にて決戦する所存だ。宝満城は要害ではあるが、筑紫勢も籠もっておることではあるし、はたして連携して、よき戦ができるかどうか不明である。わしは、地の利は人の和に如かず、との古人のことばにしたがい、ここはここころを一つにして当城で最後の一戦をこころみたい」

入道頭をゆらして、紹運は部下の顔をみまわした。その眼ざしはあくまで優しい。

「おぬしらとは縁あって、ここまで生死をともにしてきた。が、それぞれに家族もあること、この入道にむりにしたがうことはない。たとい善戦しても、われらが生きのびる術は

万に一つもない。たがいに、いちどかぎりのいのちだ。必死の戦を避けたい者は遠慮なく退城するがよい。この紹運、けっして恨みにはおもわぬ」

将士の間に歔欷の声が、さざ波のようにひろがった。

「われら、どこまでも殿のお供つかまつります」

「おぬしらの真心は充分にうけた。入道、最後の礼をいう。このうえは、それぞれの持ち場にもどり、あらためてとくと思案するがよい。生きたき者は生きるがよいのだ。一時の情にながされて、おのれの人生をみうしなうなよ」

紹運の真実の吐露だった。

愚直に主家に殉じるのは、自分一人でよいのだ。部下を強いて道連れにするつもりは微塵もなかった。が、長年にわたり紹運につきしたがってきた家臣のうち、一人として城をでようとする者はなかった。岩屋城の人の和は鉄壁だった。

紹運は屋山三介以下の重臣たちをかえりみていった。

「主家が盛んなときに役立つ武者はいくらでもいる。が、主家がほろびるおり、いのちをなげだす者こそ、まことの武士ではないか」

みずから信じる愚直の精神の神髄をのべているのだ。

「おことば、身にしみまする」

三介がふかぶかとうなずいた。



屋山中務少輔三介は高橋家の宿老である。

主の高橋鑑種が大友家に背いたとき、ともに最後まで戦い、降伏後も鑑種につきしたがって豊前小倉の蟄居さきまでおもむいた。あくまで主人に殉じるつもりだった。ところが、不如意の日々、鑑種のこころはすさみ、所業はあれ、三介らの旧臣にあたりちらした。

鑑種は、嗣子の絶えた高橋家に一万田家から入った養子である。武家の世界は人よりも家だ。自暴自棄におちいった鑑種では、もはや高橋家の再興はなりがたいとみて、三介は同輩の福田民部少輔らとはかって宗麟に新たな養子をねがいでた。けっか吉弘弥七郎、すなわち現在の紹運が高橋家を継ぐことになったのだ。

以後、岩屋城の城代として三介は紹運に誠心誠意仕えてきた。むろん、こたびの戦では、主のためにまっさきに死ぬ覚悟である。

「それでは、各人の持ち場をもうしつたえる」

三介は背筋をのばすと、紹運の裁可をえた籠城戦の配置を読みあげた。

「本丸虚空蔵台の大手は福田民部どのが五十余名をもってかためる。南大手門は伊藤総右衛門どの以下七十余名、百貫島砦は三原紹心どのほか百余名、二条の砦は萩尾麟可、大学父子におねがいする。守兵は五十余名。西北面の山城戸は弓削了意どの以下七十余名……」

順次読みあげ最後に、自分は南西の城戸を百余名でうけもつと告げた。

いずれにしても島津の大軍を迎え討つには寥々たる兵数である。はたして、この備えで紹運がいうとおり十数日をもちこたえることができるのであろうか。

夕刻になって、ぱらぱらと雨がきた。その雨をついて吉田右京亮兼正にひきいられた立花城からの二十数名の加勢が到着した。食糧、弾薬を満載した数頭の荷馬をしたがえている。統虎からのこころづくしである。

紹運はみずから本丸の広間まででて、ていねいに招じ入れた。

「百名を越える兵が志願いたしましたが、統虎さまのご意向により当城にゆかりのある、われら二十余名のみゆるされて、ご加勢にまかりこしまいた」

右京亮は平伏した。

「よう、まいられた」

紹運は、ふかぶかとした眼ざしを右京亮の肩口にそそいで、いくどもうなずいた。

崖下の櫟林で蜩が鳴いている。

「われらがいのち、ただいまより紹運さまにおあずけいたします。すぐにもお役目もうしつけくださりますよう」

右京亮は平伏したままつづけた。

「まずは面をあげられよ」



紹運は優しい声音でよびかけ、

「お志はありがたく頂戴する。しかし、そこもとらはいずれも立花家のたいせつな勇者、あたら当地で死なせるわけにはまいらぬ。今宵はゆっくり疲れをいやし、明朝にも主家におもどりあるよう」

諭すように告げた。

「これは、慮外のおことばをききもうす」

右京亮は、きっと面をあげてさけんだ。

「われらは、死ぬるためにまいりました。おきき入れくださらねば、一同この場で腹を切るまででござる」

「みごとな覚悟のほどをきき、ますます死なせとうなくなった」

「武士の情け、なにとぞわれらによき死に場所をおあたえくだされ」

「強情者だの」

ことばはきついが、紹運の双眸はあたたかい。

「強情は地でござる」

右京亮は、利かぬ気をみせていいはった。

「負けたわ」

紹運は、腹の底からわらいをほとばしらせた。愉快なのだ。道服が大きくゆれている。

「いや、わしの心得ちがいであった。千余の兵にもまさる尊いお味方、そこもとらのおいのち、ありがたくあずからせていただく」

紹運はうなずいた。

「おおき入れ、いただけましたか」

右京亮は、はじめて莞爾とし、晴々とした瞳をあげた。

右京亮らは本丸に詰め、百五十名の旗本とともに紹運のかたわらをかためることにきまった。

「あたくしめも、お供させてくださいまし」

もう一人、紹運を手こずらせた者がいる。

ちよ、である。

すでにかいがいしく女鎧を身につけ、薙刀をかいこんでいる。

「あたくしも斎藤鎮実の妹、敵の五人や十人は……」

討ちとってごらんに入れます、といいはった。

ちよは、統増につきそって宝満城に入るよう紹運からいいわたされたが、それが不満なのだ。

「ちよは、あなたさまのおそばで死にとうございます」

「ききわけのない」



紹運はにがりきった。

「あたくしも、根は強情女です」

めずらしく、ちよは容易にひきさがろうとしなかった。

「よいか。宝満城に詰めておる筑紫家の者らを安堵させるために統増とかねをよこすのだ。しかし、統増夫妻は若年者……」

「統増も、はや十五歳。あたくしなど、かえって足手まといでありましょう」

「統増が短慮にも死に急ぐようなことがあってはならぬ。そなたにぜひとも後見してもらいたいのだ。たのむ」

紹運は、ちよのまえに両手をつき入道頭をさげた。

「ずるうございます」

ちよは、うらめしげにいったが、夫にここまでされては、否やはいえない。おもわず紹運の手にみずからの手を重ね、

「いのちあるかぎり、あなたさまのご恩はわすれませぬ」

日ごろのおもいを一言にこめて、ぬれた瞳で夫の顔をみつめた。

「そなたには苦労ばかりかけた」

紹運も、ひしとちよの手をにぎりかえした。

「ちよは日本一の幸せ者でございました」

このことばにうそはない。

一時は、おのれのあばた顔を恥じ、独り不嫁後家をとおす覚悟をきめたちよである。それが、おもいもかけず紹運の優しいこころにひろわれ、日々睦みあい二人の息子までなした。

ちよにとって、これ以上の幸せはなかった。

だからこそ、この天晴れな殿ごとともに死にたかった。しかし、このうえの未練は、いたずらに夫をこまらせるだけだ。賢いちよには、それがわかる。

で、最後は、

「ご武運を……」

とだけ告げた。

この夜、ちよは北原進士兵衛らにつきそわれ、統増夫妻とともに闇にまぎれて宝満城にうつった。

## 5

同月十二日、島津忠長は全軍をひきいて高良山をでると、太宰府、観世音寺、崇福寺など岩屋城のある四王寺山の南麓一帯に布陣した。薩摩の兵のほか、肥前、肥後、筑前、筑後、それに豊前の兵をも加えた数万になんなんとする大軍である。晩夏の日ざしのもとに、いろとりどりの旌旗がはためいている。

本丸の高櫓からみおろして、

「この小城一つに、よくもまあ……」

紹運は苦笑をもらした。

眼下に蝟集した軍勢が、紹運には一群の油虫（ゴキブリ）にみえる。確たる志をもたぬ名ばかりの武士たちが、恥じらいもなく餌のあるほうにぞろぞろと這いあつまる。

（しかし、これが人間世界というものだ）

紹運は厳然たる人の世の現実を認めざるをえない。

およそ、人間の九割が油虫なのだ。しかも、かれらはみずからを油虫とは気づいていない。ただ、いたずらに飯を食らい大糞をひり、日々の快楽に酔い、より多い欲得に身を投じ、かたちだけの栄誉をもとめて右往左往する。そのうえ、紹運のような生き方を、時勢のみえぬ片意地張りの愚か者と断じてさえいる。

（しょせん、救いがたし）

紹運は、いまは鬼籍の人となった道雪との、かつての語らいをおもいだす。

「じつはな、わしは出家遁世をおもい立ったことがある」

道雪が、ふっといいだしたことがあった。

「ほう、おやじどのが……」
「ひょんなことから、弘法大師の説法書を読んだことがあるのだ」
「おやじどのは、兵書だけでなく仏書までお読みでありましたか」
「なに、ほんののぞき見だが、この書がなかなかおもしろい。芝居仕立てでな、まず某なる人物がでてきて、しきりに忠君、仁義、礼信を説く。この道にはげめば、自然と栄達すると。ところが、そこにもう一人の男があらわれて、某の言説を切ってすてた」
「どのように？」
「忠義といい、忠義をはげんだすえの栄達といい、それは世俗のくだらぬ価値にすぎぬと。たとい栄達して美食し、酒を食らい、美女を抱いても、しょせんは泡のごとく虚しいもの。それよりも道心を堅固にし、仙人になり不老不死のやすらぎの境地をえてこそ、まことの人生というものではないか、とな」
「仙人になれと？」
「さよう。儒家の教えを道学で否定したのだ。しかし、話はまだおわらぬ。さらにもう一人の男があらわれて、両者の説をやっつけたのだ。ともに俗世の利欲からはなれていないと。われらは無常の世に生きている。美しい美女も死ねば白骨となって墓におさめられ、天子、大臣といえども野辺の煙とともに空にきえてしまう。つまり、われらは絶えることなく生まれかわり死にかわって、さだめなく輪廻転生する幻の存在にすぎぬ。だから、



現世へのいっさいのこだわりをすて、一筋に仏の道をもとめて身を修せねばならぬ、と」
「仏法はむずかしゅうございますな」
「要は、忠義も、出世も、長生きも、われらがこの世で必死にもとめているものは、広大無辺の仏陀の世界のまえでは、すべて虚妄だというのだよ」
「そうなると、われらこぞって出家せねばなりませぬな」
「ところが、現実の坊主どもはどうだ。仏の道を説く身が、みずから現世利益を追いもとめてばかりいる」
「しょせん人間は、目さきの欲望から逃れられぬのですね」
「口はばったいが、わしは名利には目もくれず、お屋形一筋に生きてきたつもりだ。で、人はわしを忠義者とよんでくれた。しかしのう、長く生きておると、その武士の忠義だの節義などというものも、詮ないこだわりにおもえてきた」
「で、出家を？」
「ああ、この世の主人にではなく、仏におもいきり忠義をつくしてみたいと。しかし、やはりふみきれなんだ。よくよくおのれを追いつめてみると、この道雪も欲やこだわりのかたまりよ。よしや主や家をすててみても、とても身内に巣くう煩悩からは逃げられぬ、とわかった」
「それがしなど、そこまでふかくかんがえたこともありませぬ」

「なに、かんがえてみてもおなじこと。人間、おかれた境遇からの転身はむずかしい。それより、人殺し稼業の武士は武士なりに、性根をすえて、まっすぐに生きていくよりほかはない」

「雪のように潔白な道を、ひたすらまっすぐに……おやじどのの入道名そのままでありますな」

「そうきれいごとにはいかぬが、かんがえればかんがえるほど、この世は矛盾だらけだ。理屈を立てると身うごきがとれぬ。けっくは愚直をつらぬくしかない」

結論めかしていいながら、道雪はふかくため息をもらしたものだ。

(いま、自分もまた、その愚直な生き方のはてに三十九歳の生をおわらんとしている)

紹運は、ふうっと、ふかい息をはいた。

眼下の諸陣のあいだを、いそがしく伝騎が馳せちがっている。いよいよ攻撃のときはちかい。

この夜おそくなって黒田官兵衛からの使者がきた。島津軍の包囲網の手薄な四王寺山の北の尾根をぬけてきたのだ。

「すみやかに立花城におうつりありたい」

使いの小林新兵衛は、主人官兵衛からの口上をのべつつ口ごもった。

もはや、そのときでないことは新兵衛にもわかる。



「せっかくのご指令なれど……」

紹運も多くはいわない。

あかあかと焚かれる篝火にうきあがった紹運の顔には、おだやかな微笑があった。

「ご諚にしたがい、夜闇にまぎれて間道をぬければ、あるいは脱出できるやもしれませぬ。が、おそらく虎の子の将兵の半数を失いましょう。すでに、われらは当城にて討ち死にを覚悟しております。このうえは、一日もはやく後詰くださるよう、貴殿より官兵衛どのにおつたえねがいたい」

「しかと、うけたまわりました」

うなずきながら、新兵衛は城下に視線をはしらせた。

まるで岩屋城を一個の風呂にみたて、四方から薪を焚き立てているような盛んな篝の火勢である。

にもかかわらず、城内は水をうったように静謐をたもち、紹運以下、城兵にはいささかの動揺もみられない。

(うわさにたがわぬ、みごとな軍団……)

新兵衛は舌をまき、あらためて紹運の顔を仰ぎみた。

(このまま死なせるのは惜しい)

せつないおもいがこみあげ、新兵衛はおもわず、

「ちかぢか毛利、長宗我部勢が渡海いたします。こころづようおぼしめし、せっかく防戦につとめられますよう」

予定にない口上を口にした。

「かたじけのう存ずる。新兵衛どのとは酒などゆるりと酌みかわし歓談したいところだが、ごらんのとおりの実情、夜が明けぬうちに城をでられよ」

紹運は新兵衛にあわただしく湯漬けを供し、城兵を案内につけておくりだした。

「紹運どの」

わかれにさいして、新兵衛はあらためてよびかけた。

「片時なれど、紹運どのにおめもじできたこと、新兵衛一生の誉れに存じます」

「この世は一炊の夢でござる。いずれゆるりと……」

紹運は笑みをかえした。

手首にかけた数珠が、涼やかな珠の音を立てた。

## 6

「いく日でおとせるか」

岩屋城をまぢかに望む般若寺跡の小丘まで本陣をすすめた島津忠長は、副将の伊集院忠棟、新納忠元の両名に質した。

「はて……」

二人は顔をみあわせた。

「さしたる要害とはおもえませぬが」

「なにしろ立花道雪とならんで戦上手の主膳兵衛尉（紹運）があいてゆえ……」

両名のいらえは、はっきりしない。

「いかに戦上手とはいえ、われら薩摩の兵は天下一だ」

忠長は、つんと鼻を立てていった。

図書頭忠長は義久の従兄弟で、島津本家の老中をつとめている。合戦の場数もふんでおり、戦には一家言をもっていた。

たしかに、忠長のいうとおり、薩摩兵の精強ぶりは日本一といってよいかもしれない。薩摩隼人は退くことを恥とする。これまでも不利な戦いを、その隼人魂でいくどもしのいできた。

龍造寺隆信を討ちとった島原沖田畷の合戦などもそうだ。島原までのってきた船をことごとく海上に解きはなち、背水の陣をもって十倍の敵を屠りさった。このときも、忠長は従兄の家久を補佐して戦っている。

いまは立場がかわり、九州随一の大勢力にのしあがり、敵に十倍する大軍をひきいて大

友方の斜陽の小城を攻めるのである。

ただし、忠長は油断はしていない。大軍とはいえ、しぶしぶ参陣している他国の兵はあてにならない。かれらは弾よけにつかうしかない。あくまで戦の勘どころは信頼できる薩摩の兵をもってする。紹運の兵がどれだけしぶとく抵抗したとしても、三日とはかかるまい、と確信している。

それでも、二人の歴戦の将の顔を立てて、意見を徴しているのだ。で、

「三日か」

ときいた。

「はて」

両名はこたえない。

「五日か」

「日数はともあれ、問題はどれだけ死傷者がでるかでしょう」

忠棟がおもむろにこたえた。

伊集院右衛門大夫忠棟は、島津本家の家老をつとめる百戦万馬の将である。どうじに、歌を細川幽斎に、茶道を千利休に学ぶ風雅の士でもある。

「百か」

忠長はさらに質した。



「なかなか」

「千というか」

「かずはわかりませぬが、かなりの死傷者を覚悟せずばなりますまい」

「ここはまず、使者をおくって開城をうながすのが良策ではありますまいか」

忠元が慎重に進言した。

新納武蔵守忠元も大口に城をもつ島津氏の一族で、かずかずの外征に陣頭指揮をしてきた歴戦の古強者である。

忠長は、

（調略は敵に一塩つけてからでもよいのではないか）

とおもったが、古参の軍監の顔を立てた。

「そうしよう」

十三日、降るような蟬の声を背に、一人の黒衣の僧が岩屋城の大手口にすがたをあらわした。

「愚僧は二日市の荘厳寺住職、快心ともうす者にござる」

その僧は高らかに名乗って、紹運への案内を請うた。

「ほう、ご坊も俗世の戦に狩りだされましたか」

対座するや、紹運はくだけた口調で笑みかけた。

「乱世でござる。仏も兵火にはかないもうさぬ」
快心もさる者、臆することなくかるくうけながすと、
「さて、島津忠長公よりの口上をおつたえもうしあげる。当岩屋城を攻むるは、われらの本意にあらず、と」
「ならば、なぜかくも仰々しくおしよせてまいられたか」
「そもそも、こたびの遠征は大友方に寝返った筑紫勢を討つためでござった。過日、その筑紫勢は降伏いたした。で、宝満城のことでござる。かの城は筑紫の手におちた城、筑紫勢が降ったいまは島津の城。すみやかにおわたしあれば、公はおだやかに兵を退くよしにござる」
「たしかに、宝満城は一時筑紫方に略取されましたが、いまは筑紫と高橋両家は和睦し、ともに守備することとなった。それに、ご坊もご存じであろうが、さきごろより当家は関白秀吉どのの直臣に加えられ、宝満城は関白どのからのあずかりものとなりもうした」
「あてにもならぬ関白どののために、勝ち目のない戦をされるおつもりか」
「戦は時の運でござるよ」
「意地を張るのはおよしなされ。みられよ。島津は九州八カ国の軍勢をもよおした大軍でござる」
「先刻、承知です」



「意地をすてて和睦なされ。生きてあればこそのいのちでありますよ」
「仏に仕えるご住持ともおもえぬおことばでありますな。それがしは、あずかりものをたいせつに守りとおそうとするだけのこと。どうしても引きわたせともうされるなら、関白どのの下知をうけてまいられよ」
紹運はゆずらず、和談はものわかれとなった。

## 7

十四日早暁、城下の民家に火の手があがり、やがて、どどっ、山麓から一斉射撃が起こった。いよいよ、島津勢が攻撃にでてきたのだ。
「いよいよ、きたかっ」
城兵に緊張がはしった。
「まだまだっ」
本丸東南面に位置する百貫島砦では三原紹心が、竹鞭をふるってはやり立つ銃兵をおさえた。火縄のきな臭いにおいだけが朝靄の底に低くただよった。
島津の本陣に陣鼓、攻め鉦がうち鳴らされ、旗指し物が絵模様のようにゆれうごいた。
「わあっ」

数万の大軍のあげる鯨波が地鳴りのようにわきおこった。

虚空蔵台の守将は福田民部である。本丸から二の丸にかけて東西に長い防砦が築かれている。その石塁の一角に仁王立ちになると、民部は、

「負けずに鯨波をつくれっ」

鬢の白髪をゆらして、みずから咆えた。

「うおっ」

虚空蔵台を皮切りに、二条、百貫島、南西城戸、東松本、風呂屋谷と、岩屋城の各砦から潮のように鯨波がひろがった。

どどどっ。

筒さきをそろえて、またも敵陣から一斉射撃が起こった。

「撃てえっ」

紹心の竹鞭が空にうなる。

ぱちぱちっ。

味方の火縄銃が火を噴き、朝の冷気を引き裂いて樹間に弓弦が鳴った。

攻め手は前面に弾よけの簾状の竹束をおし立て、怒濤のごとく山ぎわにおしよせた。

大手口は急坂である。

「どけ、どけっ」



攻め足の鈍った肥前や筑後の兵をおしのけるようにして、慓悍な薩摩兵が先頭に立ち、しゃにむにおしのぼろうとした。

「いまだっ」

小城ながら、岩屋城は随所に防御の工夫がこらしてある。斜面には縦横にふかい空堀をうがち、みっしりと逆茂木を埋め、土塁のきわには落とし穴、跳ね罠が仕かけてあった。

城方は敵勢のうごきが鈍るとみるや、矢弾とともに大石を降らし、樹間につるした大木を切っておとし、おしのぼる敵勢を薙ぎたおした。

やがて、あちこちの谷筋で壮烈な長槍のたたきあい、太刀打ちが展開された。

この日、紹運は入道頭に道雪遺愛の兜をかぶっている。剛将道雪にふさわしく、あらあらとした黒い鉄肌に橘花を肉おきした二の谷兜である。衣の上に着した鎧は赤絲縅だが、長年の戦ばたらきにいろ褪せ、胸板の龍紋は剝げおちていた。

本丸の高櫓に床几をすえ、しずかに眼下の戦いを観望しながら、紹運はときおり采配をふって伝令を各砦にはしらせた。その手首には数珠が巻かれている。

（まずは、おもいどおりの善戦だ）

紹運の面上には笑みがある。

ただし、いかに地の利をえた籠城戦とはいえ、かずからいえば一人で百人ちかい敵をあいてにしなくてはならない。たおしてもたおしても、敵勢は入れかわり立ちかわり攻めの

ぼってくる。これからは疲労との戦いでもある。
すでに焼けつく日輪は頭上にある。しかし、だれにも空を仰ぎみる余裕はなかった。
「しっかり腹ごしらえするように」
紹運は各持ち場に指令を発したが、むろん、ゆっくりと食事をとるひまなどない。だれもが、立ったまま手づかみで口のなかににぎり飯をおしこんだ。その手は血と汗にまみれている。
手負いの者が二の丸、本丸にはこばれてくる。午後になると、しだいにそのかずはましていった。
紹運は櫓を降り、手ずから傷兵の顔の血をぬぐい、水をふくませてやった。
この日の攻防は亥の刻（午後十時ころ）までつづいた。幸いに、いずれの砦も突破されることなく守りきった。
紹運は城内にあかあかと大篝火を焚かせた。むろん、城下の寄せ手も各陣所に大小の松明を焚き立て、まるで真昼のような明るさだった。
「よう戦った」
紹運は吉野左京介らの近臣をつれて各砦をまわり、用意の濁り酒をふるまった。
「戦は長びくぞ。飲んで眠ってあすにそなえよ」



## 8

小鳥のさえずりで目がさめた。
この日も快晴である。あわただしく粥を喉にながしこんで、紹運は高櫓にのぼった。
敵陣にも盛んに炊煙が立ちのぼっている。腹ごしらえがすめば、また合戦だ。
主戦場となった南面の諸砦のまわりには、前日の戦でたおれた、ものいわぬ屍が累々とよこたわっている。
——敵の死傷者は、まずは十倍。
と、紹運はみている。予定どおりの展開だった。
紹運は、おのれの采配にいささかの迷いもない。それでいて、胸底を木枯らしのように吹きすぎる虚しいおもいに、ともすれば沈みがちだった。
（武士の宿命とはいえ、わしがしてきたことは最後まで、このような殺戮にすぎなかった）
主家のため、家族のため、そして領民を守るためと、そのつど名目をとなえて、あらあらと血をながしてきた。ひたすら目前の敵を討ちはらうことで、いずれ戦のないおだやかな日を招来できるとねがいながら。

しかし、そのねがいの一端もはたすことなく、あいもかわらぬ彼我の首勘定をしながら、ついに最後のときを迎えようとしている。

（わしの一生とは、いったいなんであったのか）

息子の統虎や統増が、この戦をのりきりえたとしても、またおなじ人生をくりかえすだけのことなのか。

「迷うな、迷うたら負けだ」

亡き道雪は、わかい紹運にしばしばいいきかせたものだ。

（あれは、ご自身にいいきかせることばでもあったのだな）

いまにして、紹運には道雪のこころがわかるような気がした。

人に倍して感情がゆたかで、戦場を吹きわたる風の音にも、ひそかにこころうごかされる詩心をもった大将だった。それでいて、外には内心の感傷や詠嘆を微塵もあらわさなかった。

「武士の感傷は身をほろぼす」

いいながら、ひそかに仏書をひもとかずにはおれなかった道雪だった。

（おやじどのも、死ぬるおりにはおなじようなおもいをなされたのであろうか）

「殿っ」

櫓の下から左京介の声がした。



「村の者らが、戦の手つだいをしたいともうしでておりますが……」

この十日ほど、城下の領民や城兵の家族が山内に入り、防塁づくりや矢竹けずりの作業に従事していたが、その一部の者は戦がはじまっても城にのこり、炊きだしや武器弾薬の運搬を手つだっていた。

その者たちが、自分たちも武器をとって戦いたいともうしでてきたらしい。

紹運は櫓を降りた。

上がり口のちかくに、代表の年寄り数人が土下座していた。

「なにとぞ、わしらにも……」

かれらは泥にまみれた顔をあげて、口々にうったえた。

「志はありがたい。しかし、この戦は死戦だ」

「殿さまには、長年にわたってよくしていただきました。わしら、ご恩返しがしたいのです」

「死にぎわに、うれしいことをきかせてもらった。うれしいが、そなたらを死なせるわけにはまいらぬ。これからも生きつづけて、家族を養うてもらわねばならんのだ。人殺しは、そなたらに似あわぬ」

「わしらでも、敵の一人や二人……」

「わかった。きょうも激戦になろう。そなたらは水場から水を汲みあげ、はこばれてくる

手負いの者の傷口を洗うてやってくれ。それもりっぱな戦だ。それから夜になって戦がおさまったら、みんなして北口の間道から逃れるのだ。よいな」

麓で陣貝が吹きならされ、わっと鯨波があがった。年寄りたちはおもわず中腰になった。その顔からいちように血の気が失せている。

「そら、はじまったぞ。切りあいはわれらにまかせておけ。まちごうてもながれ弾にあたったりするなよ」

優しく笑みかけて、紹運はゆったりと櫓にのぼっていった。

この日も子の刻（午後十二時ごろ）まで、はげしい戦闘が展開されたが、城方は必死に防ぎきった。翌日もその翌日も早朝から深夜まで、あくなき攻防がくりかえされた。

彼我ともに戦死者のかずは、ますますふえていく。夏である。はやくも腐乱がはじまり、岩屋の山内には死臭がただよった。

七日たった。慓悍な薩摩兵の猛攻をもってしても、いまだに城の一角もくずしていない。

「さすがに堅固でござるな」

伊集院忠棟は舌を巻いている。

「このままの力攻めでは、味方が損傷するばかりだ。よい策はないのか」

忠長はあせった。



「ござります」

忠棟はうなずいた。

「先日来、城下の百姓どもを捕らえて間道、水の手のありかを問いただしておりますが、十人二十人と尋問しても、一人も口をわりませぬ」

「手ぬるいのではないか」

「紹運の日ごろの善政のあらわれでありましょう。それに、いずれ関白の軍勢がわれらを追い散らすものと信じておるようす」

「けしからぬ……」

「だが、ご安心めされよ。一人だけ脈のある者をおさえました。きょうにも明かしましょう」

「われらに好意をもっておるのか」

「なんの、金のめくらましでありますよ」

忠棟は口をあけ、声立ててわらった。

水場は本丸の背後にある。大手口から攻める島津軍には死角になっていた。

百姓の一人に金をつかませて、そのありかをききだした忠棟は、ただちに兵をさいて四王寺山の北面に迂回させ、これを襲わせた。

水の手上の砦には村上刑部が二十名余の兵と守備していたが、猛攻をうけてついに破

られた。

この日にそなえて、紹運はできるだけ多くの水を城内に汲みあげさせ備蓄していた。しかし、水の手を切られては、

（まずは数日しかもつまい）

紹運は覚悟をきめた。

（それまでに、いかによく防ぎ、いかに多くの敵勢をたおすかだ）

「敵は干乾しになったぞ」

寄せ手は勢いづいて、さらに強襲した。あまつさえ二十二日には、上井覚兼ひきいる新手の日向勢が寄せ手に加わった。

「明日は、わしがじきじきに指揮をとる」

総大将の忠長は秋月ほか肥後の宇土、赤星らの諸勢に動員をかけた。が、この日は朝から篠つく大雨となり、雨水は山肌を滝となってながれくだった。城攻めは沙汰止みとなった。

「憎い雨だ」

忠長はくやしがったが、城兵にとってはまさに恵みの雨であった。

おおわらわになって城内のあらゆる桶や壺に旱天の慈雨をうけ、諸肌脱ぎになって血と汗を洗いながした。不眠不休の戦に、いずれの兵のからだも、げっそりと肉がおちている。



「この大雨だ。攻め口はこれよ」

紹運は入道頭をなでてみせた。

足もとがつるつるすべって戦になるまい、との軽口である。

紹運の周囲に、久しぶりにどっと明るい笑声がはじけた。

「この機に、ゆっくり骨休めするがよい」

紹運は諸砦の将兵にいいおくった。

それぞれの持ち場にわかれていても、紹運と城兵のこころは一つだった。

## 9

二十五日の夜、ひそかに各砦の下手にとりついた寄せ手は、翌二十六日昧爽、いちどきにどっと起って防塁にとりついた。

この日は快晴、やがて晩夏のつよい日ざしが頭上からじりじりと照りつけた。薩摩の兵は甲冑をぬぎすて、ほとんど半裸だ。

「チェストッ」

奇声をあげながら、その裸の腕に刀槍をふりかざして野猿のごとくおどりこんでくる。

すさまじい白兵戦となった。城方は、うちたおされてもなお敵にむしゃぶりつき、はげしい戦意をみせて防戦したが、接近戦となれば、かずが勝ちを制する。しだいに圧迫されて前線から後退した。

「逃げたぞっ」

寄せ手は勢いづき、嵩にかかって攻めのぼる。

「ござんなれっ」

南西城戸で機をはかっていた屋山三介は、部下を指揮して足下にせまる島津勢に、石礫を投げ、巨石をおとし、大木をころがした。逃げ場を失った寄せ手はばたばたと薙ぎたおされ、悲鳴とともに谷底に落下していく。そのかずは、みるまに数百にのぼった。

にわかに、寄せ手の攻め足が鈍った。

「このままでは味方の損耗はかりがたし」

忠長は苦慮し、使い番の新納蔵人に命じて、再度、城方に降伏を勧告させることにした。

蔵人は白布をかかげ、矢止めを請うて単騎、敵前に乗りだし、

「島津の家中新納蔵人にござる。主膳兵衛尉どのにお会いしたい」

二の丸下から大音声によびかけた。

蔵人の武名は、むろん紹運も知っている。丁重に本丸の櫓下まで案内させ、



「それがしは麻生外記ともうす。僭越ながら、主紹運入道にかわって、ご用のむきうけたまわりましょう」

と、こたえた。

麻生外記とは、まえに島津陣に使いをしたことのある立花家の家臣の名である。

「されば、もうしあげる」

忠元は声をはりあげた。

「長年にわたる主膳兵衛尉どのの忠義のおはたらき、まことにもっておみごとと存じあげる。さりながら、大友父子は国を傾けた愚かな主人。唐国の書にも、義者は不仁者を去り仁者につく、ともうすではござらぬか。いまこそ仁、義をわきまえたるわが島津に、すみやかにご同心あってはいかがか」

「仰せのほどはうけたまわった。紹運入道にとりつぐまでもござらぬ。不肖、この外記がおこたえいたそう。栄枯盛衰は、この世のならい、仰せのごとく、わが大友家の武威のおとろえは否みようもござらぬが、あすは島津家の運命やもしれぬ。そのおり、新納どのは島津公をおすてめさるか。そうはなさるまい。のう新納どのよ、主家衰亡に臨んで志を変ずるは武士にあらず。恥を知り、義に生きてこその武士とはおぼしめさぬか」

外記のことばは、いちいち蔵人の胸にこたえた。立場がかわれば蔵人が口にしたいことばでもある。

（これ以上、問答をつづけても、おのれが恥をかくだけだ）

蔵人は早々に交渉をあきらめて退きさがった。

「それだけのことがいえるのは、麻生外記などではなく紹運本人にちがいあるまい」

蔵人の復命をうけて、忠長はうなった。

「なにゆえ、外記の名を騙ったのでありましょうな」

攻将の一人、野村忠敦がけげんそうに首をかしげた。

「真意はわからぬが、おそらく主従こころは一つというところを示したかったのであろうよ」

忠長は自分を納得させるようにいった。

「義のためとはもうせ、城兵を道連れにするについては、主膳兵衛尉も胸を痛めておるのでありましょう」

忠棟が話をひきとり、

「兵を死なせたくない気持ちは双方おなじです。だめでもともと。もういちど、快心に口説かせてみましょう」

と進言した。

「それがよい。敵ながら紹運は殺すには惜しい男だ」

忠長が感に堪えたふうにいう。



「まこと。できうれば、わが軍門に迎えたいものですな」

諸将はいちようにうなずいた。

快心は再度、紹運をたずねて熱弁をふるった。

「紹運どのがご武勇のほどは存分に拝見いたしました。このうえの流血は無用でござりましょう。いかがでござろう。お子のお一人を島津公へつかわされ、手打ちなされては。さすれば、ご本領の安堵は約束いたします。ここは多年の宿怨をすて、島津公と手をたずさえて天下に義を問われてはいかがでありましょうや」

「かたじけないご詞、しかとうけたまわりました。なれど、まんいちそれがしが、いのちを惜しんでご諚をうけたとしても、わが二子は断じてしたがいますまい。部下たちも同然でありましょう。われらが盛運にあるときならば、あるいは、おうけできたやもしれぬ。が、主家もわれらも衰亡の淵に追いつめられたいまとなっては、それもできもうさぬ。武士は義に死んでこそ、まことの義を世に問えるものとおかんがえくだされよ」

快心の面をひたとみつめて、紹運はこたえた。

「どうしても、討ち死になさるおつもりか」

「おのれの命運にしたがうまでござる」

「惜しい、なんとしても惜しい」

快心は心底から嘆息した。

周囲をとりまく城兵たちも、いちようにうなだれた。その眼に涙があふれている。

いずれも死にたくはないのだ。ひそかに主人紹運が、快心の再度の和議のすすめに翻意することをねがっていた。ありえぬこととはおもいながら、一縷の望みを抱かずにはいられないのだった。

しかし、その最後の希望も紹運の決然たることばで、あえなくついえさった。

——やはり……。

ふかい絶望が全身をおおった。

とはいえ、紹運を恨む気持ちは露ほどもない。この主人に仕えるかぎり、このような死に方は予想できぬことではなかった。義のために死ぬ紹運に、自分たちも義をつくして殉じるのだ。誉れある死というべきではないか。

絶望とはべつに、かれらは新たな覚悟にかすかな喜びさえ感じていた。

いのちある者は、いちように死をおそれ、死からまぬがれようとする。生物の本能といってよく、ほとんどの人間もそうだ。しかし、なかに義や恥という形而上的観念のために、すすんでいのちをすてる者がいる。これは人間だけにみられる、ふかしぎな行為といわねばならない。

いま紹運とその家臣がとろうとしているのが、まさにそのふかしぎな行為だった。

——主家のためにやれるだけのことはやったのだ。もはや降伏するも恥ではない。



と自己弁護するのは容易だ。おおむね世間もそのいいわけをゆるすだろう。その俗世の暗黙の了解にすがれば、人はいかようにも生きのびられる。

しかし、紹運はそれをしない。そのような延命をこそ恥とした。その紹運のもとで、この十日余を戦いぬいてきた部下たちもまた、おなじおもいであったろう。

ただ、義といい恥という実体はない。たかが脳中にしみついた抽象概念にすぎぬ。

——生きていてこその義、恥ではないか。

と、おのれに都合のよい理屈におきかえさえすれば、一時の方便として和議するもよく、再起を口実に夜闇にまぎれて城から逃亡することもできぬことではないのだ。

「知ってのとおり、いよいよ最後のときがせまった。あらためて告げる。城をでたい者は、今夜のうちにぬけてでよ。おぬしらは、もう充分に戦った。この入道、こころから礼をいう。すでに関白どのの先鋒は豊前に着到したときく。ただ、われらの戦の後詰にはまにあわぬ。これからは、死ぬるためのみの戦となる。死ぬるのは、この入道一人でよい。これは、わしの本心だ。おちたき者は遠慮なくおちよ」

部下たちのこころのうごきをみぬいたように、紹運は一息に告げた。

寂として声はない。将士はみなうつむいて足もとをみつめている。

「優しげに、このうえなき酷なことをもうされるものかな」

屋山中務三介が、声をあらげていってでた。

「ここにおるのは、殿とともに十七年、艱難辛苦をともにしてきた勇者でござる。その勇者にむかって、いまさらおちよとは、あまりにも情けなき仰せ。逃げだすつもりなら、とうにすがたをけしておりましょう。いわんや、この十日余の合戦に死力をつくしてきた者たち、ここで逃げては、ともに戦いたおれた朋輩へのもうしわけが立ちますまい。いまはせめて、主と最後をともにしたいと心底ねがっておるのが、殿にはおわかりめさぬのか」

「すまぬ」

紹運はすなおに詫びた。

「おぬしらの気持ちがわからぬ入道ではない。が、そのうえでなお、一人でも多く生きのこってもらいたいとねがっておる。おぬしらの奮闘のおかげで、目算以上に時を稼ぎ、敵勢に損害をあたえることができた。もはや、おもいのこすことはない。ただ、わしはそれでよいが、おぬしらはちがう。わしは、おぬしらの由緒ある主家、高橋家をいままさにつぶそうとしている男だ。そのような男に義理をつくすことはないといいたいのだ」

「ますますもって、異なことをもうされる。殿はれっきとした高橋家のご当主ではござらぬか。義のために主人が死ぬ。その主人に殉じて、われらも喜んで死ぬ。武門の高橋家として、これ以上に名誉なほろび方はござりますまい」

期せずして、将士の間に慟哭が起こった。

はげしく肩をふるわし、血と泥にまみれた男たちが哭いている。



## 10

明くれば七月二十七日。

しらじら明けのなかで、はやくも蟬が鳴いている。法師蟬である。おのれの短くはかないいのちを知ってか、細い胴、うすい羽根を懸命にゆらして、声をかぎりに鳴いている。

この朝、

「茶を」

紹運は近侍に命じた。

茶の湯ではない。ただの煎茶だ。煎茶とはいえ、このころはまだ貴重品で入手がむずかしい。で、ふだんは茶の代用に五加木の葉をもちいる。五加木の根の皮は五加皮といい薬用にするが、若葉は茹でて和えものにして食する。苦みがつよい。その葉を乾燥させて茶のかわりに飲むのである。

この朝の茶は、むろんほんものの煎茶である。博多の商人からの到来物で、開戦にさきだち統虎がわざわざ立花城からとどけてよこしたものだ。茶は心機をふるいたたせ、また五体の疲労をとると信じられている。統虎のこころづくしの見舞品だった。

紹運はみずから一服すると、

「みなの者にも喫させよ」

あるだけの茶葉をわかさせ、各持ち場の兵たちに配らせた。

合戦は卯の刻（午前六時ころ）、蟬の声を圧する銃声とともにはじまった。すべての調略に失敗した島津勢は、多大の犠牲を覚悟で総攻撃にでたのである。

「すすめや、すすめ」

薩摩隼人を先頭に、寄せ手は津波のように諸砦に襲いかかった。

まず、朝のうちの戦いで虚空蔵台の守将、福田民部が銃弾に胸をつらぬかれて落命した。ついで、南大手門を守る伊藤総右衛門が討ち死にした。百貫島砦の三原紹心も、山城戸の弓削了意も、あいついでたおれた。二条の砦の萩尾父子も、乱戦のなかに部下とともにはてた。

大手口には、寄せ手の総大将島津忠長がみずから長槍をふるって突貫した。これに正面から立ちむかったのは屋山三介である。

「死のうぞ、死のうぞ」

呪文のようにとなえて、大刀をふりかざし群がる敵を切ってまわった。

百人ほどいた部下も、いまや半数にも満たない。それも一人討たれ、二人討たれ、ついには三介も数本の長槍につらぬかれて戦死した。

三介は子運に恵まれず、晩年にようやく一子をえた。太郎次郎である。当年十三歳。この日まで母とともに城内にとどまっていたが、父の討ち死にをきいて、

「父の仇っ」

さけびながら、寄せ手にむかって駆けだした。

「お待ちなされ」

母親は太郎次郎の手をつかんでひきとめようとしたが、その手にはちぎれた片袖だけがのこった。

「稚児じゃ」

寄せ手の兵は、駆けこんできた太郎次郎をみて生け捕りにしようとしたが、太郎次郎は小刀をふりまわして数人の兵に手傷を負わせた。

「詮なし」

すすみでた島津の一兵が、拝み討ちに斬りたおした。

日輪が西にまわりこむころ、ついに大手門が破られ、敵の先鋒が本丸まで攻めあがってきた。

「腹切るまえに、一戦するか」

紹運は大長刀を手に、ゆったりと櫓を降りた。

おりから風がでた。本丸を囲繞する樹々の枝葉がはげしくゆれうごき、四王寺山全体をゆらすかのように、ごうごうと鳴りさざめいた。

（まるで、わが魂を中天高く吹きさらっていくようだわ）

紹運は烈風に吹かれながら、しずかに微笑した。

ことここにいたって、念頭にわだかまるものはなにもない。

「まいるぞっ」

五体に三十九歳の膂力をみなぎらせ、一個の戦鬼となって、紹運は敵中に駆け入った。

「殿につづけっ」

本丸にのこる百名たらずの旗本が、わっと喊声をあげて後につづく。

討ち死に覚悟の紹運の兵の勢いはすさまじい。寄せ手の兵は勝利を目前に、できうるなら死をまぬがれたい。そこに彼我の戦意の差がでた。しだいにおされて門外まで退く。

大長刀の刃さきに十数人の敵の骨肉を断った紹運は、身に数カ所の手傷を負ったうえに返り血をあび、全身朱に染まっている。

やがて、かたわらにつきしたがう左京介をかえりみて、

「いまは、これまで……」

皓い歯ならびをみせて笑みかけると、すばやく踵をかえして櫓にのぼった。

かばねをば岩屋の苔に埋めてぞ雲井の空に名をとどむべき



紹運は、かねて用意の辞世を、墨痕鮮やかに高櫓の扉に書きつけると、

「よいな」

左京介に、腹を切るぞと眼顔で合図した。

「統虎さまや北の方さまへ、なにか……」

遺言はないかと左京介は問いかけたが、紹運は無言のまま、兜をぬいだ入道頭をふった。

のこしていく妻子へのおもいがないといえばうそになろう。しかし、屋山三介以下、すでに配下のほとんどが討ち死にしているのだ。いまさら未練たらしく、おのれの雑念にかかずらわることはゆるされない。いまはただ、空の一点に一念をこめ、かれらとともに空へのぼるのだ。

「櫓に、火をかけますか」

左京介は重ねて問うた。

「いな」

紹運はいった。

「この入道首をくれてやれば、敵も安心しよう」

おのれ一人の肉体にこだわってもしかたがない。武士の五体は刀槍とおなじである。最後の一瞬まで信義をつらぬくための道具にすぎない。目的をはたした後は、ただの軀だ。

たいせつなのは名である。紹運にとっては、潔く武士の名誉に殉じてはてることがすべてであった。

高櫓に数珠をもむ音がして、転瞬、

かつっ。

頸骨を断つ乾いた音がはじけた。

その音をきっかけに、本丸にのこった紹運の旗本たちはつぎつぎに立ち腹を切り、あるいは、たがいに刺しちがえて紹運の後を追った。

豪気な薩摩の将士も、おもわず息をのみ、高橋家中の凄絶な最期をみまもるばかりだった。裸の胸に手をあわせるすがたもみられる。

岩屋城の空は茜いろに染まり、烈風があらあらと雲影をはしらせている。

紹運の家来に谷川大膳鎮実という男がいた。

二日まえ、大膳は紹運の密命をうけ、立花城に使いした。島津軍の重囲をくぐりぬけ、この日夜半、ようやく搦手から岩屋城に帰りついた。大膳は落城を知らぬ。

「谷川大膳、ただいま立ちもどりまいた」

門前でよばわるところを、島津の兵にとりおさえられ、本陣にひったてられた。

島津忠長がじきじきに尋問したが、大膳は従容として臆するところがない。

「大膳、わしに仕える気はないか」



忠長が問いかけると、大膳はこたえた。

「かたじけなきおことばなれど、それがし使いに手まどって殿と最期をともにできず、まことに無念であります。いまさら生き恥をさらすつもりは毛頭ありませぬ。ただ一つ、おねがいがござる。このわが首にかけたる書状、わが首をはねてからご披見くださりますよう」

「かの将にして、この部下あり。いまは、その書状をみるまでもない」

忠長は感に堪えたふうに首をふり、ただちに大膳の縛を解き放った。

紹運の首級は般若寺跡の忠長の本陣にはこばれ、型どおり首実検に供された。おだやかな死に顔である。

――これが、わずか一千に満たぬ寡兵をもって、五万の大軍をあいてに十数日をもちこたえ、味方に死傷者五千余の打撃をあたえた男か。

忠長は、まじまじと、ものいわぬ入道首をみつめながらおもった。ふしぎと憎しみの気持ちは微塵も起こらなかった。

「懇ろに弔うて進ぜよ」

忠長は伊集院忠棟に命じて、戦死した敵味方の将士の霊とともに供養させた。

秋月から臨済宗仏心寺の茂林東堂が導師として迎えられ、般若寺跡にもうけられた斎場で盛大な供養が催された。香煙にけむる卒塔婆には、つぎのような偈が記されていた。

一将功成冠九州
戦場血入染河流
殺人刀是活人剣
月白風高岩屋秋

〔人を殺す刀は是れ人を活かす剣〕とは、紹運の戦ぶりにたいする戦国武人の偽りのない共感と賞賛を示すものであろう。紹運の死が、敵方からも最高の礼をもって追悼されたことがわかる。

紹運の首級は、生前、親交のあった崇福寺の住職宗晋にさげわたされた。

岩屋城落城の一部始終は、宝満城に籠もる将士にも手にとるようにわかった。

統増にしたがう高橋家の兵のあいだには寂として声がない。

（このうえは、亡き殿の弔い合戦を……）

心中に期してはいるが、口にはだせない。

宝満城は岩屋城にくらべれば数段の堅固さをほこっている。とはいえ、守るのは十五歳の統増以下、筑紫勢を加えても三百に満たない小勢である。あまつさえ、城内には岩屋城合戦にさきだち避難してきた多くの婦女子を抱えている。



しかも、島津方からいくどとなく降伏の勧告をうけ、筑紫勢はすでに戦意を喪失していた。むりもない。主人の広門は、はやばやと島津の降人となっているのだ。かれらにとって、いまは統増に嫁しているかね姫の身の安全をはかることだけが唯一の任務だった。

高橋方の伊藤源右衛門や北原進士兵衛の悩みもそこにある。

眼前に主人紹運以下、同志たちの華々しい最期を歯ぎしりするおもいでみまもってきただけに、自分たちも、おなじ武門として負けずに、みごと死に花を咲かせたい。

しかし、いざ合戦に入ったとしても、おちおち戦っておれないだろう。筑紫勢が寝返るのは時間の問題、とかれらにはおもわれたからだ。

――戦の間隙をついて、統増君を殺し、かね姫を奪って島津方に投じるのでは……。

とのうたがいが、念頭を去らない。

ありえぬことではなかった。

「無念だが、ここはひとまず開城して後図をはかることにしよう」

二十八日、島津方からの最後の使者を迎えて、源右衛門は決断した。むろん、筑紫勢に否やはない。城を明けわたすにあたって、源右衛門は条件をつけた。

「統増君と故主君の正室ちよさまを立花城に送りとどけること」

「おもうしこしの趣、相違あるまじく……」

島津方は誓紙を入れて堅く約束した。が、いざ開城すると約束を反古にして、両人を人

質にして別所に監禁した。

仇敵紹運の死を悼み、懇ろに弔った島津忠長が、どうじに武士同士の誓いを、かくもやすやすと破ってしまう。だまし騙りも戦略のうち、といってしまえばそれまでのことだが、なぜ道雪や紹運が同時代人からも、信義を守った武将として、ことのほかの賞賛をうけたのか、この一事をみてもその理由がわかるような気がする。信義や名誉を武門の本分としながら、それを守りとおした武将がいかにすくなかったか、ということの証左である。

建前と本音のつかいわけは、戦国人にとっても乱世を生きぬくための、きわめて常識的な技術の一つだった。その技術を拒否して死んだところに道雪や紹運の特異性がある。権謀術策家からすれば、両者のような生き方は、まさに愚の骨頂というべきであったろう。それでいて、道雪や紹運を一笑に付すことができないのは、両者が戦術、戦略の王道をあるきながら、あまたの詐術家をあいてに一歩もひかず、堂々たる戦を展開できたからであろう。

死を覚悟の消耗戦だったとはいえ、岩屋城の攻防をまえに紹運が立てた目算——十数日はもちこたえ、その間に三千余の敵勢をたおす——は、まさにぴたりと適中した。みずからが玉砕することで、統虎の籠もる立花城への島津軍の進撃をはばみ、その間に秀吉の軍勢が着到するとのみとおしも、みごとにあたった。



〔兵者詭道なり〕とは孫子の謂だが、紹運は正道をもって、これだけの戦をやってのけた。

だまし騙りの術策を弄しても実をとるか、愚直をつらぬいて名をとるか。九州の小城を舞台に展開された岩屋城合戦の顚末は、まさに対立する価値観を絵に描いてみせてくれるようだ。

# 立花城

## 1

本丸北の懸崖から望む博多の海が銀箔をまいたように、きらきらと輝いている。
日没がちかい。
海鳥が白い翼をつらねて、沖合から松林をめざして舞いもどってくるのがみえる。
先刻、統虎は父紹運の死を知らされたばかりだった。
岩屋城の攻防については、僧や商人に身をやつして潜入した諜者が、連日、馳せもどってきて詳報をもたらした。いずれも城方の善戦をつたえるものだったが、なにしろ寄せ手は雲霞のごとき大軍である。日ごとに寄せ手の旗印が城の上方へ移動するさまをきくたびに、統虎は、まるで自分の首をしめつけられるようなおもいにとらわれて苦悶した。
（父上は、この統虎に有利な戦舞台をととのえようとして、あえて死地に籠もって時間稼ぎの玉砕戦を挑んでおられるのだ）
立花家に養子にだすとき、これからは親でも子でもない、とつきはなしたものいいをした父だが、やはり、この統虎のために死を賭して戦っておられる。
紹運の心情がわかるだけに、統虎は身が裂かれるばかりにつらかった。
できうることなら、立花城の全軍をひきいて助勢に馳せむかいたい。
岩屋城は、わずか四里にも満たぬ近間である。その気になれば、一駆けで父の膝下に到達できるのだ。
しかし、父はそれをゆるさず、統虎もまた亡き道雪から立花城をあずけられた身として、そのような行動はゆるされることではなかった。
はじめのうちこそ、せめてもの支援として、武器弾薬、食糧などを城の裏手の間道から搬入することができたが、それも寄せ手が四王寺山の北にまわりこんでからは、不可能になった。
やがて、城の水の手が絶たれ、立花から助勢に入った吉田右京亮らも全員討ち死にしたとの報をうけたときには、統虎はたまらず書院の屏風のかげに入って声を忍ばせて泣いた。
泣きながら、あすにも父の死がつたえられてもふしぎではないのだ、と覚悟をきめた。
で、先刻、物見の一人から父の死を報らされたときも、

「大儀であった」
感情のゆらぎもみせずにねぎらい、背後にひかえる十時摂津、薦野三河らの重臣をかえりみて、
「岩屋落城の件、ただちに本国のお屋形と黒田官兵衛どのへ報告の使者をさし立てるよう」
沈着に命じた。
あくまで、立花家当主としての役割を忠実に実行する姿勢だった。
「かしこまりました」
十時摂津はこたえながら、
――このお方の頭のなかには、すでにこれからなすべき手だてのすべてが織りこまれておるにちがいない。
ほれぼれと、わかい当主の顔を仰ぎみた。
「あすにも寄せてまいりましょうな」
内田壱岐守玄怨が摂津の背後から、入道頭をふり立てていった。
「そのまえに、まず使者がこよう」
統虎はこたえた。
「性懲りもなく、また降伏せよともうしてくるのでありましょうか」



壱岐は利かぬ気の眉をあげ、
「されば、門前払いをくらわせてやりますか」
膝をゆすって笑声をほとばしらせた。
「いや、会う」
統虎は、瞳を張って壱岐をみた。
「会われますのか」
「会う」
「まさかに、島津の強請に屈せられるのではありますまいな」
「壱岐よ……」
統虎は壱岐守に、あくまでやわらかな声音でよびかけた。
「わしは若輩ながら、高橋紹運の子、そして道雪公の婿ぞ」
「さようであります」
「お二人の死にざまは存じておるな」
「おみごとな最期でござりました。さぞかし、若殿も――」
「これ、壱岐入道。統虎公はもはや若殿ではない。当主であられる」
摂津守が口をはさみ、壱岐守をたしなめた。
「これは失礼つかまつった」

壱岐は入道頭の汗を拭きふき、すなおにあやまる。
「弥兵衛の報告では、島津はわが弟統増と母者を質にしたときく」
弥兵衛とは、闇千代の侍女たかの遠縁の者で、数年まえから闇千代の諜者として仕えている男のことである。
「必定、この二人を質に開城をせまってまいろう」
「なるほど。で、若殿、いや、わが殿はいかに対処なされるおつもりか」
「もうすまでもあるまい。わしは立花家の当主であり、関白殿下の家人である。私情をはさむ余地はない。ただ当城を死守するのみ。壱岐は不服か」
問われて、壱岐は向きになった。
「なんで不服でありましょうや。入道、まっさきかけて討ち死にいたしまするぞ」
「よい覚悟だ。が、おぬしらを、むだには死なせぬ」
「手だてがありまするか」
「手だてというほどのものはない。ただ父上が死をもって稼いでくだされた時を生かして、決戦までに、さらに時を稼ぐ」
「敵もさる者、はたして、その手にのりましょうや」
遅れて顔をだした由布雪下が、首をかしげた。
「おう、雪下か」



統虎はにこやかに雪下に視線をむけ、
「栗の毬じゃよ」
といった。
「はっ？」
「あのとき、おぬしにおしあてられた毬は痛かった」
「やっ、あのときのことは、もうご勘弁くだされ」
雪下はにわかに赤面して頭をかいた。
「おかげで、わしは学んだよ。おしつけられた毬は、おしかえしても痛く、退いても痛い。で、足裏を宙にうかせた気分で、ひたすら痛みをしのいだ」
「その手で、島津に立ちむかわれますのか」
「肉親を質にとられたは痛い。しかし、痛いとはいわぬ。痛くないともいわぬ。あいてのでかたしだいに、おしひきして、ようすをみる」
それだけいいおいて、統虎は座を立ち、本丸北の崖ぎわまでできたのだった。
独りになって、だれにも邪魔されずに父の死を悼み、人質となった母や弟の身の上におもいをいたしたかった。
しかし、すぐに背後に人のけはいがした。
ふりむくと、闇千代が立っていた。女袴の股立ちをとり、腕に薙刀をかいこんでいる。

「いかがいたした」
「けしからぬうわさを耳にしました」
「なんと……」
「戦わずして開城なさると」
「だれがもうしておるのだ」
「城下では、もっぱらのうわさと……」
「なんだ、城下のうわさか。島津の間諜（かんちょう）どもがしわざよ、すておけ」
「城の者も動揺しています」
「いまにおちつく」
「いえ、浮き足立っております」
「そなたが、軽々にそのようなことをもうしてはこまる」
「闇は城内の婦女をあつめ、連日、薙刀の稽古にはげませて決戦にそなえおります。女たちに弱腰の者はおりませぬ」
「それは頼もしいことだ。だが、戦はわしにまかせてほしい。女の力は借りぬ」
「この闇には、ひっこんでおれともうされますのか」
「気持ちはありがたいが、わしにも存念のあること。まかせてくれぬか」
「この城は、闇の城です。統虎さまがまいられるずっとまえから、女城主として守ってきたたいせつな城です」
「だから、むざむざわたしたりはせぬ」
「誓うてくだされますか」
「わしが信じられぬと？」
「仮に島津軍から守りおおせたとしても、すぐにも関白にめしあげられるのでしょう」
「それはわからぬ。関白どのとお屋形とのとりきめで、わしは関白どのの家人になり、この城も関白どのからのあずかりものとなった」
「闇には一言の相談もなしに……」
「そなたも道雪入道の娘であろう。われらが城や領地は、わがものであってわがものでない。おのれの意のごとくにならぬのはわかっていよう」
「まんいち、関白がめしあげるともうされたら、闇は直談判いたします」
「いま、そのようなことで、そなたといい争うても詮なきこと。まずは、島津から城と兵のいのちを守りぬくことが先決だ」
統虎は闇千代に背をむけて、ふたたび博多の海に視線をもどした。全身からどっと疲れが噴き出した。
闇千代と話すと、いつもこうなのだ。できうれば避けたい。ことに決戦をまえにしたこのようなときには。

しかし、それもできない。闇千代はまぎれもない自分の正室なのだ。

闇千代は、いまだに女城主の意識をすてていない。それだけに、この城にたいするふかいおもい入れもある。統虎がそれをむげに無視し、拒否すれば、夫婦の絆さえ断ち切れてしまうだろう。

統虎の疲労感は重い。その視線のさまようさきに、海はさきほどまでの銀波の輝きを失い、鈍いろの夕闇に支配されていた。

「殿っ」

家老の小野和泉守の声がした。

「島津よりの使者がまいりました」

「きたか」

「いかがなされます」

「会おう」

統虎は踵を返した。

「断固、追い返されませよ」

闇千代が、その背中に声高によびかけた。

足下の楠の森で、はやくも梟が啼きはじめている。



## 2

「すでにご承知であろうが、岩屋、宝満の両城はわが手に帰しもうした。貴辺の母君、ご舎弟もまた、われらが手のうちにござる」

島津の使者は、こう口上をきりだした。つづけて、

「そもそも貴辺にたいし、島津はいかなる遺恨もふくむものではござらぬ。よって、われらに城をお明けわたしあれば、ただちに兵を退きもうそう」

ともうし入れた。

予期したとおり、人質を切り札にした開城勧告である。

「ご懇切なるもうし入れ、たしかに拝承いたした」

統虎は、慇懃に使者の口上をうけた後、一瞬、間をおいた。

使者も立花家の重臣たちも、その後につづく返答に、いちように緊張して息をのみ、統虎の口もとを凝視する。

「われらとて、むだに血はながしたくない。できうれば和議をむすびたい」

うめくように統虎はいった。

「おう、おうけくださるか」

使者は声はずませて一膝のりだした。
「ただし、条件がござる」
統虎は間髪を入れずにいった。
「ご存じのごとく、当城は関白秀吉公よりのあずかり城でござる。それがしの一存ではいかんともしがたい。ついては、関白どのにお伺いを立て、ご下知をうるまで、しばし返答を猶予されたい」
「なんと、大坂まで伺いを立てられると？」
明らかなたぶらかし策とは、使者にも容易に読みとれる。で、そうはさせじと、使者がなにごとかをいいかけるのを制して、統虎は、さらりといってのけた。
「なんの、関白どのの先鋒はすでに早鞆の瀬戸の彼岸に集結、軍監黒田官兵衛どのの着到もまぢかでござれば、さしたる日数はかかりますまいよ」
むろん、これも統虎のはったりである。
紹運父子からの七月九日付の急報に、秀吉が毛利と小早川、吉川の軍に出兵を命じたとの返書を送ったのは八月三日のことである。当然、その書状はまだ入手していない。
ただ、統虎は島津軍が領内に侵入する以前から諜者を放って、しきりに関白軍の到着まぢかしと宣伝させた。島津方もどうように間諜を豊前にもぐらせて偵察につとめていたが、統虎のながす虚報に攪乱され、陣中は疑心暗鬼にとらわれている。



使者は迷った。
すかさず、統虎は諭すように告げた。
「ここはいったん当方の返答をもち帰られ、さしずを仰がれたらよろしかろう」
堂々たる応接である。
「左近将監がそういうたか」
使者の復命をうけて忠長は、いまいましげに舌うちした。
交渉のあいてを二十歳にもならぬ若造とみて、まさかに、こまかな駆け引きにはでてくるまい、とみていたのだが、その目算ははずれた。
「返答の体をなしておらぬ。すぐにも降伏せねば一気に攻めつぶすと脅しあげよ」
忠長は憤然として、ふたたび使者を送り返した。
「ほう、攻めつぶすともうされたか。ならば、おあいてつかまつろう」
統虎は大きめな頭を反らして悠然とうけた。
「どうしても、お手むかいなさるともうされるか。されば手切れでござるな」
こんどは使者も腰をすえて強気にでた。
「さよう。そちらがあくまで強攻を望まれるなら、話はこれまでござる。ただし、もうしておくが十日や二十日ではおちもうさぬぞ。そのうち、毛利、両川の援軍も着到いたそう。最後に泣きをみられるのは島津公と覚悟めされるがよい」

「せいぜい、いまのうちに強がりをもうしておかれることだ」
「ただの強がりかどうかは、戦うてみねばわからぬこと。それよりも忠長公はもうすこし懐のふかいお方と存じておったが……」
「……」
「わしも紹運入道の子、若輩なれど恫喝には屈せぬ。とはいえ、いたずらに流血を好むものではない。のう、使者どのよ、交渉ごとは順をふんで穏やかにすすめるものだ」
「なればこそ、われらも大軍をもってかこみながら、こうして話しあいによる開城をもとめております。貴辺になお交渉の余地ありともうされるなら、拝承するにやぶさかではござらぬ」
「では、もうしあげよう。たがいに無用の血をながさぬための妥協案は、ただ一つ。ご尊家の体面をおもんぱかり、当城を一時、明けわたしてもよい。かわりに、われらの所領すべてをご安堵ねがいたい」
「それは……」
「当城を降したとなれば、ご尊家の当面の面目は立ちもうそう。不服でござるか」
「そのような重大事、それがしの一存では、おこたえできかねる」
「ならば、もち帰って、再度ご協議なされてはいかがか」
またしても使者は、対応に窮してすごすごと退出するはめとなった。



統虎の巧妙な駆け引きとわかってはいても、統虎からだされた条件は、忠長とて独断で裁量できることではない。しかたなく、肥後の八代に滞陣する宗主義久のもとに伺いを立てた。
「なにを、ぐずぐず手まどっておる。なぜ一挙に攻めとらぬのだ」
義久にすれば、忠長や伊集院忠棟が若造の統虎一人に手をやいているのがはがゆくてならない。おもわず、忠長からの使いを叱りつけた。
「おそれながら、わが軍は岩屋城攻めで手痛い被害をこうむりました」
使者は抗弁した。
「そんなことは、わかっておる。数千の死傷者をだしたとはいえ、まだ万余の薩摩の精鋭がのこっておるではないか」
義久は、さらに声をあらげて叱責した。
「お怒りはごもっともですが、さすがの精兵も朋輩の多くを討たれ、炎熱下の長陣に疲労困憊、ひたすら帰国をこいねがっております」
いわれてみれば、義久もむげに叱責を重ねることもできない。
かれ自身が迷っているのだ。関白の軍勢がとおからず関門、豊予両海峡を渡海してくるのは否定しようのないじじつとみとめざるをえない。
そのまえに、はたして九州平定がまにあうか。その逡巡が、大友の本領豊後への討ち入

りを大はばにおくらせている。いまはまず、なにがなんでも筑前を制圧し、関門海峡をおさえたい。

「本領安堵などゆるせることではない。かわりに、筑前早良郡の荒平城をあたえるゆえ、とく調略せよ」

義久はくやしさをおさえて代案をひねりだし、使者を筑前に帰した。この間、数日が経過している。

こんどは、新たに秋月種実が使者に立てられた。

「荒平城に蟄居せよともうされるのか……」

北九州随一の勢威をほこる宿敵の種実をまえにしても、統虎はいっこうに臆することなく応対した。

「荒平城は秋月どのの里城ではござらぬか」

「さよう、大涼寺の裏山にある。小ぶりだが居心地のよい城でござるぞ」

種実は統虎をみくだす口調でこたえた。

「それがしが、なにゆえ秋月どのの世話にならねばならぬ？」

「すべてはなりゆきでござるよ。母者やご舎弟のおいのち、さらには麾下の将兵のことをおもえば、これしか手がござるまい」

「異なことをうけたまわる。それがし、いのち乞いをしたおぼえなどござらぬぞ」



「統虎どのはわかい。しかも前途有為の士だ。ここは冷静に進退なされるがよろしかろう」

「せっかくのおことばなれど、統虎は不承知です。道雪入道いらいの武門の意地にかけて、かような恥辱をうけることはがまんなりがたい。このうえは、弓箭をもっておこたえいたしましょう」

統虎はいい放った。

「さすがは、わが殿」

同席していた内田壱岐が、膝をたたいて咆えた。

すべては時を稼ぐためのたてひきとはわかっていても、これまでの統虎の対応に一抹の疑念をいだいていた壱岐は、統虎の最後の一言で胸中の迷いがふっきれた。

「この種実に免じて、ご再考くださらぬか」

なおも種実は口説こうとしたが、統虎はさわやかに皓い歯をみせて告げた。

「秋月どのとも長い確執でござりましたな」

「私怨はないが、これも乱世のならいじゃ」

「ここらで決着をつけましょう」

「む」

「島津の先兵として攻めてこられるがよい。亡き義父にかわって存分におあいてもうそ

う」

「死なせるには惜しいわか者じゃ」

種実は壮者の余裕をみせるつもりでいったが、

「なんの、死ぬるとはきまっておりませぬ。鉄壁とまではもうさぬが、当城の堅い守りをとくとご覧じてお帰りあるがよい」

統虎は種実を上まわる余裕をみせて切り返した。

## 3

「憎いもうしようだ」

不調におわった種実の報告をきいて、忠長は憮然とした。

「それがし、おもいまするに立花城の守りは岩屋城に倍する堅固さ。左近将監以下、城兵の士気もおもいのほか盛んです。まず、十日や二十日で攻めおとすのは至難とおもわれます。貴下の将士はうちつづく長陣で、さぞやお疲れでしょう。立花城は、われら筑前、筑後の勢におまかせあり、いったん、お引き揚げあって態勢をととのえられてはいかがか」

種実は、おのれの失態を糊塗するこころづもりもあって、忠長に退陣をすすめた。

すでに、この時点で種実のこころは大いにゆらいでいた。



このまま島津にしたがい関白の軍勢と戦って、はたして利があるか。もともと島津に属したのは心服してのことではない。かつて大友、龍造寺にしたがったとおなじように、乱世を泳ぎぬくための方便にすぎない。

たしかに島津はいまや九州随一の大剛だ。しかし、いかに島津の兵が慓悍で、地の利をえているといっても、日本国の過半を支配し、おそらく数倍する大軍で進攻してくるであろう関白の軍に太刀打ちできるだろうか。

（とまれ、いまこのとき、島津の先兵として立花城に攻めかかり、痛手をこうむるのはわりにあわない）

種実が忠長に退陣をすすめたのは、こんな思惑があってのことだ。

「ここは、いったん退きましょう」

忠棟がいった。

「立花の城一つに、これ以上の兵力を消耗したのでは、関白あいての大戦に支障をきたします」

「そうするか」

忠長は沈鬱にうなずいた。

「それにしても、統虎とは若年ながらこころ憎い武将よの」

「まこと、天晴れなわか者にござる」

「休庵（きゅうあん）どのには惜しい忠臣だ」
「御意」
忠棟はふかぶかと首肯した。
「よし、退こう。今夜のうちにも陣ばらいして義久公のもとへもどる」
この日、八月の二十四日。
「殿っ、博多の町が燃えております」
注進をうけて、統虎は本丸書院からはしりでると櫓に馳せのぼった。
博多の中心があかあかと火煙をあげて炎上している。火の粉が花火のように闇にはじけ、そのかなたから、風にのって暗い玄界灘の海鳴りがひびいてきた。
さらに眼をこらすと、松明とおぼしき火の列が狐火のように延々と西方にながれていく。
「む。敵は退却するぞ」
統虎はさけんだ。
「や、まこと総退陣のようすでござりますな」
由布雪下も背後から猪首をのばして、眼下を観望しながら大声をあげた。
「おう、逃げていく、逃げていく」
櫓の下でどっと歓声があがった。



一月余におよぶ大軍の包囲から解き放たれた安堵の喜びが、その歓声にこめられている。
ひとり統虎のみは冷静だった。
「兵に腰兵糧（こしひょうろう）を用意させよ。夜明けとともに追撃にでる」
背後の雪下以下の家老たちをふり返って告げた。
「それは、いかがなものか」
小野和泉が老巧な横顔をみせて異論をとなえた。
まもなく到着する関白軍にぶじに城をひきわたすのが当面の責務、いかに敵は退軍とはいえ、小勢をもって追撃するのは無謀、というのだった。
「和泉のもうすとおりだ。が、わが城のぶじを喜び、いたずらに城に籠もって父の仇敵が退却するのを黙視したとあっては天下のものわらいだ」
統虎は血を吐くようにいった。
「お気持ちはわかりまするが……」
「わかってくれれば、それでよい。おぬしらは城を守れ。かわりに、わしに千の兵を貸せ。存分に仇討ちの戦をしてみせる」
「殿お一人を、なんで危地に立たせられましょう。ご決意がかわらぬとあれば、われらこぞってお供いしたします」

和泉がいった。
「先陣は、この壱岐におまかせあれ」
内田壱岐も胴間声をあげた。
「闇もゆきますぞ」
いつのまにあらわれたのか、闇千代が老臣たちをかきわけて統虎のかたわらに立った。
「ありがたいが、父上の仇討ちはわしにまかせ、そなたは城をかためてくれ」
統虎はいった。
「邪魔だといわれますか」
「そのようなことは、いうておらぬ」
「紹運さまは闇にとっても義父。手練の薙刀にかけて忠長の首とってみせましょう」
「わかった。そなたの気持ちを帯して、わしが馳せむかおう。まんいち、わしが討ち死にしたら、お闇が城主だ。ぬかりなく後の差配をたのむぞ」
統虎は、ようやく闇千代をいいくるめた。
明けて二十五日払暁、統虎は壱岐を先鋒に城をおしだし、島津軍をはげしく追尾して筑後川の大木の渡しに追いつめた。
この地は道雪が陣没した北野にちかい。さしもの大軍も退勢となると勢いが半減する。火を噴くような立花勢の猛追をうけて、あまたの兵を討たれ、筑後川を逃げわたった。



「ここまで」
統虎は深追いをさけ兵を返すと、その足で高鳥居城にむかい、翌朝から攻撃にかかった。
高鳥居城は立花城の東南二里にある。標高六百八十一メートルの若杉山の中腹と、西どなりの岳の山（三百八十一メートル）の頂とに二つの城砦が築かれている。一月まえまでは筑紫広門の一族筑紫左衛門佐が籠もっていたが、島津軍に攻めおとされ、いまは、島津方に降った筑後の星野中務大輔吉実、民部少輔吉兼の兄弟が立花城のおさえとして五百の兵で守っていた。
統虎にとっては初の城攻めである。まず使者を送って降伏をうながしたが、吉実、吉兼兄弟は律儀に島津との約定を守って応じない。
「島津公からあずかった城、一存ではわたせぬ」
というのだった。
統虎は吉実の応対ぶりに、なにやら自分のすがたを重ねみるおもいがした。
――みごとな武人だ。
しかし、敵対するかぎり討たねばならぬ。
「かかれっ」
小野和泉と薦野三河が、三百の兵をひきつれて谷筋から攻めのぼる。城の東北面は急崖

である。

兵は西と南から大手、搦手にせまった。その頭上に雨霰と矢弾が降りそそぐ。

「ひるむなっ」

統虎も大刀をふりかざし、先頭に立ってあまたの銃弾をかいくぐり大手へ馳せむかう。

「殿、あぶのうござる」

立花鎮実がひきとめようとしたが、

「大将が弾をおそれて、なんで部下を叱咤できようか」

かまわずつきすすんだ。その兜の眉庇に銃弾がはじけた。

城内に火をかけられ、あぶりだされた吉実は、東門の外にうってでて獅子奮迅のはたらきをみせたが、一刻後には十時伝右衛門、立花次郎兵衛の挟撃にあい、ついに討ちとられた。弟の吉兼もやがて戦死し、高鳥居城は正午を待たずにおちた。

勝利はうれしい。が、なにやら統虎のこころは重い。両父が、そしていま自分がまさにおこなっている戦とは、いったいなんであろう、曲輪から空高く立ちのぼる黒煙をみあげながら、統虎はおもった。勝利したあいてが、自分に似た節義の武将だけに、そのおもいはひとしおだった。

兄弟は共に辞世をのこしていた。



草城に心おく露ふみわけて消えゆく野辺の道しるべせむ　　吉実

草城のつゆと消えなむ身なれども心はほしのひかりとぞ思ふ　　吉兼

このような奥ゆかしい詩心をもった武将が、討たねば討たれるというだけの理由から、たがいにいのちのやりとりをする。戦国乱世でなければ、たがいに胸襟をひらいて語りあえるよき友ともなりえたものを。

統虎は星野兄弟の首級を丁重にあつかい、懇ろに葬った。

吉実を討ちとったのは十時伝右衛門か立花次郎兵衛か。論功行賞にさいして、両人はもめた。手柄を争ったのではない。たがいに功をあいてにゆずろうとしてもめたのだ。

「両人ともに、みごとなこころばえでありますな」

雪下が感に堪えたふうに、統虎の顔をみてうなずいた。

「立花家の誇りだ」

統虎もいたく感動し、両人に等しく感状をあたえて賞した。

「これより岩屋城を奪還にむかう」

息つくまもなく統虎は兵の移動を命じた。

父紹運が玉砕した岩屋城には、秋月種実の臣桑野新右衛門が五百余の兵で籠もっている。落城から一月しかたっていない。山麓から望んでも、はげしい戦闘の跡が、まだ生々

しくのこっていた。くずれおちた防砦、投げおとされた巨石、山肌がところどころ黒焦げになっているのも痛々しい。

——さぞや……。

統虎は焼けずにのこっている本丸を仰ぎみながら、紹運の無念をおもって瞼をしばたたいた。

「これより、弔い合戦つかまつります」

統虎は胸中の父によびかけ、

「撃てえっ」

銃手に一斉射撃を命じた。

どどどっ。

にわかの銃声に城内は混乱した。城代の桑野新右衛門にとっては、まったく予期せぬ事態が起こったのだ。

「なに、立花勢が……」

島津の軍勢がかこみを解き、退却していったのは知っている。しかし、こんなにもはやく統虎が逆襲にでてくるとはおもいもよらなかった。

本丸めざして攻めのぼってくる立花勢をみると、城兵は浮き足だち、さしたる抵抗もみせずに城の背後から逃走にかかった。統虎はあらかじめ、城兵の退路をあけておいたのだ。



このうえ、無用の殺戮をするつもりはない。ただ、本丸に火をかけられるのだけは、なんとしても防ぎたかった。かつて自分もいくどか訪れ、父と膝をまじえて歓談した、なつかしいおもいでの城郭だ。

「よいか。火をかけさせてはならぬぞ」

統虎は、とくに旗本に厳命して本丸に突入させた。

さしたる抵抗をうけることなく、統虎は本丸に立った。紹運が切腹してはてた高櫓も焼けずにのこっていた。

「おう……」

扉の内がわに父の筆跡で墨痕あざやかに辞世が書きつけられているのをみて、統虎は絶句した。やがて、

「かばねをば岩屋の苔に埋めてぞ……」

統虎は声にだして読んだ。唇がふるえ、頬を涙がしたたった。

草鞋（わらじ）の底にあたるものがあった。ひろいあげると数珠の珠だった。みおぼえがあった。父がいつもたいせつに手首にかけていた菩提樹子の念珠の珠である。

（父上の死をむだにはいたしませぬぞ）

統虎は胸中に誓った。

四王寺山の頂で風が鳴っている。眼をあげると、空ははや中秋のいろあいをみせ、中天高く鱗雲をかかげていた。

立花城にもどると、前日、豊前から馳せ帰ってきた密偵の報告が待っていた。

この二十六日、毛利、吉川、小早川の先鋒、神田、三刀屋（みとや）、桂のひきいる三千の兵が、早鞆の瀬戸をわたり門司城に入ったという。朗報である。

さらに月のかわった九月半ば、十日付の秀吉からの感状がとどいた。

島津を追討し、高鳥居城を攻めおとした功をたたえ、毛利の軍をさしつかわすゆえ、このうえの無理なはたらきはひかえるように、とあった。

約束どおり、十月になると毛利三家の本隊が上陸し、小倉城を手はじめに豊前、筑前の島津方の諸城をつぎつぎに攻めおとした。軍監は黒田孝高である。

その間、統虎は母と弟夫妻の救出に腐心した。母ちよは夫紹運の死後、剃髪して宋雲（そううん）と称していた。統虎は島津と絶縁した龍造寺政家（まさいえ）に使いをだして、宋雲尼の救出を頼んだ。このとき宋雲尼は肥後玉名（たまな）郡南ノ関に幽閉されていた。

政家にすれば、このさい統虎に恩を売って秀吉へのとりなしを頼みたい。で、二つ返事でうけおい、ひそかに兵を潜行させて宋雲尼を助けだし、立花城に送りとどけてきた。母子は抱きあって再会を喜んだ。

「統増夫婦はぶじか」



宋雲尼は、たずねた。

「それが……」

統虎はいいよどんだ。

島津方は統増夫妻を、はるか薩摩領内の祁答院（けどういん）までつれさっていた。これでは手がだせない。

「いずれ関白どのの島津討伐がはじまれば、助けだせましょう。もうしばらくお待ちください」

統虎は慰めるようにいった。

「亡き紹運さまが守ってくれましょう」

宋雲尼は掌の数珠をもんだ。蓮の実をつらねた手製のかわいい念珠である。

「これを……」

統虎は懐中していた匂い袋から、一個の数珠玉をとりだした。

「や、紹運さまの念珠……」

宋雲尼は眼をみはった。

「岩屋城の櫓でひろったものです。母上におあずけします」

宋雲尼は蓮の実の念珠の軸糸をほどき、この菩提樹子の一個の珠を加えて統増夫妻のぶじを念じた。

# 4

筑前の攻略に失敗した島津義久は、この年十一月、矛先を大友家の本領豊後に転じた。

当初、義久は筑前攻略とどうじに豊後へも兵を入れようとして、肥後と日向に兵を集結させたが、諸将のあいだに慎重論も多く、ふみきれないできたのだ。関白の軍勢の到来をまえに、義久は最後の決断をせまられた。

で、薩摩と日向の国境にある霧島神社に参詣して御神籤を引いた。

吉とでた。

おそらく、義久は神意を借りて全軍の士気をふるい立たせようとしたのだろう。あるいは、おのれ自身をふるい立たせるためだったのかもしれない。

豊後に討ち入れば、まちがいなく関白の軍勢が来援するだろう。それでもなお、有利な戦果をあげることができるか。

賭である。

いっぽう、迎えうつ宗麟も不安でいっぱいだった。家中にかつての結束はない。

はたせるかな、大野郡鎧嶽城主の戸次鎮速をはじめ、鳥屋城主一万田宗挨、朝日嶽城主柴田紹安、直入郡の白仁城主志賀道雲、山野城主の朽網宗暦らの有力武将が、あいついで島津方に通じ、ひそかに侵入を手引きした。あろうことか、宗麟の次男の田原親家までが内応する始末だった。



親家は兄の義統とちがって気性がはげしく、一時は熱烈なキリシタンだったが、このころは熱がさめており、キリシタンの敵島津に与することに矛盾は感じていない。

もともと、この次男坊は、むりやり出家させられようとしたり、養子にだされたりして、父や兄への不満、反発を募らせていた。

（それにしても、島津に通じるとはなにごとか）

義統は怒って親家を追放し、さらには殺害しようとした。

「殺すのだけは待て」

宗麟のとりなしで、義統はようやくおもいとどまったが、家内はすでにまともに戦える状態ではなく、大友父子はひたすら秀吉の来援を待つばかりだった。

義久は軍を二手にわけ、次弟兵庫頭義弘の隊を肥後口から攻めこませ、自分は四弟中務少輔家久を後見して日向口から侵入した。そのかず、あわせて四万余。

まず、義弘軍は新納忠元を先陣に直入郡の岡城を攻めた。

岡城は戸次川にそそぐ白滝川の北の懸崖上に築かれた堅城で、晴れた日には九州の屋根を形成する祖母、傾、阿蘇、久住の山々が遠望できる。

この城の守将は志賀道輝の孫の親次である。祖父の道輝は宗麟とともに臼杵丹生島城に

籠もっており、父の道益は菅迫城にいたが、はやばやと島津方に内通していた。

道益は先年、義統の侍女の一人を寝盗ったため、義統の勘気をこうむり蟄居謹慎中だった。そんな事情もあって、道益は島津に通じた神原城主の入田宗和から誘われると、一も二もなく同意した。

「島津方につくように」

道益は宗和とともに親次を説いたが、親次は拒絶した。

「男子の義を説かれるならともかく、謀叛をすすめられるのは心外であります。これまで妻子や領民を飢えさせずにこられたのは、すべて主君のおかげです。日ごろはりっぱそうな口をききながら、危難に臨んで忠をわすれ、節を変えたのでは人の道に反します。それがしは城を死守し君恩に殉じる覚悟です」

親次はドン・パウロの教名をもつ熱心なキリシタンだった。父をはじめ周辺の諸将がすべて島津方になびくなか、一人信念を変えず主家にふみとどまった。

まだ二十歳になるかならぬかの青年武将だが、親次はなかなかの戦巧者である。わずかな守兵を十二手にわかち、天嶮を利用して巧みにゲリラ戦を展開したので、この方面の義弘軍の攻略はおもうようにはかどらなかった。

いっぽう、日向境から侵入した家久軍は破竹の勢いで北進し、海部郡に入った一隊が佐伯惟定の守る栂牟礼城の攻略に手こずったほかは、本隊は順調に進撃をつづけて、十二月



に入ると、はやくも宗麟の本城のある臼杵城下をうかがい、かたわら義統の籠もる府内のちかくの大分郡鶴賀城を攻めた。

鶴賀城は、豊後一の大河戸次川を濠としてめぐらし、利光鑑教（宗魚）が三千の兵とともに守備していた。家久は一万八千の兵をもって攻めさせたが、城兵の抵抗はげしく、なかなかおちない。それでも、苦心のすえに二の丸の焼き討ちに成功し、櫓で指揮する宗魚を狙撃して戦死させた。

そこに、関白からの援軍が戸次川の対岸まで到着した。さきに秀吉に降った土佐の長宗我部元親、信親父子と讃岐の十河存保の兵に、軍監として高松城主の仙石権兵衛秀久が同道している。そのかず五千余。

府内から義統に先導されて戸次川まで進出したが、大河をまえに諸将の意見が対立した。即刻渡河を主張する仙石権兵衛に、元親は、

「敵にいかなる計略があるやもしれぬ。ここは軽挙を戒める関白どのの命令を守り、自重してようすをみるべきだ」

と、反対した。

存保も元親と同意見だったが、表立って権兵衛に反対はできない。

元親にとっては、権兵衛も存保も、さきの秀吉の長宗我部討伐にさいして先鋒をつとめた憎いあいてだ。それに百戦錬磨の元親からみれば、権兵衛にしろ存保にしろ、戦のやり

方もろくに知らない凡将にすぎない。で、断固として慎重論を主張した。

軍議は白熱したが、権兵衛はあくまで渡河を主張し、軍監の権威にかけて自説をおしとおした。豊前に進出した毛利軍の軍監黒田官兵衛への対抗心もあり、権兵衛はなんとしても派手な手柄を立てたかったのだ。

対岸の敵兵のすがたはまばらである。なんの抵抗もうけることなく、連合軍は全軍渡河しおえた。

しかし、元親が懸念したとおり、これは島津軍の作戦だった。例の龍造寺隆信を島原で討ちとったさいにみせた、得意の戦法釣り野伏せである。

家久は伊集院美作、新納大膳、本庄主税助の諸隊を要所に埋伏させ、連合軍が囮の兵を追いながら鶴賀城に迫るところを一斉に銃撃を加え、前後左右に蜂起して連合軍を分断した。

「ちっ、あほうな奴ばらの功名心のために、まんまと島津めにたばかられてしもうたわ」

元親は歯がみしてくやしがったが、後の祭りである。乱軍のなか、すぐに息子の信親ともはぐれてしまった。

信親は元親の自慢の嫡子だった。信親、この年二十二歳。六尺余の身の丈に緋縅の大鎧を着している。

「死ねや、死ねや」



信親は、二尺七寸の左文字の太刀をふりかざし、千余の部下を叱咤して敵中に駆け入ったが、家久の巧みな横入れにあって、奮戦の甲斐なく討ち死にした。

全軍総崩れとなった。存保は戦死し、権兵衛は豊前の小倉城に、義統は豊前の龍王城に逃れ、最後までふみとどまって信親の安否を気づかった元親も、その討ち死にを知って沖浜から船にのり、伊予の日振島まで退却した。

大勝を博した家久は、主力をもって臼杵攻略にむかった。

城下に乱入した島津軍は、三日間にわたって宗麟の建てた教会堂や住院を焼きすて、十字架をたおして足下に蹂躙した。にもかかわらず、宗麟は城にすくんだままだった。

戦おうにも城内には満足に兵がいなかったのだ。いたずらに泣きさけぶ多数の婦女子がいるだけだった。宗麟は戦の指揮をとることよりも、これら城下からあつまったキリシタンの婦女子の面倒をみることに執心した。

さらには、城下が兵火に焼失するのをみて、宗麟は城内の修練院にいた宣教師のゴメスに命じ、臼杵城下や府内の学院にいる宣教師、修道士たちを周防山口まで避難させようと腐心した。

すでに、宗麟に闘将の面影はない。この年五十七歳。

生来、頑健とはいえなかった身は病みおとろえ、気力の萎えは覆いようもなかった。敵勢に城下を蹂躙されながら、ひたすら大友家の存続と、おのれの魂のデウスの神による救

済のみを念じていた。

その間、丹生島城が陥落をまぬがれたのは、この城が堅固な海城で、大軍をもってしても容易に攻めにくく、そのうえ城内にすえられていた二門の大砲〝国崩し〟が威力を発揮したからであったろう。

武宮武蔵守の指揮する砲隊は、島津の先鋒が集結した兎居島に照準をあわせ、間断なく砲弾を放った。じっさいの損害は微少でも、大砲が攻城軍の兵にあたえる心理的効果は絶大だったといわねばならない。

とまれ、義統の逃げだした府内とともに、宗麟の本城の臼杵城下も一面の焼け野原と化し、かつて九州六カ国余に君臨した大友家は事実上、壊滅した。

容易ならぬ事態とみて、秀吉は本腰入れての島津征討を決心し、十二月一日、畿内、東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海二十四カ国に九州出兵の檄を発した。

秀吉は予定をくりあげて、みずから宗麟の救援におもむく意向を示した。しかし、冬場の海峡渡海の危険を説く毛利輝元の意見や、戸次川の合戦に敗れた義統が尻腰なく府内をすてて出奔した報告をきいて、その気持ちもうすらいだ。

この十二月、秀吉は太政大臣となり、豊臣の姓を名乗った。



# 謁見

## 1

明けて天正十五年（一五八七）二月十日、秀吉は弟の秀長に命じて豊後におもむかせた。

それと知って、豊後を占拠中の島津軍はただちに撤退を開始した。本国に籠もって応戦しようとしたのだった。

秀長は黒田孝高、蜂須賀家政、尾藤知宣、毛利輝元、吉川元春、小早川隆景、宇喜多秀家らの軍と合流、大友、佐伯、それに伊東など地理にくわしい諸軍を先鋒に、後退する島津軍をはげしく追撃して日向に入り、まず県城（延岡）をぬき、四月六日には耳川を渡河して高城をかこんだ。

高城は、かつて、その城下で大友軍が島津軍と合戦して惨敗し、斜陽の一因をつくった

因縁の地である。いまは島津方の山田有信が千三百の兵をもって守備していた。秀長は高城の周囲に五十一の砦を築き、総勢二十万の兵で攻囲態勢をとった。

都於郡城にいた島津義久は、高城を楯に反撃に転じるべく、同十七日夜、義弘、家久の兵二万とともに根白坂の宮部継潤の砦を急襲し、得意の抜刀戦を挑んだが、宮部軍の強力な火力のまえに多くの死傷者をだして退却した。

勝敗をわけたのは兵数ではなく、火力の差だった。上方の軍隊は小者、足軽にいたるまで鉄砲を所持している。たいするに、島津方はあいもかわらぬ白刃をぬきつらねての突撃戦だった。

いかに慓悍をもってなる島津の精兵をもってしても、上方勢の物量のまえには手も足もでない。累々とよこたわる味方の屍をまえに、島津三兄弟はあらためて彼我の戦力のちがいを認識させられ、戦意を喪失した。

同二十一日、義久は秀長に使者を立て、伊集院忠棟を人質としてさしだし降伏をもうし入れた。

さて、秀吉である。

秀長の進発から二十日たった三月一日、大坂城を発向して、ゆるゆると豊前へ下った。途中、備後の鞆に逼塞中の前将軍足利義昭に会ったり、安芸の宮島に詣でたりして、早鞆の瀬戸をわたって豊前小倉に到着したのは、この月の二十八日だった。



同月二十六日、統虎のもとに秀吉からの書状がとどいた。

「この二十七日には秋月の城を攻める。ついては手勢をひきいて参陣するように」

とあった。

ただし、秀吉の予定はわずかに狂った。秋月の本城古処山城を攻めるまえに、豊前、豊後の国境にある秋月城の前衛、岩石城を攻略することにしたからだ。

岩石城は標高四百四十メートル、名のごとく全山が岩におおわれている。秋月種実は、この城に芥田六兵衛、熊見越中守久重の両将を入れ、三千の兵で守らせていた。

六兵衛は十六貫（六十キロ）の鉄棒をかるがるとふりまわす剛の者との評判が高い。

「九州の田舎武者に、わが上方勢の豪気な戦ぶりをみせてやろう」

芝居っ気のぬけない秀吉は、おのれの戦力を誇示する目的もあって、急遽、岩石城を九州における城攻めの第一号にえらんだのだった。

四月一日早暁、大手から蒲生氏郷、搦手から前田利長、後詰に羽柴秀勝、細川忠興、加藤清正、中川秀政らの兵一万を配して、一気に攻めかからせた。

城方は山腹の岩かげから大木や大石をころがして必死に防いだが、さすがに秀吉が自慢するだけあり、百戦錬磨の攻城軍は巧みに応射しながら一歩ずつ着実に攻めのぼった。昼すぎには芥田、熊見の両将も討ち死にし、背後の宝ケ岳からの奇襲にも失敗した城方は、彦山川ぞいに逃げるところを羽柴の兵に捕捉され、大半が討ちとられた。申の刻（午後四

時前後）まえに、戦闘はおわった。

岩石城から西方三里の大隈城（益富城）で形勢をみまもっていた種実は、頼みとした堅城が一日たらずで攻めおとされたのにおどろき、夕闇にまぎれて古処山城に逃げこんだ。

翌二日、秀吉は無人となった大隈城に入った。この城は種実の隠居城だったが、退散にあたり、種実はあわただしく破却して去った。

秀吉はさっそくに近隣から調達した戸障子、襖などで外壁をおおい、奉書紙を張りめぐらして、まるで一夜で白亜の新城を築いたかにみせかけた。墨股に一夜城を築いた秀吉からすれば、造作のないことだった。

古処山城には、筑、豊、肥からの応援をふくめて二万五千の兵が詰めていた。が、関白の五万の軍勢が夜陣にあかあかと焚き立てる篝火の渦におびえ、ひそかに逃亡する兵が続出した。

「かの関白どののやることは、けたちがいじゃな」

種実は当主の種長をかえりみて、大きなため息をついた。

「上方勢は化粧軍となめてかかっておりましたが……」

「みるときくでは大ちがいよ」

いいながら、種実はちらと恵利暢尭の顔をおもいうかべた。

秀吉が九州遠征の軍を起こしたと知った種実は、暢尭に命じて敵情視察にむかわせた。



暢尭は関白軍の陣容をつぶさに偵察してもどり、そのけたはずれの戦力をくわしく説明して、

「とてものことに、われらが敵うあいてではありませぬ」

一日もはやく講和することを、つよく進言した。

「臆病風に吹かれて目が狂うたか」

種実は罵倒して暢尭の意見を退けた。

暢尭はなおも諫言しようとしたが、種実に容れられぬまま、ついに腹を切った。妻子もこれにつづいていのちを絶った。そのとき種実は、ただ、短慮者めが、と苦々しくおもっただけだった。

――暢尭の意見に狂いはなかった。

いまになって認める気になったが、すべては後の祭りである。

「たしかに軍装も派手じゃが、戦ぶりも豪気じゃ。まずもって馬や鉄砲のかずからしてちがう」

種実は、さらにふかくため息をついた。

「われらと島津どのが力をあわせても、敵いませぬか」

「まずは歯が立つまいよ」

「くやしゅうございますな」

「くやしいが、これも時のながれというもの」
「戦わずして降伏なされますのか」
「このうえ戦えば、名族秋月家はほろびる」
種実は秀吉の本陣に使者をおくって降伏をねがいでた。
「降伏をもうしでれば、ゆるされるとおもうてか」
秀吉は、つめたくいいはなった。
「わしが、わざわざ九州まで出張ってきたのは、種実と義久の首をとるためだ。早々に立ちもどって、そうつたえよ」
使者が復命するのをきいて、
「関白どのが、そういうたか……」
種実は絶句した。
「わしの首ひとつでゆるされるなら、さしだしてもよいが、一族ことごとくほろぼされたのではむだ首になる」
「かなわぬまでも、秋月三十六万石の意地をみせますか」
種長が悲壮な声をあげた。
「意地もよいが、しょせんはむだ死にじゃ」
「そう弱気になることも……」



ないのではないか、とわかい種長は不満げにいいかえしたが、種実は無視して、
「一つだけ奥の手がある」
といった。
「奥の手、でありますか」
「さよう。まず、おぬしともども坊主になる」
「坊主になったくらいでは、ゆるされますまい」
「あわてるな。坊主になって人質をさしだす」
「それがしが、まいりましょうか」
「ぬしではだめじゃ。あやをだす」
「妹を？」
「さいわいと、あやは器量よしじゃ。いろ好みの猿どのには効き目があろう」
「あやを人身御供（ひとみごくう）に……」
「それだけでは、まだたりるまい」
「まだ、なにかありますのか」
「しかたがない。あれをくれてやろう」
「あれを？」
「こんなことで手ばなすつもりはなかったが……」

「あっ、楢柴でありますか」
種長は、おどろきの声をあげた。
「そうだ。かの楢柴を猿どのに献上する」
「しかし、あの肩衝は父上がいのちよりたいせつにしてまいられた秘蔵の品」
「とはいうても、われらがいのちにはかえられぬ」
種実は力なくわらった。
楢柴の肩衝は、唐物の肩衝型の茶入で別名を博多肩衝ともいう。楢柴の銘は釉薬のいろがあざやかに濃いので、『万葉集』にある、〔御狩りする雁羽の小野の楢柴の馴はまさらず恋こそまされ〕の古歌にちなんでつけられたものといわれる。
ともあれ、初花、新田の両肩衝とともに、天下の三名物の一つとして喧伝された逸品である。はじめに、これを所有していたのは平戸の松浦鎮信である。それを博多の豪商島井宗室が金百枚で買いとって秘蔵した。
数奇者の大友宗麟が、さっそくこれに目をつけ、あの手この手で譲渡をせまったが、
「これだけは……」
宗室は、ついに首を縦にふらなかった。
じつは、秀吉もこの名器に執着した一人で、宗室の茶の師匠である千宗易をとおして、なんとか入手しようとしたが、はたせないでいた。



その楢柴が、いま種実の手中にある。しぶる宗室を脅迫し、三千貫（数億円）の価値といわれた名器を大豆百俵とひきかえに強奪どうようにして手に入れたものだった。
信貴山城主の松永弾正は秘蔵の平蜘蛛の釜を信長にわたさぬために、ふところに抱いて自爆してはてたが、種実はそこまで依怙地になるつもりはない。秀吉にさしだすのは断腸のおもいだが、さりとて秋月一族の命運にはかえられない。
――秀吉のゆるしをうるには、これしかない。
種実は覚悟をきめた。
四日になって、あおあおと剃りたてた坊主頭に墨染めの衣をまとい、関白の本陣を訪れた秋月父子は、秀吉のまえにがばとひれ伏した。二人の背後に十五、六歳の娘が、ひっそりと手をつかえている。日ごろ種実が自慢にしている器量よしの愛娘だった。
「ほう、坊主に化けてきおったか」
秀吉は気がるに声をかけた。
機嫌はわるくない。両眼はひたと種実が両手のあいだにおいた錦織りの仕服にむけられている。
「なにとぞ、ご憐憫をもちまして、われらが前科をおゆるしたまわりたく……」
種実は衣の肩をふるわせて、ひたすら懇願した。
「関白の命令に服さず、島津とともにあまたの悪行をはたらいた罪、坊主首二つくらいで

はつぐなえぬわ」

一転、底鳴りのする声で秀吉は凄味をきかせた。

「ははあっ。まことにもってもうしひらきのしようもござりませぬ」

「もうしひらきなど、きく耳もたぬ。そもそも、そちは向背さだまらぬ曲者ゆえ、詫び言からして端から信じてはおらぬ」

「いかにしたら、誠心を信じていただけましょうや」

「実を示せ」

秀吉は、ふたたび錦の仕服に眼をやり、苛立った口調でいった。

「されば……」

種実は、かすかに頭をもたげ、件の仕服をうやうやしく秀吉の膝前にさしだした。

「楢柴か」

秀吉はこらえきれずに、自分から楢柴の名を口にした。

「御意。それがしがいのちよりたいせつに秘蔵してまいった名器にござりまする」

「存じておる」

「わが誠意の証として献上いたしまする」

「わしに、くれるとか」

「さようにござります。ほかに金百両、米二千石を軍費としてさしだしまする。さらに人



質として、不束者ながら、わが娘をひきつれましてござります」

秀吉は楢柴にそそいでいた熱い眼を、わずかにあやのほうにむけて、

「面をみせよ」

といった。

あやは恥じらいながら上目づかいに秀吉をみた。かすかに頬が紅潮している。

「美形じゃな」

秀吉の眼端に、ちらりと好色のかげがはしった。

「よろしい。ゆるす」

秀吉は現金にいった。

「ありがたき幸せ……」

父子は涙まじりの声を発すると、額を地面にこすりつけた。

その頭上から、秀吉は厳命した。

「これより、島津攻めの先鋒もうしつける」

「ははあっ。うけたまわってござりまする」

――これで九州遠征の目的の過半は達した。

楢柴を両の掌でいとおしげに愛でながら、秀吉は五体の底からわきあがってくる歓喜の情をおさえることができなかった。

その猿面に、皺とともにうかびあがってくる笑みをこらえながら、
「種長」
秀吉は息子のほうに声をかけた。
「ははあっ」
「そちは、謡がうまいそうじゃの」
「いえ、ほんの座興芸であります」
「きかせよ」
秀吉はいった。
「それは……」
二十一歳の青年武将は白皙の額をあげ、ちらと父の顔をみた。
――いかに降人とはいえ、このような場で遊芸人のようなことをさせられるとは。
屈辱に五体がふるえている。
――かまわぬ。うたえ。
種実は眼顔で種長をうながした。
「されば……」
種長はうたいはじめた。
哀調をおびたそのうた声は、ときおりくやし涙でかすれた。



## 2

この日四日夕刻、秀吉は古処山城に入った。
建仁三年（一二〇三）いらい、十五代四百年にわたって秋月氏が本城としてきた古処山城は、鬱蒼たる黄楊の木におおわれた標高八百六十メートル余の山上に築かれ、頂上付近は白い石灰岩が露出して奇怪な様相をていしている。
この城に立花統虎が二千三百の兵とともに到着したのは、翌五日の早朝だった。
統虎は浅野長政をとおして秀吉に謁見をねがいでた。
おりから、秀吉は唐織りの掻巻に身をつつみ、近侍に鉄漿をつけさせているところだった。秀吉は先年、関白、つまり最上級の公家になったので、戦陣にあっても公家ふうに化粧し、鉄漿をつけたのである。
「おう、立花がきたか」
気がるに立ちあがると、秀吉はそのままの格好で統虎を引見した。
型どおりの挨拶をしようとする統虎を制して、
「うむ。さすがに、よい面がまえをしておるわ。このたびのみごとなはたらき、ほめてつかわす」

満面に好意をあらわして秀吉はいった。それから、

「ちょうどよい。みなの者に紹介しよう」

よほど統虎が気に入ったらしい。秀吉は、つと立ちあがると統虎の肩衣の襟もとをつかみ、拉致するようにして大広間にむかった。

「このわか者を知っておるか」

居並ぶ大名たちをみまわして、秀吉はせきこむようにいった。

「この者こそ立花左近将監統虎じゃ」

「おおっ」

期せずして、大広間に嘆声がひろがった。

「この者は、終始わが下知にしたがい秋月、島津のやからと戦うて岩屋で死んだ高橋紹運の倅じゃ。若年にもかかわらず、父が討ち死にした後も堅固に立花の孤城を守りぬき、島津勢が退却にかかるや、臆せず追撃して多くの敵を討ちとったばかりか、高鳥居城の星野兄弟を屠り、さらには岩屋、宝満の二城をも奪回した。まことにもって忠勇のはたらきは鎮西一ともうすべきじゃ。上方にもこの者ほどのわか者があろうとはおもえぬ」

秀吉は口をきわめて絶賛した。

日ごろから〝人たらし〟といわれ、人をほめるのは得意の秀吉だったが、有力大名の居並ぶまえで、二十歳になるかならぬかの若造を、これほど手ばなしに激賞した例はない。



統虎は慎みぶかいわか者である。面を伏せ、ひたすら恐懼して秀吉の褒辞をきいた。

父も舅も、きびしさを絵に描いたような古武士然とした人物だった。それで、少年のころから、このようなほめられ方をしたおぼえはない。それだけに、秀吉の褒辞に頭の芯がとろけるような気分におちいった。

むろん、初対面の統虎は、秀吉が〝人たらし〟の天才などということは知らない。ただ、

――これが上方流というものか。

とおもっただけだ。

「おぬしに会うたら、やろうとおもうていた」

秀吉は、せかせかと近侍に命じて三尺余の太刀をもってこさせ、さらには自分の愛用する鞍をおいた蘆毛の駿馬を曳いてこさせて、ともにあたえた。

「身にあまるご褒美……」

統虎がひれ伏すと、

「なんのこれは、ほんのまにあわせの引き出もの。島津討伐には先陣して、さらにみごとな手柄を立てるがよい」

秀吉は鉄漿のついた黒い口をぱくぱくさせていった。

さらなる恩賞をくれるという意味であろう。置眉の下のくぼんだ眼窩の奥から優しく瞳

が笑みかけてきた。

秀吉には子どもがいない。それだけに、できのいい気に入りのわか者に会うと、つい好々爺然と目尻が下がってしまうらしい。

とまれ、関白という最上級の貴人から最大級のほめことばをもらい、統虎は大いに面目をほどこして退出した。心底、うれしかった。おさえようとしても五体がうき立ち、まるで雲の上をあるいているような気分だった。

――この新しい主のために、父と舅の分も忠義をつくさねば……。

統虎は高鳴る胸にいいきかせた。

「謁見は、上首尾におわったようでござりますな」

薦野三河守が、すりよってきて微笑みかけた。

「うむ」

うなずいてみせながら、

「関白さまより、島津攻めの先鋒を仰せつかった」

統虎は頬をひきしめて告げた。

「大殿の弔い合戦、われらもはたらきまするぞ」

三河守は大きくうなずきかえした。

「たのむぞ」



古処山頂の空に、初夏の叢雲が湧き立っている。

――父上、舅どの。統虎はお二人の死をむだにはいたしませぬ。

統虎は、あらためて胸中に誓った。

本丸から望む筑紫野は、一面まぶしいばかりの黄金の麦秋である。

## 3

関白軍の先鋒として統虎は五千の兵をあずけられ、手勢とあわせ七千の軍団をひきいて勇躍出陣したが、ほとんど戦らしい戦はなかった。

九州の諸将は戦わずして、みな降伏したからだ。

五島の松浦党をはじめ、龍造寺、筑紫、麻生、草野、宗像、原田らの諸氏は踵を接して降ってでた。

立花、秋月の先鋒に、これらの兵をも加えた関白軍は、四月十一日、高良山を発して南下した。十三日、島津方の有力な防衛拠点とみられた隈本城も、城主の城久基がはやばやと人質をさしだして開城した。

秀吉は宇土、八代、佐敷、水俣と、ゆるゆると肥後を南下し、出水から薩摩に入って同二十五日、川内にいたり、川をさかのぼって太平寺に本陣をおく。

島津義久がわずかに十五人の従者をつれ、秀吉の本陣に降伏してでたのは五月八日だった。

義久の本城のある鹿児島から大平寺まではほぼ十三里の道のりである。川内への途次、義久は伊集院の雪窓院に立ちより、生母にわかれの挨拶をした。それから、髷をおとし剃髪して墨染めの衣に着がえ、名も龍伯とあらためた。

すでに五日まえに、家臣の河野通貞をとおして降伏をもうし入れ、秀吉のゆるしをえてあったが、会見のなりゆきでは切腹もありうると覚悟してのことだった。

僧形でひれ伏す義久をまえにして秀吉は寛大だった。

「降伏のもうし入れは、先日使者よりきいた。当方に別儀はない」

「ご鴻恩……」

衣の肩をゆらして義久は、さらにふかく叩頭したが、

「まずは、お手をあげられよ」

秀吉は優しげに声をかけた。

降将とはいえ、あいては九州の盟主である。徹底抗戦を主張する弟の歳久や大口城主の新納忠元、平佐城主の桂忠昉などをおさえて、早々に降伏を決断した義久の分別を、

（さすが、ただの田舎大名ではない）

秀吉は高く評価していた。



当初から、秀吉は島津をほろぼすつもりはなく、できるだけ血をながさず屈伏させればよい、とかんがえていた。

そもそも、こたびの九州遠征は島津討伐だけが目的ではなかった。秀吉の胸中には、より遠大な企図が秘められていた。

朝鮮出征。

かつて主人信長に語った、唐天竺への遠征を秀吉は本気でかんがえはじめている。九州遠征は、その瀬踏みの一端にすぎない。

唐天竺への遠征ともなると、島津の強兵は最大の戦力となる。ここで、総帥の義久に出家されてはこまるのである。

「お腰のあたりが、さびしゅうござろう」

秀吉は義久によびかけ、近侍に命じて備前包平の大刀と三条宗近の脇差をもってこさせると、手ずから義久にあたえた。

（これが天下人の器量というものか）

義久はおしいただきながら、

（負けた）

戦の敗北だけでなく、人間としての勝負にも負けたことを認めざるをえなかった。五体がわなわなとふるえ、おさえようもなく両眼から涙がしたたりおちた。

秀吉は義久の十五歳になる娘亀寿を質にとっただけで、従前どおり薩摩、大隅、そして日向の一部の領有を認めた。義久が予想もしない寛大な処置だった。

退出して陣幕のかげで小憩するところに、一人の青年武将が声をかけてきた。

「立花左近将監統虎でござる」

「おう、そこもとが立花どの……」

義久はおもわず床几から腰をうかした。

「せんだっては、わが愚弟をぶじお引きわたしいただき感謝いたします」

統虎はていねいに腰をおって礼をのべた。

「当方こそ、かずかずのご無礼、ひたすら恥入るのみです」

統虎に丁重にでられて義久は眼のやり場にこまった。

統増夫妻を立花城へおくりとどけるとの宝満城での約定を反古にし、肥後の吉松まで拉致しただけでなく、さらに撤退とどうじに薩摩の祁答院までつれてきて幽閉させたのは、ほかならぬ義久自身だった。

統虎は薩摩へむけて進軍する途次、十時摂津守を使者に立て、統増夫妻の引きわたしを交渉させた。義久はまだ抗戦か降伏か態度をきめかねていたときだったが、

「返してやれ」

統虎の要求に応じた。



関白軍の怒濤の進撃をまえに、いまさら統増夫妻にこだわってみてもしかたがない。むしろ、もとめに快く応じて、秀吉お気に入りの統虎の心証をよくするほうが得策と判断してのことだった。

その統虎から、あらためて慇懃に礼をいわれて、義久はおのれの心底をみすかされたような恥ずかしさをおぼえた。

しかし、統虎の眼には、いささかの皮肉も意地わるさもこめられてはいない。あの肥後相良家の剣客丸目兄弟が感嘆した、一点の濁りもない涼やかな瞳で微笑みかけている。じじつ、統虎にはいまさら島津の違背をなじる気など毛頭なかった。

弟夫妻が無傷で返されてきた。それだけで充分だった。すべては戦ごとの駆け引きのうえで起こったことだ、とわりきっている。

ただし、統増夫妻は難なくもどってきたわけではない。

新妻かねは、途中、貞操の危機にさらされた。

祁答院は川内川の河口から六里ほどの上流にある。

十時摂津は、島津方から統増夫妻をうけとり、急ぎ川ぞいにくだった。夫妻にはともに囚われの身となっていた十数人の家来と女中衆がいる。

川岸に船がかりしていた関白軍の軍船の兵たちが、めざとく女たちのすがたをみとめて、

「女だっ」

いっせいに、いろめきたった。

伝馬船にのって漕ぎよせる者、ざんぶと川にとびこんで泳ぎつく者。なにしろ戦国である。つらい戦務に耐える雑兵の唯一の楽しみは、略奪と暴行にある。

「味方だっ、狼藉はゆるさぬぞ」

摂津守は大手をひろげて立ちふさがったが、欲望に駆り立てられた兵たちの耳にはとどかない。

摂津守は、兵がのりすてた伝馬船にとびのって親船に漕ぎよせ、

「大将どのにもうしあげる。われらは筑前立花城主、左近将監の手の者にござる。関白さまの下知にてまかりとおる者……」

大声によばわった。

関白の名が功を奏し、船手組の大将の制止でようやく狼藉はおさまったが、すでに幾人もの女たちが、獣と化した兵たちに凌辱された後だった。

「かねも、やられたか」

統虎は、眉をひそめて摂津守に質した。

「あやういところを、危難をまぬがれてござります」

「ふーっ」



摂津のいらえをきいて、統虎は安堵の吐息をもらしたものだ。

戦場では味方とて油断はならない。もし、かねが雑兵の欲望の犠牲になっていたとしたら、これからの弟夫婦の仲はどうなったことか。まちがいなく自分と闇千代とのあいだ以上に、むずかしい関係となったことだろう。

こんなことがあったとは、むろん義久にいえることではない。いってみてどうなることでもない。

「このうえは過去のいきがかりをすて、ともに関白さまにつくしましょう」

とだけ、統虎は義久に告げた。

## 4

この日、豊後津久見の宗麟館で、葬儀がとりおこなわれた。

宗麟の葬儀であった。

二日まえの五月六日、宗麟は神に禱りをささげながら五十八年の生涯をとじたのだった。

この三月の秀長軍の来援により、府内や臼杵城を占拠していた島津家久の兵はなだれをうって豊後から逃れていった。

大友家滅亡の危機は去った。

義統が先鋒となり、二十万になんなんとする秀長軍は、逃げる島津軍の後を追尾して日向に攻め入った。

戦況は刻々と臼杵城内の宗麟のもとにもたらされた。いずれも大友家にとって喜ばしい報せばかりだった。現金なもので、島津方に寝返った家中の有力武将たちも、あいついで帰参をねがいでてきた。

秀吉からは内々に、豊後一国を安堵すること、宗麟にはとくに隠居料として日向をあたえる旨いいおくってきた。

しかし、宗麟は、これらのことにあまり関心を示さなかった。隠居料としての日向ももらうつもりはなかった。

かつては日向の無鹿（むじか）にキリシタンの理想国をつくろうと夢みた宗麟だったが、

（もはや、わしにはその時間がない）

力なくため息をつくばかりだった。

ただ一つの関心は、みずからの魂が神に救われるかどうか、だけだった。

島津軍の侵攻いらい、領内のバテレンのほとんどは山口その他に難をさけ、宗麟のもとにのこっているのはラグーナ、レベロ、フランシスコの三人だけである。

これらのバテレンをあいてに、宗麟は熱心にデウスや魂についての質問をくりかえし



た。

「われらの誠の友である王は、神にもっともちかい聖徒です」

バテレンたちは、口をそろえて宗麟を慰めた。

そんな宗麟にとって、もっともうれしかったのは、この年三月、義統がキリスト教に入信したことだった。洗礼名はコンスタンチノ。

どうじに義統の夫人、嫡子義乗（よしのり）と二人の娘も受洗した。

それまでは、宗麟がいくら入信をすすめても言を左右にしてきき入れなかった義統だったが、急に山口からペトロ・ゴメスをよびよせ、豊前の妙見（みょうけん）山城で洗礼をうけたのだった。

「それもこれも、官兵衛どののおかげよ」

宗麟は黒田孝高に感謝した。

秀長軍の軍監、官兵衛孝高は熱心なキリシタンだった。そのせいもあって、バテレンを手厚く庇護する大友家に肩入れしてきたが、当主の義統が父宗麟としっくりいかないのは、かれが入信しないせいだとして、義統にしきりに入信を説いた。

官兵衛は秀吉の軍師役をつとめる実力者だ。説得力があった。それに加えて、この春、最大の反対者だった生母のイゼベルことまさが亡くなり、反キリシタンの重臣たちの多くもまた島津方にはしったため、周囲に表立って反対する者もいなくなった。優柔不断の義

統にとっては、入信にふみきる格好の条件がととのったわけだ。

理由はともあれ、自分の後継者がキリシタンになったことで、宗麟はふかい安息をえたのだった。

島津軍に臼杵城を包囲されたころより、宗麟はしばしば床に臥せるようになっていた。わかいころからの過淫がわざわいしたか、宗麟はつねにけだる気だったが、家勢が斜陽にむかうとともに、急速に生気も根気もなくし病をふかくした。

この四月のすえいらい、宗麟は発熱していたが、五月に入ると、どうしても津久見の隠居所にいきたいといってきかなかった。バテレンのラグーナらにつきそわれて津久見におもむいた三日後、宗麟は胸に手をあわせて禱りをつづけながら息絶えた。

葬儀はいあわせた三人のバテレンとイルマンのジョアンによって執行された。義統は出陣中で参列できなかったが、在国の武将の多くがあつまり、棺を担って墓所へむかった。棺のまわりには多数のキリシタンが十字架を奉じてつきしたがった。

この月十八日、秀吉は大平寺から凱旋の途につき、六月六日、太宰府にいたり岩屋城を視察した。

「救援がおくれて、そなたの父には気の毒なことをした。紹運どのを失ったのは、かえすがえすも惜しい」

熊蟬の鳴きしきる本丸に立って、秀吉はしみじみとした口調で統虎にささやきかけた。



翌七日、秀吉は博多から二里余の筑前箱崎に入って本営をおくと、二十余日滞在した。その間に九州の新たな国割りをすませ、島井宗室、神谷宗湛らの豪商をよんで博多の復興の協力をとりつけ、さらには対馬の宗義調、義智父子に朝鮮国王に来朝をうながす使者をだすよう命じた。

秀吉は本気で外征にのりだす気だった。

――まことの天下どりとは唐天竺までを制すること。

で、朝鮮には明国への橋渡し役をさせる。

いよいよ渡海となれば、九州が足がかりになる。ことに博多はその拠点として重要だった。

そこで、博多の新しい町割りにはことのほか力を入れ、楽市楽座の制をしいて商業の発展をはかろうとした。

さらに、もう一つ、かねがね胸中におさめていた施策を公表した。

キリシタン禁教令である。

秀吉は十九日夜、バテレンやポルトガル商人が、社寺を破壊してキリスト教への入信を強制し、牛馬を食らい、日本人を奴隷として買いとっていると日本イエズス会の準管区長ガスパル・コエリヨあての詰問状を発し、翌朝、本陣に諸大名を召集して禁令をつたえた。

「このまま布教をゆるせば、亡き信長公を苦しめた本願寺の坊主とおなじことになろう。

大坂の坊主は下々があいてだったが、バテレンは大名、貴族をひき入れているので、さらに危険である」

と秀吉は演説した。

キリシタン大名の多い九州、ことに博多にきてみて、そのおそるべき浸透ぶりにあらためて脅威をおぼえた秀吉は、かねて構想してきた大陸侵略にのりだすにあたり、キリスト教を邪教として排除し、日本は神国であるというイデオロギーを強調することで、みずからの国家づくりの理念を明らかにしようとしたのだ。

とまれ、大友宗麟が、この禁教令を知るまえに他界できたのはしあわせだった、といってよい。

病みおとろえ、ひたすら神に救済されることのみをねがった宗麟には、もはや高山右近のようにキリスト教に殉じて大名の身分をすてるだけの勇気も、また黒田孝高や小西行長のように巧みに転身する現実的対応もできなかったであろう。

秀吉の禁令をききながら、統虎が第一番におもったのもそのことだった。

（その点、義統さまは、さほど苦悩なされることもあるまい）

万事に優柔不断で、ものごとを自分の意思できめることができないと、舅の道雪や父の紹運が生前、歎いていたのを統虎もきいている。

（それだけに、ながれにまかせて信仰もうやむやになさるにちがいない。そして、それが



義統さまにとってはいちばんよい身の処し方になるのではないか）

と統虎はおもったのだった。

九州引き揚げの期日のせまった二十五日、秀吉は従軍の諸将をあつめて慰労の茶会をもよおした。

義久も統虎も招ばれて同席した。

「こうして同座しておると、つい先だってまで立花どのと角逐しておったのがうそのようだ」

義久は、剃りあげた坊主頭をかたむけて、わるびれず統虎に語りかけた。

「まこと、さようでありますな」

統虎も真直にうなずきかえした。

「それにしても、立花どのは若年に似ぬ、ほれ惚れするばかりのよか武者ぶりでごわすな。独身でござったら、この龍伯の娘をぜひもろうてほしいところじゃが、しゃっ、おそすぎた」

薩摩ことばをまじえ、義久は膝をゆすってかる口をきいた。

降将の卑屈さなど微塵もみられない。統虎も義久に好意をおぼえ、

「縁組みはともあれ、向後ご昵懇にねがいまする」

微笑みかえした。

# 柳河城

## 1

「あたくしはいきませぬ」
閶千代は、いいはった。
「なにを駄々っ子のようなことをいうておる」
統虎は眉をひそめた。
「ここは、わたくしが生まれ育った城です。だれにもわたしたくない、といったでしょう」
「そなたの気持ちはわかるが、現実はおもいどおりにはいかぬものだ」
「男はいつもそういって女の気持ちをふみにじってきた」
「わしが望んでしたことではない。すべては関白さまのご差配なのだ」



「どうして、おことわりにならなかったのですか」
「関白さまの国割りに、わしらが異論をさしはさめようか」
「あなたは関白さまのお気に入りでしょう」
「それとこれとはちがう」
「しょせんは、自分のことしかかんがえていないのですね」
「そなたの頑固は、ときにかわいいとさえおもうてきたが、きょうはいささかあきれはてておる」
「頑固は父ゆずりです」
「とおもえばこそ、わしもがまんしてきた。しかし、そなたの頑固は筋がとおらぬ」
「いえ、わたくしは筋をとおしています。わたくしは、あなたとともに父ののこしたこの城を島津の手から必死に守りぬいた。そのことは関白さまもご存じでしょう。それをなにも、無下にとりあげて、他人の手にわたすことはないではありませぬか。筋がとおらないのは関白さまや、それをうけ入れたあなたのほうです」
「城は、われらにとってあずかりものにすぎぬ。この城とて、もともと舅さまが豊後のお屋形からあずかったもの」
「そのくらいのことはわかっています。そのあずかりもののこの城を、これからもあずからせてほしいと、なぜ関白さまにねがいでてくださらなかったのかというているのです」

「それは、できぬことだ」
「なぜ、できぬのです」
「そのくらいのことが、なぜわからぬというておる」
「わかりませぬ」
闇千代は、はげしく首をふった。
二人の争論は立花城立ち退きをめぐって、である。
島津を降して博多に引き揚げた秀吉は、六月、筥崎八幡宮であらたに九州全土の領地割りをおこなった。
統虎は筑後国の三池、山門の二郡に下妻、三潴郡の一部をあわせた十三万二千石の封をうけ、柳河を居城としてあたえられた。おしもおされもせぬ大名に列せられたわけだ。弟の統増にも筑後三池郡のうち一万石があたえられ、江ノ浦城主に任じられた。
統虎にたいする秀吉のなみなみならぬ好意のあらわれといってよい。
しかし、闇千代は気に入らなかった。立花城が筑前国ほか筑後と肥前の二郡の領主に任じられた小早川隆景にあたえられたことが不満なのだった。
で、自分は立ち退かないといって統虎をこまらせた。
「領地などすくなくてもいい。父の眠る立花の地にのこりたい」
と。



統虎はすでに家老の小野和泉に城戸豊前、八尋民部、扇掃部の三人をつけて柳河城のうけとりにおもむかせている。いつまでも、闇千代のわがままにつきあっているひまはないのである。
それでもなお、統虎は根気づよく闇千代を説得したが、ついに闇千代は首を縦にふらない。
六月半ば、統虎はいたしかたなく闇千代をのこしたまま城をでて柳河にむかった。
沿道には土地の民百姓が総出で見送った。涙ながらに手をふる者もいる。道雪いらい二十年ちかくにおよぶ立花家の善政を惜しんでのことだった。
統虎は去った。ほとんどの家臣も二日、三日と間をおいて新領地へ出立していった。小早川家の城うけとりの使者もすがたをあらわした。
ことここにいたっては、闇千代とていつまでも意地を張りとおすわけにはいかない。
統虎の意をうけて残留した世戸口十兵衛に背をおされるようにして、闇千代はとりまきの女中衆をつれ、城をでて柳河にむかった。
出発にさきだち、闇千代は父道雪の墓に詣でて供花をたむけた。
「お父さま、この地をすてて旅立つわたくしをおゆるしください」
ここまでは、いかにもしおらしかった。が、その後、闇千代は父の墓碑にむかって、いささか毒づいた。

「婿どのは、わたくしをおいて、さっさと任地にいってしまいました。あのような男を婿におしつけたお父さまがわるいのです」

それから、かたわらの祖母養孝院の墓にむかって告げた。

「闇は、いまだに、あの男を愛しているのかどうか、わかりません。でも、いたしかたありません。この世のしくみは、女一人で生きていけるようにはなっていないのです。でも、闇は負けませぬ。女をただの従者の一人としてしかかんがえていない男どもと、これからも戦いつづけます」

## 2

秀吉は、九州の国割りで、立花、小早川のほかに、龍造寺政家には旧領を安堵し、筑紫広門に筑後一郡を、秋月種長に日向二郡を、そして黒田孝高に豊前六郡を、佐々成政には肥後一国をあたえた。

その佐々成政の領国肥後で、七月、国衆の一揆が勃発した。

肥後は守護の菊池氏がほろんだ後、五十二人の国衆がおのおの割拠していたが、九州平定のおり秀吉から、それぞれ本領を安堵されていた。

秀吉は成政に肥後の支配をまかせるにあたり、これら国衆を刺激しないため三年間は検



地をしないよう命じた。にもかかわらず、成政は入国とどうじに強引に検地を実施しようとした。俄然、国衆は決起して成政に反抗した。

まず、隈府城主の隈部親永が叛乱を起こし、成政はこれを攻めて降したが、その子の親泰が、親類の山鹿城主の有働大隅守兼元と連帯して強硬に抵抗した。筑後と肥後の国境にある南ノ関の大津山出羽守らの国衆たちも決起し、これらの一揆勢にかこまれた佐々方の平山城は餓死寸前に追いこまれた。

困じはてた成政は、まず肥前の龍造寺政家の重臣、じっさいは主人以上の実力をもつ鍋島直茂に救援をもとめた。

直茂は七千の兵をもってすぐに救援にむかわせたが、途中に待ち伏せした一揆勢の奇襲をうけ、さんざんの敗北のすえ、兵糧までことごとく奪われてしまった。

成政は、統虎にも援助を要請した。重ねて大坂の秀吉からも、九月半ば、肥後救援におもむくよう指令がきた。

国替えになったばかりで寸暇も惜しい日々だったが、なにごとも手ぬきをしないのが統虎のやり方だ。全力をあげ、誠意をつくして隣国の救難にあたろうとした。

そこで、統虎は出陣にさきだち、さきに鍋島勢の兵糧輸送にあたった人夫をよびだして、どのようにして一揆勢に襲われたかを、じきじきにくわしく質した。

「平山城への道筋には両がわにふかい竹林がつづき、敵はそのなかから矢弾をはげしく射

かけて、糧秣を奪いました」

「なるほど、竹林に潜んでおったか」

統虎はさらに、山鹿城や大津山勢の籠もる蟇ガ嶽城のようすをくわしくさぐらせた。

そのうえで内田壱岐、十時摂津、小野和泉、由布上総、森下備中、立花次郎兵衛、後藤隼人、原尻宮内、石松安兵衛ら錚々たる歴戦の将に、統増を加えた兵八百余をひきつれて出陣した。

早暁、統虎は肥後南ノ関まですすんで小憩した。この地は、ついさきごろまで母宋雲尼が島津によって幽閉されていたところである。北東に大津山が望まれ、山麓を関川が蛇行している。鶏鳴のきかれる山間の村だ。

統虎は、ここで兵を三手にわかった。

まず一手をもって蟇ガ嶽城を攻めさせる。その間に他の二隊をもって前後から荷駄隊を援護し、平山城内におくりこむ。

平山城は平山川と岩村川にはさまれた標高百三十メートルの山上にあり、両川の合流するあたりに温泉が湧きでている。ここから蟇ガ嶽城は指呼の間にある。

蟇ガ嶽城を攻めて一揆勢の注意をひきつけ、その間に平山城を救援しようとの作戦であった。しかし、一帯の道筋はすべて一揆勢の監視下にある。たちまち立花軍のうごきは有働の兵を主力とする一揆勢に察知され、はげしい矢弾の洗礼をうけたが、統虎は、主軍の



三百の兵をもって、これらの妨害を巧みに排除し、ぶじ兵糧を城内にはこびこむことに成功した。

飢渇した城内の将兵は歓喜の声をあげて立花隊を迎え入れた。涙をながし、立花の兵を両手をあわせて伏し拝む兵もいる。

その喜びようを眼前にして、統虎は久しぶりに心地よい気分にひたった。

（殺しあいだけが戦ではない）

統虎はおもう。

城内の将兵は自分とは直接利害関係はないが、知恵をしぼり、全力をつくして、かれらを飢餓地獄から救うことができた。武人として、これ以上の喜びがあろうか。本来、戦とは人のいのちを救うためにするものなのだ。

（わが道、みえたり）

統虎は、おのれの武人として生きる道に、一条の曙光をみいだしたおもいだった。

「殿っ」

物見にでた原尻宮内が具足に、籾殻のように草の実をつけてもどってきた。

「有働め、かんかんになって怒っておりまするぞ」

「であろうな」

「殿お一人を標的に、三段に兵を埋伏させて待ち伏せしております」

「それは厄介だのう」
「なに、われらが殿の弾除けに十重二十重に守護いたしますれば……」
「それでは、わしは安泰だが、味方を多数損ずることになる」
「殿のおんためならば、われら喜んで死にまするぞ」
石松安兵衛が宮内の背後から、ぬっと髭面をさしだしてさけんだ。
「ありがとうよ。とまれ、敵に計略があるとすれば、こちらも奇兵で応じねばなるまいて」
統虎は部下に充分に休養をとらせると、兵を五陣にわけて、正午ちかく順次、平山城からおしだした。
まず、荷駄隊の人夫三十人ほどを先行させ、
「敵が大勢待ち伏せしておるゆえ、引き揚げはあす肥後の援軍を待ってとのことじゃ」
大声でしゃべらせながらすすませた。
——なんだ。敵の本隊が引き揚げるのはあしたか。
有働の伏兵たちは気ぬけし、すっかり油断した。
そこに、由布上総の指揮する先陣が疾風のごとく攻めかかり、ついで統虎を守護した第二陣、第三陣が馳せきたった。
——はかられたか。



一揆勢はあわてて矢弾を撃ちかけ、どっと立って迎えうつ。
「そら、まいったぞ」
立花の兵は槍先をそろえて立ちむかう。
手はずを狂わされた一揆勢は、二陣までたちまち切りくずされた。
それでも太田黒城主の大知豊前を筆頭に、鹿子木、蘆原、戸上某らの兵が、
「立花の小倅を討ちもらすな」
口々におめいて果敢に攻めかかった。
統虎のいでたちは、黒絲縅の鎧に、あざやかな五枚兜をいただき、黄川原毛の駿馬にまたがり、腰には道雪遺愛の名刀笈切りの太刀を佩いている。その勇姿はいやがうえにも目立ち、一揆勢の標的となった。
「なにを小癪なっ」
内田壱岐、十時源兵衛、立花次郎兵衛らが馬首をそろえて迎えうち、森下備中、十時摂津、石松安兵衛、安東五郎右衛門、原尻宮内らが統虎の馬前に立ちふさがって防いだが、やがて敵味方入り乱れての乱戦となった。
統虎は馬上に大長刀をふるって敵数騎を薙ぎおとした。そこに、敵の一将、有働下総守がするすると馬をよせるなり、長槍で統虎の左腕をしたたかに突いた。
「ものものしや」

統虎は豪胆にも右手で下総の槍の柄をたぐってひきよせ、鞍の前輪に下総の上体をおしつけざま、小刀をもって首を掻きすてた。

やがて、先手の兵がとってかえし、後陣の兵も駆けつけたので、敵将有働大隅守は、たまらず退却した。

「しばらく休息したいところだが、日が暮れては厄介だ。急ごう」

統虎は左腕の傷をものともせず、そのまま兵をすすめた。

目路のかぎりひろがる薄の穂が、午後の陽をあびて燦爛とかがやいている。

南ノ関をではずれたところで、大知豊前の留守を守る太田黒城の兵五百ばかりが待ちうけ、城のうえからはげしく矢弾を撃ちかけてきた。

統虎は、いったん退避するとみせて、

「敵は逃ぐるぞ」

城兵がうってでてきたところを、

「いまぞっ」

逆襲に転じて城内に攻め入り、激戦のすえにこれをおとした。

筑後の北ノ関に入るころ、すでに日はとっぷりと昏れていた。

長い一日だった。

この日、統虎は七カ所で十三度合戦し、一度も負けをとらず、敵の首級六百余を挙げた



が、味方百四十余が討ち死にし、統虎ほか五百余が手傷を負った。

かかわりのうすい佐々勢を救援するにしては大きすぎる犠牲といえたが、統虎は後悔しなかった。

あいてがだれであれ、あるいは目的がなんであれ、つねに手ぬきすることなく、全力をあげて対応する。これが青年武将統虎の真骨頂だった。

ただひとつだけ気になることがあった。一揆勢のなかに多くの百姓たちがふくまれていたことだ。国衆一揆とよばれてはいるが、じつは、名主、百姓たちの新政権にたいする反抗でもあることは明らかだった。

よそごとではない。統虎の新領地でも起こりうることだった。

（こころして、かからねばならぬ）

統虎は、わが胸にいいきかせた。

領主と領民との利害は一致しがたいものだ。しかし、強権をもって民百姓をおさえつけるやり方は領主のとるべき道ではない、と統虎はおもう。

武人として、民百姓に安易に刃をむけることは恥ずべきことだ。とはいえ、民百姓が自分に刃をむけてきたらどうするか。げんに、肥後だけでなく周辺の諸大名の領内にも、その兆しがみえている。自分の領内でも起こらぬという保証はないのである。

（日々、領民に顔をむけて生きていくことだ。そして領民が反抗して立つまえに、問題を

解決する。むずかしいが、それをやりとげるのが政治というものではないか）

自信はない。

が、柳河十三万石の新領主として統虎が、ぜひともやりぬかねばならぬことだった。

その後も統虎は小早川隆景らとともに、和仁親実（わにちかざね）、辺春親行（へばるちかゆき）らの籠もる肥後の田中城などを攻め、激戦のすえ年末ちかく、これを降した。

「天晴れの武功……」

ほどなく秀吉から感状がもたらされた。

## 3

満々と水をたたえた濠に、白い水鳥が群れている。

「では、いってまいる」

城門まえに居並んで見送る小野和泉以下にかるく会釈して、統虎は馬上の人となった。

天正十六年（一五八八）九月、柳河の空は晴朗で雲一つない。

「旅立ちには絶好の日和でございますな。なにやらよいことがありそうな」

供に加えられた世戸口十兵衛が、うれしげに朋輩に語りかけている。

十兵衛は吉弘本家の屋山城から紹運について岩屋城にうつり、統虎が道雪の養子になると、朋輩の太田久作とともに、年少の統虎の近侍として立花城に入った。

十兵衛は腕が立つ。が、近年はほとんど戦にでない。留守城を守り、内方の采配をふるうのが、おもな役目だった。とかく意思の疎通を欠きがちな主人夫婦の仲を斡旋するのもかれである。

先年、柳河へ国替えのときには、移転をしぶる閨千代のなだめ役として最後まで城中にのこり、その尻をおすようにして柳河城にうつってきた。

「ときには、戦の供をしとうござる」

いくども統虎に訴えたが、

「戦はだれにでもできるが、わしの留守をまかせられるのは、おぬししかおらぬ」

統虎は、いつもそういって留守役からはずしてはくれなかった。

「このままでは腕がなまり、いざというときお役に立てませぬわい」

といっても、

「なに、おぬしの役目は、わしが死んだら妻女の面倒をみてくれることだ」

いっこうにとりあってくれない。

「殿は、それがしを、いくつとおぼしめしか」

十兵衛は、すっかり白くなった鬢（びん）をふり立てて抗議したものだ。

その十兵衛に、統虎から声がかかった。

柳河城にうつってほぼ一年、領内の整備もようやく一段落し、統虎は秀吉に御礼言上のため上洛することにした。その供に加えられたのだ。

なんの危険もない気楽な旅である。長年、内方で苦労してきた十兵衛に上方を見物させ、慰労してやろうとの統虎のこころづかいだった。十兵衛が、ついはしゃぎたくなるのも、むりはない。

統虎にとっても、むろん上方へ旅するのははじめてである。他国の城下や風物もしっかりとこの眼におさめたい。で、あえて駕籠をもちいず馬でいく。

とくに十兵衛に命じて、亡き道雪と紹運の位牌を懐中させていた。

いま柳河十三万石の領主として関白に会いにいけるのも、この二人の父の身をすててのはたらきのおかげだった。

（お二人が青い李を食しながらがまんしてくださったからこそ、なんのはたらきもない自分が、こうしておいしい熟した李の果肉を味わうことができるのだ）

統虎は両父に感謝した。

一行は筑後から筑前に入って、やがて立花城下にさしかかった。

なつかしい二つ瘤をもった立花山の山容が頭上にそびえている。

「殿、ちと寄り道なされませぬか」

十兵衛が駆けよってきて、両の瞳になつかしさの情をあふれさせながらよびかけた。



しかし、統虎はしずかに首をふった。

たやすくできることではない。立花城はいまは小早川隆景の所有なのだ。

「もういちど、あの城内の井戸水をのみとうござるなあ」

十兵衛は、未練がましく喉を鳴らして、いくども城をふりかえった。

## 4

平安京の大内裏跡に秀吉が築いた聚楽第は完成からほぼ一年、邸外の諸大名の屋敷もすでにととのっている。

豪勢な構えである。

邸宅として築かれてはいるが、実態は城郭だ。濠の幅は二十間（約四十メートル）、深さは三間（約五メートル）、四周の長さは千間（約千八百メートル）もある。本丸には五層の天守がそびえ、北の丸、西の丸、南二の丸などの諸曲輪の甍が晩秋の日ざしの下にきらきらとかがやいている。

豪邸の主は統虎を迎えて、満面に好意をあらわし、

「柳河の住み心地はどうじゃ」

ときいた。

「ははっ、おかげをもちまして、心地ようすごさせていただいておりまする。美しき水郷にて、濠には睡蓮が花ひらき、水鶏の啼き声でめざめる毎日でござります」
「それは重畳。そちのぬきんでたはたらきで、九州もなんとか治まりがついた」
「過分のご褒辞、恐懼至極にござりまする」
「そう、硬くなるな。この関白のために父を亡くしたそちだ。これからは関白を父とおもえ。望みあらば、なんでもきいてつかわすぞ」
「おそれ多き、おことば……。ご恩によって三千の兵を指揮する大名にとり立てていただき、ご恩報じの戦つかまつるに不足はござりませぬ」
「愛いことをもうすのう。慎みぶかいは父ゆずりであろうが、遠慮いたすな。四国、九州のうち、よりどりしだい、くれてやるぞ。なんなら肥後一国をつかわそうか」
秀吉はいった。
肥後は前年の国衆一揆の責任をとらされた佐々成政が、この閏五月に切腹させられ、そのあとに秀吉子飼いの加藤清正と小西行長が封じられたばかりだ。
じつは、加藤、小西を配するまえに、秀吉は統虎に肥後一国の就封を打診したが、統虎は固辞してうけなかった経緯がある。
閻千代が大反対したからだ。生国からますます遠ざかることに、閻千代はつよい拒否反応を示した。



秀吉が、
「よりどりしだい」
といったとき、統虎はちらと閻千代の顔をおもいうかべ、
「ならば、旧領立花の地を……」
とねがいでたい衝動に駆られた。
しかし、おもいとどまった。
すでに新領主としておさまっている小早川隆景の心証をかんがえると、安易に秀吉の好意に甘えるわけにはいかない。
このたびもおなじだ。肥後一国は魅力だが、加藤や小西の心事をおもんぱかれば、とても無神経にうけられることではなかった。
男は閻千代のように、私情によってうごくわけにはいかない。
「ところで、子はまだか」
秀吉が唐突にきいてきた。
「はっ、いまだに……」
統虎は、かすかに赤面した。
「そちの妻女は稀にみる美形ときく。ちと、かわいがりようがすぎるのではないか」
秀吉は揶揄する口調になった。

「いえ、そのような……」
「わしにも、いまだ子はない」
「ははあっ」
「じゃが、あきらめてはおらぬぞ。妻女が怖くては子はつくれぬ。側妾はおるのか」
「いえ」
「ふむ。そちらしく、閨房でも妻女一筋か」
「生来の不調法者にござりますれば……」
「それはいかん。よいか。わしはそのうち、かならず子をつくる。そのために、この新邸にも女どもを仰山召しつれてきておる。そちもつくれ。わしの子をまかせられるのは、そちの子をおいてほかにはない。なんなら、わしが女を世話してもよいぞ」
「それは……」
「はは、こまっておるな。よいよい、意中の女がおるのなら、はよう抱け。抱いて子をつくれ」
「は、はあっ」
統虎は、すっかり狼狽してしまった。
意中の女がいないわけではない。しかし、そのようなことが関白あいての話柄にふさわしいとはおもえない。



本題にもどらねば、と統虎は顔をひきしめた。
一つだけ、関白にねがいでたいことがあった。
「身にあまる、かずかずのご厚情、統虎、恐懼にたえませぬ。このうえの望みなどござりませぬが、ただ……」
統虎は叩頭しながらいった。
「ただ、なんじゃ」
秀吉はなおも上機嫌をくずさず、統虎の顔をのぞきこんだ。
いおうか、いうまいか、統虎は一瞬逡巡した。
蔦野三河や小野和泉の顔がうかんだ。
この古参の家老たちは、秀吉に謁見したら、ぜひとも昇殿の儀をねがいでるようにと統虎にすすめたのだ。
「武人に位階など無用だ」
統虎が気のすすまぬようすをみせると、
「もはや刀槍のみの時代ではござらぬ。柳河十三万石の威光のためにも、このさい昇殿をゆるされるよう懇望なさりませ」
かさねて強請した。
いま、かれらの声が重く耳底によみがえる。

統虎は重い口をひらいて、むりにおしだすようにいった。
「僭越なるおねがいにござりまするが、昇殿の儀おゆるしたまわりますれば望外の仕合わせにござりまする」
「なんだ、そんなことか」
秀吉は気ぬけしたようにわらいをもらし、
「おそらく重臣どもに強要されたのじゃな」
すべてをみぬいた口調でいった。
「まこと、恥ずかしきしだいにて……」
「なにが恥ずかしいものか。わしなど育ちがわるいゆえ、ただひたすら勲位をほしがったものじゃ。よい、従四位下に任じよう。それにわしの羽柴の姓をくれてやる。従四位下羽柴柳河侍従統虎、うむ、なかなか似あうぞ」
「それは……」
統虎は口ごもった。
「なに、不服か」
「不服だなどと……。ただ……」
「また、ただか」
「わが旧主大友義統さまは、まだ五位であらせられます。旧臣のそれがしが旧主の上位に



叙せられるのはこころ苦しゅうございます。なにとぞ従五位に叙したまわりたく……」
義統は、この二月、九州を代表する大名として上洛し、全国からあつまった二十八人の諸大名とともに聚楽第で秀吉に謁した。いまは一豊後の領主にすぎぬ義統だが、秀吉はいちおう門閥を優先して招待したわけだ。
内実は、義統をきらっている。
父宗麟とともに秀吉に救援を請いながら、戸次川の合戦に敗北すると、恥もなく豊前まで敵前逃亡した。名族の裔とはこのようなものだ。統虎の必死のはたらきにくらべ、なんともさまにならない。
秀吉は内心、義統をまったく買っていない。
しかし統虎は、そのような義統にたいしても、いまだに旧臣としての礼を失わず、あえて、そのうえに位置することをおそれ多いこととした。
「気に入ったぞ」
秀吉は膝をたたき、心地よげにさけんだ。
「日本六十余州にあまたの武将あれども、統虎、そちのごとき謙虚なこころばえをもった仁は絶えて久しい」
「……」
「長生きはするものじゃ。わしは、そちのようなわか者に会えてうれしい。わかった。ね

がいどおりに従五位に叙して進ぜよう」

すぐに統虎に従五位下の叙任が下った。ただし、それから一月もせぬうちに、あらためて従四位下に叙せられた。

「柳河侍従の気持ちはようわかった。が、いつまでもそちが、かの義統ごとき者の下位では、この関白の政治の均衡がとれぬ」

というのが理由だった。

じっさい、秀吉はもうすこしはやく統虎と出会っていたら、自分の養子にしたいとさえおもったほどだ。

人はだれしも同類を身のまわりにあつめたがるものだ。が、秀吉のように功なり名とげて安泰な座におちつくと、おのれにない異質の性状、才能をもった者にこころ魅かれるようになる。

秀吉はもともと純なる心性をもった男だ。しかし、あまりにも氏素性がおとるため、こころならずも阿諛追従をもって立身出世した。

それだけに、正真正銘、純なる魂の持ち主である統虎のようなわか者には、ぞっこんまいってしまう。なんとしても、おのれの力で後おししてやりたくなるのだ。

とまれ、世戸口十兵衛の、

「なにやらよいことがあるような」



予感はあたったのだ。

「亡き大殿たちも、さぞ満足しておられましょう」

十兵衛は懐中する位牌をつよく抱きしめた。

統虎は八坂神社にちかい呉服商で、平絹に金糸で刺繍した反物を購った。あざやかな紅いろの摺箔がほどこされている。闇千代への土産である。

小袖に仕立てれば、目鼻だちのくっきりした闇千代にはよく似あうだろう、と統虎はおもった。

## 5

天正十八年（一五九〇）二月十日、小田原北条氏征伐の先陣を命じられた徳川家康は、居城の駿府をでて長久保まで陣をすすめた。

月がかわった三月一日、秀吉は諸大名の軍団をひきつれて京を発ち、十九日、駿府に到着した。そのなかに、むろん立花統虎もいる。

家康は急ぎ前線からひき返し、三日ほど秀吉のかたわらにあって饗応につとめたが、その最後の日、秀吉は家康に、

「本多平八郎をおめしつれいただきたい」

と、だしぬけにいった。
「なに用でござるか」
家康はいぶかしげに問い返したが、
「会わせたい男がおる」
とだけ秀吉はいった。
「なるほど」
家康は、それ以上、くどくはきかない。
すぐに平八郎忠勝をよびだし、秀吉のもとに出頭させた。
「まいるがよい」
秀吉は平八郎をつれて諸大名のつどう大広間につれていった。それから、
「柳河侍従はおるか」
一座をみわたした。
統虎が膝行してでると、
「こちらにまいれ」
上段にまねきあげ、平八郎とならべてすわらせた。
「みなの者」
秀吉は諸将によびかけた。



「こちらは徳川どのの股肱の臣にて東国無双の本多中務大輔じゃ」
まず、本多平八郎を紹介し、ついで統虎の手をとるようにしていった。
「また、こちらは西国に無双の誉れ高き立花左近将監である」
統虎は、おもわず顔赤らめて一座の諸将に頭をさげ、ついで平八郎に眼顔で会釈した。
平八郎もわずかに上気した眼に笑みをうかべて、ゆったりと会釈を返す。
統虎より二十歳ほど年長の平八郎は、家康幕下で酒井忠次、榊原康政、井伊直政とならぶ四天王の一人である。あまたの戦に武功をあげることかずかぎりなく、ことに六年まえの天正十二年（一五八四）の小牧・長久手の合戦では、寡兵をもって秀吉軍をさんざんに悩ませた家康自慢の勇将の一人だ。
戦歴、武功からいっても、統虎とは格がちがう。しかし、秀吉はかまわない。
「東西無双の両人が懇親をむすび、おのおのの国を守護すれば、日本国は安泰じゃ」
とつづけた。
秀吉麾下にも歴戦の勇者はそろっている。そのあまたの勇将をさしおき、秀吉があえて統虎を賞揚したのは、統虎を平八郎におとらぬ一途な忠義者と認めてのことだった。
恩賞や立身をめあてに勇戦する家来はいくらでもいる。しかし、自分は両人のように利害にかかわりなく、無私のはたらきをする家来を高く評価する、ということを満座の武将たちに知らしめたかったのだ。

むろん、目のまえにひかえた小田原征伐、ひいては、きたるべき朝鮮出兵をにらんでの発言であった。

一座は、しんとしずまりかえっている。

前田利家や毛利輝元などは、大いに感じ入ったふうにうなずきかわしたものだが、ほとんどの将は嫉視、羨望の眼で両者をみつめた。

夜になって平八郎が統虎の宿所を訪ねてきた。

「こんにち、おもいもかけず、それがしが関白どのにおほめをいただいたのは、ひとえに柳河侍従どののおかげでござる」

平八郎は礼をのべた。

「なんの、関白さまは小田原攻めをまえに諸将の奮起、ことに徳川どののご尽力をうながされるために、おてまえの忠勇を賞揚なされたもの。若輩のそれがしは、おてまえのひき立てまでに褒辞にあずかったにすぎませぬ。礼をいわねばならぬのは当方です」

ていねいに統虎は礼を返した。

関白にほめられて天狗になっているふうは毫末もない。

「まことにもって、ききしにまさるご器量。失礼ながら、おいくつになられる？」

「いまだ二十二歳の若造です」

「や、二十と二歳？　これはまたなんとも、みごとなご老成ぶり……」



心底、平八郎はおどろきの声をあげ、

「それにくらべて、やつがれの長男など、まだひよっ子でござるわ」

ふかく嘆息した。

平八郎の嫡男忠政は当年十六歳になる。今度の小田原攻めに参加させるため、いまは長久保に滞陣中だ。

統虎は忠政の齢をきき、

「それがしとて、そのころはただのひよっ子でありましたよ」

皓い歯並みをみせて、さわやかにわらった。

それから、統虎は急ぎ酒肴をととのえさせ、平八郎と酒を酌みかわした。

「立花どのと親しく語らえて、まことに愉快でござった。徹宵して飲み明かしたい気分でござるが、あすは早朝の出立でありますゆえ……」

平八郎が高声をはじかせて帰っていったのは、すでに亥の刻（午後十時）をまわっていた。

長期にわたる包囲戦のすえ、小田原北条氏の総帥氏直が開城して秀吉に降伏したのは、七月五日である。

日をへずして秀吉は論功行賞をおこない、家康に北条氏の遺領、関東八カ国、二百五十万石をあたえた。

ちなみに、平八郎は家康の関東移封とどうじに、上総大多喜城十万石の主に封じられた。

古参譜代の将には大禄をあたえなかった家康にしては、異例ともいえる処遇だった。あるいは、秀吉の統虎とならべての賞揚が大きく影響してのことかもしれない。

## 6

『大宰管内志』に〔柳河は也奈加波と訓むべし。柳の多き処にて負わせたる〕とある。たしかに柳が多い。

広大な筑後平野を西流して有明海にそそぐ筑後、矢部の両川にはさまれた扇状地には四方に水路がはしり、その岸辺をやわらかな柳のみどりが彩っている。

早春、葉にさきだって花が咲き、やがて実をむすぶ。実は二つにわれて白い綿毛のついた種子をとばす。これが柳絮である。

風によって虚空に吹きあげられた柳絮は、さながら風花のように、柳河城内にも降りかかった。

柳河城はもと大友氏に属した蒲池氏の持ち城で、難攻不落の水城として知られたが、天正九年（一五八一）、鑑並のとき龍造寺隆信が偽りの和議をもって鑑並を猿楽能に招き、



その席で謀殺した。以後、鍋島直茂や龍造寺家治が居城したが、このたび統虎にあたえられた。

城内はかなり荒れていたが、統虎はかまわなかった。防備のために濠の底をさらい、くずれた土塁や石垣を繕っただけである。

「のっぺらぼうの平城なんて、なんだかおちつけない」

闇千代は不満をもらした。

平野をみおろす山城に生まれ育った闇千代にすれば、たしかに平地の城は不安におもわれもしたろう。

しかし、統虎は周囲がのっぺらぼうの平地であることを、むしろ理想とした。山上から下にみおろすのではなく、領民とおなじ目の高さでともに暮らしてこそ、領民のこころのうちがみえもする。

――領主は領民によって生かされている。

というのが統虎のかんがえだった。

日々、かれらが懈怠なく田仕事や商いに精をだしてくれるからこそ、領主たる自分も戦に専念でき、多くの家臣を養うことができる。

そのためにも、将兵がこころを一つにし、他国からの侵略をふせぎ、領内をしっかりと治めて、領民の安寧をはからねばならない。

将卒一心一和、が統虎のめざすものだった。

新領地には重要な六つの支城があった。城島城、蒲池城、今古賀城、酒見城、鷹尾城、松延城がそれである。

柳河入封からまもなく、統虎は信頼できる重臣に、これらの城を割りふり差配をまかせた。

城島には立花（薦野改め）三河守、蒲池には小野和泉守、今古賀には立花右衛門大夫、酒見には由布雪下、鷹尾には立花三左衛門、松延には立花三郎右衛門。

どうじに家老以下、諸奉行などの職制を定めた。

さらには領内に触書をだして、安心して日々の作業に従事するよう領民によびかけ、親しく領内を巡察して領民をはげまし、みずから先頭に立って荒野の開墾、田畑の改修をすすめ、おもいきって不要の防砦を田畑ととりかえたりもした。

すべては領内を富ませるための施策であった。

秋の収穫の祭りにも、気がるに酒樽をたずさえて参加し、無礼講で百姓たちと車座になって酒をのみかわした。

道雪の酒のあいてをして育った統虎は、すでに斗酒をも辞さぬ酒豪である。両手にあまる大盃でぐいぐいあおる。それでいて最後まで乱れることがなかった。周囲をたのしくさせる明るい酒である。



——こんどの領主は戦がつよいばかりではないらしい。

領民は統虎を信頼し、日々のはたらきにも活気がみられるようになった。

## 7

統虎は朝が早い。

前夜、いかに深酒をしても、しらじら明けには床をはらい、庭にでて剣をふるう。少年時代、丸目蔵人からたたきこまれた剣技の習練を、いまだに忠実につづけているのだ。

気合とともに真剣をうちふるうちに、やがて、全身に淋漓と汗が噴きだしてくる。そのころあいをみて、世戸口十兵衛が水桶をさげてあらわれる。

「けさも、心身さわやかであられますな」

「おう、いますぐにも戦にでられるぞ」

統虎は隆々たる筋骨の背中をむけ、十兵衛にぬぐってもらいながら快活な声をあげた。

「戦もけっこうでありますが……」

十兵衛は手をやすめぬまま、背後からいった。

「このうえは、一日もはやくお子をなされませ」

「子、か」

「柳河十三万石は、いまや磐石。なれど、お世継ぎがいまだにおわさぬのが、唯一、こころがかりであります」
「おぬしの心配はわかるが、こればかりは天からの授かりもの」
「なにを仰せでござる。子はみずからはげんでつくるもの」
「……」
「殿は、ちかごろとんと御台のもとにかよわれませぬな」
「うむ」
「お気がすすまぬのは、この十兵衛にもわかっております」
「わかっておれば、いうな」
「いえ、御台との仲がどうあれ、立花家にとって嗣子は必要です」
「十兵衛、なにがいいたいのだ」
統虎は、むきなおってたずねた。
「もうしあげにくいことながら、側妾をおかれませ」
「閨が怒るぞ」
「すべては、お家のためです。御台もわかってくださいましょう」
「他の女ならそうだろう。だが閨はちがう。女を子産みの道具とかんがえておるのか、とくってかかろう」



「子を産んでこその妻女でありましょう」
「ま、それが世間のかんがえだ。しかし、たとえ石女でも血も涙もある人間、男の勝手でみすてるのはいかがなものか」
「殿は、いつからそのようなかんがえになられまいた」
「閨と話しておれば、自然とそういうものかという気分になる」
「女を等しくあつかわれるのは、それはそれでよいとして、まんいち、御台が石女だとしたら、これはえらいことになりまするぞ」
「わしに種がないということもある」
「だからこそ、畑をかえて試してみねばなりませぬ。いずれの殿さまもなされていることです。ぜひにも、試されませ」
「じつはな、関白さまからもすすめられた。女を世話してもよいと」
「で、どうこたえられました？」
「むろん、おことわりもうしあげた」
「関白さまお手筋の女なら、好都合でありましたものを」
「そこまで関白さまには甘えられぬ」
「その分別が殿のよいところでもあり、厄介なところでもあり……」
ふーっと十兵衛は息をはいてから、

「で、殿にこころあたりの女はござりませぬのか」
さりげなくたずねた。
「ないことはない」
「しゃっ、意中の女ごがおりまするのか」
「うむ」
「ぶしつけなれど、この十兵衛にお明かしねがえませぬか」
「むう……」
「さあ、もうされませ」
「勘兵衛の娘だ」
口にだしてから、統虎はかすかに赤面した。
「あの、矢嶋勘兵衛の娘ごでござりますか」
「さよう」
「たしか、はちとかもうしましたな」
「おぬしも知っておったか」
「それは、評判の器量よしでありますれば……」
「うむ、よい娘であろう」
「御意。なれど……」



「なれど、なんだ」
「いささか肉置(ししお)きがうすうござりますな」
「いかぬか」
「あの手の女体は難産の質であります」
「子を産めぬと？」
「とまではもうしませぬが、もっと尻の大きな女はおりませぬか」
「これ、女を猪えらびのようにいうてはならぬ」
「これは、いささか口がすべりました。いずれにしろ、安堵いたしまいたぞ。ではさっそく、矢嶋どのと話をすすめましょう」
「はやまるな。闇がおるかぎり、側妾はおかぬ」
「これはまたなんたる純情。よろしいか。二君に仕えぬ武士の節義と男女のことはべつでありますよ」
「そうはかんがえぬ。さきほどももうしたとおり、まだ閨とのあいだに子ができぬときまったわけではない。他の女を迎えるのは、まださきのことだ」
「わかりもうした。ならば、しっかりはげまれませ」
十兵衛は統虎の下帯を、おもいきりきつくしめあげた。

# 碧蹄館

## 1

文禄二年（一五九三）正月。

統虎は漢城（現ソウル）にいる。

ここで、ちょっとおことわりしておきたい。

この朝鮮役のくだりに舞台がうつったところで、統虎を宗茂としたい。

統虎は、鎮虎、正成、親成、尚政、俊正など、いくつかの名をつかっており、朝鮮役のころは親成と称している。宗茂を名乗るのは、これからまだ二十年余も後のことである。

この作品はほぼ史実にそってつづっているが、それにあまりこだわりすぎると読者も混乱されるだろうし、宗茂の名前の出番も終章ちかくになってしまう。世間に流布する名前は、なんといっても立花宗茂だ。



で、この章から宗茂でいくことにする。おゆるしねがいたい。

とまれ、宗茂は朝鮮国の首都、漢城の西大門外にいる。この年二十五歳。

眼前にふかい霜をおいた広い街道が目路はるかにのびている。とおく明国まで通じる大道である。

頭上に重厚な石造りの瑠璃の門がそびえている。形状はパリの凱旋門を想像されるといい。街道上にかかったアーチ状の独立門である。

正式の名は迎恩門という。朝鮮の宗主国明からの使者を奉迎するための門で、柱と壁には七宝がちりばめられ、四方の軒を金の鎖で吊った屋根は、まばゆいばかりの青瓦で葺いてある。

まさしく瑠璃の門である。

とおく中国大陸から旅してきた明国の使者がはじめてくぐる門、つまり、漢城の玄関口の一つだ。

宗茂は手勢とともに、この玄関口をかためている。

寒い。九州育ちの立花勢が、これまで味わったことのない酷寒である。あかあかと篝火を焚きたて、将兵はそのまわりに群がって暖をとった。

秀吉が朝鮮出兵の儀を発表したのは、天正十九年（一五九一）八月のことだった。

遠征の本営は肥前名護屋におかれることにきまり、十月には工事に着手、翌二十年二月には、ほぼ完成した。

前年暮れ、秀吉は甥の秀次に関白職をゆずり、みずからは太閤と称して、本腰を入れて朝鮮侵略の指揮にあたった。

三月、太閤秀吉は全国の諸大名に名護屋への集結を命じる。

あつまった遠征軍は総勢三十万余。一番隊の小西行長を大将とする第一陣一万八千は、四月十二日、七百余隻の軍船に分乗して大浦港を出帆、この日の夕方には、はやくも釜山に上陸した。

つづいて、二番隊加藤清正以下の第二陣が渡海した。

宗茂は弟高橋主膳統増の兵をあわせた三千の兵をひきいて、小早川隆景を主将とする六番隊に属して第二陣に加わった。

以後も、陸続と軍団は朝鮮海峡をわたった。諸軍は破竹の勢いで進撃し、はやくも五月はじめには漢城にせまって、これをおとした。

朝鮮国王は一戦も交えることなく開城にむけて逃走する。

この月中旬、宇喜多秀家が漢城守備の大将として、兵一万をひきいて到着した。

おりしも、漢城から五、六里の天嶮によって数千の敵が日本軍の進出をさまたげている。有馬晴信、蜂須賀家政らが討伐にむかったが、いずれもさんざんに翻弄されて退却してきた。



「ここは戦巧者の立花どのに出陣ねがおう」

秀家は宗茂をよんで掃討を命じた。

「うけたまわりました」

宗茂は一千ほどの手勢をひきいて出動する。敵前にいたると宗茂は、わずかに数騎をつれただけで、みずから物見にでた。

たしかに、天嶮である。

巨岩のそびえ立つ荒野いっぱいに茫々たる丈高い茅野がひろがっている。しかも、敵は茅原のいたるところに空堀をうがって待ちかまえていた。

「なるほど」

宗茂はしかと偵察してもどると、その夜、雑兵に命じて敵の陣所のちかくの茅をいっせいに刈りとらせた。

翌日の昼間は敵のうごきを観望するにとどめ、夜になると、ひそかに兵を三カ所にわかって埋伏させ、またしても前夜とおなじく雑兵をくりだして茅を刈りとらせた。

前夜、油断して陣所のまえの茅をやすやすと刈りとられた敵勢は、不寝番を立てて警戒していた。そこにまた雑兵たちがでてきて茅を刈りはじめたので、

「それっ」

どっと陣所からはしりでた。そのかず、およそ三千。
雑兵たちは、宗茂に命じられたとおりに、わらわらと逃げもどる。
「逃がすなっ」
敵勢は嵩にかかって追いかける。
そこに三方から、わっとおめいて伏兵が襲いかかった。
宗茂は、あらかじめ伏兵に下知していた。
「敵勢が攻めかかっても、みだりに討ちとろうとするな。そろりと討ちはらい、敵が退却にかかったら、あわてずに追尾して、できるだけ敵陣ふかく肉薄せよ」
頭脳的な宗茂の作戦である。
敵勢の退却する後を、余裕をもって追いかけるので、空堀などの障害物に足をとられることもない。
侍大将の立花吉右衛門、由布源五兵衛にひきいられた立花勢は、巧みに敵陣所にせまって火を放った。おりからの強風にあおられて、陣幕ははげしく燃えあがる。
敵の狼狽に乗じて、立花勢は縦横にあばれまわり、敵の首級七百余をあげた。
とても二十五歳の将とはおもえぬ、沈着な作戦、みごとな采配だった。
いっぽう、漢城をおさえた小西行長、加藤清正らの先鋒は、すぐさま北進にうつった。
開城の国王は北方の平壌まで退き、さらに寧辺に逃げた。



むろん、この間、朝鮮軍も必死に抵抗した。しかし、なにしろ備えがなかった。まさかに、日本軍が本気で攻めてくるとはおもってもいなかったのだ。で、諸方で連戦連敗、日本軍は漢城、開城につづいて六月半ばには平壌をも無血占領した。
なかでも咸鏡道を北上した清正隊は、会寧で国王の二人の王子を捕虜にした。
しかし、日本軍の勢いもここまでだった。朝鮮王からの懇請をうけて、ようやく明の援軍がでてきたのだ。民衆も義勇軍を組織して果敢に反抗に転じた。
行長は平壌に兵をとどめ、ひそかに独断で和平交渉をはじめた。
古くから朝鮮と交渉のあった対馬の宗義智に娘を嫁がせている行長は、朝鮮、明国の情勢にくわしかった。
彼国の実力は端倪すべからざるものがある。かれらが本腰を入れて反撃に転じたならば、潰滅的打撃をこうむるおそれがある。それだけに、これ以上の深入りをせず、なんとかここいらでおとしまえをつけたいとおもったのだ。
しかし、名護屋の本営で、うちつづく勝報にすっかり気をよくした秀吉は、みずから渡海するといいだし、徳川家康や前田利家に制止され、ようやくおもいとどまるといったありさまだった。
宗茂は隆景にしたがって全羅道へ侵攻した。
この地は慶尚道とならんで朝鮮の義兵の抵抗がもっともはげしく、日本軍のあいだか

ら多くの死傷者がでた。

それでも、しゃにむに錦山を攻略した隆景は、さらに全州への前進をはかった。が、義兵の抗戦がさらに熾烈となったため、矛先を京畿道の開城へ転じた。

明の名将李如松が五万の大軍で平壌におしよせたのは、この文禄二年正月はじめだった。仏郎機砲、霹靂砲などの巨砲をはじめ、優勢な火力をもってはげしく攻撃した。一万五千の守兵から多くの犠牲がでた。行長は全軍をひきいて黄海道の鳳山城まで退却する。

ここで、態勢をたてなおすつもりだったが、なんと、鳳山の番城を守備しているはずの大友義統軍のすがたがない。

義統は、小西軍、平壌に敗るとの報に接するや、尻腰なく無断で兵を退き、漢城まで一目散に逃げた。

いたしかたなく行長軍も漢城まで撤退するはめとなり、周辺の諸将もさきをあらそって退却した。

ちなみに、この年五月、大友義統は、秀吉に臆病、怠慢と叱責されたうえ、無断逃亡の罪に問われて改易、他家あずけとなった。道雪や紹運があれほど必死に守りぬこうとした大友家も、ついにみじめな末路をたどった。

ところで――。

牛峰城を守備していた宗茂は、李如松の平壌攻撃の報をうけるや、



「小西どのを後詰する」

全軍をあげて救援に馳せむかったが、途中、龍泉というところで撤退してくる小西軍と出会った。

「大友軍の無断退却で、かような始末となった」

小西軍の将兵が、口々に義統の非を鳴らすのを耳にして、

「くやしや」

旧主の恥をそそぐべく、宗茂は小西軍をやりすごし龍泉にふみとどまって、追撃してきた七、八千の明軍を縦横に邀撃し、これを撃退した。

小西軍は敗走六十里、疲労困憊して、ようやく漢城にたどりついた。

このころ、漢城には秀吉が派遣した石田三成、増田長盛、大谷吉継の三奉行が来着していた。

実務派の三奉行は、戦線の縮小と軍団の再編成をかんがえている。

文禄元年四月の先陣の渡海にあたり、九鬼嘉隆を主将とする日本水軍は慶尚道の水軍を潰滅させた。ところが、七月には全羅道水軍の海将李舜臣が、亀甲船をはじめとする堅固な装甲船をもって反撃し、日本水軍を完膚なきまでにたたきのめした。

これによって日本軍は武器、兵糧の補給路を断たれ、大はばな作戦変更を余儀なくされたのだ。

宇喜多秀家と三奉行は、開城に駐屯する隆景、白山城を死守する黒田孝高らに漢城まで引き揚げるよう命じた。宗茂も牛峰城から撤退した。

そして、いま漢城西大門の守備についている。

## 2

平壌を奪取した明の軍務提督李如松は、漢城をめざして刻々と南下、正月二十五日には、氷のとけはじめた臨津江を渡河して披州に到着した。

ここから漢城までは十里に満たぬ距離である。

これに先立つ二十三日未明、漢城の市街に火の手があがり、おりからの強風にあおられて市街の過半が焼失した。明軍の入城ちかしとみた市民が、内応するために火を放ったらしい。

ただし、朝鮮がわの記録『懲毖録』では、平壌で敗北した日本軍が、市民の内応をうたがって放火し、多くの市民を虐殺したのだ、と書いている。日本がわの作戦としてもありえぬことではない。どちらが事実かは、いまのところはっきりしない。はっきりしているのはただ一つ、漢城は朝鮮の都市で、そこに日本軍がいたという事実だけである。

二十四日、偵察にでていた加藤光泰、前野長康の兵が敵の先鋒と遭遇し、六十余人が討



ちとられた。敵はすでに城下まぢかにまでせまっている。

さて、大軍の襲来をまえに、いかに戦うか。

諸将のあいだで議論が戦わされた。大方の意見は籠城だった。

小早川隆景は、つよく城外戦を主張した。

「大軍にかこまれて籠城すれば、いかなる状態になるか、おのおの方はご存じか。敵は四方に砦を築き、釜山との行路をさえぎるにちがいあるまい。城内はすぐにも飢渇におちいり、戦意は失われ、下々の兵は逃亡する。それがしは、いくども負け戦をしてきたゆえに、そのみじめさがようわかっておる。けっかはともあれ、勇ましく城をでて戦うべきだ」

「小早川どのが、そこまでもうされるなら」

城外で迎え撃とう、と衆議一決した。

そこで、だれが先陣をつとめるか、ということになった。

「立花左近将監どのをおいて、ほかにはない」

隆景は言下に宗茂の名をあげた。

宗茂は隆景の組下に属している。自分が主張した作戦をとるかぎり、隆景は自陣の与力から先鋒をださざるをえない。宗茂にすれば、とんだ貧乏籤をひかされたといえなくもないが、隆景は宗茂に犠牲を強いる気などなく、これまでともに戦ってきて、宗茂の天才的

な戦ぶりを認めていたからこその推挙であったろう。

「お歴々をさしおいて先陣仰せつけられたは武門の誉れでありますが、なにぶんにも若年者でありますれば……」

宗茂は、いくども辞退したが、きき入れられない。

評定は立花隊先陣、と決した。第二陣には隆景ひきいる二万の兵がつづく。

それにしても、敵は五万とも十万とも知れぬ明、朝連合の大軍である。手勢の三千でいかほどの戦ができるだろうか。いな、出陣時には三千いた兵も、たびかさなる戦の間に、死傷者が続出し、すでに数百が欠けている。

西大門の陣所に引き揚げると、

「えらいことになりましたな」

小野和泉が眉をひそめた。

「えらいことだ」

宗茂もけれん味なくうなずく。

「ま、やるしかござりませぬな」

「そうだ。みんなのいのちをあずけてもらう」

「漢城五万の兵の先頭に立って討ち死にできれば、武士の本懐でありますよ」

「うむ。死ぬ気でかかれば、おのずと道はひらけるものだ」



「御意。このところの勝ち戦で敵は必定、油断しておりましょう。それがしに先手をもうしつけください。かならず敵を追いくずしてみせます。失敗したら逃げもどります。敵は大挙して追いかけてまいりましょうゆえ、そこをほれ例の手でしとめてくだされ」

和泉は不敵に、にやりとわらった。

そこに黒田長政が馬をとばしてきた。長政は孝高の息子で、宗茂より一歳年少である。

「味方は、あのとおりのていたらく。あすの出陣はみあわせ、ようすをみられてはいかがか」

島津軍の有馬次右衛門もやってきた。こちらは手勢百騎ばかりをひきつれている。

「ぜひ、先手にお加えくだされ」

主の義弘に命じられて助勢にきたのだという。

宗茂に好意をもつ将は、だれもが小勢の立花軍が先鋒を命じられたことに同情し、なんとか手だすけしたいとおもったのだ。

宗茂はていねいに謝意を表して、めいめいにひきとってもらうと、二十六日、丑の刻（午前二時）、十時伝右衛門と森下備中に足軽数十人をつけて物見にだした。

それから、大釜に湯を沸かさせると、米を投じて粥をつくり、これまたべつの大釜いっぱいに酒を満たして温めた。

満天に星が凍てつき、寒風が陣幕を鳴らしてびょうびょうと吹きこんでくる。この夜も

きびしい冷えこみだった。

「さあ、腹いっぱい酒をのみ、粥を食ってからだをあたためよ」

宗茂は部下の将士に手ずからふるまった。

やがて、伝右衛門と備中が物見からもどってきた。

「敵はいたるところに兵を伏せておるようす。で、試みに鉄砲を放ちましたところ、伏兵どもはさわぎたち、ほぼその伏せどころがわかりまいた。また、高みの森かげに敵のひそむけはいゆえ、わっと攻めかけましたるところ二、三百ばかりの敵兵が遁走(とんそう)しました。背後には敵の先鋒一万ほどがひかえておるとおもわれます」

「よし、ただちにうってでよう」

宗茂は全軍に出陣を命じる。

先鋒は、小野和泉、立花三左衛門。中備(なかぞなえ)は、十時伝右衛門、内田忠兵衛。宗茂は統増とともに旗本をしたがえて後詰する。

宗茂は、まず漢城から三里余の礪石嶺(リセッソリヨン)までで た。碧蹄館(ピョクチェグァン)はさらにこれより北方二里にある。

碧蹄館とは、もともと碧蹄駅に付属する明使をもてなすための迎賓館だった。それが地名となったものだ。四方を丘陵にかこまれ、南北に貫流する川ぞいに狭長な渓谷がのび、水田と湿地がひろがっている。その谷から丘陵にかけて、敵勢は息をひそめて埋伏してい



た。

小野、立花の先陣が攻撃の間あいをはかっているところに、後方から積雪をけたてて中備の十時伝右衛門が馳せつけた。

「しばらくっ。われに先陣をもうしつけられよ」

伝右衛門はさけんだ。

「この期におよんでなにをいう。それほどまでに手柄がほしいか」

和泉は叱りつける。

「いやいや、神に誓うて功名をねがうものではござらぬ。小野、立花ご両者ともに、お家の柱石、まんいちのことあれば、われらがこまりもうす。されば、それがしと忠兵衛が先駆けいたしますれば、敵の備えのくずれを待って、殿とともに攻め入ってくださりますよう」

その決死の面をみて、敵前ではあり、

「されば、せっかくのはたらきをなされよ」

老練の和泉はすぐに了承して先陣をゆずった。

立花軍はさらに敵との間あいを二十町ほどにつめ、川をまえに森を背負って布陣した。

# 3

朝霧がうごき、空が白んだ。

とつじょ、前面に陣鼓がどよみ、敵の先鋒三千ほどが霧の下からすがたをあらわした。いずれも鉄菱をびっしりと縫いつけた布鎧を着し、白く磨きたてた鉄製の兜をかぶっている。騎乗する馬はたくましく、兵の体格もすこぶる大きい。これまで対戦した朝鮮の兵士とは格段のちがいである。

「臆するなっ」

伝右衛門は部下を叱咤して、じりじりと前進した。

伝右衛門の麾下に天野源右衛門という武者がいた。もとの名を安田作兵衛という。

明智光秀が本能寺に織田信長を弑したおり、小姓の森蘭丸をたおし、信長に一番槍をつけた男である。

光秀が秀吉に討たれた後は、浪人して諸国を流浪していたが、あるとき立花家から仕官の話がきた。そのとき、作兵衛は、

「おめしかかえくださるなら一万石ちょうだいしたい」

と吹っかけた。



いかに天下に武名の高い作兵衛とはいえ、一万石はいかにも高禄だ。しかし、

「一万石に一粒欠けても仕官つかまつらじ」

と作兵衛はうそぶいた。

使者は顔いろをかえてもどっていった。

（田舎大名め、これでひっこむだろう）

と作兵衛はおもっていた。

ところが、立花家では、禄高におどろいてひっこんだとあってはお家の恥辱、というので、ふたたび使者をやって、

「お望みどおり一万石で、お抱えしたい」

といわせた。

さらに、十時伝右衛門からの問いとして、

「あえて一万石の高禄を望まれるからには、よほどの自信があってのことでござろうな」

使者は質した。

「とりたてて誇るほどの芸はないが、戦場に臨めば、かならず一番槍を突きもうす」

と作兵衛はこたえた。

「されば、まんいち約束にたがい、一番槍を突き損じたときには、ただちに禄をめしあげてもよろしいか」

と使者は問い返した。

「むろん、ただちに浪人いたす」

こんなやりとりのすえ、作兵衛の立花家仕官がきまった。

安田作兵衛あらため天野源右衛門は、伝右衛門の手に属して、こたびの朝鮮役でも広言に恥じぬ、めざましいはたらきを示した。

その源右衛門が、このときも配下の三十騎ほどをひきつれて、伝右衛門の背後にぴたりとつきしたがっている。とうぜんながら、一番槍をねらう魂胆だ。

ただし、みずから請うて先陣をかってでた伝右衛門は、明の大軍をまえに緊張している。源右衛門との一番槍あらそいのことなど、すっかり頭からきえさっていた。

高々と法螺を吹き鳴らし、伝右衛門は突入を命じた。

「わあっ」

雄叫びをあげ、騎馬も徒兵も足もとの雪泥をはねて、いっさんに駆けた。

そのとき、先頭の伝右衛門の横をするりと追いぬいていった一騎がある。

自慢の長柄の槍を小脇にかいこんだ源右衛門である。

「やっ」

このときになって、伝右衛門はちらと一番槍のことをおもいだした。

「きゃつめ、このわしをさしおいて……」



舌うちするや、伝右衛門ははげしく馬腹をけりたてた。

と、わずかに源右衛門の馬脚がにぶった。

びっしりと密集して突進してくる明の甲冑騎馬軍団をまえに、槍の突き入れどころに一瞬とまどったのだ。

伝右衛門は追いすがりざま、源右衛門の背後から、

「十時伝右衛門、一番槍っ」

さけんで、槍を投げ突きにした。

槍は宙をとんで、源右衛門の突きだす槍より一瞬はやく明軍の一将の胸板をつらぬいた。

「む、浮気槍」

源右衛門はうめいた。

敵との間をおいて、槍を投げ突きにすることを浮気槍という。仕損じれば、これほど不名誉なことはない。が、みごとに仕留めれば、一番槍の功名にちがいはない。

合戦の主役は、すでに刀槍から銃砲にうつっている。それでもなお、武士たちは一番槍の功名を競いあった。

ただし、一番槍あらそいも束の間のことだ。いつまでもこだわっているひまはない。

「かかれ、かかれっ」

伝右衛門も源右衛門も、部下を叱咤して小山のような大軍のなかに突き入った。
あとは一まわり大きな明兵をあいてに、必死に突き、たたき、切ってまわる。
やがて敵先鋒が、馬首を返して退却にかかった。
「くずれたぞっ」
伝右衛門も源右衛門も、そして内田忠兵衛も、いまや返り血で全身真っ赤である。
と、右手で陣鼓がうち鳴らされ、三千ばかりの騎馬兵がおしだしてくるのがみえた。備えを立てなおそうとするところに、こんどは左手からも、おなじく二、三千の騎馬の集団が整斉とすがたをあらわす。
さらには、くずれ立った先鋒隊の背後から、雲が湧きだすように六、七千の軍勢がおしかえしてきた。
「これは……」
伝右衛門は息をのんだ。
このままでは、小勢の味方は大軍にのみこまれ、殲滅(せんめつ)してしまうだろう。
伝右衛門は散開した味方の兵をよびあつめ、
「三方の敵にばらばらに立ちむかってはやられてしまうぞ。いまは一団となって正面の敵に駆けむかい、敵がおしつつんで討ちとろうとかかるところを手をくだいて戦い、切りぬけて中備まで退きとろう。敵は三隊入り乱れて追ってくるにちがいない。そこを中備が迎



えうてば、かならず勝機はみいだせる」
大声で作戦をさずけた。
その間にも、敵勢は包囲の輪をちぢめてくる。
「それっ、ぬかるなっ」
伝右衛門は阿修羅(あしゅら)のごとく槍をふりかざし、正面の敵にまっしぐらに駆けむかった。それとみて、左右の敵が立花の先鋒隊の背後にまわりこもうとする。
「いまぞっ」
伝右衛門は、やにわに馬首を返し、背後を遮断しようとしていた敵の中央をしゃにむに突破しようとした。しかし、中備の陣まで引き揚げる間に百余の兵が討ちとられ、あるいは手傷をこうむった。
伝右衛門も身に数カ所の深傷を負い、ついに敵中に落馬して絶命した。
中備に下がっていた小野和泉、立花三左衛門は、後退してきた先手と入れかわりに大軍に立ちむかった。が、兵はわずかに八百、激流にもまれる木の葉のように危うくみえた。
「まいるぞっ」
宗茂は弟の統増をうながすと、ひらりと馬にうちのった。
宗茂を先頭に、旗本勢がわっと鯨波をあげて、敵の横腹に槍を入れた。
寡兵とみて気をゆるめていた明軍は、にわかに横槍を入れてきた新手の出現におどろ

き、
「敵方にはまだ多数の伏兵がいるらしい」
あわてて退却にかかる。
「それっ、逃がすなっ」
宗茂は旗本に下知して追撃させた。
この追撃戦で、立花軍は二千余の敵を討ちとったが、歴戦の池辺龍右衛門が戦死したほか、二百余の死傷者をだした。
緒戦は立花勢の果敢なはたらきで、日本軍の大勝利におわった。

## 4

明軍はすぐに態勢を立てなおし、またもはげしく攻撃するけはいをみせた。
昼ちかく、小早川隆景が戦場に到着した。
隆景はあらたに六つの隊を編成した。
先陣は立花隊、二陣は毛利、小早川隊、三陣は宇喜多隊——。
ところが、いざ陣立てとなったとき、宇喜多隊が立花隊のまえにでてきた。
すかさず毛利隊の大将粟屋四郎兵衛からの使いがきて、



「宇喜多勢が、あのようなうごきをみせるのは、さだめし、ぬけ駆けの先陣をねらってのこととおもわれる。立花どのは朝の戦で潔く合戦をとげられ、存分に戦功も立てられたことゆえ、われらに先陣をおゆずりたまわりたい。宇喜多と毛利はかねてより雌雄を争う仲なれば、まげておゆるしねがいたい」
ともうしでた。
宇喜多はもと毛利の属将だった。にもかかわらず、秀家が秀吉の猶子となってより、なにかと尊大にふるまい、こたびの朝鮮役にも総大将格できている。毛利にすれば、なんとも腹立たしい。で、このような口上となったわけである。
「先陣をゆずれとは、なんたるもうしよう……」
家来たちは憤慨したが、
「怒るほどのこともない。私情私利にこだわるから先陣あらそいが起こる。すべては御国のためにすること。だれが先をしようと、要は勝てばよいのだ」
宗茂はこともなげにわらいすてて、快く毛利のもうしでをゆるした。
やがて、李如松の直接指揮する数万の大軍が、ふたたびおしだしてきた。大軍は碧蹄の渓谷を埋めつくし、小山を越えるときには、まるで森林が黒々とうごくようであった。
うち鳴らされる陣鼓とともに、もうもうたる黒煙のなかから、整斉と馬首をつらねてせまる先鋒の騎馬隊は目も綾なる緋の鎧を着けている。

ひときわ高く陣鼓がうち鳴らされ、その二万の騎馬軍団が鯨波とともに突出してきた。
毛利、宇喜多の兵はたちまち、くずれ立ち後退する。
小丘上に本陣をすえた宗茂は、しずかにそのさまを観望している。
かたわらの小野和泉が、
「時分では……」
出陣をうながしたが、宗茂はこたえない。
味方の敗勢は、ますますあらわになった。
朝の激戦を生きぬいた天野源右衛門が、宗茂の床几のかたわらにいた。
戦巧者を自認するだけに、宗茂の態度にじりじりした。
たまらず、
「もはや、よきころあいでは」
と口をだした。
が、宗茂はやはり返事もせず、ひたすら双眸を戦野に投じている。
源右衛門も、ただ者ではない。
「潮あいをはずしまするぞ」
臆せずに重ねていった。
「いまは退却する味方の兵が邪魔になる。みなひきとった後、功名も不覚もまぎれぬよう



にして、一はたらきするのだ」
はじめて宗茂が口をひらいた。
(なるほど……)
これには源右衛門も、だまってしまい、
(これが弱冠二十五歳の大将の才覚か。おそろしいばかりじゃ)
腹のなかでうなった。
やがて、宗茂はすっくと立ちあがった。
「一騎駆けするなよ」
ことばすくなに命じると、全軍一団となって敵前にちかづき、ころあいをみて二百梃の鉄砲の筒先をそろえて、三度まで一斉射撃させた。
敵勢に動揺が起こる。そこをすかさず、宗茂を先頭に喊声をあげて全員が槍の穂先をつらねて攻めかかった。勝ちに乗じて追撃してきた敵勢は、はじめて組織的な反撃にあい混乱した。
「それっ、立花勢につづけっ」
小早川隆景は麾下の全軍に出撃を下知した。
大軍同士の激烈な合戦となった。敵将李如松も新手をくりだし、みずから騎馬を駆って戦陣にでた。しかし、乱戦のなか落馬したところを、毛利の先鋒大将井上景貞(かげさだ)に槍をつけ

られ、かろうじて配下に救出された。

そのうち、毛利の一隊が横から果敢に突入し、小早川軍は敵の本隊の背後にまわりこんで、はげしく銃撃を加えた。李如松は、ついに退却を命じた。

日本軍は一里余も逃げる敵を追撃し、総計六千余の首級をあげた。

碧蹄館（ピョクチェグァン）の戦の大敗によって、明国は本気で講和をかんがえるようになった。いっぽう、日本軍のあいだにもようやく厭戦（えんせん）気分がつよまり、逃亡する兵も続出した。これを降（こう）倭（わ）という。

講和の交渉は小西行長の苦心にもかかわらず、双方の無理解に条件のへだたりが重なって容易にまとまらない。さまざまな経過のなかで、大きな戦もないままに歳月は経過し、やがて、太閤から引き揚げの命令がとどくと、帰国を急ぐ大名のかずも多くなった。

宗茂が太閤のゆるしをえて帰国したのは、文禄四年（一五九五）九月のことである。

久しぶりにみる故郷柳河の山河は、さわやかな秋色に彩られている。ただ、宗茂は手放しで喜ぶわけにはいかなかった。

あまたの日本軍の先頭に立って戦い、華々しい武功を立てた分、麾下の将士の損耗もはげしかった。故郷を出陣するおり三千いた将兵のうち、ほぼ半数ちかくが異境に屍をよこたえるけっかになった。

その一人一人の顔がおもいうかぶ。十時伝右衛門、池辺龍右衛門はじめ、長年、宗茂の



側近に仕えてきた者たちも多数死んだ。

十時伝右衛門といえば、かれと一番槍をあらそった天野源右衛門は、いまごろどうしておるだろう。

客気満々の源右衛門の顔もおもいだされる。

宗茂の帰国がちかづいたある日、源右衛門はにわかに致仕（ちし）をねがいでた。

「伝右衛門どのとの約定にしたがい、先度の戦に一番槍を失しましたゆえ、俸禄を返上し浪人つかまつります」

というものだった。

伝右衛門との約束のことは、むろん宗茂も知っている。

「伝右衛門も討ち死にしたことだ。伝右衛門との約束は、わしとの約束でもある。生きのこったこの宗茂が、その約束は反古にしてもよいというておるのだ」

だから、おもいなおせ、と宗茂はなだめたが、源右衛門は頑としてきかない。

「生きておいでの殿よりも、死んだ伝右衛門との約束をたいせつにしとうござる」

「その死人へのこだわりはなにか」

「いずれ、それがしも死ぬる身。この世は短うござるが、死界は永遠とかもうします。その長い長い時間を伝右衛門めにひけめをおぼえてすごすのはまっぴらでござる」

いい放って、源右衛門はからからとうちわらい、なおも慰留しようとする宗茂に背をむ

けて、加徳城からさっていったすがたが、眼底にのこっている。肩怒らせたそのうしろすがたに、慶尚道の海の照り返しが縞模様をつくっていた。

「いずれ、手柄話をきかせよ」

と太閤からの書状にあった。

手柄……。

太閤の夢をかなえるために、多くの部下を犠牲にして敵兵を殺したということか。

味方の危機を救うため——といいかえてみても、あまりこころは晴れそうもない。

いったい、かの戦とはなんだろう。

太閤さまの戦に異をとなえることはゆるされない。太閤に仕える武人であるかぎり、命令にしたがい朝鮮、明国の兵と殺しあいをしなければならぬし、ときには無辜の民衆をも殺戮せねばならない。

それにしても、自分の家族や領地を守るためでもなく無縁の他境を侵し、飢えと寒さに苦しみながら死んでいった部下たちに、その死の意味をいかに説明したらよいものか。

「感傷は武人の敵だ」

とは、亡き道雪の訓えだった。

しかし、武士も人間であるかぎり、感傷からは逃れられない。

はたして、感傷をおさえて鉄の武人になれるだろうか。



錦をまとったような筑後の山野を、宗茂はまぶしげにみつめながらおもった。

おちつくまもなく、秀吉からのよびだしがあった。

「朝鮮陣での手柄話をきかせよ」

というのだった。

「妻女同伴でまいられよ」

ともあった。

十月早々、宗茂は闇千代を帯同し、小野和泉らを供に上洛して伏見城で秀吉に謁した。

「闇どのも、ようみえられたの、どれどれ顔をみせよ」

宗茂の背後で平伏する闇千代をみとめると、秀吉は気がるに座を立ってあゆみより、闇の手をとって宗茂とならんですわらせた。それから、

「おう、似あいの夫婦じゃ」

二人の顔を交互にのぞきこみながら、猿面に微笑をうかべていった。

秀吉は宗茂の抜群の戦功を賞した後、なおこまごまと戦陣のもようをたずねた。

だが、宗茂は得々と手柄話をする気にはなれない。おのずと和泉がかわって奉答するかたちになった。

「柳河侍従は、あいもかわらず謙虚じゃのう。ま、そこが、そちのよいところじゃ」

秀吉は上機嫌をくずさず、

「秀頼がこと、べっしてたのんだぞ」
おもい入れのふかい声で宗茂に告げた。
この七月、秀吉は甥の関白秀次を謀叛の科で切腹させ、諸大名に秀頼への忠誠を誓う起請文を書かせたばかりだった。近来、病気がちの秀吉は、ただもう秀頼の将来が不安でならないのだった。
秀吉は子飼いの家来をふくめて、だれも信じていない。唯一、信をおく前田利家も高齢だ。それだけに、外様ながら清々しく信義を信条として生きる宗茂のような人物に、格別のおもいをかけたくなるのだった。
「城下に屋敷をつかわそう。両人してゆるりと上方を見物してまいるがよい」
秀吉はにこやかに告げると、小姓をよんで愛用の佩刀ほか用意の品々を宗茂に下賜した。とくに、闇千代への賜りものもあった。やわらかな光沢のある緋綸子地にあざやかに楓と浪形を金銀で繍箔した小袖である。
「闇どのは美形ゆえ、よう似あうぞ」
屈託なくわらいながら、秀吉は窪んだ眼窩の奥から闇千代の上気した面をみつめていたが、
「末永く仲よう暮らせ」
いいおいて、さっと座を立った。



## 5

慶長二年（一五九七）秋、宗茂はまたも朝鮮の釜山にいる。
ふたたび、戦がはじまったのだ。
明との和平交渉が決裂したのは、一年まえの文禄五年九月である。
交渉の任にあたった小西行長にすれば、秀吉がだした、
〔明の皇女を后女にさしだすこと。朝鮮を南北に分かち、北半分と漢城を朝鮮国に返還すること。朝鮮の王子、大臣を人質にさしだすこと〕
といった七カ条の講和条件など、まともに明国に提示できるものではない。
そこで、明の交渉あいての沈惟敬と相談し、条件を曖昧にぼかし、さらに改竄を加えて、ともかく講和のかたちをととのえようとはかった。
明王は、どだい日本国の秀吉なる者をまともにあいてにしていない。東夷の成り上がり者が、まさかに僭越な条件をつきつけているなどとは知らされぬまま、
〔秀吉を日本国王に封じるゆえ、全軍朝鮮から撤兵し、以後、朝鮮と修交し、ともに大明の属国となること〕
とする返書を使節にもたせて日本に派した。

秀吉は九月一日、大坂城で使者を引見し、西笑承兌に明王からの国書を読ませた。
行長はひそかに事前に承兌に会い、暗に事情を匂わし、苦衷をもらして協力を請うたが、秀吉のまえにでると、承兌は文字どおりに国書を読みあげてしまった。
〔とくに爾を封じて日本国王となし、これに誥命をたまう〕
きくや、秀吉は烈火のごとく怒り狂い、
「いまさら、なんで明王の封などもらわねばならぬのだ。ただちに朝鮮へ兵をだせ」
という始末にあいなったのだった。
明けて慶長二年二月、一番隊から八番隊までの征朝軍が再編成された。総勢十四万。
先鋒の一番隊加藤清正、二番隊の小西行長は、はやくも一月半ば、陣立てが発表されるまえに競いあって渡海した。
主戦派の清正は、さきに行長の和平案に反対した科で秀吉の怒りをかい、日本によびもどされて蟄居させられていただけに、再度、先鋒を命じられると、
「もはや、商人あがりの行長ごときには任せておれぬ」
砂煙をまきあげるようにして先陣をきった。
行長も負けてはおれない。名誉挽回を賭けて、ただちに清正の後を追った。
明王は、日本軍が再出兵するにおよび、はじめて秀吉の和議七カ条を知り、これまた激怒して使者を厳罰に処し、あらたに朝鮮への出兵を命じる。



かくて、宗茂もふたたび朝鮮にわたり、釜山ちかくの安骨浦城の守備についた。
この年八月から九月にかけて、宇喜多秀家を主将とし小西行長を先鋒とする五万と、加藤清正を先鋒とする毛利秀元ひきいる六万五千の軍は、それぞれ慶尚道から全羅道にすすんで、全羅道の順天、慶尚道の蔚山、梁山、泗川、南海などに城を築いた。
順天城には小西行長、蔚山城には加藤清正、泗川城には島津義弘が入った。
この年の暮れ、明と朝鮮の連合軍七万が蔚山城をかこんだ。
蔚山府の島山に築かれた蔚山城は、内城に延長七百六十間余の石垣をめぐらし、外郭には千四百間余にわたって土塁をかきあげ、木柵を立てまわしていたが、まだ普請の最中だった。
そこに攻めかかられたので、たちまち外郭を占領され、千人余の戦死者をだした。
それでも内城に籠もった清正軍は、その後は必死に守って連合軍の波状攻撃をこらえた。
とはいえ、時は厳冬、水食糧が欠乏するなか、疲労死する兵が続出し、籠城は困難をきわめた。城兵は飢えと寒さと敵襲の恐怖に耐えながら、ひたすら援兵の到着を待ち望んだ。
年が明けた慶長三年（一五九八）正月、その援軍がきた。
毛利秀元、鍋島直茂、黒田長政らの兵一万三千が蔚山城北方に進出して作戦を展開する

と、連合軍は後方を遮断されることをおそれ、全軍、漢城まで撤退した。

ひとまず蔚山城の危機は去った。

ところが、磐丹に新たな明の大軍が進出したとの情報に、兵数のすくない釜山の日本軍本営は浮き足だった。

「ご苦労なれど、立花どのに一はたらきおねがいいたそう」

宇喜多秀家は宗茂に出陣をうながした。

宗茂は手勢二千のうち、八百をひきつれて、ただちに磐丹に馳せむかう。

おりから猛烈な吹雪となった。眉が凍りつき鎧の袖に氷柱の下がる寒さに、兵の足はやもすれば鈍りがちになる。ここで、兵を凍死させてはならない。

「いずこで死んでも死はただの一度ぞ」

宗茂はこころを鬼にして部下を叱咤し、ようやく敵陣ちかくまでたどりついた。

敵勢は烈風を避けて低地に幕営していた。深夜である。いずれの陣屋も深沈と眠りにおちている。

宗茂はひそかに兵三百をくりだして、風上に火をかけさせ、その火明かりをたよりに、どっと攻めかかり、逃げまどう敵兵を撫で斬りにした。この夜襲で、立花軍はおよそ五百の首をあげ、頭立った将を生け捕りにして釜山にとって返した。

いつものことながら、わずかな兵で敵の大軍を奇襲する宗茂の戦の巧みさは、まことにもって瞠目すべきものがある。



しかし、諸将はたがいに戦功を競いあう仲だ。すなおに賞賛してくれる者はすくない。むろん、宗茂におのれの殊勲をひけらかすつもりはないが、宗茂のような組下の武将があげた戦果は、つねに大身の隊頭の名で喧伝されがちなのが、いささか不満ではあった。

この年五月になって、明軍は漢城に十万の大軍を集結し、まきかえしにでた。先度の失敗にかんがみ、こんどは蔚山、泗川、順天の三城をどうじに攻撃してきた。

蔚山城には明、朝あわせて三万の軍が攻めかかった。守る清正の兵は七千。手をつくして、よく防いだが、他の二城とおなじように大軍にかこまれて苦戦を強いられた。あまつさえ、城内の兵糧とぼしく、馬肉を食らい、戦死した敵兵の残飯をあさって飢えをしのぐありさまだった。一日もはやく救援にむかわねば、先度の籠城戦とおなじように城兵の力はつきはてるだろう。

にもかかわらず釜山の本営では、連日、いたずらに評定を重ねてばかりいる。たれ一人、みずから救援におもむこうという者がいないのだ。

宗茂は、口だしを避け、諸将の背後に慎ましくひかえていたが、このまま時をすごしては後詰の機を逸してしまう。で、おもいあまって、

「僭越ながら、評定のみを重ねても詮なきこと。まず蔚山の敵を追いはらえば、泗川、順天の敵勢もおのずと退却するは必定。おゆるしねがえれば、それがしが蔚山の後詰にま

いりましょう」
ともうしでた。
「まいってくれるか」
小早川秀秋が、喜色をうかべて身を乗りだした。
秀秋は秀吉の正室北政所の兄木下家定の子である。幼くして秀吉の猶子となり、北政所のもとで育てられ金吾中納言を称した。五年まえ秀吉の側室淀君が子を産むと、小早川隆景の養嗣子に転じ、先年、隆景の死去とともに、その旧領をうけついだ。このたびの慶長の役には、弱冠十六歳で総大将に任じられ、釜山にわたってきている。
その秀秋が、つづけていった。
「ただちに出陣してもらおう。わずか三千の立花勢なら、まんいち後詰に失敗しても、味方にとってたいした痛手にもなるまい」
いかに世間知らずに育ったとはいえ、宗茂を人ともおもわぬ無礼なものいいである。
さすがに宗茂も顔いろをかえた。
立花ごとき小勢なら、全滅してもかまわぬと、総大将から満座のなかで侮辱されたのだ。
(うぬっ。豊太閤の権威を笠に着た若造めが……)
五体に音たてて血が逆流した。



しかし、宗茂は唇をかみしめてがまんした。
(あいては、秀吉のうしろ楯さえなければ、ただの小便くさい軽忽者にすぎぬ。怒るだけ、こちらの男が下がるというものだ)
すでに名護屋の陣にあったときから、宗茂は秀秋の小人ぶりをみぬいていた。
「ならば、さっそくに出立いたす」
座をけって宗茂は退出した。
秀秋への私憤はすてさった。が、諸将のまえで侮蔑的なあしらいをうけた恥辱は、武門の意気地にかけてすすがねばならない。
宗茂は小野和泉に命じて兵一千を選抜すると、みずから引き具して蔚山への道を急いだ。

## 6

五月の闇に蛍が群れとんでいる。
鞍上にゆられながら、宗茂は道雪、紹運のことをしきりにおもっている。
この身は、二人の父の捨身によって生かされているのだ。そのためにも、私情をおさえ、感傷をすてて、ひたすら武門の面目のために生きねばならない。潔く死ぬ覚悟さえ失

わねば、この世のいかなる難儀も耐えしのぶことができる。
「二里ほど前方に敵勢五千ばかり……」
先駆けの物見から報告があった。
蔚山城を攻囲する明軍の一部隊であろう。
「夜明けとともに突入する」
宗茂は、ことばすくなに下知した。
すでに宗茂の戦ぶりは、配下の将兵に浸透している。錬磨の兵はこまかな指図をうけずとも、宗茂の手足のごとくうごいた。敵はつねに数倍する大軍だが、宗茂とともに戦って、いまだいちども負けたことがないのだ。兵の宗茂によせる信頼は絶大だった。
蔚山へつづく街道は、やがて一面の朝霧につつまれた。鎧にねっとりとまといつく濃霧だ。
そのふかい霧の底から、かすかに敵勢の立てるらしい物音がきこえてきた。
「敵はまだ朝飯を食しておるまい。こちらはしっかりと腹ごしらえをしてからかかろう」
宗茂は全軍を停止させ、腰兵糧をつかわせた。
やがて、足もとの草むらから風が立ち、霧がはれた。
みどりの草原はるか、小丘の麓に敵勢の幕営がうかびあがった。盛んに炊煙があがっている。



「気の毒だが、朝飯まえに邪魔させてもらうとするか」
宗茂は余裕の微笑をみせながら、
「鉄砲隊、まえへ」
と命じた。
朝露に鎧の腹をぬらしながら、鉄砲隊が匍匐して敵陣にせまる。
射程距離まで入ったところで、百五十梃の筒先をそろえて、どどっ、いっせいに射ちかけた。蝗のように敵兵がはねとぶのがみえた。
「それっ、盛大に貝を吹け、鯨波をつくれっ」
命じるや、宗茂は長槍を小脇にかいこみ、はげしく馬腹をけって駆けだした。
「わあっ」
その後に一千の兵がつづく。
みるみる敵勢との距離がちぢまる。敵兵は武器を手にするまもなく、たちまち潰走にうつった。
「逃がすなっ」
立花勢は背後から追いすがりざま、突き、切り、薙ぎたおす。
「殿っ」
小野和泉が急ぎ駆けよると、鐙に両脚をふんばって立ちあがり、

「小勢をもっての長追いはあぶのうござる」
必死に宗茂によびかけた。
「いな」
宗茂は首をふった。
「いまは追わねば、われらが小勢なるをみぬかれる。みよ、敵は乱れたち、返しあわせる力はない。かの森かげまで追おう」
さらに先頭に立って二十町余を追尾した。
森をまえに追撃を停止すると、宗茂は兵をまとめた。
「斬りすてますか」
全身を朱に染めた兵たちが、はやり立って宗茂に問うた。
十名ばかりの俘虜の縄尻をつかんでいる。
「放してやれ」
言下に宗茂は命じた。
「ここで解き放っては、味方の小勢を知らせるようなものでは……」
兵たちは首をかしげたが、
「なに、いまはもう敵さんも気づいておるわ。いずれ、兵を返して攻めかかってくる」
宗茂はこともなげにいい、兵を休息させた。



丹念に周辺の地勢をしらべた宗茂は、夕刻、兵を先陣から後陣までの五手にわけて街道筋の要所に埋伏させた。本陣にはわずかの足軽をのこし、盛大に篝火を焚かせた。
子の刻（午前零時ごろ）、敵の大軍が街道に長蛇をなしておし返してくるとの報がとどいた。
宗茂は和泉以下の諸将をあつめて作戦をさずけた。
「わが先陣は敵の先陣と遭遇しても戦わずにやりすごせ。敵の後陣があらわれたところで、一気にうちかかれ。要は敵の大軍を分断するにある。むりに勝敗を決しようとせず時を稼げ。不利となれば、かまわず本陣へ引き揚げよ。他の諸陣は、わが下知あるまで、かまえてうごいてはならぬ」
いかに敵の意表をつき、味方の損傷をすくなく戦うか。この作戦にも、宗茂の戦哲学がはっきりとでている。
猛きのみにあらず——。
手柄第一主義とはちがう。つねに小兵をもって大軍と戦うことを宿命づけられている宗茂である。ただいたずらに強攻して、部下のいのちを損じるのは将としてゆるされない。任務はたさねばならぬ。が、それぞれの将士も、その背中にさまざまの人生を背負っているのだ。その一人一人の人生に責任をもたねばならない。
本陣の篝火をめざして進軍する明軍の先鋒は、息をひそめて埋伏する立花勢のまえを素

通りし、味方の後陣ちかくまですすんだ。そこで、伏せていた後陣の立花吉右衛門がまず起って百五十人の兵とともに襲いかかった。

はるか前方で起こった喚声をききつけ、明軍の後陣は足をはやめて前進にうつる。宗茂は、それをやりすごしておいて、

「かかれっ」

にわかに陣鉦を鳴らし、鯨波をあげて背後から攻めかかった。

この夜は月影うすく、ほとんど闇夜にちかい。明軍は前後に襲撃をうけて混乱した。立花勢は前後左右に切ってまわり、敵の首級数百をあげたが、なにぶん兵数がちがう。味方にも、たちまち百余の死傷者がでた。やがて、明軍は戦い疲れ、街道からはずれてばらばらに逃散していった。

しばしの小憩の後、宗茂はさらに兵をすすめて、白々と夜が明けるころ、はるかに蔚山城を望む地点まで到達した。

「よいか、できるだけ大軍にみせかけるのだ」

宗茂は丘上に登ると、旌旗を背にした騎馬兵を盛んにはしらせ、間断なく鯨波をあげさせた。

作戦はあたった。

明の攻囲軍は立花勢の兵数をしかとたしかめもせず、蒼惶としてかこみを解き退却にかかった。



蔚山城の櫓上から、それを望んだ清正は、

「それっ、敵は退くぞ」

攻め鉦を鳴らし、五千の城兵とともにうってでると、急追して敵兵二千ほどの首を討ちとった。

すでに、日は蔚山の野面にあかあかと照りかがやいている。意気揚々と蔚山城の城門まで引き揚げた清正は、そこに、にこやかに迎える宗茂のすがたをみいだして、

「おう、後詰くだされたは立花どのでござったか」

おもわず駆けよって、その手をしっかとにぎりしめた。

「長の籠城戦に、よう耐えられまいたな」

宗茂も清正の眼を、ひたとみつめて慰労した。

「貴台のかずかずの軍功はききおよんでおったが、こたびはその武略のほど、眼のあたりに拝見つかまつった。まこと、貴台こそは日本一の武辺でござる」

「天下無双の主計頭どのにおほめいただき、宗茂、一生の名誉であります」

文禄、慶長の両役ともに、危険な先鋒をつとめて赫々たる武功をあげてきた猛将清正には、かねて敬意を抱いていた宗茂である。戦のかたわら虎を退治した余裕も清正ならではの勇気である。

しかも、この仁はただ猛きのみの武将ではなく、難攻不落の晋州城攻めにさいしては、みずから考案した亀甲車（木製の四つ車の上に牛の生皮を張り、人力でうごかした一種の戦車）をくりだして攻略に成功した智将でもあった。

「まずは、いのちを張って後詰くだされた御礼に、一献さしあげねばなりますまいて」

清正は、宗茂より六歳年長にあたる。少年のころから秀吉子飼いの一人として戦場を馳駆してきただけに、戦歴は宗茂をはるかにしのぎ、おのずから物腰にもおちつきがある。

「一献ともうしても、このような酒しかござらぬが……」

肥後から特別に持参した金蒔絵の大盃に、清正は瓶子からぽとぽとと酒をそそいだ。

大盃のみごとさにくらべ、酒のほうは酢にちかかった。

「ともに太閤さま恩顧の身ゆえ明かせることじゃが……」

清正はどっかりとあぐらをかくと、酸っぱい酒をなめながら、いきなり本音をはいた。

「このような戦、太閤のご命令でなくばできることではござらぬな」

「主計頭どのも、そうおもわれますか」

「おうとも。それがしは本来、信心ぶこうござってな。世の評判とはちがい、詮なき人殺しは好きではない」

「武門の宿命とはいえ、いくつ首とって手柄というのは、おもえば気の重い所業です」

「首ならまだしも、功を競うての鼻削ぎじゃ」



清正は顔をしかめた。

この戦では、諸将は討ちとった首級のかわりに鼻を削ぎ塩漬けにして、軍功の証として太閤のもとに送るならいになっている。鼻には武人、一般人の区別がないので朝鮮の民衆で、この災禍にあう者のかずもおびただしい。

清正は、そのことをいっている。

「この国の政治はよほど苛酷だったらしゅうございますな。はじめのうち百姓らはわれらを拍手して迎えた。しかし、いまはちがう。義兵となり、火のごとく攻めかかってまいる」

「われらの後から本願寺の僧たちが仏の教えを説いてまわったようじゃが、火事場泥棒が火消しを教えるようなもの。きき目はござるまい」

「彼我ともに、民の苦しみの上に戦がなり立っている」

「さよう。それがしが二度にわたり一万の兵をつれてくるについては、わが領民にもただならぬ負担をかけた。で、呂宋に商い船をだして戦費のたしにしようとしたり、それがしも、ない知恵をしぼっておりますわ」

「この宗茂も、おなじです。ただ、島津龍伯どのの領内のように、出陣を忌避して謀叛する者がおらぬだけでも、よしとせずばなりますまいな」

「仰せのとおりじゃ。が、すべては太閤さまのため。愚痴をいうてみてもしかたがない。

まずはこの戦、なんとしても、われらがはたらきで成功させねばならん」

清正は濃い眉をあげていった。

「いや主計頭どのと胸をひらいて話しあえ、宗茂、久しぶりに気分がすっきりいたしまいたわ」

「これをご縁に、立花どのとは生涯ご昵懇にねがいたいものじゃ」

「たとい敵味方にわかれようとも、この日の語らいをわすれぬようにいたしましょう」

「いずれ、このような酸っぱい酒でなく、うまか酒を酌みかわしたいものでござるな」

## 7

朝鮮で諸将が苦労を重ねているとき、秀吉はまるで外征のことなどわすれたかのように、あらたに京に贅沢な屋敷をつくらせ、さらには秀頼や北政所、淀君らの正、側室に、女房衆三千人をひきつれて、醍醐寺に盛大な花見の宴をもよおしたりしていた。

その秀吉が五月になって病にたおれた。病勢は急速にすすみ、あわただしく遺言などして絶命したのは、八月十八日のことである。

十月に入って、徳川家康以下の五大老、石田三成らの五奉行から朝鮮在陣の日本軍に、早々に和議をまとめて撤退するようにとの秀吉の遺志がつたえられた。



諸将は、太閤の服喪を理由に、さきをあらそって帰国しようとする。

明、朝の連合軍は日本軍討滅の好機とみて、和睦を拒否し俄然攻勢に転じた。

まず泗川城を攻めた。城将島津義弘は善戦して、これを撃退した。

しかし、順天城の小西行長は敵中に孤立した。

「おのおの方は、小西どのを置きすてになさるおつもりか」

宗茂は、ひたすら帰国を急ぐ諸将に詰問したが、まともにこたえようとする者はいない。みなもう、一日もはやく日本へ逃げ帰りたいのだ。

それに、行長は和平交渉に失敗したこともあり、諸将のあいだで、すこぶる評判がわるい。

「本来なら、太閤さまに誅されてしかるべき人物」

と、あからさまに悪口する者さえいた。

たしかに、行長は秀吉をたばかるような裏交渉をし、あげく講和に失敗した。しかし、いったいたれが行長に代わって、むずかしい和平交渉をまとめることができただろう。

わが身におきかえてみれば、その難儀のほどは容易に察しられる。

宗茂は蔚山城を後詰していらい、清正とは肝胆あい照らす仲となったが、行長とは、べつだん親しいわけでもない。しかも行長と清正は、ことごとに対立する仲だ。

ただ、そのことと、行長を敵中にみすてることとはべつである。

——かんがえや立場のちがいはあれ、ともに太閤の戦のために辛苦を重ねてきた戦友ではないか。

と宗茂はおもう。

——武士のこころも、ここまで頽廃したか。

古武士のごとき義侠に生きた道雪や紹運の顔をおもいうかべて、宗茂はふかく嘆息した。

「よろしい。方々がおきき入れなくば、それがし一人にても小西どのをお救いする」

宗茂が意を決してさけぶようにいったとき、

「立花どののもうされるは一々道理、われらもとどまって生死をともにいたそう」

大声にもうしでた二人の将がいた。

島津義弘と寺沢正成である。

正成は肥前唐津の城主で、船による兵や武器、食糧の搬送にたずさわるかたわら、行長をたすけて外交折衝にあたってきた男だ。ちなみに、宗茂のもとを致仕した槍自慢の天野源右衛門を千石でめし抱えたのも、この正成である。

さて、十一月になると、果然、明、朝の連合軍が順天城をかこみ、帰路を断とうとした。が、宗茂の後詰によってようやく危機を乗り切り、行長軍はぶじ順天を脱出した。

また島津、寺沢の両将は慶尚道の露梁津に水軍をくりだし、連合軍と海戦して朝鮮水軍の名将李舜臣を戦死させた。味方にも多くの死傷者をだしたが、これで、朝鮮脱出の退路は確保された。



最後まで朝鮮にふみとどまった宗茂は、同月末、義弘の軍とともに釜山から日本にむかった。

宗茂は艫につっ立ち、とおざかる釜山浦の山影をみつめていた。

敵味方のあまたの血をながしあった長い長い戦い。そして、このむなしい引き揚げ。

日本に帰っても、もう太閤はいない。そして、すでに各将のあいだで暗闘がはじまっている。

朝鮮海峡は波あらく、空は宗茂の胸中を映すかのように、重くどんよりと曇っていた。

宗茂の胸のなかで、からからと風が鳴っている。

対馬の島影がみえはじめたころ、低い雲からにわかに雪が降りかかった。

# 離別

## 1

柳河城外の水路を吹きぬける風はつめたい。

朝鮮ほどのきびしい凍てつきはないが、やはり西国柳河も厳冬である。雲間からもれ射す陽のいろはよわよわしく、霜枯れた菰の葉叢の上に淡い縞模様を描いている。

宗茂は本丸の石塁の端に立ち、みるともなく風に波立つ水路に視線を放っている。

背後に世戸口十兵衛が一人、小腰をかがめて、これも蕭条たる冬枯れの水辺に、じっと眼をそそいでいた。

やがて、十兵衛が、ふーっとふかいため息をもらしてから、

「もう十日ほどになりまするな」

低く宗茂に問いかけた。



宗茂は返事をしない。十兵衛はかまわず、

「それがしが、ようすをみてまいりましょうか」

重ねて問うた。

「無用」

宗茂は背をみせたままいった。

「もはや、もどる気はあるまい」

「やはり……」

「閻とは、しょせん、こうなる運命だったのやもしれぬ」

「とはいえ、このままでは……」

「よいのだ」

「やはり、やつがれが御台のお気持ちをたしかめてまいりましょう」

十兵衛は鬢の白髪をかきあげながら、抗うように告げた。

「無用というておる。閻がみずからしたことだ。気持ちはかわるまい」

「御台は強情であられますからな」

「わしも強情だ」

「さよう、年ごとに先君に似てまいられた」

いいながら、十兵衛はまたしてもふかい吐息をもらした。

水辺にさわがしい羽音がして、いっせいに水鳥が翔び立つのがみえた。有明の干潟に餌を採りにいくのであろう。

この年（慶長三年）、宗茂が朝鮮から帰城したのと入れかわるようにして、とつじょ闇千代が城をでたのは、つい十日ほどまえ、師走の半ばのことである。

母のにし（道雪が他界した後は、剃髪して宝樹院と称している）と二百人の侍女、それに闇千代付きの近侍三十人ばかりが同行した。

おちつき先は先年、宗茂があたらしく建てた宮永村の別邸である。

宮永村は城から小一里ほどのところにある。巨きな楠の森を背にした館は、まわりを高い石垣でかこみ、要所に鉄砲狭間をもうけて、暫時の防衛ができるつくりになっており、門前には一条の道をはさんで、小流がはしり四季の花が群れ咲く草野がひろがっていた。春には蝶、夏には蛍、そして秋には赤蜻蛉が空一面に群舞する幽邃境である。

あわただしい三日つづきの帰国祝いの宴がおわった夜、宗茂は二年ぶりに、あらためて闇千代とむかいあった。

「再度の出陣で、そなたにも苦労をかけた」

宗茂は戦陣焼けした顔に笑みをうかべ、闇に礼をいった。

「みずから先頭に立って夜廻りをしてくれたと、老女のたかからきいたぞ」

「なんの、あなたさまのご苦労にくらぶれば、闇などぬくぬくと眠っていたようなもの」



闇は眼を伏せたまま首をふり、

「朝鮮国でのかずかずのご武功、うけたまわるたびに、うれしゅう存じておりました」

いささか切り口上につづけた。

こわばった顔をしている。しかし、燭に照らしだされた顔は二年まえとすこしもかわらぬ美しさだ。ただ、久しぶりに親しく夫と対面したにしては、そのととのった眉目に喜びの表情はみられない。

それから、しばしの沈黙の後、闇はおもい決したふうにいったのだ。

「宮永の館を、闇にいただきます」

「短兵急に、いったいなにをいいだすのだ」

宗茂は一瞬鼻白んで、問い返した。

「急ではありませぬ。よくよくかんがえぬいてのことです」

「わしとわかれて暮らしたいということか」

「そのほうが、ようござりましょう」

闇は瞳を張って宗茂をみかえした。

「そなたのもうした決着というのがこれか」

宗茂は、苦いものでも吐きだすようにいった。

「そうおもうてくださってけっこうです」

闇は、きっぱりとうなずいた。
「かの別邸は、そなたとともにすごそうと建てたものだ」
「そのようなおこころづかいは、もはや無用にねがいます」
「……」
「よろしゅうございますね」
「どうしてもいくか」
「まいります」
「後悔するやもしれぬぞ」
「かもしれませぬ。が、いまはこうするほかはないのです」
「そなたは一度いいだしたら後に退かぬ女だ」
「ですから、ぜひにもおきき入れください」
「それほどまでにいうなら、いたしかたない。気のむくようにするがよい」
「では、ちかぢかうつらせていただきます」
夫婦のあいだが、これほどまでにこじれたのは、あのことがあってからである。
あのこと、の原因をつくったのは、ほかならぬ、いまは亡き秀吉だった。



## 2

すぐる文禄元年（一五九二）、秀吉は朝鮮出兵の令を下した後、四月にはみずから肥前名護屋の本営にうつり、翌年の八月、淀君の出産で急遽、帰坂するまでの一年半ばかりを滞在した。
その間、大政所の死去のため一時、本営をあけたほかは、ほとんど本丸の北東にもうけられた山里丸ですごした。
この一郭は濠の外に樹木が生い茂り目隠しされている。
秀吉はここにあらたに側妾に加えた名護屋経述の妹広沢局ほかの侍妾をおき、連日、茶の湯や能、歌舞をもよおして憂さをまぎらわせた。
当初、破竹の進撃をつづけた日本軍も、二年目になると朝鮮の義兵の反撃に加え、明の援軍の進出もあってしだいに苦戦におちいった。あまつさえ李舜臣ひきいる朝鮮水軍に制海権を奪われ、武器、兵糧の補給もままならぬ状態に追いこまれた。
で、和議の交渉に入ったが、このほうもおもうようにすすまない。みずから朝鮮におもむき陣頭指揮をとるつもりだった秀吉だが、とても渡海できるような状態ではなくなった。

秀吉に鬱屈と無聊の日々がつづいた。

そこで、ついわるい癖がでた。

女漁りである。

朝鮮出兵にあたり、秀吉は諸将から人質をとって名護屋城内に住まわせていた。人質は諸将の妻女を原則としたが、すべての大名がこれに応じたわけではない。

秀吉の女癖のわるさは天下周知のことだったから、だれもがおそれをなし、病その他の理由をもうけて、ことわるのに四苦八苦した。

そのあたりの事情は、秀吉も充分に察している。で、諸将を渡海させた後、目ぼしい大名の妻女に、つぎつぎによびだしをかけた。

秀吉の好みは、むろん美女にきまっていたが、ことに名門の女には目がなかった。

それだけに、明智光秀の美形の娘たま（ガラシア）を妻としている細川忠興など、日ごろから警戒おこたりなく、得意の和歌をもって妻をいましめたほどだ。いわく、

〔靡くなよ我ませ垣の女郎花　男山より風は吹くとも〕

男山とは、むろん秀吉のことである。

ともかく屋敷から外にでるな、とたまを人目にふれさせないようにした。

忠興はまだしも、もっとも戦々恐々としたのが地元九州の諸将だった。かれらは、いちように、秀吉のもとに伺候するおりには、くれぐれもこころしてかかるように妻女にいいおいて出陣した。



で、佐賀城主鍋島直茂の夫人は、秀吉から声がかかると、おもいきり前髪をぬきあげ、老け顔をよそおって対面し、巧みにその誘惑から逃れた。

しかし、あまたの大名の妻女のなかには、秀吉の慰みの対象にされた者もすくなくない。

たとえ家来の妻女であろうとも、だれかれなしに手をだしたあたりは、わかいころの大友宗麟にそっくりだ。ただ、秀吉のばあいは自分が下賤の出身で、容貌も醜いことをみずからみとめているので、その劣等感の裏返しとして、とくに名族貴種の女につよい征服欲を示した。

中国経略に従事していたころ、備前の宇喜多直家の妻ふくとできたのなども、その一例といってよい。主君信長の美貌の妹、いちに懸想したのは、その最たるものだ。いちにふられて想いを達せられなかった秀吉は、その後、代償としていちの娘茶々（淀君）を妾にして想いをはたした。

唐天竺まで制覇しようとした男だけに、女にたいする征服欲も並ではない。いちど目をつけたら、あくまで執着する。

上松浦党の頭領で岸岳城主波多三河守親鎮の妻は、龍造寺本家の胤栄の娘だった。秀の前とよばれた。すでに齢は四十半ばをすぎていたが、評判の美形である。

その秀の前にも秀吉から声がかかった。覚悟をきめた秀の前は、短刀を懐中して名護屋におもむいた。秀吉は上機嫌で迎え、能を演じさせて秀の前をもてなしたが、宴はてて秀の前が辞去をもうしでると、

「ま、ゆるりと泊まってまいれ」

いいながら秀吉は手をさしのべた。

おもわず、その手をはらおうとして、秀の前の懐中からぽろりと短刀がおちた。

「ぬしは、この太閤を刺すというか」

「いえ、そのような……」

「それほどまでに三河守に惚れておるのか」

「はい。惚れております。どうぞご勘弁くださりまし」

「いうたな。ならば、このわしがわすれさせてやろう」

「ご無体なっ」

秀の前は山里曲輪に数日とじこめられた。

いっぽう夫の波多三河守は、日本によび返され、朝鮮在陣中に落ち度があったとして、所領没収のうえ常陸に流罪となった。

「妻女が太閤に無礼をはたらいたせいだ」

諸将は声をひそめてうわさしあい、あらためて、おのおの国もとの妻女に注意をいい送った。



宗茂もまた、その一人だった。

「妻女どのとはうまくいっておるか。稀にみる美形のうえに、めっぽう気がつよいそうじゃの」

秀吉はかねて島津征討に下ってきたときから、節義を全うして陣没した剛将立花道雪の一粒種としての閨千代に、つよい興味を示した。一見、宗茂への好意からでた夫婦仲への気づかいととれぬこともなかったが、油断はできないのである。

秀吉のばあい、宗茂への好意と好色のおもいとはべつものなのだ。

「太閤から伺候するよう命令がきても病とことわり、けっしてでむかぬように。すべての責任は、この宗茂がとる」

いのちをけずる戦のあいまに、宗茂は短いながら、はっきりとした指示を閨千代に書き送った。

にもかかわらず、やがて

「立花どのの妻女も名護屋城にめされたそうな」

とのうわさが宗茂の耳にもきこえてきた。

しかも、

「豊太閤のお手がついた」

というのだ。

（どうせ口さがないうわさにきまっている。まさか、あの太閤さまにかぎって、わが妻女に……）

手をだされるはずがない、宗茂はうわさを信じまいとした。

（だいいち閨には、あれほどはっきり足止めしてあるのだ。お手のつきようがないではないか）

しかし、そうおもういっぽうで、

（いや、閨はあの性格だ。わしのいいつけなど無視して、会いにいったやもしれぬ）

との疑念が、むくむくと頭をもたげてきた。

とはいえ、とおく海をへだてた戦陣に身をおくいま、閨に問いただす術もない。

じかに閨に問いただせぬかぎり、うわさの真偽はたしかめようがないのだ。たしかでないことを、あれこれおもいわずらうほどばかげたことはない。

宗茂は頭をふって、いっさいの想念をふりはらおうとした。

ただ他のこととちがい、妻の貞操にかかわることだ。きっぱりふりはらってしまうというわけにはいかなかった。

つねにもまして、宗茂は寡黙になった。

小野和泉をはじめ、従軍している重臣たちのうえにも、このうわさは暗く、重くのしかかった。



「殿のお苦しみはいかばかりか」

宗茂の心中をおもんぱかると、平静ではいられない。主君のまえでは御台について一言半句もふれぬよう、ぴりぴりと神経をつかった。

## 3

文禄の遠征から帰国した宗茂は、すぐにも問いただしたい気持ちに駆られた。

しかし、ことは妻の貞操にかかわるうわさだ。うわさをもとに問責するのも、男としてはしたないことのように宗茂にはおもえる。

で、閨千代のほうからいいだすのを待った。根気づよく待ちつづけた。

しかし、閨はいっこうにいいだすけはいをみせない。そのうち、秀吉からのよびだしがあり、ともに伏見に上って謁見した。そのとき秀吉が閨千代にみせた好意は並々ならぬものがあったが、宗茂はとりたてて不自然ともおもわなかった。

もともと秀吉は、人たらしといわれるほどに人あしらいにこまめな人物だ。ことに女には優しい。

閨千代にも、べつだんかわった点はみられなかった。豪華な小袖をもらって無邪気に喜

ぶようすに、うわさにたいするこだわりなど毫末も感じられなかった。

伏見からもどった後も、閨は秀吉からもらった小袖を誇らしげに侍女たちにみせたりして、屈託するところがなかった。むろん、うわさの件について、宗茂にもうしひらきするふうは、まったくなかった。

そこに、師走ちかくなって、まえぶれもなく丸目蔵人がふらりと訪ねてきた。

「めざましきご武功のほど肥後の山奥でつたえきき、わがことのように喜んでおりました」

蔵人は、この年五十五歳になる。髷はすでに真っ白である。この剣客も変転する時代の波にもまれて苦労を重ねてきたのだ。

大友、島津の角逐にまきこまれ、はげしく動揺する相良家にあって、蔵人は主人の義陽の勘気をこうむり、長いあいだ逼塞を余儀なくされた。

義陽が死に、子の長毎が秀吉に本領を安堵され、ようやく蔵人にも近隣諸国を訪ねある く自由がゆるされるようになったのだった。

「この蔵人の眼に狂いはなかった。まこと、ご立派になられた」

うっすらと涙までうかべて、蔵人は宗茂の出世にこころから喜びのことばをのべた。

酒肴を供されるままに、その夜、蔵人は宗茂と閨千代をまえに徹宵してよもやま語りをしたが、そのなかに秀の前の自害未遂の話がでた。



秀の前の夫の三河守は、前年春、配流さきの常陸国筑波で自裁した。その一周忌に、秀の前が自殺をはかった。さいわい旧臣の一人が気づいて、あやうく一命はとりとめたが、その後、秀の前は尼になって亡夫の菩提をとむらう毎日だという。

「故太閤も罪つくりをなされたものよ」

酔いを発した蔵人は、ぐらぐらと五体をゆらしながら慨嘆したが、そのとたん、閨千代はつと立って、挨拶もせず奥にひきとった。

（閨もまんざら、気にしていないわけでもないらしい）

酒精のまわった頭のなかで、宗茂はおもった。

（今夜こそ、ききただす好機かもしれぬ）

めっきり酒によわくなった蔵人が酔いつぶれたのを機に、宗茂は近侍に命じて蔵人を寝かしつけてから、まっすぐに閨千代の寝所にむかった。

「邪魔するぞ」

声をかけてから宗茂はずかずかと寝間に入り、閨千代のまえにすわった。

「ききたい」

ずばりといった。

「あのこと、ですか」

閨はまっすぐに宗茂の眼をみかえした。

「そうだ。そなた、太閤のもとにまいったな」
「まいりました」
「まいってはならぬ、ともうし送ったはずだが」
「たしかに、うけたまわりました。なれど……」
「なれど？」
「太閤は、あなたにではなく、この闇にお声をかけられた」
「それはそうであろう。が、そなたはわしの妻だ」
「そうです」
「夫のわしが、いくなともうしたのだ。そなたも太閤の下心は存じておろう」
「存じております」
「ならば、なぜまいった。わしの身をおもんぱかってのことか」
「むろんのこと」
「わしは、おのれの妻を売ってまで身の安泰をはかろうとはおもわぬぞ」
いいながら、宗茂はかつて父母が寝語りしていた一万田鑑相（いちまだあきすけ）のことをおもいだしていた。
「むかし、妻を主君に寝盗られたうえ、謀叛の罪を着せられて誅されたご仁がいた」
「なにをおっしゃりたいのです？」



闇は、はじめて宗茂の顔をまっすぐにみた。
「だから、わしはそのご仁とはちがうというておる。いかに大恩ある太閤とはいえ、妻が汚されるとわかれば、かなわぬまでも死を賭して阻止する」
「うれしいことを仰せられますこと。それでこそ、宗茂どのはまことの男です」
「ならば、なぜ、まことの男のいいつけに背いて太閤のもとにまいった」
「闇はおのれの意思をもった一人の女です。あなたの物ではありませぬ」
「それで？」
「道雪の娘、立花家の女城主として太閤にまみえました」
「わしの身をおもうてのことではなかったのだな」
「とはもうしませぬ。なれど、病と偽って辞退せよとのご諚（じょう）には、正直もうして失望しました」
「わが節を曲げてまで、そなたの身を案じたのだ」
「あたしの身を？　闇はただのかよわい女ではありませぬぞ」
「それが、そなたのおもいあがりともうすものだ。たしかに、そなたは男をもひしぐつよい女だ。が、あいては天下の太閤だ」
「あたしには、太閤とてただの男の一人にすぎませぬ」
「で、こころゆるして山里曲輪で数日もすごしたのか」

「はい。存分にたのしんでまいりました」
こともなげにいってのける闇千代をまえに、それまで抑えに抑えてきた宗茂の怒りが一気に噴出した。
「よくもぬけぬけと。太閤のお手がついたとうわさされ、このわしがどれほど傷ついたか、そなたにはわかるまい」
「ただのうわさでございましょう」
「真実を、きく。そなた太閤と寝たのか」
「……」
「寝たのかときいておる」
「あなたも、世の中のただの男とおなじなのですね」
「こたえよ」
「闇が信じられないのですか」
「信じる、信じないの問題ではない。妻として、わしの問いにまっすぐにこたえよ」
「太閤は優しゅうございました」
「こたえになっておらぬ」
「ほほほっ」
闇千代は、とつじょ狂ったようにわらいをほとばしらせた。



「なぜ、わらう」
「おこたえする気にもなれませぬ」
「みとめるのか」
「酔うておられます。はよう御寝なされませ」
「そなたは夫婦の絆を、みずから断ち切るのだな」
「闇は疲れました」
「わしはもっと疲れておる」
「ずっと疑うておられましたのか」
「ずっと、そなたのほうからいいだすのを待っていた」
「なにをもうせばよいのでしょう」
「太閤とのことだ」
「もう、夜が明けまする」
闇は戸外に耳をすます所作をしていった。
白々明けに、澄んだ声で目白が啼きかわしている。
「鳥は、ようございますな」
闇はつぶやくようにいった。
「……」

「雄鳥は、広い空を雌鳥が自由に飛びまわっても、かようにくどい詮議などいたしませぬ」
「いちがいに、そうともいえぬ。生涯、親しく番う鴛鴦の例もある」
「あたしたちも、それぞれの生き方をきめねばならぬときがきたようですね」
「やはり、わしを好きにはなれぬか」
「そうではありませぬ。が、あなたもお世継ぎをもうけねばなりますまい」
「ほかの女と寝よと？」
「そうなさりませ」
「よいのか」
「遠慮なさりますな」
「立花家の血が絶えるぞ」
「いたしかたありませぬ」
「あんなうわさが立った後でも、わしはそなたをきらってはおらぬ」
「閨も、おなじです」
「ならば、どうしてうまくいかぬ？」
「わかりませぬ」
「人生とはふかしぎなものだな。二十六歳にもなって、いまだに夫婦のありかた一つわからない」



「世の中には、太平楽にすごす夫婦もあまたおりますのに……」
「なのに、われらはなぜこうなのだ」
「あたしが、あなたの物にならぬせいもありましょう」
「たしかに、それもある」
「あたしには、わかっているのです。が、どうして女は男の物にならねばならぬのでしょう。男も女もからだの凸凹のちがいこそあれ、おなじ人間です。凸と凹には優劣はありませぬ。あたしは、その信念をつらぬいて生きたい。おわかりいただけますか」
「わかる。人はみな生まれながらに等し並みのものだ。身分、男女で差別されるべきものではない」
「ま、なんと雄々しい殿ごであられますこと」
「雄々しくなどはない。わしはまだ、そなたが太閤と寝たか寝ないかに女々しくこだわっておる」
「そのようですね」
「そのような他人ごとのようなものいいが気にくわぬ」
「あたしたち、やはりだめかもしれませぬね」
「正直にこたえてくれればいいことだ」

「仮に、闇が太閤と寝たといったら、あなたはどうなさります？」
「それは……」
「で、ありましょう。いずれにせよ、あなたは生涯、疑いをおすてにならないでしょう。性格やかんがえ方のちがいは、たがいに埋めあわせもききましょう。が、このようなわだかまりだけは……」
闇千代は、つと立って寝所の戸をはらった。
軒さきに氷柱が下がっている。五寸もあろうという大氷柱だが、やがて陽が射せば、あとかたもなく溶け失せる。
しかし、人の胸に宿ったわだかまりは、たやすくは氷解しない。
「いずれ、闇がみずから決着をつけます」
ふり返って、闇はきっぱりと告げた。
この後、あらためて話しあうまもなく、宗茂は慶長の出陣にしたがった。そして、いちばん最後まで朝鮮に踏みとどまり、一年ぶりに帰国した宗茂を待ちうけていたのが、このたびの妻の家出だったのだ。



## 4

闇千代がでていった後、宗茂はいちども宮永村に足をむけなかった。
ただ、賄い料として宮永村の領米三千石を闇千代に給した。
二人の夫婦仲の修復はむりとみると、世戸口十兵衛は矢嶋勘兵衛の娘はちとの話をすすめ、水辺の柳が芽吹くころ、輿を迎え入れて三の丸に住まわせた。
はちは宗茂のかねて意中の女だった。
眉目の秀でた、きりりとした美貌の闇千代とは反対に、はちは色白で、はんなりとした美人だ。母親が京の公家の血をひく女で、その血をいろ濃くうけついでいた。性格もおっとりしている。
宗茂も闇千代へのこだわりをわすれたように、夜ごと、はちのもとに足をはこんだ。
「これで、ぶじ男児誕生ともなれば、わしも安心して死ねるわい」
十兵衛はほくそえみながらも、
「それにしても、やはりはちどのは腰がうすすぎる。殿がいかに種をそそいでも、はたして苗床になるかどうか」
気がかりでならない。

で、ある朝、宗茂が寝所からでて、いつものように庭で剣をふっているところにでかけて、

「殿、はちどのとのぐあいは、いかがでござりまするか」

むきだしにたずねた。

「よい」

宗茂は微笑した。

「どのように、よいので？」

「女を抱くとは、このように心地よいものかと、しみじみ感じておる」

「心地よう、ござりますか」

「よい」

「しかし、そのなんでありますが、腰がいささか細すぎるのでは……」

「それがな、裸にむくと意外と肉置きがよいのだ」

「ははあ、着痩せする質でありますかな」

「うむ、抱くとこう、やわらかに腰の肉がしなうのだ」

「乳房はどうでありますか」

「まあ、掌いっぱいくらいの大きさはある」

「もむと、はずみまするか」



「これ、十兵衛、ぬしはどこまで図々しいのだ」

「いや、その、やつがれは、和子をなせるかどうかが気がかりでござりまして」

「子は天からの授かりものだ」

「そうではないともうしたでありましょう。子をなすもなせぬも、男と女の気息しだい」

「はちは、いつも気分よう、やわらかにからだをひらき、わしをうけ入れるぞ。そして心地よげな声をあげる」

「それはけっこうでありますな。気分よう交わるのが、よい種を宿す勘どころで……」

「十兵衛の交合指南はありがたいが、わしはな、むりに世継ぎをつくることもない、とおもうている」

「これ、殿、なにをもうされます」

「そう、むきになるな。わしはな、おのれの不器用な性格が好きではない。だから、むりしておのれの血をのこすほどのことはないとおもうておる」

「では、立花家はどうなります？」

「血や家にこだわってどうなる。それよりも、いかに潔く生き、死ぬるかのほうがたいせつだ。おのれの節を曲げず、家臣を養い、領民を慈しむことができれば、それでよいではないか。血や家など一代で絶えてよいのだ」

「気に入りませぬな。人の上に立つ者は末代まで家の子郎党の面倒をみるこころがけがな

くてはなりませぬ」
「では、どうすればよいのだ」
「このうえも手柄をお立てあそばし、大大名になられませ」
「身代が大きゅうなれば、みなが仕合わせになれるというのか」
「御意」
「ま、世間の大半はそうかもしれぬ。だが、わしはそうはおもわぬ。現世の欲にはかぎりがない。かぎりがないものを追いもとめていては、おのれをみうしなう。人はみな死ぬるのだ。厳然たる死のまえには、現世の束の間の贅沢や栄華など、まさに空の空だ。そうはおもわぬか」
「殿も父上の紹運さまにそっくりでござりますな」
「そうかもしれぬ。わが家の血は生来、愚直ときまっている」
「やつがれにもうされる分にはかまいませぬ。なれど、そのようなおかんがえ、他の重職たちには、かまえておもらしになりませぬよう」
「もらしはせぬ。が、わしの生き方はかわらない」
「ますます、頑固になられまいたな」
「いや、あたりまえの生き方を守っておるだけのことだ。世間がかわりすぎるのではないか」



「かわらねば、生きぬけないとおもうから右顧左眄するのです」
「恥を知ってこその人間ではないか」
「殿には、出世や栄達の欲はないのですか」
「あるわさ。人並みにある。が、そのためにおのれの節は曲げぬ。それが恥を知るということだ」
「なにやら、やつがれにもわかってきました。そのような殿の血をうけて生まれた和子は、難儀な生き方を強いられまするな」
「だから、自分の血にはこだわらぬというておる。立花家を存続させるためだけなら、統増の子をもらえばいいことだ」
「またご養子でありますか」
「わしも養子だ。血はうすまり、分散するほうがよいのだ。天朝がよい例だ。天子の濃い血統が、われらにいかなる恩恵をもたらしたか。日々、田畑にかがみ、われらの食い物をつくってくれる百姓たちに、なにがしかでも裨益をもたらしたか」
「やつがれに、むずかしいことはわかりませぬ。このうえとも、はちどのをかわいがられませ」
「おう、はちはかわいい。毎日でも抱くぞ」
「すぎたるはおよばざるごとしとのたとえもござる。寵愛がすぎてはお子はできませぬ

ぞ」

「まだいうか」



# 関ガ原役

## 1

二年が経過した。

慶長五年（一六〇〇）夏――。

陽炎（かげろう）のゆらぐ水路ぞいの道に砂煙を立てて、佐和山（さわやま）城主石田三成からの使者が柳河城に駆けこんだ。

〔故豊太閤の遺志に違背した内府（ないふ）（家康）を討つ。ついては、太閤の遺児（わすれがたみ）秀頼公のもとに結集されたし〕

という檄（げき）であった。

宗茂は三成に、あまりいい印象はもっていない。朝鮮で最前線に立ち、いのちがけで戦った宗茂のような実戦派からすれば、主に後方支援の任にあたり、戦功査定を秀吉にもう

し送っただけの三成らの奉行に、好感をもてるはずがない。

さっそくに、肥後の加藤清正からも急使がきた。

〔治部（三成）らは故太閤の名を騙って私欲をはかろうとするもの。かまえてご出陣めされるな〕

これは制止の文である。

三成らが討伐すべしとしている家康については、宗茂はとりわけ恩義も怨恨もない。

その来歴からして権謀術数に長けた、したたかな智将であるらしいこと、優に秀吉に対抗できるだけの力をもちながら、太閤の忠実な麾下として黙々と役目をはたした律儀者、といった印象はもっていたが、これまでほとんど接触の機会もなかっただけに、どちらかといえばとおい存在だった。

ただ、太閤の死後、太閤の遺命を破り、福島正則、黒田長政、それに清正といった豊臣恩顧の将を手なずけ、ことにお目付役の前田利家が死んでからは、まるで天下人のごとき専横のふるまいにおよぶさまには、つねづね苦々しいおもいを抱いている。

清正は、三成らが私心から秀頼をかついでいるだけのことというが、宗茂のかんがえはいささかちがう。かたちはどうあれ、家康が律儀者の仮面をぬぎすて、豊臣家をおのれの膝下にひざまずかせ、天下を自分のものにしようとしていることだけはたしかである。

宗茂の耳底に、秀吉のことばが生々しくよみがえった。



「たのむぞ。わしの子を守ってくれるのは、そちの子だけだ」

ただし、宗茂に、まだ子はいない。

秀吉もまた、おのれの死後、こんなにはやく自分の政権が危機におちいろうとは、予想だにしていなかったにちがいない。

とまれ、宗茂にとって、これはどちらが正しいか、どちらにつけば有利かといった問題ではない。

はっきりしていることは、いま自分が柳河十三万石の大名でいられるのは、故太閤の格別の引き立てがあったからという事実だけだ。その恩義は海山より大きい。

理由はどうあれ、いまその大恩ある豊家が危難に瀕している。それを座視することは、武士として、人間として、とうていできることではない。

いまの身代は、おのれのはたらきにたいして応分の報酬をうけたまでだ、といったかんがえ方は宗茂には無縁だ。他の大名たちはともあれ、そのような自己正当化は、宗茂の好むところではなかった。

たとい、三成がいかに信望がなく、その挙兵の裏に私心をかくしているにせよ、それはそれで、戦の後で対処すればよいことだ。いずれにせよ、家康のふかい企みにくらぶれば、たいしたことではない。

――要はまず、豊家のために力をつくすことだ。

と宗茂はおもった。

ただ、むずかしいのは立花の小城主だったころとちがって、まがりなりにも、いまは十三万石を領する大名である。家臣のかずもふえ、その分、家臣たちのかんがえもさまざまだった。

領主である宗茂のかんがえに、ただちに一致結束するとはきまっていない。だれもが、おのれがかわいい。おのれの家族、おのれの領地を失いたくない。

で、恩義や信義はさておき、どちらについたら有利か、口々に自説を主張してやまない。

とうぜんながら、家老立花三河守のように、徳川どのに味方すべし、とする意見もすくなくなかった。

なかでも、宗茂が頭を悩ませたのは、闇千代からのもうし入れだった。

闇が城をでていらい、二人のあいだにはまったく往来がなかった。闇はもう宗茂の存在などわすれたかのように、宮永村の館で気ままに暮らし、村の者たちからは〝宮永さま〟とあがめられている。宮永村にいるかぎり、小なりとも女城主でいられるのだ。

その女城主が書状をもって、

〔徳川どのに味方すべきである〕

と強硬にいってきた。



別居の身だが、立花家の存亡にかかわることだけに、だまってはいられないということらしかった。立花家の跡とり娘として、自分には口だしする権利がある、といった口ぶりが行間にあらわれている。

闇千代直筆の書状に目をとおしながら、宗茂はこのところわすれかけていた、あの忌まわしい一件をおもいだした。

家康につけと強調する闇の心事に、はたして太閤との一件はどのようにかかわっているのか。

もし、闇が秀吉に凌辱（りょうじょく）されたとはっきりと告白していたならば、あるいは、こたびの選択にあたり、宗茂のこころは多少ゆらいだやもしれなかった。

恩義は恩義、妻をもてあそばれた恨みは恨み――。

（自分は一万田鑑相とはちがう）

と宗茂はおもう。

だから、もし闇が秀吉への憎悪をあからさまにあらわし、恨みの情をつよく宗茂に訴えたならば、宗茂の気持ちは妻の恨み、おのれの無念をはらすために、おそらく家康に味方するほうに傾斜したであろう。だが、闇はあくまで真実を明かさず、秀吉は優しかった、山里曲輪の数日はたのしかったとしかいわなかった。

それでいて、よこした書状には、徳川方につくようにと、つよく力説している。

宗茂の信義を愚直につらぬこうとする生き方は、闇も知りつくしているはずだ。にもかかわらず、豊家をすて徳川に味方せよといってきたのは、あくまで立花家の存続を第一にかんがえてのことにちがいなかったろう。

そうわかっていながら、宗茂は、

（これは自分にたいする闇の間接的な告白なのではないか）

ちらりと、おもった。

## 2

七月下旬、宗茂は二千余の兵をひきいて柳河を出立した。

めざすは大坂城である。

もはや迷いはない。秀頼公の名をもってする戦であるかぎり、宗茂は主筋について戦う。

これは義戦だ、と宗茂は位置づけている。三成のもとめに応じて、潔く母の宋雲尼（そううんに）を人質にさしだしもした。

出発直前になって、家康からの書状がとどいた。

〔お味方あれば、恩賞は望みにまかせる〕



とあった。

家中に、いささかの動揺がみられた。

宗茂は主だった家臣をあつめ、

「義によって、いったん秀頼公にお味方するときめたことだ」

自分のかんがえはかわらない、と告げ、

「異議ある者は去るがよい」

とつよい語調でいった。

宗茂にこれほどの決意をみせられたのでは、家来たちにはもはや異議のとなえようもない。

瀬戸内の海を東上する途次、ふたたび家康からの書状がとどいた。こんどは、はっきりと、

〔勝利の暁には筑前筑後、あるいは肥前をさしあげる〕

と記してあった。

いずれも五十万石は下らない大領である。

「せっかくのご諚なれど、いったん大坂方にお味方の約束いたしましたれば」

もはや気持ちはかわらぬ、と丁重に返事して家康の使者を帰すと、宗茂はすぐに書状を引き裂いて海中に投じた。

十時摂津守が声をひそめてきいた。

「なんと書いてござりました？」

「なに、きくだけ耳の毒だぞ。わしも聖人君子ではない。おもわずこころがゆらぎかけたわ」

宗茂は磊落にわらいとばした。

さて、大坂方の総大将は毛利輝元、副将は宇喜多秀家である。

八月から九月にかけて、東西両軍にわかれた諸将の間には、さまざまなうごきがあった。なかんずく西軍には去就定まらず、家康の巧みな調略をうけて、ひそかに内応を約する将が多かった。

京極高次もその一人である。

高次の妻はつは淀君の妹であり、どうじに徳川秀忠の妻おえよの姉でもあった。で、高次は両陣営から誘いをうけ、人質をもとめられて、いたしかたなく二股膏薬をきめこんだ。

宗茂は、この高次の居城大津城を監視するため瀬田に陣した。

大津城は琵琶湖西岸に位置し、東海、東山、北国街道を扼する要衝にある。高次ははじめ西軍に属して北陸に出陣したが、九月に入ると美濃へ転進する途中、海津の港からひそかに琵琶湖をわたり大津にもどって籠城した。



宗茂はただちに察知して大坂城の輝元に報告する。輝元は淀君からの使者を派して高次を説かせたが、きき入れない。そこで毛利元康、同秀包を大将に、片桐且元ら大坂七手組の将、それに宗義智、伊東祐兵、筑紫広門ら九州の諸勢を大坂からくりだし、宗茂の兵とあわせた総計一万五千の兵をもって攻略にかかった。

籠城の兵は三千だが、高次はかねてより城内に食糧、弾薬を充分に備蓄して、この日にそなえていた。

九月十三日、西軍は総攻撃にかかったが、城兵は果敢に抵抗する。攻め手は長等山に臼砲をひっぱりあげて城内に砲撃を加え、湖上からも船や筏をもって肉薄した。

なかで、立花勢の銃撃がすさまじかった。宗茂は出撃にあたり、一発分の火薬をつめた竹筒を縄で数珠つなぎにして弾帯にし、鉄砲隊の肩にかけさせた。ちょっとした工夫だが、これが実戦にあたって大いに効果をあげた。他隊の鉄砲隊が一発射つ間に、立花の銃手はすばやく三発射つ。しかも攻め口に長い塹壕を掘り、壕づたいに敏速に移動して集中射撃を加えた。城方は射すくめられ、立花隊とむきあう矢狭間をとじてしまった。

立花勢は先陣をきって突入を敢行し、立花五右衛門、内田監物らが討ち死にした。

この日のうちに二の丸がおちた。が、城方は本丸に籠もってなおも抵抗する。そこで元康は、高野山の木食上人応其をつかわして開城をうながした。十五日、高次は城をひらくと、ちかくの三井寺に入り、髪を剃って高野山にむかった。

元康は宗茂に城の守備を命じ、美濃へ転進しようとした。しかし、この十五日、美濃関ガ原では東西両軍が激突し、西軍は総敗軍となっていた。

翌十六日、敗報に接した宗茂が伏見まで撤退しようとするところに、大坂方が瀬田の唐橋を焼きおとそうとしているとの報せがあった。宗茂はただちに馬を馳せて唐橋にいたり、まさに火を点じようとしている兵をおしとどめて説諭した。

「源平のむかしより、この橋を焼きおとして利をえたためしは一度もない。諸人に迷惑をかけるだけのこと。守りはこの宗茂がひきうけるゆえ無用になされよ」

味方の敗報に浮き足立っていた唐橋の守兵たちは、宗茂の悠揚せまらざるおちつきをまえに、山のように積みあげていた薪をとりかたづけた。

その後、京に入った宗茂は、京都所司代の木下家定のもとに使いをはしらせ、

「故太閤の御台（北政所）を守護して、ともに大坂城に入りましょう」

と誘った。

ところが、家定は、

「さきにまいられよ。それがしは後を追いもうす」

と、宗茂のすすめをことわった。

「われらが内府に寝返ったとでもおもいましたかな」

十時摂津は憫笑したが、家定にすれば姉の北政所が淀君のいる大坂城にすなおにおもむくはずもなく、困惑しての返答であったろう。



## 3

大坂城に着いた宗茂は、さっそく西軍総帥の毛利輝元や五奉行の一人増田長盛らに会い、熱心に籠城決戦を説いたが、いずれも言を左右にして煮えきらない。すでに戦意を喪失し、おのれの保身に汲々としているのだった。

（こんな実なき者たちのことばを、真にうけた自分が愚かだった）

宗茂は、がっくりと力がぬけおちるのを感じた。

大津城の攻略を命じられたため、天下分け目の大戦に参陣できなかったくやしさもある。いかなる展開になろうとも、この宗茂ならば、ひたすら家康本陣への突入をはかり、一矢をむくいたものを。

なにやら、むらむらと名状しがたい怒りがこみあげた。

このうえは柳河に帰り、つぎなる事態にそなえねばならぬ。おそらく容易ならぬ苦境に立たされることになろう。

「引き揚げるぞ」

城内に人質として入れてあった宋雲尼を奪い返すと、宗茂は全軍をひきいて海路、帰国

の途についた。

途上、島津の兵船とゆきあった。島津義弘は関ガ原で西軍がわに布陣しながら、一戦も交えず、西軍敗北とともに敵中を真一文字に突破して大坂まで駆けぬけた。その間に一千の手勢の九割までを失っていた。

義弘がこのような行動をとったのは、卑怯、臆病のせいではない。大坂出陣いらい、義弘の積極的な献策はことごとく三成につぶされた。戦巧者の義弘は歯がみしてくやしがり、三成の下で本気で戦う気をなくしてしまったのだ。

とまれ、義弘は敗残の身を百余に満たぬ兵とともに船にゆだねている。

「いまこそ先君の仇を報じる好機ではありますまいか」

宗茂に上申した者がいた。

「たしかに島津は父の敵だが、朝鮮の戦陣では、ともに血をながし苦労をわけあった戦友でもある。いわんや、いまはたがいに敗残の身を故国へ逃れる途次ではないか。このような場で旧怨をはらしたとあっては、わが立花の名がすたれよう」

即座に退けた。

立花、島津の両船団は瀬戸内の海を併走し、やがて豊後沖にさしかかった。島津の船団はここから外海にでて日向の海岸づたいに薩摩にもどる。

島津の船の一艘が舷をよせてきて、わかれの挨拶を告げた後、



「貴殿がもどられる道筋には、さぞかし黒田の兵が待ち伏せしておりましょう。われらとともに薩摩に下られ、ともに力をあわせ追討軍と戦われてはいかがか」

との義弘のことばをつたえた。

「ありがたきお誘いなれど、他領に逃れて戦するは父祖の法に違背します。われら決死にて敵地をおしとおる所存にござれば、お気づかい無用にねがいます」

宗茂は義弘の好意に謝辞をのべ、誘いをことわった。

要害の立花城へうつることをこばみ、あえて居城の岩屋城に籠もって討ち死にした紹運の顔を、宗茂はおもいうかべている。

豊後の鶴崎に上陸した立花軍は、ぶじ豊後路をぬけ筑後に入った。国境ちかくまですすんだとき、百名ばかりの立花の兵に出会った。

「お方さまのお指図にて、お迎えにまいりました」

老臣清田又兵衛が膝を屈して、うやうやしく告げた。

闇千代が城代家老の立花三河守に命じて迎えの兵をださせたのだ。

「ご苦労である」

出迎えの者たちに労いの声をかけながら、宗茂は、

（闇はまだ、わしのことをわすれてはいぬらしい）

ふっと胸が温くなったが、

（さて、もどったら、どうもうしてくるか）

おもうや、顔がこわばった。

闇千代の反対をおしきっての大坂出陣だった。けっかは、闇がみとおしたとおり惨憺たる敗北におわった。今後の推移しだいでは、立花家はつぶれるやもしれない。

（おそらく闇は、はらわたの煮えくりかえるおもいをしているであろう）

宗茂は眼のいろを暗くした。

十月九日、柳河城に帰着。出陣のときとはちがい、全員汗と泥にまみれた無残なすがただった。

もしや、とおもった闇千代のすがたは、出迎えの人波のなかになかった。

## 4

休むまもなく、宗茂は城の防備にとりかかる。

四辺はすべて敵とみなければならない。じじつ、関ガ原のけっかを知るとどうじに、豊前中津城主の黒田如水は、はやくも加藤清正に柳河攻めを提案した。

ただ、清正はすでに小西行長の本拠宇土城攻めにかかっており、柳河を攻めるのはその後にしたい、と返事した。清正の宗茂にたいする好意のあらわれとみてよい。



肥前佐賀城主の鍋島直茂は、息子の勝茂を家康の会津征討軍に従軍させたが、勝茂は一時、大坂方について伏見、安濃津城攻めに参加、関ガ原の西軍敗報を知り、あわてて家康に詫びを入れた。家康は赦免の代償に、立花宗茂を討てと命じた。

直茂もまた二股膏薬をきめこんでいた一人である。みずからの立場をよくするには、一日もはやく勝茂とともに宗茂を攻め、戦功をあらわしたいところだが、かねてより宗茂の武辺を知悉していたから、あわてて攻めかかり、ぶざまなけっかになることをおそれた。

十月半ば、鍋島軍三万は柳河にむかい、その先鋒は柳河城の北三里の大善寺までせまった。

宗茂はただちに迎撃しようとして、立花三河らの重臣にひきとめられた。

「このうえ殿がじきじきに出陣なされては、ますます内府の心証を害するばかり、との主計頭（清正）どのからの忠告もあります。ここはわれら家来におまかせあれ」

「わしは、いまさら内府の鼻息をうかがうつもりなぞない」

宗茂はいい放ったが、重臣らは泣かんばかりにしてひきとめた。

やがて、その清正が二万の兵とともに国境の南ノ関を越えた。如水の兵五千も柳河の西北方二里の水田村ちかくにすがたをあらわした。

十月二十日、宗茂は反対をおしきり、みずから出陣して城北一里半の八の院に鍋島勢の先鋒を邀撃した。

（内府ごときをおそれて、すくんでおるときではない。わしは信義にもとづいて秀頼公のために戦っただけだ。天下に恥じるところはない。二股膏薬の鍋島なんぞに、この宗茂を攻める名分があるのか。いまは、見苦しくない戦ぶりをみせて潔く死ぬるだけだ）

小野和泉、立花右衛門太夫、同三太夫、石松安兵衛、安東五郎右衛門を将に、二千の兵を五隊にわけ、宗茂はわずか百の旗本をひきいただけで水路ぞいに八の院へすすんだ。

鍋島勢は十二段にかまえ、はげしく鉄砲をうちかけてきた。立花勢は小勢だが地勢に通じている。巧みに攻めかけて、一時は敵の備えの九段までつきくずした。が、反復攻撃するだけの兵力がない。やがて、大軍におしかえされ、多くの戦死者をだして城内に退いた。鍋島がわの打撃も大きく、追撃するだけの余裕はなかった。

城方苦戦のさまは、宮永館にもきこえてきた。

「お城の男衆は鍋島との戦で手いっぱいであろう。われらが一手で加藤どのの兵を防ぐのじゃ」

闇千代は、館の侍女百人ばかりに武装させ、みずからも紫縅（むらさきおどし）の鎧に身をかためて出陣しようとすると、日ごろ〝宮永さま〟を慕っている村の男女も得物をとって駆けあつまり、総勢二百を超えた。

肥後から柳河へ入るには瀬高（せだか）道と江ノ浦道の二道がある。宮永村は江ノ浦道に面している。



「この闇千代があるかぎり、この道は一歩もとおさせぬ」

闇は館をでて江ノ浦道の入り口をかためた。

それと知って、城内から闇千代のもとに馳せ参じる者が続出した。

立花家譜代の臣たちの心情は複雑だった。お家存亡のときにあたって、先君道雪の姫が女子だけに守られ前線にでたと知ると、もう矢も楯もたまらず持ち場をすてても駆けつけずにはおられなかった。

かれらにとって、闇千代は依然として女城主だったのだ。

宗茂の心中もまた複雑だった。帰城いらい、宗茂は闇と会っていない。迎えの兵をだしてくれたことでもあるし、いちど会って一言礼をのべたいともおもったが、どうしても足が宮永村にむかぬのだった。

闇のほうから、なんの苦情もいってこないのも不気味だったが、闇も分別盛りの三十二歳。もともと、おもいきりのいい気性である。すんだことはしかたがないとして、いまは自分にできることをせいいっぱいはたそうとしているのであろう。

宗茂は、そうおもうことにした。

こんどの戦では、自分もいのちをおとすかもしれない。

（そのまえに、いちど会っておきたい。使いをだせば、闇は城まできてくれるだろうか）

いや、くるまい。いまは城内にはいちがいる。すでにあたらしい御台となったはちがいる

かぎり、闇は面子にかけても、でかけてはこないだろう。

宗茂はさまざま闇の身の上におもいをいたしながら、けっくはなにもしなかった。できなかった。

そして、いま闇は女ばかりの薙刀隊をひきいて清正軍を迎えうとうとしているという。いかにも闇らしい。が、女だてらにむりをしてもらいたくはなかった。

それに、部下が無断で闇のもとにはしるのも、宗茂としてはこまる。大敵にかこまれたいま、家臣が二つにわれ、家中の規律が乱れるのは由々しき事態だ。

しかし、宗茂はみてみぬふりをした。こことこにいたっては、すべて、なりゆきにまかせるしかなかった。

二十一日、清正からの急使が書状を持参した。

〔貴台ほどの名将をあたら討ち死にさせるに忍びない。武士の意気地はきのうの八の院の戦で存分にはらされたであろう。このうえの抵抗は誠忠なご家来を失い、領民の災禍を大きくするだけのこと、そのあたりをご思案あり、ただちに城をあけわたされよ。貴台とご家来衆の身柄は、清正の一身に代えてお守りもうしあげる〕

こころのこもった降伏勧告状だった。

すでに、鍋島、黒田両氏にも根まわしして了承をとりつけてあるという。

清正は、はじめから宗茂と戦う気はなかったのだ。その証拠に、大軍は後方にひかえさせ、身辺には一千の兵しかつれていないと使者は告げた。

宗茂には清正の友情が痛いほどによくわかった。ただし、すぐに降伏する気にはなれない。

「明日、おこたえいたそう」

ひとまず使者を帰した。

わかれぎわに、使者が苦笑しながらいった。

「われらは江ノ浦道をすすむつもりでござったが、そこには、かねてうわさにきく勇ましき女城主どのが、薙刀をかいこんで待ちうけているときき、殿は『そのようなおそろしい道はとおれぬ』と仰せあり、わざわざ瀬高道へ遠まわりしたしだいにござる」

これも、立花家を必死に守ろうとする闇千代どのの気持ちも斟酌されよ、という清正の情にからめた忠告だったのかもしれない。

闇千代、家臣、領民……。こうたたみかけられては、宗茂もおのれ一人の意気地にこだわってはいられなかった。

翌日、宗茂は城東一里余の瀬高に在陣する清正のもとに、開城に応じる旨の書状をさしだした。

開城は十一月三日ときまった。

城は清正がうけとり、立花家主従も家康からの沙汰があるまで清正のもとであずかる。

「わしの不明により、かくなる事態を招いてしまった。こころから詫びをいう」
宗茂は家臣一同をまえに、ふかぶかと頭をさげた。
座中にすすり泣きが起こり、やがて号泣にかわった。
「ただし、われらは卑怯未練のすえに、かくなったのではない。道雪公いらいの節義をつらぬいてのことだ。天に誓って恥じることはない。これからも誇りをもって生きよ」
厳然と面をあげて告げる宗茂に感傷のかげはなかった。
それから城内の蔵をひらき、すべての金穀を平等にわけあたえた。
城内を隅々まで清掃した後、三日、宗茂は十時摂津、由布雪下、森下備中、立花吉右衛門ら、わずか二十一名の者を供に瀬高門から城外にでた。
「殿さまっ」
門前に待ちうけていた二百人ばかりの領民たちが、宗茂の名をよびながら駆けよった。
「ご開城はおもいとどまりください。ご領内四郡の百姓どもは、すべての兵糧米といのちを殿さまにさしあげる覚悟です。もう一度、戦うてくだされ」
庄屋らしき者が、馬前に立ちふさがるようにして懇願した。
宗茂は、馬から降りると領民たちにあゆみより、優しい声音でいった。
「そちたちには苦労のかけどおしで、さぞや恨まれておろうとおもうておったに、おもいがけずも、うれしいことばをきかせてもらった。礼をいうぞ。ただ、これ以上、領内を戦



場にしては、そちたちの苦難が増すばかりだ。どうか、新しい領主のもとで仕合わせに暮らしてほしい」
「いやでござります。わしらは殿さまをどこにもいかせませぬぞ」
「そうだ、わしらの殿さまは立花さまだけだ」
領民たちは宗茂をとりかこむようにして、さけびたてた。
「ききわけてくれ。気持ちはうれしいが、ここでさわぎ立てると、わしにも、そちたちにもためにならぬのだ。さあ、たのむゆえ、道をひらいてくれ」
宗茂は、ひらりと騎乗すると、
「さらばじゃ」
わかれを告げたが、領民たちは泣きながら、いつまでもついてきてはなれなかった。
一里ほどさきの三橋村にいたると、清正がみずから出迎えて瀬高の本陣にいざなった。
本陣には、すでに酒席がととのえられている。
「この酒は酸っぽうはござらぬぞ」
清正は鼻下の髭をゆらしてわらい、
「まずは一献」
瓶子をとりあげて大盃になみなみと酒をそそいだ。
宗茂も屈託なく微笑んで酌をうける。

降将のみじめさなど微塵も感じさせない悠揚せまらぬ態度であった。

「さすがは大明、高麗まで名をとどろかした立花どの。かようなときには、いかな豪気な大将でも、ああはいかぬものじゃ」

相伴した加藤家の家臣たちは、感に堪えたふうにうなずきあった。

よもやま語りをしながら、清正と宗茂は深更まで酒を酌みかわした。



# 流寓

## 1

「えいっ」

朝の冷気を破って裂帛の気あいがほとばしるたびに、境内の銀杏の葉がはらはらと散った。

川霧につつまれた船着場のほうで、船頭たちのよびかわす声がきこえる。

宗茂が肥後にうつってきてから半月ほどになる。

幽囚の身となっても、宗茂の日課はかわらない。日の出まえに床をはらい、口を漱ぎ、諸肌脱ぎになって真剣をふる。

稽古の後でこまごまと面倒をみてくれた世戸口十兵衛のすがたはみえない。ぜひにと志願して上方に従軍し、いまは鬼籍の人となっていた。

十兵衛のかわりに、ちかごろは、はちがかいがいしく宗茂の五体の汗をぬぐう。

宗茂は当年三十四歳。まだ筋肉は隆々とはりつめている。はちは闇千代のように、夫のからだの批評をしたりはしない。ただまぶしげに眼を細め、ぬぐってもぬぐっても玉になって吹きだす汗と一心に格闘する。

依然として、はちのからだは細い。腰のあたりを拭くころには息があがっている。そのようなはちを、宗茂はかぎりなくいとおしくおもう。

(この女にも苦労をかけることだ)

宗茂は、ふっとせつないおもいにとらわれる。

(このような暮らしがいつまでつづくことか)

当面、宗茂にもあすからさきのことはわからない。ただ、いまは高瀬村の朝の冷気につつまれて、こうして立っている。

玉名郡高瀬村は隈本城下から西北にはなれること五里、菊池川河口から一里ばかりさかのぼったところにある。菊池川、浦川、繁根木川が合流してつくった中州の村で、舟運が盛んである。

清正のはからいで、宗茂はこの高瀬村の千間寺に入り、後を慕ってきた家臣百人余とともに住んでいる。闇千代は宗茂との同居を厭い、この高瀬からさらに二里ほど西方の腹赤村の庄屋の家に母の宝樹院と、つきしたがってきた侍女、近侍ら数十人にかしずかれて暮



らしていた。

とうぜん、両者のあいだに往来はない。

柳河十三万石を没収され、加藤家預けの身となった後も、闇千代は宗茂にたいして、とやかく恨みがましいことは、一言も口にしなかった。ただ一度、

「宗茂どのは、しょせんは養子であった」

唇をかむようにしてくやしがったことがある。

つい先だってのことだ。島津討伐の軍がもよおされることになり、清正がわざわざ宗茂を訪ねてきて、参陣をすすめた。

清正にすれば、宗茂が島津討伐の先陣をつとめて戦功をあげれば、家康の心証もよくなり、大名復帰への足がかりにもなる、とかんがえてすすめにきたのだ。参陣の費用として玉名一郡を進上してもよい、ともつけ加えた。

ところが、宗茂は言下に辞退した。

「島津氏は仇敵なれど、朝鮮では辛苦をともにし、先度の合戦ではともに敗者となり、帰路同道したおりには、たがいに力をあわせて戦おうと誓いあった仲。玉名一郡はおろか肥後一国をくだされても、わが身いとしさに恥ずべき戦はいたしませぬ。それがしをお引き立てくださろうとのご好意のみ、ありがたく頂戴いたす」

これほど愚直にでられては、清正もとりつく島がない。この話はそれきりになり、やが

て島津氏も降伏して、参陣の件も沙汰止みとなった。

闇千代の「養子うんぬん」は、このときの宗茂の返答が美談のごとくつたえられるのに反発しての発言だった。

たしかに宗茂の態度は武人としては潔い。しかし、お家をつぶし、幾千もの家来を路頭に迷わせた城主としての責任を、いったいどう感じているのか。すなおに清正から玉名一郡をもらいうければ、旧臣の半分は召し返すことができ、立花家再興のきっかけをつかむことができるのに、と闇千代は残念がったのだ。

しかし、宗茂はその絶好の機会をにべもなく、けとばしてしまった。

「あのとき、お方はひどくくやしがっておいでありました」

それから一年ほどして、千間寺に連絡に訪れた米多比丹波守が、ふとおもいだしたふうに宗茂に告げた。

丹波は闇千代について腹赤村に下った旧臣である。道雪の養女を妻としている。むろん、闇千代びいきだ。自然と宗茂を非難する口調になる。

「闇が、そういうたか」

宗茂は嘆息した。

「闇のくやしさはわからぬでもないが、玉名一郡をもらいうけるということは、加藤家の家来になるということぞ」



「御意」

「それをわかっていうておるのか」

「おそれながら、他家に仕官がかのうた者はわずか、譜代の多くはいまだに扶持をはなれたまま辛酸をなめております」

丹波は闇千代になりかわった気持ちで強面にいった。

たしかに、立花家の家臣のうち、宗茂とともに清正の食客になっている筆頭家老の小野和泉以下およそ百名をのぞけば、あとは次席家老の立花三河守が黒田如水にめし抱えられたくらいで、再仕官できた者のかずはきわめてすくない。一年たったいまも、ほとんどは浪人し、あるいは農夫となり、なれぬ鋤鍬と格闘している。

「お方は立花家の姫として、譜代の家来の身を案じておられるのです」

丹波は、だめおしするように重ねていった。

「……」

その夜、宗茂ははちを抱きながら、たずねた。

「わしは、冷たいか」

「いいえ、温うございます」

「からだのことではない。こころだ」

「こころ？」

はちは、はんなりと首をかしげ、
「わたくしには優しい殿ごであられます」
いいながら、遠慮がちに細い腕で宗茂の腰を抱いた。
「わしは、まちごうているのやもしれぬ」
「なにが、でございますか」
「わしがこうして、ぬくぬくとそなたを抱いている間にも、流浪して飢え、凍えている旧家臣がおる。新領主のもとで、ひどい仕打ちをうけている百姓もおる」
いま柳河城主は田中吉政である。関ガ原合戦で石田三成を捕らえた手柄をみとめられ、三河岡崎十万石から、一躍、筑後一国三十二万五千石の領主に抜擢された。
小才が利き万事に器用な人物で、ことに普請ごとが好きだ。で、入封するや、すぐに柳河城に五層の天守を築き、海を埋め立て、新田をひらき、柳河城下はみちがえるばかりに立派になった。その分、領民からの税のとり立てもきびしい。
宗茂を泣いてひきとめようとした領民のなかには、
「立花の殿さまは偉かった」
と声高に宗茂をなつかしみ、ひそかに小舟に米を積んで、高瀬村まで送りとどける者もいた。
吉政は、それが気に入らない。現世の波間をうまく泳ぎわたって、ここまで立身出世した男である。
——立花宗茂とは何者ぞ。いささかの武辺を鼻にかけ、家をつぶした無能者ではないか。
おのれの評判がわるい分、宗茂への反感をつのらせて、旧主びいきの農民らを弾圧し、あげく道雪の墓のある梅岳寺を破却してしまった。
吉政に仕えるようになった旧家臣から、そのような報せがもたらされるたびに、
（おのれ、成り上がり者め）
宗茂は憤怒をたぎらせたが、いまや加藤家の一食客にすぎぬ身では、抗議することさえままならぬ。
「おのれの生き方をつらぬくためには、このままでもよいとおもうていたが、どうやらそうもいかぬようだ」
「どうなされます？」
胸の下から、はちがきいた。
「わからぬ。わからぬが、なんとかせずばなるまい。まず、ここをでる」
「わあっ」
はちがうれしげに声をはずませた。
「京へでられませ」

京には、はちの母方の実家がある。
「京か……」
「京は天子さまの都、よいことがたんとございましょう」
「だが、わしは浪人者だ。そなたはつれていけぬ」
「まいります」
「はちらしくもないぞ」
「殿さまにご迷惑はおかけしませぬ。母の実家に世話になります。ただ……」
「ただ、なんだ」
「めでたく禄をえられましたら、はちを迎えにきてくださりませ」
「うむ、いつとは約束できぬが……」
「死ぬまで、お待ちしております」
はちは宗茂の胸に顔を埋めて、ひそと泣いた。

## 2

「出国いたしたい」
と清正にうちあけると、



「そろそろ天下に顔見せする潮時やもしれぬな」
うなずいてから、
「内府どのも、もはや貴台へのこだわりはないようじゃ。さきごろも、貴台が瀬田の唐橋を焼かせなかった一件を本多（平八郎）どのからきき、『ききしにまさる優しきこころがけ』と感じ入っておられたそうな。それがしも微力ながら、伝をたよって貴台の赦免と、おとり立てをはたらきかけておるゆえ、望みをすてられぬことだ」
清正は、はげました。
「人は窮したおりに人品があらわれるとは父紹運の口ぐせでした。それがしも、いまはただ見苦しいあがきはせず、こころ穏やかに時勢をながめつつ生きたいとおもいます」
「さよう、さよう。そのような生き方は余人にはできぬこと。ゆるりと天下を観望なされてまいられるがよい。失礼ながら、それがしからもいささかの餞別をさしあげたい」
清正は微笑んだ。
「おてまえよりたまわったかずかずのご芳志、宗茂、生涯わすれませぬ」
宗茂は丁重に礼をのべてから、
「ついては、一つだけ気がかりがあります」
といった。
「なんでござろう」

「恥ずかしながら、腹赤の……」
「ああ、闇千代どののことでござるか。貴台についていかれるならば、それもよし。のこるといわれるなら、それがしがこれまでどおりお世話いたそう」
「かたじけない。立花家をつぶしたそれがしに、もはや闇にあれこれもうす資格はありませぬ。おてまえのご情におすがりするばかりです」
「わかりもうした。で、ご家来衆はいかがなされる」
「禄なき身では、これまた指図はできませぬ」
「では、それがしがひきとってもよろしいか」
「あの者たちが望めば、ぜひともそうねがいたい」
宗茂が出国の決意をのべると、由布雪下、十時摂津など十九名が、どうしても供をするといって退かない。
「ついてまいっても、わしは、なにもしてやれぬ」
「殿に、なにかをしていただこうなどとは、毛頭おもうておりませぬ。それがしどもは、ただ殿のおそばにいたいだけでござる」
八の院の戦で負った深傷が治りきらぬ小野和泉ほか百人ほどが残留することになり、それぞれ加藤家にめし抱えられることになった。
慶長七年（一六〇二）三月、宗茂の一行二十名は肥後を出立した。



野は一面の蓮華である。頭上で雲雀がさえずりをかわしている。
宗茂のみが馬、あとは十時摂津以下、すべて徒歩である。禄なき主従のあてのない旅立ちだった。
雪下の顔はおもいなしか暗い。気がかりなのだ。ふところぐあいが、である。
出発にさきだち、清正から餞別をもらった。まずは当面の路銀には不自由しない。しかし、それもいつまでもつことか。
雪下以下、計数に明るい者は一人もいない。宗茂にいたっては、これはもう赤ん坊に等しい。戦に関してはおどろくべき緻密な作戦を編みだす天才戦術家だが、金銭の出入りをはじめ、俗世の駆け引きなどにはまったく関心がない。秀吉の使いばしりから苦労して大名になった清正などとちがい、小なりとも生まれたときから城主の子だったせいもあり、宗茂の頭のなかにあるのは、いかに真直、清廉に生き、そして潔く死ぬか、この一事だけといっていい。
戦のスペシャリストであるほかは、メタフィジカルなものにしか興味がないのである。けっくは、それが家をほろぼすことにもつながり、ひいては闇千代を離反させる原因にもなったのだが……。
戦国大名でありながら、宗茂には一片の領土欲もなく、大大名に成りあがるためにこころを労するといったこともいっさいなかった。

大名にとり立ててくれた秀吉にたいしても、宗茂はいちどたりとも尻尾をふったことはない。すべては秀吉が一方的にやったことで、宗茂は感謝こそすれ、そのためにおもねったりはしなかった。宗茂の整斉たる生き方が、その謙虚の裏にかくされた能力が、人間通の秀吉のこころを魅きつけただけのことだった。

いま、宗茂につきしたがう家臣たちが魅きつけられるのも、その点だった。無禄となった旧主についていっても、なにほどの利益も期待できない。この時代は、まだ封建的主従関係はない。利害のまえには家臣も平気で主人を売り、殺しもした。それが、あたりまえだった。

しかし、雪下らはついていく。ただの忠義心ともちがう。ひたすらそばにあって、お世話をしたい、なにかの役に立ちたい。塵外の気をただよわせる宗茂という一個の人間が、かれらをそういう気持ちにさせるのだ。

一行はわずかな伝をたよって、京は西山の妙心寺の塔頭の一つに入った。

宗茂は御所や神社仏閣を悠然と見物し、それにもあきると縁側に書見台などだして仏典に読みふける。仕官運動をするけはいなどまったくなかった。

そうして半年がすぎた。京の町並みを吹きぬける風は、すでに秋の冷気をふくんでいる。

「こまった」



雪下は頭を抱えた。

金のたくわえがつきたのである。さりとて借金のあてもない。

「われらで、内職するほかないな」

摂津はいい、さっそく翌日から町にでた。

趣味の尺八が役に立った。深編笠で面体はかくせるが、元十三万石の大名家の家老職が虚無僧のまねをして門づけをするのである。しかし、すべては宗茂のためとおもえば恥ずかしくはなかった。他の者も竹笊や草鞋を編んだ。雪下は老眼を細めて懸命に竹箸をけずった。

ただし、これらの稼ぎも微々たるものだ。家臣たちは窮したはてに乞食までした。

さすが宗茂にも家来たちの苦労ぶりはわかった。わかってはいるが、やはり殿さまだ。米櫃が底をついたため、わずかにのこった米で雑炊をつくって宗茂の膳に供したことがある。宗茂は一瞥して、いった。

「いらざることをする。飯のままだせば汁くらいは、わしがかけるわ」

雑炊のなんたるかを知らないのである。

「これが泣かずにおられようか」

雪下はぽろぽろと涙をこぼした。

家来たちは細工物を売ったり乞食をするために町にではらうことが多い。宗茂はひとり

だけのこり、書見などしてすごす。そこににわか雨がきた。庭には残飯が干してあった。干飯にするためだ。家来たちは、とんで帰った。

もしや殿がとり入れてくだされているのでは……。かすかに望みをかけて馳せもどったが、宗茂は端然と書見をつづけており、庭で干飯は無残に雨にうたれていた。

「これでこそ、わが殿だ。いずれご運もひらけよう」

家来たちは喜びあった。この殿にして、この家臣ありというべきか。

そのうち、摂津にいい話がとびこんだ。豊臣家から高禄をもってめし抱えたいといってきたのだ。

「よい話ではないか。おぬしが仕官し、禄の一部をまわしてくれれば大いにたすかる」

雪下がにやにやしながらいうと、摂津はむきになって、いい返した。

「殿をさしおいて仕官などできるか。わしはいつまでも殿のおそばにいたいのだ」

それから、しばらくして、こんどは宗茂に仕官話がきた。あいては加賀の前田家である。

「十万石でいかがでござろう」

使者は得意げに告げた。

宗茂はこたえない。

「不足ともうされるか」



重ねて問われて、宗茂はいった。

「腰ぬけの分際で、よくもさようなことをいうてきたものよ」

この一言で、十万石は泡ときえた。

腰ぬけとは、前田利長が秀頼の傅役をつとめ、父利家没後は五大老をひきついだ身でありながら、はやばやと家康に屈し、関ガ原役では東軍に与したことをさしている。宗茂からすれば、もっとも唾棄すべき人物で、仕官などおもいもよらぬことだった。

それにしても、加賀百万石をあいてに、おもいきった啖呵をきったものだ。十万石をけっとばし、宗茂はあいもかわらず家来に養われながら、悠然と時をすごした。

この年も師走にちかい氷雨の降る寒い日だった。

肥後の米多比丹波から書状がとどいた。一読して宗茂は肩をおとした。訃報だった。十月十七日、闇千代が病死したと簡単にのべられている。べつに侍女のうのからの書状が添えられていた。こちらは、ずいぶんと長い。

## 3

宗茂が上洛した後、闇千代はにわかに生気を失った。

生来の勝気さがかげをひそめ、口かずもすくなくなり、柳河城からたいせつに抱えてき

た目白の世話さえも、侍女たちにまかせきりになった。

「比翼の鳥、連理の枝とはいかぬ仲でも、やはり夫婦は夫婦、お方さまはちかくに殿さまがおいでだからこそ、気の張りもあられたのでしょう」

たかの死後、侍女頭となったうのが、気づかい顔に米多比丹波に告げ、

「せめて出立まえに、殿がお顔をみせられれば、お方さまのお気持ちもずんとかわったでありましょうに……」

と歎いた。

いくら闇千代びいきでも丹波は男だけに、宗茂を責めるのは筋ちがいだとおもう。わかれて暮らす身とはいえ、やはりかつての夫が長旅にでるときけば、お方のほうから挨拶にでてしかるべきであろう、と。

しかし、すすめてみたとしても、すなおにきき入れるようなお方ではない。そのことを知りつくしているだけに、丹波もあえて口だししなかったのだ。けっきょく宗茂は最後まですがたをみせず、小野和泉が名代で旅立ちを告げにきただけだった。

別居に踏みきった後、闇は断ち切れぬ愛情と憎悪の狭間で苦悩しつつ生きてきた。柳河城を失い、加藤家の庇を借りて惨めな暮らしをするようになってからは、憎悪と怨恨の情のほうが増幅され、宗茂の名を耳にするのさえ、おぞましい気になった。で、わずか二里の近間に住まいながら、絶交をつづけてきた。



その宗茂が、きえた。

きけば、なんのあてもなく上方に彷徨いでたのだという。おそらく、ふたたびこの地にもどってくることはないだろう。おもうと、闇の胸はきゅんとしめつけられた。

（やはり、こころのどこかでは、あの男を愛していたのだ）

宗茂に完全に去られてみて、はじめて闇はそのことに気づいたのだった。

（あのように融通のきかぬ男。あたしのほうが、もうすこしおれてでればよかったのかもしれぬ）

久しぶりに、しおらしい気持ちになったが、さりとて宗茂に詫びを入れ、後を追うなどという気にはなれない。失意のなかにも、なお立花家の女城主としての誇りはすてきれないのである。

半年、一年とたつうちに、闇はしだいに食が細り、寝つくことが多くなった。

「うの、稲荷社の御札をもろうてきておくれ」

ある日、闇はうのに頼んだ。

稲荷は亡き道雪の信仰神だった。

闇は御札を寝所の枕もとの文匣におさめ、日夜祈った。

「あたくしのいのちに代えて宗茂どのをお守りください。なにとぞ立花家の再興にお力をお貸しくださりますよう」

かすかに病間からもれてくる闇の祈りをきくたびに、
「おいたわしや」
うのは身をもんで、すすり泣いた。
庭の萩の花に明るい秋日のさす一日、闇はうのをよんで、
「長櫃から、あれを……」
と命じた。
「あれ、でござりますか」
うのは察しよく、漆塗りの長櫃の底ふかくしまわれている反物をとりだし、闇のもとにはこんだ。
平絹に金糸の刺繍をほどこした、みごとな反物である。十四年まえ、はじめて上洛した宗茂が、八坂神社ちかくの呉服商から闇への土産に買ってきた品だった。
「小袖に仕立てれば、いろ白のそなたに似あうとおもうて……」
はにかみながらさしだす宗茂に、
「これを、あたくしに？」
瞬時、うれしさのあまり声をふるわしかけた闇だったが、すぐに、
「あたくしには、白覆輪の太刀のほうが似あいますのに」
かわいげもなくいいすてて脇におき、二度とみようともしなかった。



「まずは、お肩にかけてみられませ」
老女のたかがとりなしても、頑としてきき入れない。
このとき闇、二十歳。立花城から柳河城にいやいやうつってきたばかりで、なにかと宗茂に八つ当たりしていたころである。
（こんな布切れ一枚で、ご機嫌とりをしようとして……）
宗茂の好意を、すなおにうける気がしないまま、闇はついに小袖に仕立てることもなく、長櫃の底にしまいっぱなしにしてきた。
その反物を、いま闇は縁ちかくにでて、みずから両肩にかけた。秋の日ざしに金糸がまぶしくかがやき、病み疲れた闇の顔を華やかに彩った。
「まあ、なんとお美しい」
うのは、おもわず声をあげ、うっとりとみとれた。
「わたくしめが、さっそくにお仕立てもうしましょう」
「そうだね」
闇はめずらしく、すなおにうなずき、
「もう、あの方におみせすることはできないだろうけれど」
さびしく微笑んだ。
「なんの、お方さまさえその気になれば、いつでもお会いできますよ」

うのは、はげますようにいったのだったが、それから十日とたたぬうちに闇は息をひきとったのだった。

「せめて、いちどでも袖をとおしていただきたかった」

縫いかけの布地のうえに身を投げて、うのは号泣した。

## 4

米多比丹波の報せは事務的なものだったが、添えられたうのからの書状には、闇千代の最期のさまが綿々とつづられていた。

〔小袖は、侍女がみなで手わけして徹夜で縫いあげ、お方さまにお着せして柩に入れました。それはそれは、もうまるで生きておられるように、お美しいおすがたでした〕

と、うのは結んでいた。

読みおえると、宗茂は丹波からの書状を黙って雪下にわたし、みずからはつと立って外廊にでた。外はあいかわらずの氷雨だった。

(闇、その優しさをどうして、もっとはようみせてくれなんだ)

宗茂は、氷雨にうたれる石灯籠にむかって、問いかけるようにつぶやいた。

剣を刺しとおされたような痛みが、胸腔をつらぬきはしった。



(闇、すまぬ。そなたの優しさをひきだすことのできなかったわしがわるかった)

宗茂は、がくりと頭を垂れた。

門の外で、寒々と犬が鳴いている。

(一つの家に、二人の主はいらぬとのおもいから、わしは、そなたをつめたくあしらった。女の気持ちがわかるといいながら、つつましい妻女になることだけをおしつけた)

宗茂にすれば、ずいぶんと我慢もしたつもりだった。

そのおもいがつよいだけに、自分がこれだけ優しくでているのに、どうしてわかってくれないのか、と闇をうらめしくおもいもした。正直なところ、途中から投げた。夫婦であろうとすることを。戦にかまけて、闇に夫としてむきあうことを放擲した。

「闇、さぞかしつらかったろう。さびしかったろう。わしが、この宗茂が、そなたを殺したのだ」

声にだして、宗茂は悲痛に闇に語りかけた。

「妻ひとり幸せにできぬ男が、なんで大名家を差配などできよう。わしがいま、このような境涯に身を沈めているのは、その罰だ。罰をうけたのだ」

罰――。

罰といえば、すでにあのときからうけているのだ、と宗茂はおもう。

自分の意思とはかかわりなしに、そうなったことではあるが、秀吉の直臣にとりたてら

れたことで、宗茂は旧主の義統をないがしろにした。

縁うすき主ではあったが、秀吉に改易されたとき、なぜ身をすてても義統のために哀訴嘆願しようとしなかったのか。父や義父が生きておれば、かならずや、いのちをかけて義統のために直訴しただろう。

しかし、自分はしなかった。これまた戦にかまけて、おのれの身、家臣のいのちを守ることに汲々とするばかりで、旧主の窮状から顔をそむけた。

義統さまは武士として、もっとも恥ずべき敵前逃亡をしたのだ。直訴のしようもないと、はじめから投げてかかってしまった。闇との夫婦関係の修復を投げてしまったのとおなじように。

で、罰をうけた。こともあろうに、恩寵をうけた秀吉に妻を弄ばれてしまったのだ。確証はない。が、闇がじっさいに太閤の褥に侍ったかどうかはもはや問題ではない。

人間として、なすべきではない行為を太閤はしたのだ。この一事と恩義とはべつのことだ。責めるなら太閤をこそ責めるべきだった。しかし、それをせず、自分は闇を詮議した。

あのとき、闇は冷やかにわらうのみだったが、一人の女として、どれだけ傷ついたことか。自分はそれに気づかず、おのれのみが傷つき、苦しんでいるとおもいこんでいた。けっか、闇を自分の手のとどかぬとおくへ追いやってしまった。



信義を標榜して生きる武士ならば、まっさきに妻女をこそ信じるべきであった。

（闇、それでも、そなたはわしをみかぎることなく、最後にはあの小袖をまとってくれたのだな。ありがとう。礼をいう。いまになって、わしは真実、そなたを愛していたことに気づいた。愚かな夫をゆるしてくれ）

宗茂は縁から蹌踉として庭に降りた。たちまち氷雨が襟もとから五体にしみとおった。

「殿っ」

背後から雪下がよびかけ、抱くようにして室内につれもどした。

「お悲しみはわかりまするが、御身たいせつになされませぬと」

いいながら、雪下はあわただしくおのれの塩たれた肩衣をぬぎ、宗茂のぬれた首筋を懸命に拭った。

門付けからもどってきたばかりの摂津の虚無僧すがたも、そこにあった。

「殿、わが身を責められてはなりませぬぞ。御台への供養はただ一つ、お家を再興なさることにござる。本日はおもいのほか報謝が多うござった。ささやかなれど酒など購い、亡き御台の通夜を営みましょう」

障子一枚をへだてて、氷雨はなおも降りつづいている。

その夜、ひえきった塔頭の一室で、主従は黙々と濁り酒をのんだ。

すこし酔いのまわったところで、摂津がおもいきったように宗茂の顔をみていった。

「われら、殿の苦衷をおもんぱかり、いままで口をつつしんでおりましたが、かの朝鮮陣中でのうわさ、殿は真実とおぼしめしか」
「これ、摂津、おぬし酔うてなにをもうすか」
雪下があわてて制止にかかったが、
「よい」
宗茂は鷹揚にうなずき、
「まことのことと、おもうておる」
はっきりといった。
「されば、大坂にもはや義理立てすることもござりませぬな。恩は恩、恨みは恨み。故太閤への義理は先度の大津城攻めで充分に立ちもうした」
「おぬし、それで秀頼公からのおめしをけったのか」
雪下がきいた。
「むろん。されば、このうえは京にて逼塞することもござらぬ。江戸へまいりましょう」
「江戸か」
「さよう。家康公の膝もとの江戸でござる。亡き御台のご遺志も、それでありましょう」
摂津は、眉をあげ、宗茂の眼をみすえていった。
その翌朝、境内で真剣をふる宗茂のすがたをみて、雪下も摂津も息をのんだ。



髷がない。宗茂は夜のうちに剃髪したのだ。
「なにももうすなよ」
宗茂は湯気の立つ無髪の頭をかたむけ、底鳴りのする声でいった。

## 5

相州小田原宿は旧北条氏の城下町だった。
いまは徳川譜代大久保氏の城下として大いに賑わっている。武芸者のすがたも多い。
慶長八年（一六〇三）秋、箱根の嶮を越えて小田原に入った宗茂主従は、茶屋の縁台にかけて饅頭を食している。その顔には、いちように安堵の表情があった。ひとり雪下は涙ぐんでいる。
とどいたのだ。銀子が二十貫。小野和泉からのこころづくしの金子である。
和泉はもともと吝嗇な蓄財家で知られていた。筆頭家老の地位を利用して汚職をしているのでは、とうわさされたこともある。が、そうではない。朝鮮役で戦費が欠乏するや、それまでの蓄財をぽんと投げだした。一行が肥後を出立するおりにも、手持ちの金子をひそかに雪下に託した。そして、このたびは宗茂が江戸へむかうと知って、またも銀子を送りとどけてきたのだった。

和泉は、秀吉から本多平八郎や後藤又兵衛、飯田覚兵衛らとならぶ日本七槍の一人に指名された槍の名手である。で、豪傑好みの清正は四千石で和泉をめし抱えた。その扶持のなかから和泉が貯めた銀子二十貫である。道中、笊や草鞋を売って食うや食わずの旅をつづけてきた乞食の主従だ。和泉の志が饅頭の味にしみとおり、雪下はおもわず涙ぐんでしまったのだった。

一行は江戸へ入ると、高田の宝泉寺に草鞋の紐を解いた。この寺の住職は立花家の旧臣だったので、その縁をたよって宿を借りることになった。庭に橘の生け垣がある。

江戸にでても、京の暮らしと状況はかわらない。みなで内職をつづけ、摂津はあいかわらず尺八をたずさえて町中に托鉢にでた。

旗本、番衆の屋敷が多い外堀ぞいの番町のあたりをながしていたときだ。

「おい、そこのえせ坊主」

背後から罵声がとんで、三人の浪人体の男がからんできた。摂津は腕が立つ。しかし、宗茂に迷惑がかかってはならないと、自重してあいてにしないでいると、三人はやにわに抜刀して斬りかかってきた。

「無体なっ」

摂津は尺八であしらおうとしたが片袖を切り裂かれた、やむなくあいての刀を奪いとりざま、瞬時に三人を討ちはたした。けっか、町奉行に捕らえられたが、奉行はひととおり



の調べをすますと、

「おみごとである」

摂津の手並みのあざやかさをほめそやしたうえ、無罪放免してくれた。

夜になって宝泉寺の門をたたく音がする。

(すわ、再度の詮議か?)

摂津が身がまえるところに、

「立花どの、このようなところにおわしたか」

大声をあげながら入ってきたのは本多平八郎だった。

「おう」

宗茂もなつかしげに声をあげる。

「いやあ、そこもと肥後守のところにおいでとばかりおもうておったが、江戸におわしたか」

「本多どのこそ、どうしてここがおわかりめしたか」

「それがな、そこもとのご家来が本日、番町のあたりで三名の狼藉者を斬ってすてた。そのみごとな腕前が評判になりもうしてな……」

摂津は一件を宗茂に話していない。罪にならなかったことだし、宗茂の耳を汚したくないとおもんぱかってのことだった。

「ほう、それがしの家来が……」
「なに、ご存じないのか。たしか十時摂津とかもうされるそうな」
摂津はおもわず面を伏せた。
「摂津、まことか」
「ははあっ、まことにもうしわけなきしだいにて……」
「なに、さすがは立花どののご家来衆。お手柄じゃ。おかげで、拙者がこうして立花どのに会えた」
平八郎は豪快にわらいをはじかせた。
平八郎は二年まえに上総大多喜城主から伊勢桑名城主に栄転したばかりだった。
「それにしても、ご家来衆を托鉢にだされるとは、失礼ながら、ずいぶんと困窮のごようす……」
いいながら、平八郎は寒々とした方丈をみまわした。
「お恥ずかしいかぎりでござる」
口ではそういいながら、宗茂は平然としている。
「いや、これでこそ立花どのじゃ。きけば、加藤、前田両家よりの仕官話をけられたそうなが……」
「さよう、ことわりもうした」



「禄高が不服でござったか。いや、おてまえのことじゃ。そうではあるまい。そもそも根性なしの前田ごときが、おてまえを抱えようとするのが料簡ちがいというものじゃ」
平八郎は膝をたたいて憤りをみせた。
そこに、住持が気をきかせて酒の膳をはこんできた。
「おう、ありがたい」
平八郎はすぐに酒瓶をとりあげて宗茂に酌をしながら、
「もう十年以上にもなりますかな」
なつかしい眼のいろをみせて宗茂に問いかけた。
秀吉によびだされ、宗茂とともに、
「東西に無双の者」
と賞されたのがうれしく、宗茂の宿所を訪ね、二人で夜遅くまで痛飲したときのことをいっているのだ。
「拙者ごとき陪臣が、関白どのから天下の立花どのとならび賞されたのじゃ。恐縮するやら誇らしいやら……」
いいながら、平八郎はぐいとあおり、
「立花どのを陪臣にすることはあいならん。となれば、ご仕官先はわが殿をおいてない」
一気にいって宗茂の顔をうかがい、

「いまだに、徳川を憎んでおいでか」
ずばりとたずねた。
「もともと家康公を憎んでなどおらぬ。ただ故太閤の恩義にむくいるため敵対いたしただけのこと」
「それをきいて安堵いたした。おてまえは太閤の恩義にむくいるため大坂方に与して、浪々の身になられた。もはや、存分に忠義をはたされた」
「なに、負けては忠義になりもうさぬ」
「なにをもうされる。負けたのは、おてまえではなく治部少輔でござるよ」
いわれてみれば、そのとおりだと宗茂もおもう。
「いかがでござろうか。卒爾ながら、わが殿に会うてみられる気はござらぬか」
「江戸にでてまいった挨拶でござるか」
「そうおもわれてけっこう。ともあれ、お会いめされ。大御所（家康）も喜びまするぞ」
「それがしを憎んでおいでではないのか」
「なんの。世に稀なる誠忠の士として感服しておられる」
「……」
「いや、今夜はにわかにお邪魔して失礼もうしあげた。いずれ後日……」
平八郎は盃を伏せると、一礼して足音高く退出していった。



翌日、金子にそえて身のまわりの調度一式がとどいた。むろん贈り主は平八郎である。
翌慶長九年正月、宗茂は江戸城にめされた。このころ家康は駿府にいる。代わりに秀忠が引見した。
「そなたの節義、天晴れである」
秀忠は、甲高くいい、
「ついては、徳川に仕えてくれぬか」
みずから問うた。
「おそれ入りまする」
宗茂は声低くこたえた。
「封五千石、相判衆に任ずる。承知か」
「ありがたく、おうけつかまつる」
「よい。そなた、猛きのみにあらず、性誠にして情優しき将ときく。いく久しくわれを補佐せよ」
ほどなく家康が江戸にでてきて、宗茂をよんだ。
「秀忠が頼りにしておる」
「よき、お世継ぎにおわします」
「いや、不肖の世継ぎじゃわ。ついては、そちによろしく後見をたのむ」

「なにほどのこともできませぬ」
「徳川に仕えるについては、そちも、さぞかしおもい悩んだであろう」
「悩むほどのことはござりませなんだ。恥ずかしながら浪々に疲れ、秩禄に魅かれての仕官にござりまする」
「いうたな。とはいえ、仕官したからには、なにかおもいさだめたことがあろう」
「なんの。いまや徳川さまの天下、それがしなどのでる幕はござりませぬ。せめて御門の一つでも番できればと存じおりまする」
「ききしにまさる男よの。この家康あいてに、よくもいうたり」
家康は拳で膝をうち、眼をほそめて、ほれぼれと宗茂をみた。
明けて同十年正月、宗茂は奥州棚倉一万石に封ぜられた。禄はわずか一万石ながら、まぎれもない大名に返り咲いたのだ。
宗茂は猟官運動などいっさいしなかった。ただ家来の稼ぎに頼り、雑炊を食らっていただけだ。にもかかわらず、清正や平八郎らが親身になって赦免をねがい、仕官の世話をした。せずにはおれなかった。
かれらのこころを、つきうごかしたものはなんだったのだろう。
一度会えば、たれもが好感をもたずにはおられなかった廉潔の人柄、その涼やかに澄んだ瞳に象徴される誠実無比な生き方——。それが、人たらし、狸親父といわれた秀吉、家



康のような怪物のこころをも魅了したのだ、としかいいようがない。
とまれ、宗茂は陸奥国棚倉にゆく。江戸から東へ四十里、南国育ちの宗茂には、まさしく未知の国である。が、宗茂には迷いもおそれもない。ただ、わが道をゆくのみである。
春三月、江戸は爛漫たる桜花に埋めつくされている。
宗茂は羅紗地に金銀の縫いとりをした陣羽織を着している。こんどの旅は全員騎馬である。背後に荷駄の列をしたがえている。
千住の宿まで一駆けしたところで、一行は駒をとどめ、あらためて花の饗宴にわかれを告げた。
「奥州路は、いまだ雪にとざされておるやにござります」
馬腹をよせて雪下が宗茂にささやいた。
「それもよかろう」
にっこりと笑み返し、
「まいるぞ」
宗茂は鞭をあげた。
鞭は雪下が老眼をほそめてけずった竹鞭である。
一行のすがたは、すぐにあわあわとした春日のなかにとけこんでいった。
この日、江戸に小さな地震があった。

〔了〕

# あとがき

戦国の快男児立花宗茂を、いつかは小説に書きたいとおもってきた。

なにしろ、権勢欲や領土的野心などとは無縁の人である。信義に篤く、しかもめっぽう戦がつよい。それもつねに小勢をもって大軍を破り、他人の危急を救う義戦が多かった。わくわくする、痛快なストーリーに仕立てられそうだ、と。

ところが、あらためて史料を読み返すうちに気がかわった。余計な脚色を加えずとも充分に魅力的で、しかも、実父の高橋紹運、養父の立花道雪の信義一筋の生き方が、これまた、なんともすばらしい。ある意味で宗茂の人生のみごとさは、この二人の父の踏み跡を、そのままトレースしたようなところがある。

で、二人の父と宗茂という、いうなれば戦国の父子像を描くことに切りかえ、筋立てのおもしろさよりも、史料にそって戦国に稀なる父子像を忠実にあぶりだす史伝小説ふうな書き方にした。その分、歴史背景の説明が多くなった。ただ、これまでの史家が論外として切りすてた俗説のたぐいを積極的にとり入れた。この国で、まことの意味での評伝が育



たないのは、稗史のたぐいを蔑視しすぎ、あるいは、主人公をきれいごとに描こうとして、イメージをそこねるようなエピソードを、安易に排除しすぎるからではないか。人間の真実の歴史は、一見、片々たるエピソードの集積のなかにこそ埋もれていると、わたしはかんがえている。

いかに巧みに情報や戦略を駆使して成功するか、といった知的ノウハウ重視の現代的価値観からすれば、ここに描かれた戦国の愚直な男たちの生き方は、たんなる愚蒙としか理解されないかもしれない。しかし、わたしは、あえてそのような現今の風潮へのアンチテーゼとして、この作品を書いた。

たしかに、人生は日々戦いの連続だ。賢明に知をはたらかさなければ、現代の競争社会を生きぬくことはむずかしい。だが、その競争の果てのゴールに待っているのは、まぎれもない死だ。死のまえに、おのれの生き方をかえりみて恥じるところはないか。ほんのひとときでもいい。立ちどまって自分に問うてみる。ただ一度かぎりの自分の人生に、おもいを馳せてみる。そんなとき、ふっと、この作品をおもいだしていただけたら、なんと幸せだろう。

賢しらな知ばたらきだけがすべてではない。猛々しい戦いのみが人生ではない、のである。

なお、本書は宗茂が棚倉一万石に封じられたところでおわりにしたが、宗茂は、それか

らなお三十年余の歳月を生き、寛永十九年（一六四二）の十一月二十五日、七十六歳をもって卒している。その間、元和六年（一六二〇）には、旧領柳河城主にみごとに返り咲きを果たしている。むろん、なんらの復職運動もしていない。ちなみに、宗茂には子ができなかった。はちの他界後、葉室大納言藤原頼宗の娘菊子を迎えたが、やはり子宝に恵まれず、弟統増（直次）の四男忠茂を入れて後嗣にした。

小著執筆にあたっては、歴史家の川口素生氏に資料の提供と有益なご教示をいただき、また、諸先学の著書より多くのご鴻恩をうけた。深甚なる謝意をこめ、巻末に参考文献として掲げさせていただく。最後に、かわらぬ励ましをいただいた担当の小林成彦氏に、こころから御礼もうしあげる。

一九九七年仲秋

八尋舜右



# 解説

鈴木昌平

あまり上演の機会には恵まれなかったにも拘らず、タイトルだけは人口に膾炙したシェークスピア劇に、「末よければ總てよし」というのがある。実人生ならそれでよかろうけれど、小説はそういうわけにはいかない。小説は初めから終りまで、すべて面白くなくてはならないのである。面白いとは、ファニイであるとかエクサイティングであるとかの謂いではない。筋立てが紆余曲折に富み、波瀾万丈であればよいという意味でもない。書かれていくことの一つ一つが、読み手に何らか考えるに値する事を提供し得る小説こそが本当に面白い小説なのである。勿論、ここで私が考えるに値する事というのは、読み手の人生に相渉る態のものでなければならない。この世に実在したある人物の出生からその死までを描く、所謂「一代記」のかたちを取るか否かは別として、元来史上の人物に取材してストーリイを構築する歴史小説というものは、主人公として設定された人物のキャラクターを浮き彫りにし、それが時代や世の中と相関わって紡いでゆく人生を描き、併せてその主人公が生きた時代や社会の姿あるいは意味を読者に伝えようとするものである。

したがって、歴史小説から受ける感興は、描かれた人物像に読者自身を重ね合わせてみること、主人公の人生と読者自身の人生を相照らすこと、主人公が生きた時代と読者が現に生きている「今」との相関・相違を考えてみること、といった比較の中に生じる感興である。そういうものでない歴史小説など私は一編も読んだことがないし、読もうとも思わない。この作品においても、作者の意図は表題となった立花宗茂に実父高橋紹運、義父立花道雪を加えた三人の武将のみごとな人生を描き、戦国乱世と呼ばれる一時代を読者に追体験させようとするところにある。そして、その意図はもののみごとに達成されている。

三人が辿った三つの人生は、どれも一点の汚濁もない人生である。三人が三人ともまことの快男児なのである。卑怯なこと、臆病であること、打算的であること等にかけては常に相当の自信をもつ私など、三人の前に己自身を顧みて自ずから忸怩（じくじ）たらざるを得ない。

この小説の読者は、ひょっとすると「立花宗茂」という表題に疑念を差し挟むかも知れない。立花宗茂という名が一向に出てこないからである。宗茂が正式に宗茂と呼ばれるようになるのは終りに近い「碧蹄館（ピョクチェグアン）」の章からであり、それ以前の章では宗茂よりも実父高橋紹運と義父立花道雪のことに多くの筆が費やされ、宗茂の前名である統虎は脇役に徹しているかに見える。芝居で言えば、大看板の主役が幕切れのちょっと手前から姿を現すといった態のこの小説のつくりは、他に類を見ないのではあるまいか。しかしこの小説は、そういう書かれ方をしてこそ面白いのだ。と言うより、そういう成り立ちでなければ



主題が貫けない小説なのだ。人名をタイトルとする小説としては確かに異例かも知れないが、そうあるべき小説なのである。と言うのは、二人の父なくして宗茂という人物はあり得ないということを意味する。作者自身が「あとがき」に、「ある意味で宗茂の人生のみごとさは、この二人の父の踏み跡を、そのままトレースしたようなところがある」と書いている。これは言葉を換えて言えば、三人で一つの人生を生きたということでもあるし、三人がそれぞれの人生において一つの生き方を体現したということでもある。要するに、紹運や道雪の中にすでに宗茂は胚胎されているのであるから、たとえ宗茂という名が出遅れているとしても、宗茂のキャラクターはこの小説の初めから予知されている、あるいは登場していると言ってよい。人名をタイトルとする小説としては確かに異例のこの作法自体が私には興味深いし、そういう作法を敢えて選んだところに作者独自の創造的才質が現れているのだ、と私は言いたいのである。

今まで私には好きな時代小説作家が三人あった。司馬遼太郎、吉川英治、山本周五郎の三人である。司馬の小説には時代を動かす原理といったようなものを絶えず教えてもらったし、吉川にはストーリイ・テラーとしての魅力をたっぷり味わわせてもらった。山本の作品に彫り込まれた人間の情のこまやかさや美しさには、時に涙ぐむほど感銘した。今、私は好きな時代小説作家を、四人に増やそうと思っているところである。

作者がこの小説でひたむきに書こうとしているのは、紹運、道雪、宗茂に共通する「愚

直な生き方」である。愚直な生き方とは処世にあたっておのが利を算せず、権力にへつらわず、日和見を排して、おのが義を貫く生き方である。そういう潔癖な生き方に「直」の字は相応しいが、「愚」は不相応であると言うべきだろう。試みに机辺の岩波国語辞典を開くと、「愚直」の項には「正直いちずなこと。ばか正直」という解が出ている。この小説に登場する主要三武将のひたすら潔い生き方を「愚直」と言うのはいささか礼を欠く振る舞いであると言わなければならないが、作者が敢えてこの言葉を使う裏には、なるほど三武将の生き方は「ばか正直」かも知れないが、常に強者に阿諛し、薄汚い打算に明け暮れている俗衆の処世術よりははるかに高潔で美しいのだ、という思いが潜んでいよう。世俗の常識に立つ「愚直」という語の選択は、ばか正直に義を貫く生き方のどこが愚かだ、右顧左眄して小利の前には大義をすてて憚らぬ凡俗どもより格段に立派なのだとする、作者の反語的な賞賛の現れであると思う。

建前を言えば、武士の義は主上に対して忠の限りを尽くすことである。主上の昇勢・衰運に関わりなく常に主上に寄り添ってこれを扶け、場合によっては一身の死を賭して仕えることである。が、これはことの理非曲直を案ぜずただ主上の奴隷になることではない。主上に非ありと観じた時は、主上の瞋恚を怖れず、打ち首をも覚悟して諫言し、主上に世の信頼と敬慕を集めようとすることこそ忠臣としての義なのである。ここにあれこれ事例を挙げるまでもなく、この小説の至る所に紹運、道雪、宗茂が身を以て示した、正しい意味での義が書き記されているのだから、下手な解説など必要ではない。読者各自が直接この小説に読み浸りさえすれば、三人の武将の壮大かつ純粋な義のみごとさ・美しさを心ゆくまで堪能できようというものだ。



三人の義が限りなく美しいのは、実を言うと、それが希有だからだ。先ほど「建前を言えば」と断ったのは、武士と雖もその多くは義につかず利に奔走するからである。殊に戦国乱世の世であれば、領主であろうと家臣であろうと、常にその命は危うい。死のない人生はあり得ないが、生きている間は命を惜しむのも人の常。戦国時代の武士にとって最大の利は命ながらえることであったろう。物欲を満たし、地位・権勢を誇るというのも世人垂涎の利であるには違いないが、何よりもまず「命あっての物種」である。したがって、領主・諸将から足軽・中間に至るまで、戦国時代を生きた人々の本音は絶えず「寄らば大樹」という考え方であったろうという推測は容易である。とにかくこの時代、日本中の至る所が「洞ケ峠」だったのだし、日本人の殆どが俗説通りの筒井順慶だったのだ。私など真っ先に「寄らば大樹」を決め込み、順慶を生き方の手本としたであろうから、そのような生き方をあながち蔑むわけにはいかないけれども、それにしても紹運、道雪、宗茂の三人が示した一つの生き方のみごとさには、心からの喝采を呈しないわけにはいかない。

主君大友宗麟を守るための島津勢との戦いは遂に利あらず、明日討ち死にを覚悟した紹

運が部下達に向かって言った言葉、

「知ってのとおり、いよいよ最後のときがせまった。あらためて告げる。城をでたい者は、今夜のうちにぬけてでよ。おぬしらは、もう充分に戦った。（中略）死ぬるのは、この入道一人でよい。これは、わしの本心だ。おちたき者は遠慮なくおちよ」

に感銘しない読者はあるまい。これが史実に即した記述であるか否か、門外漢の私が知る由もないが、戦智に長けた武将が一方でこのようにこまやかな情にも優れているということ、言ってみれば豪快にして繊細とでも言うべき理想的な武将像を描くことを忘れなかった作者の配意にも敬意を表したい。道雪や宗茂とて同様の状況に立てば同じことを言うに違いないと思う。それほどに三人の人品骨柄は相似ているのである。

こまやかさと言えば、宗茂とその妻誾（ぎん）との微妙な夫婦関係もこの小説に彩りを与えている。人間関係というのはことごとく一筋縄ではいかないが、それが男女の間のものともなればとりわけ難しい。誾は道雪の娘で宗茂はその入婿という関係なのだが、誾は目もあやな美形であるにも拘らず、道雪に培ったその気性は男に勝るものがある。さすがの宗茂も扱いに窮することしばしばで、二人が交わす会話には緊張感がある。言葉を尽くしても越えることのできない溝を中にして対峙する二人の心理の襞がまざまざと見え、男女の間に存在するある種の不毛を感じさせ、武将のもつ寂しさの一面が窺える。このような側面にも抜け目なく描写の手を加えた作者の用意周到な手腕を大いに佳としたい。



武士が終生その義を貫き得たか否かはその死によって定まるが、紹運、道雪の二人は作中においてそれぞれの義を完結している。潔い死が生を荘厳（しょうごん）しているのだ。武士の一念に徹した二人の「末（おわり）」は二人の生の「總（すべ）て」を「よし」とするに足りているが、宗茂の人生の「末（おわり）」を見ないまま小説は終る。しかし、その人生が二人の父に勝るとも劣らないものであったことは察するに難くない。読了して一巻を閉じた後の気分は至極爽快。私の好きな時代小説作家は今、確実に四人に増えた。

（俳人）

## 【「立花宗茂」関係年表】

| 年代 | 西暦 | 事項 |
|---|---|---|
| 天正　九年 | 一五八一年 | 高橋紹運の子統虎（宗茂）、立花道雪の養子となり誾千代と結婚。 |
| 天正　十年 | 一五八二年 | 高橋・立花の連合軍、秋月領に侵攻の際、宗茂初陣す。 |
| 天正十三年 | 一五八五年 | 九月十一日、柳河攻城の陣中にて立花道雪没す。 |
| 天正十四年 | 一五八六年 | 七月二十七日、島津軍の猛攻により高橋紹運自刃。 |
| 天正十五年 | 一五八七年 | 四月五日、宗茂、古処山城で秀吉に謁見。五月八日、島津義久が秀吉に降伏。六月、宗茂、柳河十三万二千石に封ぜられる。 |
| 文禄　元年 | 一五九二年 | 文禄の役始まる。宗茂、渡海し、碧蹄館の戦いで活躍。 |
| 慶長　二年 | 一五九七年 | 慶長の役始まる。宗茂再び渡海。蔚山籠城戦で加藤清正に助勢。 |
| 慶長　三年 | 一五九八年 | 秀吉が没し、慶長の役終わる。帰国した宗茂、誾千代と別居。 |
| 慶長　五年 | 一六〇〇年 | 関ガ原の役。宗茂、西軍に与し大津城を落とすが、西軍の大敗により帰国。柳河城を開城し加藤家預かりの身に。 |
| 慶長　七年 | 一六〇二年 | 宗茂一行二十名、上洛し仮寓す。翌年、江戸へ。 |
| 慶長　十年 | 一六〇五年 | 奥州棚倉一万石に封ぜられ、大名に列せられる。 |
| 慶長十九年 | 一六一四年 | 大坂冬の陣に出陣。翌年、夏の陣にも出陣。豊臣家滅亡。 |
| 元和　六年 | 一六二〇年 | 旧領柳河藩主に復帰。 |
| 寛永十九年 | 一六四二年 | 十一月二十五日、宗茂没す（享年七十六）。 |

［参考文献］


『九州治乱記』『高橋紹運記』『上井覚兼日記』『立花立斎旧聞記』『立花立斎家中掟書』『立花朝鮮記』『筑紫史談』『旧柳河藩史』『柳川藩史料集』『柳川史話』『天野源右衛門朝鮮軍物語』『立花戦功録』『浅川聞書』『太閤史料集』『名将言行録』『新名将言行録』（海音寺潮五郎）『武神・立花宗茂』（浅川漏泉）『日本西教史』『フロイス日本史』『陰徳太平記』『大友宗麟』（外山幹夫）『懲毖録』（柳成龍）『豊臣秀吉の朝鮮侵略』（北島万次）『豊臣政権の朝鮮侵略と太閤検地』（中野等）『関ケ原合戦史料集』（藤井治左衛門）『関ケ原役』（松好貞夫）『関ケ原合戦』（笠谷和比古）『関ケ原合戦』（二木謙一）『筑前戦国史』（吉永正春）『筑後戦国史』（吉永正春）『戦国九州の女たち』（吉永正春）『九州戦国合戦記』（吉永正春）『九州戦国史』（吉永正春）『大宰府戦国史』（吉永正春）『続・西国合戦記』（読売新聞西部本社）『戦国挽歌・高橋紹運』（西津弘美）『火の槍・立花宗茂』（原田種真）『日本の歴史12天下一統』（林屋辰三郎）『日本の歴史15織田・豊臣政権』（藤木久志）『大分県の歴史』（渡辺澄夫）『福岡県の歴史』（平野邦雄・飯田久雄）『熊本県の歴史』（森田誠一）『佐賀県の歴史』（城島正祥・杉谷昭）『鹿児島県の歴史』（原口虎雄）『宮崎県の歴史』（日高次吉）『滋賀県の歴史』（原田敏丸・渡辺守順）『福岡県史』『鹿児島県史』『滋賀県史』『新修大津市史』『日本武道全集』『日本城郭全集』『日本歴史地名大系』『寛政重修諸家譜』

著者紹介
**八尋舜右**（やひろ　しゅんすけ）
1935年、平壌生まれ。早稲田大学文学部卒業。朝日新聞社勤務を経て、現在作家。日本文芸家協会・日本ペンクラブ・現代詩人会会員。著書に『太宰治文がたみ―道化と死』（宝文館出版）、『坂本龍馬』『高杉晋作』『上杉謙信』『源実朝』『良寛』（以上、成美堂出版）、『長耳の人・徳川吉宗』（小学館）、『竹中半兵衛』『森蘭丸』（以上、ＰＨＰ研究所）、『領事館の虫』（詩集、花神社）などがある。

ＰＨＰ文庫　立花宗茂
秀吉が天下無双と讃えた戦国武将

2000年６月15日　第１版第１刷
2003年１月31日　第１版第６刷

著　者　八尋舜右
発行者　江口克彦
発行所　ＰＨＰ研究所
東京本部　〒102-8331　千代田区三番町３番地10
文庫出版部　☎03-3239-6259
普及一部　☎03-3239-6233
京都本部　〒601-8411　京都市南区西九条北ノ内町11
PHP INTERFACE　http://www.php.co.jp/
制作協力　PHPエディターズ・グループ
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　図書印刷株式会社

©Shunsuke Yahiro 2000 Printed in Japan
落丁・乱丁本は送料弊所負担にてお取り替えいたします。
ISBN4-569-57421-1

この作品は、一九九七年十一月にＰＨＰ研究所より刊行された『小説　立花宗茂』を改題したものである。

## PHP文庫

池波正太郎 霧に消えた影
池波正太郎 信長と秀吉と家康
池波正太郎 さむらいの巣
石川能弘 山本勘助
大島昌宏 結城秀康
岡本好古 漢の武帝
奥宮正武 真実の太平洋戦争
小和田哲男 戦国合戦事典
岳 真也 家康
加野厚志 島津義弘
神川武利 秋山真之
神川武利 伊東祐亨
川口素生 戦国時代なるほど事典
菊池道人 丹羽長秀
紀野一義 文 入江泰吉 写真 仏像を観る
楠木誠一郎 石原莞爾
黒鉄ヒロシ 新選組
黒鉄ヒロシ 幕末暗殺
黒部亨 松永弾正久秀
黒部亨 宇喜多直家
郡順史 佐々成政
今野勉 真珠湾奇襲 ルーズベルトは知っていたか
堺屋太一 豊臣秀長(上)(下)
佐竹申伍 島左近
佐竹申伍 真田幸村
重松一義 江戸の犯罪白書
芝豪太 公望
嶋津義忠 上杉鷹山
祖父江一郎 阿部正弘
高野澄 井伊直政
高橋克彦 風の陣[立志篇]
武光誠 古代史大逆転
立石優 范蠡
柘植久慶 ネルソン提督
寺林峻 河合道臣
童門冬二 戦国名将一日一言
戸部新十郎 信長の合戦
中江克己 お江戸の意外な生活事情
中江克己 日本史怖くて不思議な出来事
中島道子 前田利家と妻まつ
中津文彦 日本史を操る興亡の方程式
中村晃 直江兼続
中村整史朗 尼子経久
野村敏雄 小早川隆景
葉治英哉 張良
花村奨 前田利家
浜野卓也 黒田官兵衛
半藤一利 ドキュメント 太平洋戦争への道
半藤一利 徹底分析 川中島合戦
淵田美津雄 真珠湾攻撃
星亮一 山口多聞
星亮一 浅井長政
松田十刻 東条英機
満坂太郎 榎本武揚
三戸岡道夫 保科正之
宮野澄 小澤治三郎
八尋舜右 竹中半兵衛
山村竜也 新選組剣客伝
吉田俊雄 戦艦大和・その生と死
竜崎攻 真田昌幸